
Kompira Documentation

リリース 1.6.8

Kompira development team

2023 年 04 月 07 日

目次

第 1 章	管理ガイド	1
1.1	はじめに	1
1.2	Kompira パッケージ管理	1
1.3	Kompira プロセス管理	18
1.4	ノードの設定	21
1.5	Kompira の設定とログファイル	27
1.6	Kompira のデータバックアップ	31
1.7	Kompira ライセンス	35
1.8	秘密鍵の管理	36
1.9	冗長構成管理	37
1.10	監査ログ管理	50
1.11	システムパッケージ管理	62
1.12	SSL 証明書管理	63
第 2 章	操作ガイド	71
2.1	はじめに	71
2.2	基本的な操作方法	71
2.3	Kompira ファイルシステム	72
2.4	Kompira オブジェクト	74
2.5	プロセス管理	88
2.6	スケジューラ	93
2.7	設定	95
2.8	トラブルシューティング	103
第 3 章	Kompira チュートリアル	107
3.1	はじめに	107
3.2	ジョブフローを動かす	107
3.3	変数を使う	109
3.4	リモートでコマンド実行する	114
3.5	制御構造でジョブを操る	116
3.6	オブジェクトを操作する	122
3.7	イベントを待ち合わせる	125
3.8	外部にアクセスする	128
3.9	プロセスを制御する	130
第 4 章	Kompira ジョブフロー言語リファレンス	135
4.1	イントロダクション	135
4.2	字句構造	135
4.3	値と型	140
4.4	変数	149

4.5	式	153
4.6	ジョブ	160
4.7	ジョブフロー式	169
4.8	ジョブフロープログラム	170
第 5 章	Kompira 標準ライブラリ	171
5.1	組み込み関数/ジョブ	171
5.2	Kompira オブジェクト	180
5.3	組み込み型オブジェクト	191
5.4	特殊オブジェクト	233
第 6 章	他システムとの連携	243
6.1	はじめに	243
6.2	Kompira へのイベント送信	243
6.3	Kompira でのメール受信	245
6.4	監視システムとの連携	246
6.5	Redmine との連携	248
6.6	SNMP トラップの受信	249
第 7 章	Kompira の監視	251
7.1	はじめに	251
7.2	Zabbix での監視	251
第 8 章	Kompira REST API リファレンス	255
8.1	イントロダクション	255
8.2	共通	255
8.3	Kompira オブジェクトへのアクセス	263
8.4	プロセス	267
8.5	スケジュール	269
8.6	インシデント	271
8.7	タスク	273
8.8	ユーザー/グループ管理	274
	索引	279

第1章 管理ガイド

著者

Kompira 開発チーム

1.1 はじめに

このマニュアルでは、Kompira を管理するための情報について記述します。

インストール、アップデート、Kompira 全体の設定、ログなどについて知りたい場合には本マニュアルを参照してください。

本マニュアルでは、Linux 上でのコマンド実行プロンプトとして一般ユーザーの場合は \$、ルート権限ユーザーの場合は # を表記します。

```
$ echo '一般ユーザーでコマンド実行'
# echo 'ルート権限ユーザーでコマンド実行'
```

1.2 Kompira パッケージ管理

Kompira 関連パッケージのインストールとアップデートについて説明します。

参考:

本節では Kompira パッケージを単一のサーバ上で動作させる場合についてのみ説明をしています。Kompira を冗長構成で動作させたい場合は [冗長構成管理](#) を参照してください。

1.2.1 インストールパッケージの種類

Kompira には以下に示す種類のパッケージが存在しています。

パッケージ名	説明
Kompira パッケージ	Kompira の本体にあたるパッケージです。Kompira のコア機能群、ジョブマネージャ、イベント送信スクリプトを含みます。
ジョブマネージャパッケージ	ジョブマネージャとイベント送信スクリプトを含むパッケージです。
イベント送信パッケージ	イベント送信スクリプトを含むパッケージです。

Kompira を初めてお使いになる場合は、まず Kompira パッケージのインストールから始めてみましょう。

ジョブマネージャパッケージは Kompira パッケージをインストールしたサーバ以外にもジョブマネージャプロセスを起動させたい場合に使用します。

イベント送信パッケージは別サーバから Kompira に対してイベントを送信させたい場合に使用します。イベント送信を利用したシステム間の連携については [他システムとの連携](#) を参照してください。

1.2.2 インストールスクリプト

install.sh を用いることで、Kompira の各種パッケージのインストールを行うことができます。

```
install.sh [options]
```

インストール処理には Kompira で使用するミドルウェアのインストール、データベースの構築、プロセスの自動起動設定が含まれます。

install.sh はコマンドの成功・失敗に関わらず *install.<プロセス番号>.log* という名称のログファイルを作成します。

注釈: Red Hat にインストールする場合は、事前にサブスクリプションを登録しておく必要があります。

制限

install.sh は RHEL/CentOS でのインストールのみサポートしています。

install.sh では外部から Kompira で使用する各種ミドルウェアをダウンロードします。インターネットに接続可能な環境で実行してください。

プロキシ経由でインターネットに接続する環境の場合は以下のように --proxy オプションを付けて install.sh を実行してください。

```
# ./install.sh --proxy proxy:3128
```

注釈: オプションに渡す "proxy" や "3128" の部分は導入環境のプロキシサーバのホスト名（または IP アドレス）やポート番号に合わせてください。

認証付きプロキシサーバの場合は、以下のように "user" にユーザー名を、"password" にパスワードを指定して install.sh を実行してください。

```
# ./install.sh --proxy user:password@proxy:3128
```

コマンドラインオプション

install.sh に指定可能なオプションは以下の通りです。

オプション	説明
--https	Kompira サーバに対するアクセスを HTTPS のみに制限します (Kompira v1.5.0 からデフォルト)。HTTP でアクセスすると自動的に HTTPS にリダイレクトされるようになります。
--no-https	Kompira サーバに対する HTTP アクセスを許容します。
--amqps	Kompira サーバに対する AMQP のアクセスを SSL で保護します (Kompira v1.6.8 からデフォルト)。
--amqps-verify	Kompira サーバに対する AMQP のアクセスを SSL で保護します (SSL 証明書の検証を伴います)。
--no-amqps	Kompira サーバに対する AMQP のアクセスを SSL で保護しません。
--allow-insecure-amqp	Kompira サーバに対する外部からの非 SSL での AMQP アクセスを許可します。
--no-backup	データベースのバックアップ取得およびリストア処理をスキップします。
--rhui	RHUI モードでインストールします。
--rhel-option-repo <repo>	RHEL レポジトリを指定します。
--skip-python3-install	Python3 のインストールをスキップします。
--skip-cluster-start	冗長構成時の更新インストールで冗長構成の起動 (pcs cluster start) をスキップします。
--initdata	明示的にデータベースを初期化します。
--initfile	明示的に添付ファイルの保存先を初期化します。
--secret-key <secret-key>	パスワードフィールドの暗号化用キー文字列を指定します。(キーは 8 文字以上)
--force	Kompira のメジャーバージョンが異なっても強制的にインストールを試行します。また既存データベースがあるときに削除確認をせず、データベース初期化してインストールを試行します。
--proxy <proxy>	プロキシサーバの URL を指定してインストールを行います。ここで指定したプロキシサーバは Kompira サービスの環境変数として設定され、ジョブフローから外部 HTTP アクセスするときにも適用されます。
--temp-proxy <proxy>	インストール時だけ適用するプロキシサーバの URL を指定してインストールを行います。
--noproxy <hosts>	プロキシサーバの対象から除外するホストをコンマ区切りのリストで指定します。
--temp-noproxy <hosts>	インストール時のみのプロキシの除外設定を指定します。
--locale-lang <LANG>	ロケールを指定してインストールを行ないます。
--locale-timezone <ZONENAME>	タイムゾーンを指定してインストールを行ないます。
--jobmgr <kompira_ip>	ジョブマネージャパッケージのインストール、アップデートを行います。Kompira パッケージをインストールしたサーバを示すホスト名もしくは IP アドレスを指定する必要があります。

次のページに続く

表 1 – 前のページからの続き

オプション	説明
<code>--sendevt <kompira_ip></code>	イベント送信パッケージのインストール、アップデートを行います。Kompira パッケージをインストールしたサーバを示すホスト名もしくは IP アドレスを指定する必要があります。
<code>--with-rpm <rpms></code>	追加でインストールする RPM パッケージを指定します。
<code>--with-whl <wheels></code>	追加でインストールする wheel パッケージを指定します。
<code>--with-gdb</code>	Kompira のデバッグに必要なツール類をインストールします。
<code>--offline</code>	kompira-extra パッケージを利用してオフラインモードでインストールします。
<code>--extra</code>	オフラインインストール用の kompira-extra パッケージを作成します。
<code>--extra-without-ha</code>	冗長構成用の HA パッケージは含まない kompira-extra パッケージを作成します。
<code>--install-only</code>	パッケージのインストールのみ行い、完了後の各種デーモンサービスの起動は行いません。
<code>--dry-run</code>	ドライランモードで実行します。パラメータチェックのみで、実際のセットアップは行いません。
<code>--help</code>	ヘルプメッセージを表示します。

jobmgr, sendevt オプションは排他です。

1.2.3 Kompira パッケージ

Kompira の本体にあたるパッケージのインストール・アップデートについて記述します。

インストール

Kompira パッケージを展開し、install.sh を実行します。<version>は Kompira のバージョン番号に置き換えてください。

```
$ tar xzf kompira-<version>-bin.tar.gz
$ cd kompira-<version>-bin
# ./install.sh
[2020-09-17 02:00:24] ****:
→ *****
[2020-09-17 02:00:24] ****: Kompira-1.6.0:
[2020-09-17 02:00:24] ****: Start: Install the Kompira
[2020-09-17 02:00:24] ****:
[2020-09-17 02:00:24] INFO:      SYSTEM                = CENT
[2020-09-17 02:00:24] INFO:      SYSTEM_NAME          = cent8
[2020-09-17 02:00:24] INFO:      SYSTEM_RELEASE       = CentOS Linux release 8.2.
→2004 (Core)
[2020-09-17 02:00:24] INFO:      SYSTEM_RELEASEVER    = 8.2.2004
[2020-09-17 02:00:24] INFO:      PLATFORM_PYTHON     = /usr/libexec/platform-
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```

→python
[2020-09-17 02:00:24] INFO:      PYTHON                      = /bin/python3.6

...

[2020-09-17 02:02:46] ****: -----
→-----
[2020-09-17 02:02:46] ****: Test access to kompira.
[2020-09-17 02:02:46] ****:
[2020-09-17 02:02:48] INFO: Access succeeded:   <div class="brand-version">1.6.0</div>
[2020-09-17 02:02:48] ****:
[2020-09-17 02:02:48] ****: Finish: Install the Kompira (status=0)
[2020-09-17 02:02:48] ****: ↳
→*****

```

インストーラは自動で Kompira パッケージのインストール処理を行います。「Finish: Install the Kompira (status=0)」という表示があれば、正常に完了しています。

インストールが完了したら以下の URL に対して Web ブラウザから Kompira サーバにアクセスし、ログイン画面が表示されることを確認してください。

この際、サーバ証明書の警告が表示されます。この警告を表示されなくするためには、Kompira サーバ用の SSL 証明書を取得し、Kompira サーバ上の Apache へのインストールを行ってください。

```
https://<Hostname or ipaddress of Kompira server>/
```

注釈: HTTP でアクセスする場合は --no-https オプションを付けてインストールする必要があります。

Web ブラウザでの操作方法については、操作ガイドマニュアルを参照してください。

アップデート

既に Kompira パッケージがインストールされている場合に、アップデートを行う方法について説明します。

Kompira のバージョン番号形式は次のように定められています。

```
1.<major-version>.<minor-version>
```

マイナーバージョン番号のみが変更されるアップデートをマイナーアップデート、メジャーバージョン番号が変更されるアップデートをメジャーアップデートと呼びます。

例えばバージョン 1.5.0 から 1.5.2 へのアップデートはマイナーアップデート、バージョン 1.4.10 から 1.5.0 へのアップデートはメジャーアップデートとなります。

メジャーアップデートはアーキテクチャ構成や DB スキーマの定義変更を含む可能性のあるアップデートであるため、マイナーアップデートとは異なる作業が必要となる場合があります。

アップデートの際は、現在使用している Kompira バージョンとアップデートする Kompira バージョンを確認の上で作業を行ってください。

マイナーアップデート

マイナーアップデートの場合は、オプション無しで install.sh を起動します。

```
$ tar xzf kompira-<version>-bin.tar.gz
$ cd kompira-<version>-bin
# ./install.sh
[2020-09-17 22:56:32] ****:
↳ *****
[2020-09-17 22:56:32] ****: Kompira-1.6.0:
[2020-09-17 22:56:32] ****: Start: Install the Kompira
[2020-09-17 22:56:32] ****:
[2020-09-17 22:56:32] INFO:      SYSTEM                = CENT
[2020-09-17 22:56:32] INFO:      SYSTEM_NAME           = cent8
[2020-09-17 22:56:32] INFO:      SYSTEM_RELEASE        = CentOS Linux
↳ release 8.2.2004 (Core)
[2020-09-17 22:56:33] INFO:      SYSTEM_RELEASEVER       = 8.2.2004
[2020-09-17 22:56:33] INFO:      PLATFORM_PYTHON        = /usr/libexec/
↳ platform-python
[2020-09-17 22:56:33] INFO:      PYTHON                  = /bin/python3.6

...

[2020-09-17 22:57:00] ****: -----
↳ -----
[2020-09-17 22:57:00] ****: Check version of Kompira installed.
[2020-09-17 22:57:00] ****:
[2020-09-17 22:57:00] INFO: VERSION=1.6.0b4 [pip=/opt/kompira/bin/pip]
[2020-09-17 22:57:00] INFO: A compatible version is installed.

...

[2020-09-17 22:58:18] ****: -----
↳ -----
[2020-09-17 22:58:18] ****: Test access to kompira.
[2020-09-17 22:58:18] ****:
[2020-09-17 22:58:19] INFO: Access succeeded:  <div class="brand-version">
↳ 1.6.0</div>
[2020-09-17 22:58:19] ****:
[2020-09-17 22:58:19] ****: Finish: Install the Kompira (status=0)
[2020-09-17 22:58:19] ****:
↳ *****
```

インストーラは自動で Kompira パッケージのアップデート処理を行います。「Finish: Install the Kompira (status=0)」という表示があれば、正常に完了しています。

アップデートが完了したら Web ブラウザから Kompira にログインし、Kompira のバージョン番号表記が更新されていることを確認してください。

メジャーアップデート

メジャーアップデートの場合は以下の手順でアップデートを行います。

- export_data コマンドで Kompira に保存されているデータを取り出す
- install.sh コマンドで --initdata オプションを付けてデータベース初期化モードで Kompira をインストールする
- import_data コマンドで最初に取り出したデータを Kompira に保存する

install.sh コマンドを実行する時点で、既存のデータベースが初期化されることに注意してください。

```
$ cd kompira-<version>-bin
$ /opt/kompira/bin/manage.py export_data --owner-mode --virtual-mode / > backup.json
# ./install.sh --force --initdata
$ /opt/kompira/bin/manage.py import_data --owner-mode --overwrite-mode backup.json
[2018-04-09 21:44:15,936:30953:MainProcess] INFO: import data: start...
[2018-04-09 21:44:16,010:30953:MainProcess] INFO: import object: imported
↪ "system/types/TypeObject" to "/system/types/TypeObject" (updated)
[2018-04-09 21:44:16,022:30953:MainProcess] INFO: import object: imported
↪ "system/types/Directory" to "/system/types/Directory" (updated)
[2018-04-09 21:44:16,033:30953:MainProcess] INFO: import object: imported
↪ "system" to "/system" (updated)

...

[2018-04-09 21:44:22,126:30953:MainProcess] INFO: import fields: /user/
↪ data: []
[2018-04-09 21:44:22,164:30953:MainProcess] INFO: import fields: /user/data/
↪ nodes: []
[2018-04-09 21:44:22,202:30953:MainProcess] INFO: import fields: /user/data/
↪ accounts: []
[2018-04-09 21:44:22,218:30953:MainProcess] INFO: import data: finished
↪ (created=0, updated=59, skipped=0, error=0, warning=0)
```

install.sh を実行する際は、データベースを初期化するために --initdata オプションと --force オプションを指定します。

import_data の処理が完了したら Web ブラウザから Kompira にログインし、Kompira のバージョン番号表記が更新されていること、既存の Kompira 上で作成していた Kompira オブジェクトが存在することを確認してください。

注釈: Ver.1.5 以前から Ver1.6 へアップデートする場合、上記の手順でアップデートすること

はできません。以前のバージョンの Kompira を一度削除してから、改めて、Ver1.6 を新規インストールしてください。

注釈: Ver.1.5 以前の Kompira から Ver1.6 へアップデートする場合、完全な互換性は保証されませんので、移行したジョブフローやライブラリオブジェクトがそのままでは動作しない可能性があります。必要に応じて、個々のジョブフローやライブラリを修正した上で、それらの動作確認を実施してください。

1.2.4 ジョブマネージャパッケージ

ジョブマネージャとイベント送信スクリプトを含むパッケージのインストール・アップデートについて記述します。

インストール

Kompira パッケージを展開し、install.sh を実行します。ジョブマネージャは Kompira 本体と通信を行うため、Kompira パッケージをインストールしたサーバのホスト名、もしくは IP アドレスを install.sh の引数に指定する必要があります。

<version>は Kompira のバージョン番号に置き換えてください。

<kompira_ip>は Kompira サーバのホスト名、もしくは IP アドレスです。

```
$ tar xzf kompira-<version>-bin.tar.gz
$ cd kompira-<version>-bin
# ./install.sh --jobmgr <kompira_ip>
[2020-09-18 00:42:54] ****:_
→*****
[2020-09-18 00:42:54] ****: Kompira-1.6.0:
[2020-09-18 00:42:54] ****: Start: Install the Kompira
[2020-09-18 00:42:54] ****:
[2020-09-18 00:42:54] INFO:      SYSTEM                = CENT
[2020-09-18 00:42:54] INFO:      SYSTEM_NAME           = cent8
[2020-09-18 00:42:54] INFO:      SYSTEM_RELEASE        = CentOS Linux release 8.2.
→2004 (Core)
[2020-09-18 00:42:54] INFO:      SYSTEM_RELEASEVER      = 8.2.2004
[2020-09-18 00:42:54] INFO:      PLATFORM_PYTHON       = /usr/libexec/platform-
→python
...
[2020-09-18 00:43:24] ****: -----
→-----
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
[2020-09-18 00:43:24] ****: Setup kompira-jobmgrd.
[2020-09-18 00:43:24] ****:

...

[2020-09-18 00:43:24] VERBOSE: run: systemctl restart kompira_jobmgrd
[2020-09-18 00:43:24] ****:
[2020-09-18 00:43:24] ****: Finish: Install the Kompira (status=0)
[2020-09-18 00:43:24] ****:
→*****
```

インストーラは自動でジョブマネージャパッケージの新規インストール処理を行います。「Finish: Install the Kompira (status=0)」という表示があれば、正常に完了しています。

ジョブマネージャプロセスが正しく起動しているかの確認方法については、[Kompira ジョブマネージャの起動・停止・状態確認](#)を参照してください。

また、Kompira 本体がジョブマネージャと正しく通信できているかどうかについては、Kompira の「管理領域設定ページ」から確認することができます。Web ブラウザから Kompira にログインし、「設定」→「管理領域設定」→「default」ページを表示してください。「ジョブマネージャ状態」の欄にジョブマネージャパッケージをインストールしたサーバのホスト名が表示されていれば、正常に通信できています。

なお、install.sh に --amqps-verify オプションを付けた場合は、インストール途中に指定した Kompira サーバから SSL 証明書を scp でコピーするため、以下のようにパスワードの入力が求められます。

```
[2023-01-16 18:34:12] INFO:
[2023-01-16 18:34:12] INFO: !!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
→!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
[2023-01-16 18:34:12] INFO:
[2023-01-16 18:34:12] INFO: Start copying the SSL/CA certificates from the kompira_
→server with scp.
[2023-01-16 18:34:12] INFO:
[2023-01-16 18:34:12] INFO: PLEASE ENTER THE PASSWORD OF THE REMOTE KOMPIRA SERVER (
→<kompira_ip>) FOR SCP.
[2023-01-16 18:34:12] INFO:
[2023-01-16 18:34:12] INFO: !!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
→!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
[2023-01-16 18:34:12] INFO:
[2023-01-16 18:34:12] VERBOSE: run: scp -q -p -o StrictHostKeyChecking=no -o_
→UserKnownHostsFile=/dev/null root@<kompira_ip>:/opt/kompira/ssl/certs/{kompira-
→bundle-ca.crt,amqp-client-kompira{.crt,.key}} /opt/kompira/ssl/certs/
root@<kompira_ip>'s password:

...
```

バージョン 1.6.8 で変更: install.sh に --amqps-verify オプションを付けた場合は、Kompira サーバから SSL 証明書を scp でコピーするようになりました。

アップデート

インストールと同様の手順を実行することで、ジョブマネージャパッケージのアップデートを行うことができます。

1.2.5 イベント送信パッケージ

イベント送信スクリプトを含むパッケージのインストール・アップデートについて記述します。

イベント送信パッケージは、Linux および Windows へのインストールに対応しています。

RHEL/CentOS へのインストール

Kompira パッケージを展開し、install.sh を実行します。

イベント送信スクリプトは Kompira 本体にデータを送信するため、Kompira パッケージをインストールしたサーバのホスト名、もしくは IP アドレスを install.sh の引数に指定する必要があります。

<version>は Kompira のバージョン番号に置き換えてください。<kompira_ip>は Kompira サーバのホスト名、もしくは IP アドレスです。

```
$ tar xzf kompira-<version>-bin.tar.gz
$ cd kompira-<version>-bin
# ./install.sh --sendevt <kompira_ip>
[2023-01-16 18:33:50] ****:
→*****
[2023-01-16 18:33:50] ****: Kompira-1.6.8:
[2023-01-16 18:33:50] ****: Start: Install the Kompira
[2023-01-16 18:33:50] ****:
[2023-01-16 18:33:50] INFO:      SYSTEM                = CENT
[2023-01-16 18:33:50] INFO:      SYSTEM_NAME           = cent7
[2023-01-16 18:33:50] INFO:      SYSTEM_RELEASE        = CentOS Linux release 7.7.
→1908 (Core)
[2023-01-16 18:33:50] INFO:      SYSTEM_RELEASEVER      = 7.7.1908
[2023-01-16 18:33:50] INFO:      PLATFORM_PYTHON       = /usr/libexec/platform-
→python
[2023-01-16 18:33:50] INFO:      PYTHON                = /usr/bin/python
[2023-01-16 18:33:50] INFO:      SYSTEMD              = true
[2023-01-16 18:33:50] INFO:      TMPDIR              = /root/kompira-1.6.8-bin/.
→tmp.install-20230116-1833.rQ8X
[2023-01-16 18:33:50] INFO:      LOCALE_LANG           = ja_JP.UTF-8
[2023-01-16 18:33:50] INFO:      PATH                = /usr/local/sbin:/usr/local/
→bin:/usr/sbin:/usr/bin:/root/bin
[2023-01-16 18:33:50] INFO:      HTTPS_MODE          = true
[2023-01-16 18:33:50] INFO:      AMQPS_MODE          = true
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```

...

[2023-01-16 18:35:04] VERBOSE: run: chown :kompira /opt/kompira/ssl/certs/kompira-
→bundle-ca.crt /opt/kompira/ssl/certs/amqp-client-kompira.crt /opt/kompira/ssl/certs/
→amqp-client-kompira.key
[2023-01-16 18:35:04] ****: -----
→-----
[2023-01-16 18:35:04] ****: Setup kompira common files.
[2023-01-16 18:35:04] ****:
[2023-01-16 18:35:04] INFO: Create log directory: /var/log/kompira
[2023-01-16 18:35:04] VERBOSE: run: install -g kompira -m 775 -d /var/log/kompira
[2023-01-16 18:35:04] VERBOSE: run: find /var/log/kompira -type f -user root ! -name_
→audit-* -exec chown kompira:kompira {} ;
[2023-01-16 18:35:04] INFO: Create kompira.conf
[2023-01-16 18:35:04] VERBOSE: run: install -m 644 /root/kompira-1.6.8-bin/.tmp.
→install-20230116-1833.rQ8X/kompira.conf /opt/kompira/kompira.conf
[2023-01-16 18:35:04] ****:
[2023-01-16 18:35:04] ****: Finish: Install the Kompira (status=0)
[2023-01-16 18:35:04] ****:_
→*****

```

「Finish: Install the Kompira (status=0)」という表示があれば、正常に完了しています。

インストールが完了すると、/opt/kompira/bin 以下に kompira_sendvt コマンドが配置された状態となります。

```

$ /opt/kompira/bin/kompira_sendvt --version
kompira_sendvt (Kompira version 1.6.8)

```

なお、install.sh に --amqps-verify オプションを付けた場合は、インストール途中に指定した Kompira サーバから SSL 証明書を scp でコピーするため、以下のようにパスワードの入力が求められます。

```

[2023-01-16 18:34:12] INFO:
[2023-01-16 18:34:12] INFO: !!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
→!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
[2023-01-16 18:34:12] INFO:
[2023-01-16 18:34:12] INFO: Start copying the SSL/CA certificates from the kompira_
→server with scp.
[2023-01-16 18:34:12] INFO:
[2023-01-16 18:34:12] INFO: PLEASE ENTER THE PASSWORD OF THE REMOTE KOMPIRA SERVER (
→<kompira_ip>) FOR SCP.
[2023-01-16 18:34:12] INFO:
[2023-01-16 18:34:12] INFO: !!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
→!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
[2023-01-16 18:34:12] INFO:
[2023-01-16 18:34:12] VERBOSE: run: scp -q -p -o StrictHostKeyChecking=no -o_

```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```

→UserKnownHostsFile=/dev/null root@<kompira_ip>:/opt/kompira/ssl/certs/{kompira-
→bundle-ca.crt,amqp-client-kompira{.crt,.key}} /opt/kompira/ssl/certs/
root@<kompira_ip>'s password:

...

```

バージョン 1.6.8 で変更: install.sh に --amqps-verify オプションを付けた場合は、Kompira サーバから SSL 証明書を scp でコピーするようになりました。

Windows へのインストール

1. Python のインストール

Python 3.6 を Windows にインストールします。

- <https://www.python.org/downloads/>

上記の公式ダウンロードサイトから最新の Python 3.6 のインストーラをダウンロードして、対象の Windows にインストールしてください。

インストールが完了したら、コマンドラインから Python が起動できるように、環境変数のパスを追加しておきます。

パス	説明
C:\Program Files\Python36	Python のコマンドが含まれるフォルダ
C:\Program Files\Python36\Scripts	pip コマンドなどが格納されるフォルダ

2. Kompira 用 Python 仮想環境 (venv) の作成

C:\Kompira に Kompira 用の独立した Python 仮想環境 (venv) を作成します。

```
C:\> python -m venv C:\Kompira
```

3. ログファイル出力先ディレクトリの作成

ログファイルの出力先としてディレクトリ C:\Kompira\Log を作成します。

```
C:\> mkdir C:\Kompira\Log
```

4. kompira_sendvt パッケージのインストール

Kompira パッケージを Windows 上にダウンロードして展開したら、dist ディレクトリに含まれる Kompira_sendvt-<version>-py3-none-any.whl を仮想環境の pip コマンドでインストールします。

```

C:\> C:\Kompira\Scripts\pip.exe install Kompira_sendvt-1.6.0-py3-none-
→any.whl

```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
Processing c:\users\kompira\documents\kompira-package\kompira_sendvt-1.
→6.0-py3-none-any.whl
Collecting amqp~=2.6.1 (from Kompira-sendvt==1.6.8)

...

Installing collected packages: amqp, decorator, Kompira-sendvt
Successfully installed Kompira-sendvt-1.6.8 amqp-2.6.1 vine-1.3.0
```

以上でイベント送信パッケージのインストールは完了です。kompira_sendvt コマンドは C:\Kompira\Scripts にインストールされますので、次のように kompira_sendvt コマンドを実行してみてください。

```
C:\> C:\Kompira\Scripts\kompira_sendvt.exe --version
kompira_sendvt (Kompira version 1.6.8)
```

正しくインストールされていれば、バージョン番号が出力されます。

C:\Kompira\Scripts も環境変数のパスに追加すれば、パスを省略して実行できます。

5. Kompira サーバから SSL 証明書ファイルの取得

インストール時に --amqps-verify オプションを付けるなどして、SSL 証明書の検証が有効になっている Kompira サーバに kompira_sendvt でメッセージを送信するためにはその Kompira サーバが発行した SSL 証明書が必要になります。kompira_sendvt で SSL 証明書を用いて接続するためには、Kompira サーバから以下のファイルを取得して C:\Kompira\SSL\Certs ディレクトリに配置してください。

- /opt/kompira/ssl/certs/kompira-bundle-ca.crt
- /opt/kompira/ssl/certs/amqp-client-kompira.crt
- /opt/kompira/ssl/certs/amqp-client-kompira.key

例えば scp コマンドが利用できる Windows であれば、以下のように Kompira サーバからファイル転送してください。<kompira_ip> の部分は Kompira サーバのアドレスを指定してください。

```
C:\> mkdir C:\Kompira\SSL\Certs
C:\> scp root@<kompira_ip>:/opt/kompira/ssl/certs/{kompira-bundle-ca.
→crt,amqp-client-kompira{.crt,.key}} C:\Kompira\SSL\Certs
```

6. 設定ファイル kompira.conf の作成

kompira_sendvt が読み込む設定ファイルを C:\Kompira\kompira.conf に作成してください。Windows 環境におけるデフォルト設定を以下に示しますが、<kompira_ip> の部分は Kompira サーバのアドレスを指定してください。

```
[kompira]
site_id      = 1

[logging]
logdir       = C:\Kompira\Log

[amqp-connection]
server       = <kompira_ip>
port        = 5671
ssl         = true
ssl_verify   = false
ssl_cacertfile =
ssl_certfile =
ssl_keyfile  =

[event]
channel      = /system/channels/Alert

[agent]
name         = default
```

Kompira サーバから取得した SSL 証明書を用いる場合は、以下の部分を書き換えてください。

```
ssl_verify      = true
ssl_cacertfile  = C:\Kompira\SSL\Certs\kompira-bundle-ca.crt
ssl_certfile    = C:\Kompira\SSL\Certs\amqp-client-kompira.crt
ssl_keyfile     = C:\Kompira\SSL\Certs\amqp-client-kompira.key
```

アップデート

インストールと同様の手順を実行することで、イベント送信パッケージのアップデートを行うことができます。

1.2.6 オフラインインストール

オフラインインストールを行なうには以下のステップを踏む必要があります。

- インターネット接続環境での kompira-extra パッケージの作成
- kompira-extra パッケージを利用したオフラインインストール

注釈: ただし、すべての環境で動作確認できているわけではないので、問題があればご報告ください。

インターネット接続環境での kompira-extra パッケージの作成

kompira-extra パッケージを作成するには、以下の条件を満たすサーバ上で実施する必要があります。

- オフラインインストールする対象と同じ構成のサーバ（少なくとも OS とバージョンは合わせてください）
- インターネットに接続できるサーバ（必要であれば proxy を指定してください）

注釈: RHEL では必要に応じてサブスクリプションを登録しておいてください。

install.sh を用いた kompira-extra パッケージの作成

kompira パッケージに含まれる install.sh に --extra オプションを付与して実行してください。

```
$ tar xzf kompira-<version>-bin.tar.gz
$ cd kompira-<version>-bin
# ./install.sh --extra
[2021-11-04 20:56:38] ****:
→*****
[2021-11-04 20:56:38] ****: Kompira-1.6.3:
[2021-11-04 20:56:38] ****: Start: Install the Kompira
[2021-11-04 20:56:38] ****:
[2021-11-04 20:56:38] INFO:      SYSTEM                = CENT
[2021-11-04 20:56:38] INFO:      SYSTEM_NAME           = cent8
[2021-11-04 20:56:38] INFO:      SYSTEM_RELEASE        = CentOS Linux release 8.2.
→2004 (Core)
[2021-11-04 20:56:38] INFO:      SYSTEM_RELEASEVER       = 8.2.2004
[2021-11-04 20:56:38] INFO:      PLATFORM_PYTHON        = /usr/libexec/platform-
→python
[2021-11-04 20:56:38] INFO:      PYTHON                =
[2021-11-04 20:56:38] INFO:      SYSTEMD              = true
[2021-11-04 20:56:38] INFO:      TMPDIR              = /root/kompira-1.6.3-bin/.
→tmp.install-20211104-2056.P3fx
[2021-11-04 20:56:38] INFO:      LOCALE_LANG           = ja_JP.UTF-8
[2021-11-04 20:56:38] INFO:      PATH                = /usr/local/sbin:/usr/local/
→bin:/usr/sbin:/usr/bin:/root/bin
[2021-11-04 20:56:38] INFO:      HTTPS_MODE          = true
[2021-11-04 20:56:38] INFO:      FORCE_MODE          = false
[2021-11-04 20:56:38] INFO:      BACKUP_MODE        = true
[2021-11-04 20:56:38] INFO:      BACKUP_PROCESS     = false
[2021-11-04 20:56:38] INFO:      INITDATA_MODE      = false
[2021-11-04 20:56:38] INFO:      INITFILE_MODE      = false
[2021-11-04 20:56:38] INFO:      OFFLINE_MODE       = false
[2021-11-04 20:56:38] INFO:      JOBMNGR_MODE       = false
[2021-11-04 20:56:38] INFO:      SENDEVT_MODE       = false
[2021-11-04 20:56:38] INFO:      PROXY_URL          =
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
[2021-11-04 20:56:38] INFO:      NO_PROXY                = localhost,127.0.0.1
[2021-11-04 20:56:38] INFO:      KOMPIRA_SERVER          = localhost
[2021-11-04 20:56:38] INFO:      DRY_RUN              = false
[2021-11-04 20:56:38] ****: -----
→-----

...

opt/kompira/extra/1.6.3/cent8/wheelhouse/PyYAML-5.3.1-cp36-cp36m-linux_x86_64.whl
opt/kompira/extra/1.6.3/cent8/wheelhouse/pykerberos-1.2.1-cp36-cp36m-linux_x86_64.whl
opt/kompira/extra/1.6.3/cent8/wheelhouse/future-0.18.2-py3-none-any.whl
opt/kompira/extra/1.6.3/cent8/wheelhouse/PTable-0.9.2-py3-none-any.whl
[2021-11-04 21:08:58] ****:
[2021-11-04 21:08:58] ****: Finish: Install the Kompira (status=0)
[2021-11-04 21:08:58] ****: ↵
→*****
```

kompira-extra パッケージの確認

問題がなければ、10～20 分程度で kompira-extra- で始まるパッケージファイルが生成されますので確認してください。

```
# ls -lh kompira-extra-*.tar.gz
-rw-r--r--. 1 root root 290M Nov  4 21:08 kompira-extra-1.6.3.cent8.tar.gz
```

kompira-extra パッケージを利用したオフラインインストール

kompira, kompira-extra パッケージの準備

オフラインインストールを実施したいサーバに、kompira パッケージと上で作成した kompira-extra パッケージを配置してください。

```
# ls -l kompira-*
-rw-r--r--. 1 root root 7555278 Nov  4 21:11 kompira-1.6.3-bin.tar.gz
-rw-r--r--. 1 root root 303772888 Nov  4 21:12 kompira-extra-1.6.3.cent8.tar.gz
```

kompira-extra パッケージの展開

root 権限で kompira-extra パッケージをルートディレクトリ配下に展開してください。

```
# tar xzf kompira-extra-1.6.3.cent8.tar.gz -C /
```

/opt/kompira/extra/1.6.x/\${OS}/ 配下にオフラインインストールに必要な各種パッケージが展開されていることを確認してください。

```
$ ls -l /opt/kompira/extra/1.6.3/*
total 40
drwxr-xr-x. 3 root root 24576 Nov  4 21:08 packages
drwxr-xr-x. 2 root root      6 Nov  4 20:57 pip
drwxr-xr-x. 2 root root  8192 Nov  4 21:08 wheelhouse
```

kompira オフラインインストールの実施

kompira パッケージを展開して install.sh に --offline オプションを付けて実行してください。

```
$ tar xzf kompira-<version>-bin.tar.gz
$ cd kompira-<version>-bin
# ./install.sh --offline
[2021-11-04 21:14:37] ****:
→ ****
[2021-11-04 21:14:37] ****: Kompira-1.6.3:
[2021-11-04 21:14:37] ****: Start: Install the Kompira (offline-mode)
[2021-11-04 21:14:37] ****:
[2021-11-04 21:14:37] INFO:      SYSTEM                = CENT
[2021-11-04 21:14:37] INFO:      SYSTEM_NAME           = cent8
[2021-11-04 21:14:37] INFO:      SYSTEM_RELEASE        = CentOS Linux release 8.2.
→2004 (Core)
[2021-11-04 21:14:37] INFO:      SYSTEM_RELEASEVER       = 8.2.2004
[2021-11-04 21:14:37] INFO:      PLATFORM_PYTHON        = /usr/libexec/platform-
→python
[2021-11-04 21:14:37] INFO:      PYTHON                =
[2021-11-04 21:14:37] INFO:      SYSTEMD                = true
[2021-11-04 21:14:37] INFO:      TMPDIR                = /root/kompira-1.6.3-bin/.
→tmp.install-20211104-2114.7XV8
[2021-11-04 21:14:37] INFO:      LOCALE_LANG           = ja_JP.UTF-8
[2021-11-04 21:14:37] INFO:      PATH                  = /usr/local/sbin:/usr/local/
→bin:/usr/sbin:/usr/bin:/root/bin
[2021-11-04 21:14:37] INFO:      HTTPS_MODE            = true
[2021-11-04 21:14:37] INFO:      FORCE_MODE             = false
[2021-11-04 21:14:37] INFO:      BACKUP_MODE           = true
[2021-11-04 21:14:37] INFO:      BACKUP_PROCESS        = false
[2021-11-04 21:14:37] INFO:      INITDATA_MODE         = false
[2021-11-04 21:14:37] INFO:      INITFILE_MODE         = false
[2021-11-04 21:14:37] INFO:      OFFLINE_MODE          = true
[2021-11-04 21:14:37] INFO:      JOBMNGR_MODE          = false
[2021-11-04 21:14:37] INFO:      SENDEVT_MODE          = false
[2021-11-04 21:14:37] INFO:      PROXY_URL             =
[2021-11-04 21:14:37] INFO:      NO_PROXY              = localhost,127.0.0.1
[2021-11-04 21:14:37] INFO:      KOMPIRA_SERVER        = localhost
[2021-11-04 21:14:37] INFO:      DRY_RUN               = false
[2021-11-04 21:14:37] ****: -----
```

(次のページに続く)

```

→-----

...

[2021-11-04 21:15:25] ****: -----
→-----
[2021-11-04 21:15:25] ****: Test access to kompira.
[2021-11-04 21:15:25] ****:
[2021-11-04 21:15:26] INFO: Access succeeded:   <div class="brand-version">1.6.3</div>
[2021-11-04 21:15:26] ****:
[2021-11-04 21:15:26] ****: Finish: Install the Kompira (offline-mode) (status=0)
[2021-11-04 21:15:26] ****: ↵
→*****

```

1.3 Kompira プロセス管理

Kompira システムは複数のプロセスが協調動作することにより成り立っています。以下では Kompira を構成するプロセスについての情報を記述します。

1.3.1 Kompira のプロセス構成

Kompira システムを構成するプロセスは、以下のようになっています。

Kompira デーモン (kompirad)

Kompira ジョブフローを実行、管理するためのデーモンプロセスです。

Kompira ジョブマネージャに対してリモートコマンドの実行指示を出し、結果を受け取ります。

Kompira ジョブマネージャ (kompira_jobmgrd)

Kompira デーモンから指示されたりリモートコマンドを実行するためのデーモンプロセスです。

Kompira デーモンからリモートコマンドの指示を受信すると、Kompira ジョブマネージャは接続種別で指定されたプロトコルでリモートホストへ接続し、コマンドを実行します。コマンドの実行結果は Kompira デーモンに送信されます。

その他、Kompira システムに必要なプロセスには、Apache(httpd)、PostgreSQL(postgresql)、RabbitMQ(rabbitmq-server) があります。

これらの各プロセスは、マシン起動時に自動的に起動するように install.sh によって設定されます。

1.3.2 Kompira デーモンの起動・停止・状態確認

Kompira デーモンの起動・停止は、ルート権限で行ってください。起動後の実効ユーザーは自動的に kompira に変更されます。

RHEL/CentOS 7/8 系の場合

RHEL/CentOS 7/8 系での Kompira デーモンの起動は以下のコマンドによって行います。

```
# systemctl start kompirad
```

停止には以下のコマンドを実行します。

```
# systemctl stop kompirad
```

systemctl status コマンドで、Kompira デーモンの状態を確認することができます。

```
$ systemctl status kompirad.service
* kompirad.service - Kompira-daemon
   Loaded: loaded (/usr/lib/systemd/system/kompirad.service; enabled; vendor preset:
   →disabled)
   Active: active (running) since Thu 2018-07-05 16:33:02 JST; 2h 20min ago
   Process: 5277 ExecStartPre=/opt/kompira/bin/prestart_kompirad.sh (code=exited,
   →status=0/SUCCESS)
   Main PID: 5368 (kompirad)
   CGroup: /system.slice/kompirad.service
           └─5368 /opt/kompira/bin/python3.6 /opt/kompira/bin/kompirad

Jul 05 16:32:32 kompira-install-test3.dev.fixpoint.co.jp systemd[1]: Starting
   →Kompira-daemon...
Jul 05 16:33:02 kompira-install-test3.dev.fixpoint.co.jp systemd[1]: Started Kompira-
   →daemon.
```

起動している時は Active: の欄が **active (running)**、停止している時は **inactive (dead)** と表示されます。

1.3.3 Kompira ジョブマネージャの起動・停止・状態確認

Kompira ジョブマネージャの起動・停止も Kompira デーモンと同様にルート権限で行ってください。起動後の実効ユーザーは自動的に kompira に変更されます。

RHEL/CentOS 7/8 系の場合

RHEL/CentOS 7/8 系での Kompira ジョブマネージャの起動は以下のコマンドによって行います。

```
# systemctl start kompira_jobmgrd.service
```

停止には以下のコマンドを実行します。

```
# systemctl stop kompira_jobmgrd.service
```

status コマンドで Kompira ジョブマネージャの状態を確認することができます。

```
$ systemctl status kompira_jobmgrd.service
* kompira_jobmgrd.service - Kompira-jobmanager
   Loaded: loaded (/usr/lib/systemd/system/kompira_jobmgrd.service; enabled; vendor_
   → preset: disabled)
   Active: active (running) since Thu 2018-07-05 16:32:22 JST; 2h 25min ago
 Main PID: 5164 (kompira_jobmgr)
   CGroup: /system.slice/kompira_jobmgrd.service
           |-5164 /opt/kompira/bin/python3.6 /opt/kompira/bin/kompira_jobmgrd
           `--5197 /opt/kompira/bin/python3.6 /opt/kompira/bin/kompira_jobmgrd

Jul 05 16:32:22 kompira-install-test3.dev.fixpoint.co.jp systemd[1]: Started Kompira-
   → jobmanager.
Jul 05 16:32:22 kompira-install-test3.dev.fixpoint.co.jp systemd[1]: Starting_
   → Kompira-jobmanager...
```

起動している時は Active: の欄が **active (running)**、停止している時は **inactive (dead)** と表示されます。

1.3.4 Kompira 使用ポート一覧

Kompira パッケージをインストールしたサーバ上では、以下に挙げるポートに外部から接続可能である必要があります。

ポート番号	説明
80/TCP	HTTP (HTTPS からのみブラウザアクセスする場合は不要)
443/TCP	HTTPS (HTTP からのみブラウザアクセスする場合は不要)
5671/TCP	AMQPS (外部の kompira_jobmgrd や kompira_sendvt から AMQPS 接続を許可しない場合は不要)
5672/TCP	AMQP (外部の kompira_jobmgrd や kompira_sendvt から AMQP 接続を許可しない場合は不要)

その他、httpd サーバと Kompira エンジンの RPC 用にループバック IF で 5593/TCP のポートを使用します。(こちらは外部から接続可能にする必要はありません)

また、冗長構成を構築する場合は、各ノード間（ハートビート用の内部 IF を用いる場合はその内部 IF 間）で以下のポートを用いた通信を行なえる必要があります。

ポート番号	説明
2224/TCP	pcs (冗長構成ミドルウェア)
4369/TCP	epmd (Erlang port mapper daemon)
5405/UDP	corosync (ハートビートに使用)
5432/TCP	PostgreSQL (レプリケーションに使用)
25672/TCP	RabbitMQ Server (ノード間通信に使用)

バージョン 1.6.4 で変更: rsyncd は使用しなくなったため、ポート番号一覧から削除しました。

バージョン 1.6.8 で追加: AMQPS に対応したため、ポート一覧に 5671/TCP を追加しました。

1.4 ノードの設定

Kompira では以下の種類のノードに対して、リモートジョブを実行することができます。

- ローカルノード
- SSH ノード
- Windows ノード
- ネットワーク機器ノード

ノードの種類ごとに指定する接続種別や、事前にノード側に必要な設定が異なります。

接続種別の指定方法については [制御変数](#) を参照してください。

1.4.1 ローカルノードの設定

ローカルノードに対する接続種別は以下の 1 種類です。

接続種別	プロトコル	備考
local	ローカル実行	kompira_jobmgrd が動作しているノード上でジョブを直接実行します

Kompira においてリモートノードを明示的に指定していない場合、ローカルノード上でジョブを直接実行します。ここでのローカルノードとは kompira_jobmgrd サービスが動作しているノードを示します。

バージョン 1.6.6 で追加: ローカルノードについての説明を追加しました。

1.4.2 SSH ノードの設定

SSH ノードに対する接続種別は以下の 1 種類です。

接続種別	プロトコル	備考
ssh	SSH	SSH v2 のみに対応

Kompira から SSH ノードに対してコマンド実行を行う場合、ssh バージョン 2 でログインできる状態である必要があります。最近の Linux などであればインストールした時点で ssh ログインできる状態になっているため、特に設定する必要はありません。それ以外の対象ノードで ssh ログインを有効にする方法については、各システムのマニュアル等を参考にして設定してください。

注釈: サポートしている SSH のバージョンは v2 のみとなっています。v1 には対応していません。

1.4.3 Windows ノードの設定

Windows ノードに対しては、以下の 4 種類の接続種別が選べます。

接続種別	プロトコル	備考
windows/https	WS-Man HTTPS	サーバ側に SSL 証明書の導入が必要
windows/ https-ignore-validation	WS-Man HTTPS (サーバ証明書の検証エラー無視)	自己署名証明書が利用可能
windows/http	WS-Man HTTP (メッセージ暗号化あり)	
windows/ http-unencrypted	WS-Man HTTP (メッセージ暗号化なし)	(非推奨) サーバ側で非暗号化通信の許可が必要

注釈: 互換性のため従来の接続種別 `winrs` も利用できます。ただし、この場合はポート番号が指定されているかどうかで、利用するプロトコルが切り替わります。ポート番号として 5986 または 443 が指定されている場合は HTTPS が、5985 または 80 が指定されている場合は HTTP が利用されます。ポート番号が省略されている場合は HTTPS 接続を試みます。

Kompira から Windows ノードに対してコマンド実行を行う場合、事前に Windows ノード側にて WinRM の設定が必要となります。なお、対応している WinRM のバージョンは 1.1, 2.0, 3.0 になります。

WinRM のリモート管理を有効にする

WinRM を有効にするため、Windows のコマンドプロンプトを「管理者として実行」して、`winrm quickconfig` (または `winrm qc`) と実行してください。「変更しますか [y/n]？」と表示されたら `y` と答えてください。なおこの操作は最初に 1 回行っておけば、2 回目以降は不要です。

以下は Windows 7 で実行した場合の例ですが、Windows のバージョンやその時点での設定状況によって表示される内容の詳細は異なります。

```
C:\>winrm quickconfig
```

WinRM はこのコンピューター上で要求を受信するように設定されていません。

次の変更を行う必要があります：

WinRM サービスの種類を遅延自動開始に設定します。

WinRM サービスを開始します。

ローカル ユーザーにリモートで管理権限を付与するよう `LocalAccountTokenFilterPolicy` を構成してください。

変更しますか [y/n]? `y`

WinRM は要求を受信するように更新されました。

WinRM サービスの種類を正しく変更できました。

WinRM サービスが開始されました。

ローカル ユーザーにリモートで管理権限を付与するよう `LocalAccountTokenFilterPolicy` を構成しました。

WinRM は、管理用にこのコンピューターへのリモート アクセスを許可するように設定されていません。

次の変更を行う必要があります：

このコンピューター上のあらゆる IP への WS-Man 要求を受け付けるため、`HTTP://*` 上に WinRM リスナーを作成します。

WinRM ファイアウォールの例外を有効にします。

変更しますか [y/n]? `y`

WinRM はリモート管理用に更新されました。

このコンピューター上のあらゆる IP への WS-Man 要求を受け付けるため、`HTTP://*` 上に WinRM リスナーを作成しました。

WinRM ファイアウォールの例外を有効にしました。

WinRM の接続設定を変更する

接続方式としては HTTPS 接続が最も安全ですが、Windows ノードに SSL 証明書を導入しておく必要があります。ここでは詳細な手順は示しませんが、Microsoft のサポートページなどを参考にしてみてください。

- <https://docs.microsoft.com/ja-jp/search/?terms=winrm%20https>

非推奨ですが、メッセージ暗号化なしの HTTP 接続を行なう場合は、WinRM で非暗号化通信を許可しておく必要があります。管理者として実行したコマンドプロンプトから以下のコマンドを実行することで、非暗号化通信を許可することができます。

```
C:\> winrm set winrm/config/service @{AllowUnencrypted="true"}
```

HTTP 接続でメッセージ暗号化ありの場合、メッセージ暗号化無しに比べると速度低下が見られる場合があります。速度低下が問題になる場合は、リスクを理解したうえで非暗号化通信の利用を検討してください。

WinRM は標準では Administrators グループに所属する特権ユーザだけが接続できます。非特権ユーザとして接続する場合は追加の設定が必要になりますので、以下のいずれかを試してみてください。

- 当該ユーザを "Remote Management Users" グループに所属させる。
- 管理者として実行したコマンドプロンプトから以下のコマンドを実行して、当該ユーザあるいは所属グループのいずれかに読み込み権限と実行権限を与える。

```
C:\> winrm configSDDL default
```

バージョン 1.4.10 で変更: Kompira Ver.1.4.10 以降では、デフォルトで NTLM 認証に対応したため、BASIC 認証の許可設定は不要となりました。

バージョン 1.6.4 で変更: HTTP 接続の WinRM においてメッセージ暗号化に対応したため、非暗号化通信の許可設定は必須ではなくなりました。あわせて、非暗号化通信の通信許可は非推奨となりました。

ジョブフローでの動作確認

Kompira で以下のようなジョブフローを作成・実行して windows ノードへのコマンド制御ができるか確認してください。

```
[__host__ = '<Windows サーバのアドレス>',
__user__ = '<Windows ユーザー名>',
__password__ = '<Windows ユーザーパスワード>',
__conntype__ = 'windows/http']
-> ['ver']
-> print($RESULT)
```

ジョブフロープロセスのコンソールに Windows のバージョン番号が表示されれば成功です。

なお WinRM 2.0 以降ではデフォルトで TCP ポート 5985 番を利用しますが、Windows Server 2008 などの WinRM 1.1 では利用するポート番号が 80 となっていますので、その際はポート番号の設定 `__port__ = 80` を追加するようにしてください。

うまく接続できない場合は、ファイアウォールで TCP ポート 5985 番（や 80 番）が通過できない設定になっていないか、ログインアカウントの設定が正しいかなどを確認してください。

1.4.4 ネットワーク機器ノードの設定

Kompira からネットワーク機器ノードに対してコマンド実行を行う場合、ネットワーク機器によっては事前に SSH または TELNET によるログインを有効化する必要があります。各機器で SSH や TELNET ログインを有効にする方法については、各機器のマニュアル等を参考にして設定してください。

バージョン 1.6.4 で追加: ネットワーク機器ノードとのリモート連携に対応しました。

対応機種一覧

Kompira v1.6.4 時点では以下のネットワーク機器（接続プロトコル）とのリモート連携に対応しています。

- Cisco IOS (SSH, TELNET)
- Cisco ASA (SSH)
- Yamaha (SSH, TELNET)
- Juniper ScreenOS (SSH)
- HP Procurve (SSH)

各機器ごとに指定できる接続種別と動作確認を行なった機種を以下に示します。

ネットワーク機器	接続種別	プロトコル	動作確認機種	備考
Cisco IOS	cisco_ios/ssh	SSH	Cisco 892J, Cisco CSR1000V	PUT/GET に対応
	cisco_ios/telnet	TELNET	Cisco 892J, Cisco CSR1000V	PUT/GET に対応
Cisco ASA	cisco_asa/ssh	SSH	Cisco ASA5505	PUT/GET に対応
Yamaha	yamaha/ssh	SSH	Yamaha RTX1200	
	yamaha/telnet	TELNET	Yamaha RTX1200	
Juniper ScreenOS	juniper_screenos/ssh	SSH	Juniper SSG5	
HP ProCurve	hp_procurve/ssh	SSH	ProCurve 2510G	

注釈: ノード種別として上記以外の機種も選択できるようになっていますが、弊社では動作確認はできていません。

ネットワーク機器連携での制限事項

ネットワーク機器との連携においては、リモートジョブの全ての機能に対応しているわけではありません。以下のような制限事項がありますのでご注意ください。

- コマンドジョブではコマンドの成否は判別できません。ログイン成功した場合は、実際のコマンド成否にかかわらず \$STATUS は常に 0 になります。エラー判定が必要な場合は、標準出力にエラーメッセージが含まれていないか、などをジョブフローで判定する必要があります。
- 標準エラー出力には対応していません。内部的には PTY モード (__use_pty__=true) と同様になっており、出力はすべて標準出力として取得されます。
- 制御変数によるシェルの指定や実行ディレクトリの指定には対応していません。
- スクリプトジョブ、再起動ジョブには対応していません。
- 一部の機種では PUT/GET によるファイル転送に対応していますが、単一ファイルの転送のみが可能です。ワイルドカードの指定や再帰的なファイル転送には対応していません。

動作確認を行なった機種情報

弊社で動作確認を行なった各機器のバージョン情報を以下に示します。

Cisco 892J:

```
Cisco IOS Software, C890 Software (C890-UNIVERSALK9-M), Version 15.0(1)M3, RELEASE
→SOFTWARE (fc2)
Technical Support: http://www.cisco.com/techsupport
Copyright (c) 1986-2010 by Cisco Systems, Inc.
Compiled Sun 18-Jul-10 08:34 by prod_rel_team
ROM: System Bootstrap, Version 12.4(22r)YB3, RELEASE SOFTWARE (fc1)
```

Cisco CSR1000V:

```
Cisco IOS XE Software, Version 03.11.00.S - Standard Support Release
Cisco IOS Software, CSR1000V Software (X86_64_LINUX_IOSD-UNIVERSALK9-M), Version 15.
→4(1)S, RELEASE SOFTWARE (fc2)
Technical Support: http://www.cisco.com/techsupport
Copyright (c) 1986-2013 by Cisco Systems, Inc.
Compiled Tue 19-Nov-13 21:00 by mcpre
```

Cisco ASA5505:

```
Cisco Adaptive Security Appliance Software Version 8.4(4)3
Device Manager Version 6.4(9)
Compiled on Wed 11-Jul-12 10:25 by builders
System image file is "disk0:/asa844-3-k8.bin"
Config file at boot was "startup-config"
```

Yamaha RTX1200:

```
RTX1200 BootROM Ver.1.01
RTX1200 Rev.10.01.78 (Wed Nov 13 16:29:42 2019)
```

Juniper SSG5:

```
Product Name: SSG5-Serial
Serial Number: XXXXXXXXXXXXXXXX, Control Number: 00000000
Hardware Version: 0710(0)-(00), FPGA checksum: 00000000, VLAN1 IP (0.0.0.0)
Flash Type: Samsung
Software Version: 6.2.0r8-cu1.0, Type: Firewall+VPN
Feature: AV-K
Compiled by build_master at: Thu Nov 18 01:29:55 PST 2010
```

ProCurve 2510G:

```
Image stamp:    /sw/code/build/cod(cod11)
               Nov 17 2009 16:55:04
               Y.11.16
               43
Boot Image:     Primary
```

1.5 Kompira の設定とログファイル

Kompira が標準で使用するサーバ上のディレクトリおよび設定ファイルについて記述します。

1.5.1 Kompira 標準ディレクトリ

Kompira が標準で使用するサーバ上のディレクトリおよび設定ファイルの一覧を以下に示します。

パス		説明
/opt/kompira/	bin/	Kompira コマンド実行ファイル用ディレクトリ
	kompira.conf	Kompira 設定ファイル
/var/log/kompira/		エンジンやジョブマネージャのログファイル用ディレクトリ
/var/opt/kompira/		Kompira の各種可変ファイル用ディレクトリ
	kompira.lic	Kompira のライセンスファイル
	html/	オンラインヘルプの HTML ファイル群
	repository/	リポジトリ連携のための作業用ディレクトリ
/etc/httpd/conf.d/	kompira.conf	Apache 設定ファイル

バージョン 1.6.4 で非推奨: 添付ファイルはデータベース上に保存されるように変更されたため、/var/opt/kompira/upload ディレクトリは廃止されました。

1.5.2 Kompira ログ

Kompira 自体のログファイルは、標準で以下のディレクトリ下に作成されます。

- /var/log/kompira/

注釈: Windows 環境ではログファイルは標準でディレクトリ C:\Kompira\Log の下に作成されます。

作成されるログファイルごとに、標準のログローテート設定と記録される内容は以下のようになっています。

ログファイル	ログローテート設定	内容
kompira.log	固定 (daily rotate 7)	リクエスト関連のログ出力 (httpd による出力)
kompirad.log	固定 (daily rotate 7)	Kompira デーモンのログ出力
process.log	固定 (daily rotate 無制限)	Kompira ジョブフロープロセスのログ出力
kompira_jobmgrd.log	kompira.conf (daily rotate 7)	Kompira ジョブマネージャのログ出力
kompira_sendevt.log	kompira.conf (1GB rotate 10)	イベント送信コマンドのログ出力
audit-*.log	logrotate (daily rotate 365)	各種操作による監査ログ出力

- ログファイルは自動的にローテートされ、古いログファイルは日付がファイル名に追加された上で保存されます。
- 上記ログファイルのうち、kompira_jobmgrd.log, kompira_sendevt.log は /opt/kompira/kompira.conf によりローテートの間隔やバックアップする世代数の設定を変更することができます。
- audit-*.log については logrotate サービスによりログのローテートを行っており、/etc/logrotate.d/kompira_audit でその設定を変更することができます。

Kompira を構成する各種サービスは、以下のディレクトリにログを出力します。また、各サービスごとの標準のログローテートの設定も以下に示します。

サービス	ログ出力先	ログローテート設定	備考
httpd	/var/log/httpd/	logrotate (daily rotate 30)	
postgresql	/var/log/postgres/	logrotate (daily rotate 30)	
rabbitmq-server	/var/log/rabbitmq/	logrotate (weekly rotate 20)	
pacemaker (1.x)	/var/log/	logrotate (weekly rotate 99)	冗長構成時のみ (RHEL7 系)
pacemaker (2.x)	/var/log/pacemaker/	logrotate (weekly rotate 99)	冗長構成時のみ (RHEL8 系)
corosync	/var/log/cluster/	logrotate (daily rotate 31)	冗長構成時のみ
pcsd	/var/log/pcsd/	logrotate (weekly rotate 5)	冗長構成時のみ

バージョン 1.6.3 で追加: 監査ログが追加されました。

バージョン 1.6.8 で変更: Windows 環境ではログファイルがデフォルトで C:\Kompira\Log に作成されるようになりました。

1.5.3 Kompira 設定ファイル

/opt/kompira/kompira.conf での設定項目は、次のとおりです。

セクション名	項目名	デフォルト値	内容
kompira	site_id	1	本バージョンでは未使用
logging	ログ出力関連の設定		
	loglevel	INFO	ログ出力レベルの設定 (DEBUG, INFO, WARNING, ERROR, CRITICAL)
	logdir	/var/log/kompira	ログファイルのディレクトリ
	logbackup	kompirad: 7 kompira_jobmgrd: 7 kompira_senddevt: 10	ログバックアップの世代数
	logmaxsz	kompirad: 0 kompira_jobmgrd: 0 kompira_senddevt: 1024*1024*1024	ログファイルの最大サイズ (単位は byte) 0 に設定すると日次ローテートとなる
amqp-connection	RabbitMQ の接続情報関連の設定		
	server	localhost	接続ホスト名
	port	(5671 or 5672)	接続ポート番号
	user	(guest or kompira)	接続ユーザー名
	password	(guest or kompira)	接続パスワード
	ssl	(true or false)	SSL で接続するかどうか
	ssl_verify	false	SSL でサーバ証明書を検証するかどうか
	ssl_cacertfile		SSL でサーバ証明書を検証する CA 証明書ファイル
	ssl_certfile		SSL 接続するときの証明書ファイル
	ssl_keyfile		SSL 接続するときの秘密鍵ファイル
	heartbeat_interval	10	ハートビートの送信間隔 (単位は秒)
	max_retry	3	接続断時に再接続する最大試行回数
	retry_interval	30	接続断時に再接続する間隔 (単位は秒)
agent	ジョブマネージャの動作に関する設定		
	name	default	ジョブマネージャの名称

次のページに続く

表 2 – 前のページからの続き

セクション名	項目名	デフォルト値	内容
	pool_size	8	同時プロセスワーカー数
	disable_cache	false	リモート接続キャッシュの無効化
	cache_duration	300	リモート接続キャッシュの有効期限 (秒)
event	イベント送信の設定		
	channel	/system/channels/Alert	イベント送信先チャンネルのKompira 上のパス

なお、Windows 環境では以下のようにデフォルト値が変化します。

- logdir: C:\Kompira\Log

注釈: リモート接続キャッシュは、リモートコマンド実行時のリモート接続を再利用することで、同一ノード、同一アカウントでの連続するリモートコマンド実行の処理を高速化する機能です。

ただし、WinRS 接続では高速化の効果が得られないため、disable_cache の設定にかかわらずリモート接続キャッシュは使用しません。

バージョン 1.6.8 で変更: logdir のデフォルト値が Windows 環境では C:\Kompira\Log に変更になりました。

バージョン 1.6.8 で変更: user のデフォルト値が guest or kompira になりました。接続先ホスト名に localhost または 127.0.0.1 を指定している場合は guest に、それ以外の場合は kompira になります。

バージョン 1.6.8 で変更: password が指定されていないとき、デフォルト値として user と同じ文字列になるように変更されました。

バージョン 1.6.8 で変更: ssl のデフォルト値が true or false に変更になりました。ssl が指定されていないとき、server が localhost の場合は false に、それ以外の場合は true になります。

バージョン 1.6.8 で変更: port のデフォルト値が 5671 or 5672 に変更になりました。port が指定されていないとき、ssl が true の場合は 5671 に false の場合は 5672 になります。

バージョン 1.6.8 で追加: 新しい設定項目 ssl_verify, ssl_cacertfile, ssl_certfile, ssl_keyfile が追加されました。

1.5.4 Kompira 画像ファイル

ブラウザ画面で表示される画像は Kompira サーバ上の以下に配置されています。

- /var/opt/kompira/html/kompira/img/

ここに配置されている画像ファイルは以下の通りです。画像ファイルを直接置き換えることで、画面の見た目を変更することができます。

ファイル名	用途	サイズ	説明
favicon.svg	ファビコン (SVG 形式)	16x16	ブラウザタブやお気に入り登録したときのアイコンに利用されます
favicon.ico	ファビコン (ICO 形式)	16x16	同上 (SVG 形式に対応していないブラウザに利用されます)
brand-logo.svg	ブランドロゴ画像	40x40	メニューバー左上に表示されます
login-logo.svg	ログインロゴ画像	128x128	ログイン画面およびログアウト画面の中央に表示されます
console-loading.gif	コンソールローディング画像	20x20	プロセス詳細画面でプロセスがアクティブな間コンソールに表示されます

注釈: サイズは一般的な解像度のディスプレイで表示される時のピクセル数を参考値として示しています。

1.6 Kompira のデータバックアップ

Kompira 上に保存したデータのバックアップとリストアを行う方法について記述します。

Kompira 上で作成したジョブフローや機器情報の定義は、データベースに格納されます。これらのデータを json 形式でファイルにエクスポートしたり、インポートしたりすることが可能です。

1.6.1 Kompira オブジェクトのエクスポート

以下の形式の `export_data` コマンドを実行することで、標準出力に引数で指定した Kompira ファイルシステムのパス以下のデータが json 形式でダンプされます。

```
/opt/kompira/bin/manage.py export_data [options] <path>...
```

たとえば、Kompira で作成した `/home/guest` 以下の全てのデータをファイルにエクスポートするには、以下のコマンドを実行します。

```
$ /opt/kompira/bin/manage.py export_data /home/guest > guest.json
```

または、`export_dir` コマンドを実行することで、引数で指定した Kompira ファイルシステムのパス以下のデータを、オブジェクト毎に YAML ファイルとしてダンプします。

```
/opt/kompira/bin/manage.py export_dir [options] <path>...
```

なお、以下の型を持つオブジェクトの場合は、代表するフィールドのデータのみがファイルとして出力され、残りのフィールドは、`.<オブジェクト名>` という名前の YAML ファイルとして、プロパティ情報とともに出力されます。

型名	代表フィールド	ファイル形式
Jobflow(ジョブフロー)	source(ソース)	テキスト
ScriptJob(スクリプトジョブ)	source(ソース)	テキスト
Library(ライブラリ)	sourceText(ソーステキスト)	テキスト
Template(テンプレート)	template(テンプレート)	テキスト
Text(テキスト)	text(テキスト)	テキスト
Wiki(Wiki ページ)	wikitext(Wiki テキスト)	テキスト
Environment(環境変数)	environment(環境変数)	YAML

バージョン 1.6.7 で追加: export_dir で、添付ファイルフィールドのデータを別ファイルとして出力するように変更しました。

1.6.2 Kompira オブジェクトのインポート

import_data コマンドを用いて、エクスポートしたファイルからデータを取り込むことができます。import_data コマンドの形式は以下のとおりです。

```
/opt/kompira/bin/manage.py import_data [options] <filename>...
```

たとえば、/home/guest ディレクトリをエクスポートしたファイル guest.json を取り込むには、以下のコマンドを実行します。

```
$ /opt/kompira/bin/manage.py import_data guest.json
[2014-07-25 12:34:49,576] INFO: import data: start...
[2014-07-25 12:34:49,676] INFO: home/guest: import is skipped: "/home/guest" already
→exists.
[2014-07-25 12:34:49,710] INFO: home/guest/a: import is skipped: "/home/guest/a"
→already exists.
[2014-07-25 12:34:49,743] INFO: home/guest/b: import is skipped: "/home/guest/b"
→already exists.
[2014-07-25 12:34:49,743] INFO: import data: finished (created=0, updated=0,
→skipped=3, error=0)
```

インポートする json ファイル中に既に存在するパスのオブジェクトが含まれていた場合、そのオブジェクトのインポートはスキップされます。上記例の場合は、インポートしようとしたファイル3つが全てスキップされた状態です。

overwrite-mode オプションを指定すれば、上書きインポートをすることが可能です。

```
$ /opt/kompira/bin/manage.py import_data --overwrite-mode guest.json
[2014-07-25 12:39:15,685] INFO: import data: start...
[2014-07-25 12:39:15,821] INFO: import object: imported "home/guest" to "/home/guest"
→(updated)
[2014-07-25 12:39:15,904] INFO: import object: imported "home/guest/a" to "/home/
→guest/a" (updated)
[2014-07-25 12:39:15,971] INFO: import object: imported "home/guest/b" to "/home/
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```

→guest/b" (updated)
[2014-07-25 12:39:15,991] INFO: import fields: /home/guest: []
[2014-07-25 12:39:16,015] INFO: import fields: /home/guest/a: ['wikitext']
[2014-07-25 12:39:16,046] INFO: import fields: /home/guest/b: ['wikitext']
[2014-07-25 12:39:16,046] INFO: import data: finished (created=0, updated=3,
→skipped=0, error=0)

```

export_dir コマンドでダンプしたファイルについては、import_dir コマンドを用いて取り込むことが出来ます。

```
/opt/kompira/bin/manage.py import_dir [options] <dirname>...
```

1.6.3 バックアップ

Kompira の全てのデータをバックアップするための手順について説明します。

Kompira はデータベース上以外に、サーバ上の *Kompira 標準ディレクトリ* に挙げられているパスのデータを使用します。Kompira のデータをバックアップする際は、export_data コマンドによる Kompira オブジェクトのバックアップに加えて、必要に応じてサーバ上のファイルバックアップも行う必要があります。

Kompira オブジェクトとライセンスファイルのバックアップを行う場合の例を以下に示します。

```

$ mkdir -p /tmp/kompira_backup
$ cd /tmp/kompira_backup
$ /opt/kompira/bin/manage.py export_data / --virtual-mode > backup.json
$ cp /var/opt/kompira/kompira.lic ./
$ cd /tmp
$ tar zcf kompira_backup.tar.gz ./kompira_backup

```

1.6.4 export_data のオプション

export_data コマンドには以下のオプションがあります。

オプション	説明
--directory=DIRECTORY	エクスポートするパスの起点となるディレクトリを指定します。(デフォルトは'/')
--virtual-mode	仮想ファイルシステムに含まれるデータも出力します。
--owner-mode	エクスポート対象となったオブジェクトの所有者のユーザオブジェクトおよびそのユーザの所属グループオブジェクトも出力します。
--zip-mode	ZIP 形式で出力します。
--without-attachments	添付ファイルデータを出力しません。
-h, --help	ヘルプメッセージを表示します。

バージョン 1.6.7 で追加: --zip-mode, without-attachements オプションが追加されました。

1.6.5 export_dir のオプション

export_dir コマンドには以下のオプションがあります。

オプション	説明
--directory=DIRECTORY	エクスポートするパスの起点となるディレクトリを指定します。(デフォルトは'/')
--property-mode	表示名など属性も出力します。
--datetime-mode	作成日時と更新日時も出力します。
--current=CURRENT_DIR	出力先のディレクトリを指定します。
--without-attachments	添付ファイルデータを出力しません。
--inline-attachments	添付ファイルデータを YAML ファイルに含めて出力します。
-h, --help	ヘルプメッセージを表示します。

バージョン 1.6.7 で追加: --without-attachements, --inline-attachments オプションが追加されました。

1.6.6 import_data のオプション

import_data コマンドには以下のオプションがあります。

オプション	説明
--user=USER	インポートするデータの所有者を USER (ユーザー ID を指定) に設定します。
--directory=ORIGIN-DIR	インポート先の起点となるディレクトリを指定します。(デフォルトは'/')
--overwrite-mode	既存のオブジェクトがある場合に上書きします。
--owner-mode	インポートするデータの所有者をエクスポート時の所有者情報に設定します。
--update-config-mode	Config 型オブジェクトの設定データも上書きします。(--overwrite-mode オプションも同時に指定する必要があります)
--now-updated-mode	現在時刻をオブジェクトの更新日時に設定します。
-h, --help	ヘルプメッセージを表示します。

バージョン 1.6.7 で追加: --update-config-mode オプションが追加されました。

1.6.7 import_dir のオプション

import_dir コマンドには以下のオプションがあります。

オプション	説明
--user=USER	インポートするデータの所有者を USER (ユーザー ID を指定) に設定します。
--directory=ORIGIN-DIR	インポート先の起点となるディレクトリを指定します。(デフォルトは '/')
--overwrite-mode	既存のオブジェクトがある場合に上書きします。
--owner-mode	インポートするデータの所有者をエクスポート時の所有者情報に設定します。
--update-config-mode	Config 型オブジェクトの設定データも上書きします。(--overwrite-mode オプションも同時に指定する必要があります)
--now-updated-mode	現在時刻をオブジェクトの更新日時に設定します。
-h, --help	ヘルプメッセージを表示します。

バージョン 1.6.7 で追加: --update-config-mode オプションが追加されました。

1.7 Kompira ライセンス

license_info コマンドを用いて、Kompira のライセンス状態を確認することができます。license_info コマンドの形式は以下のとおりです。

```
/opt/kompira/bin/manage.py license_info
```

以下はライセンスが登録されている場合の実行例です。

```
$ /opt/kompira/bin/manage.py license_info
*** Kompira License Information ***
License ID:      KP-REGLM0-0000000001
Edition:        REGL
Hardware ID:     NODE:000C29FB949E
Expire date:     2015-12-31
The number of registered nodes: 0 / 100
The number of registered jobflows: 2 / 100
The number of registered scripts: 0 / 100
Licensee:        fixpoint,inc.
Signature:       dwyWvG9eKbnGxcpWfVr1H0wSybLkGL7UqB2E6d5f0jYapfTx/
→AABJ66W3sRpK0byk+9Y724

→NuEZ9Rh90ySU8f2GRsIyujuVrgPloajokbdZrPFIqOlyvLkak8MAWcGJxiioPHPNd2Tv2BN
    Osq6bs5ZfJlCReEJhYyyngnXjeLBM=
```

ライセンスが登録されていない場合は、仮ライセンス情報が表示されます。

```
$ /opt/kompira/bin/manage.py license_info
*** Kompira License Information ***
License ID:      KP-TEMP-00000000000
Edition:        temporary
Hardware ID:     NODE:000C29FB949E
Expire date:     2015-01-22
The number of registered nodes: 0 / 100
The number of registered jobflows:      2 / 100
The number of registered scripts:       0 / 100
Licensee:
Signature:      None

Kompira is running with temporary license.
```

ライセンスファイルパスは/var/opt/kompira/kompira.lic です。

license_update コマンドを用いて、上記のパスにライセンスファイルを配置したり更新したりすることができます。

license_update コマンドの形式は以下のとおりです。

```
/opt/kompira/bin/manage.py license_update <LICENSE_FILE>
```

license_update コマンドには以下のオプションがあります。

オプション	説明
--no-backup	ライセンスファイルのバックアップを行いません
--force	ライセンスファイルの検証に失敗しても強制的に更新します

バージョン 1.6.2 で追加: license_update コマンド

参考:

ライセンス管理: ライセンスの確認と登録はブラウザ上からも行うことが可能です。

1.8 秘密鍵の管理

1.8.1 秘密鍵の変更

パスワードフィールドの暗号化に使用する秘密鍵を変更するには、change_secretkey コマンドを root 権限で実行します。実行するとデータベースに暗号化されて保存されている全てのパスワードデータを新しい秘密鍵で再暗号化して保存し直します。

change_secretkey は以下の形式です。

```
# /opt/kompira/bin/manage.py change_secretkey [options] <new_secretkey>
```


オプションは以下のとおりです。

オプション	説明
<code>--no-backup</code>	変更前の鍵をバックアップしません。
<code>--force</code>	途中で再暗号化に失敗したパスワードデータがあっても、再暗号化を続行します。

注釈: 秘密鍵の文字列は `/var/opt/kompira/.secret_key` に保存されています。

注釈: `change_secretkey` を実行後は、`httpd` サービスと `kompirad` サービスをリスタートしてください。冗長構成の場合は、アクティブ側で `change_secretkey` を実行した後で、スタンバイ側への切り替えを行ってください。

1.9 冗長構成管理

Kompira を 2 台のサーバで Pacemaker/corosync を用いた Active-Standby 型の冗長構成で動作させることができます。ここでは、そのインストール方法や状態確認方法、フェイルオーバー等について記述します。

1.9.1 はじめに

Pacemaker は Kompira が動作する上で必要なリソース (アプリケーション) を監視し、エラーを検知した場合はフェイルオーバーを行なうことで冗長性を実現します。

Pacemaker で監視するリソースの一覧を以下に示します。

httpd, kompirad, kompira_jobmgrd

Kompira の動作に必要なプロセスです。アクティブ状態のサーバ上でのみ動作します。

RabbitMQ

Kompira の動作に必要な RabbitMQ プロセスです。アクティブ状態のサーバのプロセスが Master、スタンバイ状態のサーバのプロセスが Slave として動作します。

IPAddr2

仮想 IP アドレスを管理するためのリソースです。

PostgreSQL

PostgreSQL データベースプロセスです。アクティブ状態のサーバのプロセスが Master、スタンバイ状態のサーバのプロセスが Slave として動作します。PostgreSQL はレプリケーションの設定がされており、プライマリ機とセカンダリ機のデータが同期されます。

1.9.2 インストール

Kompira の冗長構成を構築する場合、2 台のサーバにそれぞれ Kompira をインストールしてから、プライマリ機、セカンダリ機の順に冗長構成のセットアップを実施する必要があります。

2 台のサーバには 2 つのネットワークインターフェースが必要になります。ネットワークインターフェース名は OS のバージョンや環境によって、eth0, eth1,... であったり、ens192, ens224,... であったりします。

以降の説明では、それぞれのサーバをプライマリ機 (ha-kompira1)、セカンダリ機 (ha-kompira2) と呼び、ネットワークインターフェースとしては eth0, eth1 を持っていることとします。また、eth0 はサービス提供用のネットワークに接続され、eth1 はハートビート用インターフェースとして使用するため独立したネットワークで 2 台のサーバが接続されていることとします。

なお、冗長構成を構築した初期状態ではプライマリ機がアクティブ状態、セカンダリ機がスタンバイ状態となります。

Kompira の冗長構成を構築するにはパッケージに含まれる `setup_cluster.sh` を利用します。以下では OS インストール直後のサーバ 2 台に対して、冗長構成の Kompira をインストールする手順を記述します。

注釈: `setup_cluster.sh` は、`install.sh` と同様に外部から必要な各種ミドルウェアをダウンロードします。外部ネットワークに接続可能な環境で実行してください。

プライマリ機の設定

Kompira パッケージを通常インストール後、`--primary` オプションを指定して `setup_cluster.sh` を実行することでプライマリ機のセットアップを行います。

また `setup_cluster.sh` を実行するときに、以下の情報を引数で指定します。

- ハートビートネットワークデバイス名
- クラスタに割り当てる仮想 IP アドレス (VIP) とそのネットワークマスク長

例えば、ハートビートネットワークデバイスとして eth1 を、仮想 IP アドレスとして 192.168.0.100 とネットワークマスク長に 24 を指定する場合、以下のようにコマンドを実行します。

```
$ tar xzf kompira-<version>-bin.tar.gz
$ cd kompira-<version>-bin
# ./install.sh
# ./setup_cluster.sh --primary --heartbeat-device eth1 192.168.0.100/24
```

注釈: 内部的には冗長構成の各ノードを名前解決できる必要があるため、`/etc/hosts` に ha-kompira1 (プライマリ機) や ha-kompira2 (セカンダリ機) といった別名の登録を行なうようになっています。`setup_cluster.sh` ではサーバのホスト名は変更しません。

セカンダリ機の設定

Kompira パッケージを通常インストール後、`--secondary` オプションを指定して `setup_cluster.sh` を実行することでセカンダリ機のセットアップを行ないます。

また `setup_cluster.sh` を実行するときに、以下の情報を引数で指定します。仮想 IP アドレスの指定は不要です。

- ハートビートネットワークデバイス名

例えば、ハートビートネットワークデバイスとして `eth1` を指定する場合、以下のようにコマンドを実行します。

```
$ tar xzf kompira-<version>-bin.tar.gz
$ cd kompira-<version>-bin
# ./install.sh
# ./setup_cluster.sh --secondary --heartbeat-device eth1
```

注釈: セカンダリ機での `setup_cluster.sh` の実行時、プライマリ機からデータベースのスナップショットを取得します。セットアップ済みのプライマリ機を立ち上げ、接続している状態で `setup_cluster.sh` を実行してください。

状態確認

プライマリ機、セカンダリ機でインストール処理が完了したら、以下の URL に対して Web ブラウザからアクセスし、ログイン画面が表示されることを確認してください。

```
http://192.168.0.100/
```

URL はプライマリ機インストール時に設定した仮想 IP アドレスです。この URL はプライマリ機に障害が発生し、フェイルオーバーが発生した場合でも維持されます。

また、冗長構成の各リソースの状態を確認するには、プライマリ機またはセカンダリ機で `crm_mon` コマンドを使用します。

```
# crm_mon -A1
Cluster Summary:
* Stack: corosync
* Current DC: ha-kompira1 (version 2.1.0-8.el8-7c3f660707) - partition with quorum
* Last updated: Wed Sep  8 22:21:02 2021
* Last change:  Wed Sep  8 22:19:56 2021 by hacluster via crmd on ha-kompira1
* 2 nodes configured
* 10 resource instances configured

Node List:
* Online: [ ha-kompira1 ha-kompira2 ]
```

(次のページに続く)

Active Resources:

```

* Resource Group: webserver:
  * res_memcached      (systemd:memcached):      Started ha-kompira1
  * res_kompirad       (systemd:kompirad):       Started ha-kompira1
  * res_kompira_jobmgrd (systemd:kompira_jobmgrd): Started ha-kompira1
  * res_httpd (ocf::heartbeat:apache):          Started ha-kompira1
  * res_vip (ocf::heartbeat:IPaddr2):           Started ha-kompira1
* Clone Set: res_pgsql-clone [res_pgsql] (promotable):
  * Masters: [ ha-kompira1 ]
  * Slaves: [ ha-kompira2 ]
* Clone Set: res_rabbitmq-clone [res_rabbitmq]:
  * Started: [ ha-kompira1 ha-kompira2 ]

```

Node Attributes:

```

* Node: ha-kompira1:
  * master-res_pgsql      : 1001
  * rmq-node-attr-last-known-res_rabbitmq : rabbit@ha-kompira1
  * rmq-node-attr-res_rabbitmq : rabbit@ha-kompira1
* Node: ha-kompira2:
  * master-res_pgsql      : 1000
  * rmq-node-attr-last-known-res_rabbitmq : rabbit@ha-kompira2
  * rmq-node-attr-res_rabbitmq : rabbit@ha-kompira2

```

crm_mon コマンドの出力において確認すべき点を示します。

- **Resource Group**

アクティブ機のみで動作するリソースが表示されます。「Started <アクティブ機のホスト名>」と表示されていれば正常です。

- **Clone Set**

両方のサーバで動作するリソースが表示されます。promotable リソースの場合、Masters にアクティブ機側のホスト名、Slaves にスタンバイ機側のホスト名が表示されていれば正常です。

- **Node Attributes**

PostgreSQL プロセスの詳細な状態が表示されています。正しくレプリケーションが行われている場合、master-res_pgsql の行にアクティブ機側には 1001、スタンバイ機側には 1000 と表示されます。

ライセンス登録

冗長構成の場合、アクティブ機とスタンバイ機、両方のサーバに対してそれぞれライセンスファイルを登録する必要があります。

Kompira **ライセンス** に記載された手順を実行し、各サーバに対してライセンスファイルを登録してください。

1.9.3 アップデート

まず、冗長構成のアップデートに際しての注意点を示します。

- アップデート作業前にアクティブ系・スタンバイ系ともに正常に動作していることをご確認ください。片系しか正常に動作していないような環境では、アップデートできない可能性もあります。
- 各ステップで異常が発生していないか、アップデートに失敗していないかなど確認しながら作業するようにしてください。
- いずれのアップデート手順でも、アクティブ系で実行中であったジョブは強制終了されます。アップデート後の起動および系切り替えで、強制終了されたジョブの動作が再開するわけではありませんのでご注意ください。
- アップデート手順について、バージョンに特有の注意事項がある場合があります。事前にリリースノート等をご確認ください。
- 古い erlang / rabbitmq-server を利用していた環境では、以下に示す片系停止アップデート手順が行えない場合があります。

冗長構成をアップデートする場合、大きく 2 通りのアップデート手順があります。その手順によって、Master/Slave の切り替えを伴う方式と、切り替えを伴わない方式を選ぶことができます。以下に、簡単な手順を示しますので参考にしてください。

両系停止アップデート手順（切り替えを伴わない）

1. スタンバイ系を停止 (pcs cluster stop)
2. アクティブ系を停止 (pcs cluster stop --force) ※ここで動作中のジョブが強制終了します
3. アクティブ系をアップデート (/install.sh) ※ここで自動起動ジョブが開始します
4. スタンバイ系をアップデート (/install.sh)

系切り替えが発生しない代わりに両系を停止するため、ジョブが停止する期間が長めになります。

片系停止アップデート手順（切り替えを伴う）

1. スタンバイ系を停止 (pcs cluster stop)
2. スタンバイ系をアップデート (./install.sh)
3. アクティブ系を停止 (pcs cluster stop) ※ここで系切り替えが発生して、アップデート済みのスタンバイ系がアクティブになります。旧アクティブ系で動作中であったジョブは強制終了して、新アクティブ系で自動起動ジョブが開始します。
4. 旧アクティブ系をアップデート (./install.sh)

系切り替えを伴いますが、片系は動作しているため、ジョブが停止する期間が短めになります。

ただし、古い erlang / rabbitmq-server からアップデートする場合など互換性に問題がある場合は、片系停止アップデートは行なえません。このとき、install.sh の最後に以下のような警告が表示され、クラスタの自動再開処理もスキップされます。

```
[2023-02-03 12:00:00] WARN: !!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
→!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
[2023-02-03 12:00:00] WARN:
[2023-02-03 12:00:00] WARN: FULL STOP UPGRADES ARE REQUIRED! (For version_
→compatibility)
[2023-02-03 12:00:00] WARN:
[2023-02-03 12:00:00] WARN:   erlang: R16B -> 23.3.4.11
[2023-02-03 12:00:00] WARN:   rabbitmq-server: 3.3.5 -> 3.10.0
[2023-02-03 12:00:00] WARN:
[2023-02-03 12:00:00] WARN: - Automatic cluster start was skipped.
[2023-02-03 12:00:00] WARN: - Please stop both systems and upgrade each one.
[2023-02-03 12:00:00] WARN: - Then start the clusters in order with the following_
→command.
[2023-02-03 12:00:00] WARN:
[2023-02-03 12:00:00] WARN:           # pcs cluster start
[2023-02-03 12:00:00] WARN:
[2023-02-03 12:00:00] WARN: - At that time, start the cluster first on the node that_
→was active before the upgrade.
[2023-02-03 12:00:00] WARN:
[2023-02-03 12:00:00] WARN: !!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
→!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
```

この場合は、両系停止アップデート手順に切り替えてください。アップデート後は pcs cluster start コマンドで冗長構成をアクティブ系から順次再開してください。

警告: 両系停止アップデートの手順3、および、片系停止アップデートの手順2で install.sh の --skip-cluster-start オプションを指定すると、冗長構成の設定が正しく更新されないことがあるのでご注意ください。

バージョン 1.6.6 で変更: 冗長構成時の install.sh 実行後に自動で pcs cluster start を実行するようになりました

た。これにともない冗長構成のアップデート手順が変更されました。

バージョン 1.6.8 で変更: 片系停止アップデートが行えない場合、警告を表示して pcs cluster start をスキップするようになりました。

1.9.4 冗長構成の停止・起動

冗長構成で動作している Kompira の停止・起動方法について記述します。

はじめに、crm_mon コマンドを使用して 2 台のサーバのどちらがアクティブ状態として動作しているかを確認します。crm_mon コマンド中のリソース部分の表示で、「Started」および「Masters」と表示されているのがアクティブ状態のサーバとなります。

以降の説明では、ha-kompira1 がアクティブ状態であると仮定して手順を記述します。

原則として、停止する場合はスタンバイ機を停止してからアクティブ機を停止、起動する場合はアクティブ機を起動してからスタンバイ機を起動という順序で行います。

これは、アクティブ機を先に停止するとスタンバイ機がアクティブ機に異常が起こったと判断してフェイルオーバー処理が行われてしまうためです。誤ってフェイルオーバーがされてしまった場合は、[フェイルオーバー時の動作とフェイルバック](#) の手順を参照してください。

冗長構成の停止

まず、セカンダリ (ha-kompira2) の Pacemaker プロセスを停止します。

```
# pcs cluster stop
Stopping Cluster (pacemaker)...
Stopping Cluster (corosync)...
```

サービスが停止したのを確認してから、プライマリ (ha-kompira1) で同様の処理を行います。冗長構成の最後の一台を停止させるときは --force オプションが必要になります。

```
# pcs cluster stop --force
Stopping Cluster (pacemaker)...
Stopping Cluster (corosync)...
```

これで Pacemaker/corosync によるリソースの監視が停止します。なお、pacemaker プロセスが停止している場合、crm_mon コマンドは実行できないことに注意してください。

プロセスだけでなくサーバー OS のシャットダウンを行う場合、上記処理は必要ありません。ただし、シャットダウンの場合もスタンバイ機のシャットダウンが完了してからアクティブ機のシャットダウンを行ってください。

冗長構成の起動

起動を行う場合は、停止とは反対の手順を実行します。はじめに、プライマリ (ha-kompira1) の Pacemaker プロセスを起動します。

```
# pcs cluster start
Starting Cluster...
```

注釈: RHEL7 系など Pacemaker (1.x) 環境では、pcs cluster start 実行時には以下のように表示されます。

```
# pcs cluster start
Starting Cluster (corosync)...
Starting Cluster (pacemaker)...
```

pacemaker プロセスが起動すると、pacemaker に登録されているリソースが順次起動します。crm_mon コマンドを実行し、全てのリソースが起動するまで待機してください。

リソースが起動したら、セカンダリ (ha-kompira2) の Pacemaker プロセスを起動します。

```
# pcs cluster start
Starting Cluster...
```

以上で冗長構成の起動が完了します。

プロセスだけでなくサーバー OS の起動から行う場合、上記処理は必要ありません。Pacemaker サービスは自動起動されるように設定されています。

アクティブ機を起動し、起動が完了したことを確認してからスタンバイ機の起動を行ってください。

1.9.5 フェイルオーバー時の動作とフェイルバック

アクティブ機で何らかの障害が発生すると、自動的にフェイルオーバーが実行されてスタンバイ機がアクティブ状態に昇格します。

以下はアクティブ状態であった ha-kompira1 がシャットダウンした後に ha-kompira2 で crm_mon コマンドを実行した場合の表示です。

```
# crm_mon -A1
Cluster Summary:
* Stack: corosync
* Current DC: ha-kompira2 (version 2.1.0-8.el8-7c3f660707) - partition with quorum
* Last updated: Wed Sep  8 22:27:37 2021
* Last change:  Wed Sep  8 22:27:09 2021 by root via crm_attribute on ha-kompira2
* 2 nodes configured
* 10 resource instances configured
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

Node List:

- * Online: [ha-kompira2]
- * OFFLINE: [ha-kompira1]

Active Resources:

- * Resource Group: webserver:
 - * res_memcached (systemd:memcached): Started ha-kompira2
 - * res_httpd (ocf::heartbeat:apache): Started ha-kompira2
 - * res_kompirad (systemd:kompirad): Started ha-kompira2
 - * res_kompira_jobmgrd (systemd:kompira_jobmgrd): Started ha-kompira2
 - * res_vip (ocf::heartbeat:IPaddr2): Started ha-kompira2
- * Clone Set: res_pgsql-clone [res_pgsql] (promotable):
 - * Masters: [ha-kompira2]
- * Clone Set: res_rabbitmq-clone [res_rabbitmq]:
 - * Started: [ha-kompira2]

Node Attributes:

- * Node: ha-kompira2:
 - * master-res_pgsql : 1001
 - * rmq-node-attr-last-known-res_rabbitmq : rabbit@ha-kompira2
 - * rmq-node-attr-res_rabbitmq : rabbit@ha-kompira2

ha-kompira1 が OFFLINE と表示されており、各リソースは ha-kompira2 上で動作していることが確認できます。

以降では、ha-kompira1 が復旧可能だった場合、復旧不能だった場合に分けて手順を記述します。

サーバーが復旧可能だった場合

シャットダウンした ha-kompira1 を正常に起動できた場合の手順です。

ha-kompira1 を起動すると、状態は以下のようになります。

```
# crm_mon -A1
```

Cluster Summary:

- * Stack: corosync
- * Current DC: ha-kompira2 (version 2.1.0-8.el8-7c3f660707) - partition with quorum
- * Last updated: Wed Sep 8 22:35:16 2021
- * Last change: Wed Sep 8 22:34:57 2021 by root via crm_attribute on ha-kompira2
- * 2 nodes configured
- * 10 resource instances configured

Node List:

- * Online: [ha-kompira1 ha-kompira2]

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

Active Resources:

```
* Resource Group: webserver:
  * res_memcached      (systemd:memcached):      Started ha-kompira2
  * res_httpd (ocf::heartbeat:apache):          Started ha-kompira2
  * res_kompirad       (systemd:kompirad):        Started ha-kompira2
  * res_kompira_jobmgrd (systemd:kompira_jobmgrd): Started ha-kompira2
  * res_vip    (ocf::heartbeat:IPaddr2):         Started ha-kompira2
* Clone Set: res_pgsql-clone [res_pgsql] (promotable):
  * Masters: [ ha-kompira2 ]
  * Slaves: [ ha-kompira1 ]
* Clone Set: res_rabbitmq-clone [res_rabbitmq]:
  * Started: [ ha-kompira1 ha-kompira2 ]
```

Node Attributes:

```
* Node: ha-kompira1:
  * master-res_pgsql           : -1
  * rmq-node-attr-last-known-res_rabbitmq : rabbit@ha-kompira1
  * rmq-node-attr-res_rabbitmq  : rabbit@ha-kompira1
* Node: ha-kompira2:
  * master-res_pgsql           : 1001
  * rmq-node-attr-last-known-res_rabbitmq : rabbit@ha-kompira2
  * rmq-node-attr-res_rabbitmq  : rabbit@ha-kompira2
```

ha-kompira1 ではデータベースが正しく同期されておらず、スタンバイ機として正常な状態にはなっていません。

スタンバイ機としてのセットアップを完了するためには、スタンバイ機で kompira パッケージに付属している sync_master.sh を使用します。sync_master.sh はアクティブ機のデータベースをスタンバイ機にコピーし、レプリケーションの設定を行った上でデータベースプロセスを起動します。

```
# /opt/kompira/bin/sync_master.sh
[2021-09-09 00:30:50] ****:_
→ *****
[2021-09-09 00:30:50] ****: Kompira-1.6.2.post7
[2021-09-09 00:30:50] ****: Start: Sync with the Master
...
[2021-09-09 00:30:54] INFO: Waiting for the resources to stabilize.
    PostgreSQL | RabbitMQ
      -1, 1001 | rabbit@ha-kompira1, rabbit@ha-kompira2
      -1, 1001 | rabbit@ha-kompira1, rabbit@ha-kompira2
      1000, 1001 | rabbit@ha-kompira1, rabbit@ha-kompira2
[2021-09-09 00:30:56] INFO: Resources stabilized.
...
[2021-09-09 00:30:56] INFO: Display state of resources.
  * Resource Group: webserver:
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```

* res_memcached      (systemd:memcached):      Started ha-kompira2
* res_httpd (ocf::heartbeat:apache):          Started ha-kompira2
* res_kompirad       (systemd:kompirad):        Started ha-kompira2
* res_kompira_jobmgrd (systemd:kompira_jobmgrd): Started ha-kompira2
* res_vip    (ocf::heartbeat:IPaddr2):         Started ha-kompira2
* Clone Set: res_pgsql-clone [res_pgsql] (promotable):
* Masters: [ ha-kompira2 ]
* Slaves: [ ha-kompira1 ]
* Clone Set: res_rabbitmq-clone [res_rabbitmq]:
* Started: [ ha-kompira1 ha-kompira2 ]
[2021-09-09 00:30:56] ****:
[2021-09-09 00:30:56] ****: Finish: Sync with the Master (status=0)
[2021-09-09 00:30:56] ****:
→*****

```

注釈: sync_master.sh は、実行時にデータベースに関連する全てのデータを /var/lib/pgsql/12/data.old に退避し、アクティブ機のデータを取得します (ログファイルを含む)。同期に成功すると、/var/lib/pgsql/12/data.old は自動的に削除されます。失敗した場合は、/var/lib/pgsql/12/data.old は /var/lib/pgsql/12/data に戻されます。

sync_master.sh を実行後に crm_mon コマンドを呼び出すと、ha-kompira1 の master-res_pgsql が 1000 となったことが確認できます。

```

# crm_mon -A1
Cluster Summary:
* Stack: corosync
* Current DC: ha-kompira2 (version 2.1.0-8.el8-7c3f660707) - partition with quorum
* Last updated: Thu Sep  9 00:35:55 2021
* Last change:  Thu Sep  9 00:30:55 2021 by root via crm_attribute on ha-kompira2
* 2 nodes configured
* 10 resource instances configured

Node List:
* Online: [ ha-kompira1 ha-kompira2 ]

Active Resources:
* Resource Group: webserver:
* res_memcached      (systemd:memcached):      Started ha-kompira2
* res_httpd (ocf::heartbeat:apache):          Started ha-kompira2
* res_kompirad       (systemd:kompirad):        Started ha-kompira2
* res_kompira_jobmgrd (systemd:kompira_jobmgrd): Started ha-kompira2
* res_vip    (ocf::heartbeat:IPaddr2):         Started ha-kompira2
* Clone Set: res_pgsql-clone [res_pgsql] (promotable):
* Masters: [ ha-kompira2 ]

```

(次のページに続く)

```

* Slaves: [ ha-kompira1 ]
* Clone Set: res_rabbitmq-clone [res_rabbitmq]:
* Started: [ ha-kompira1 ha-kompira2 ]

Node Attributes:
* Node: ha-kompira1:
  * master-res_pgsql          : 1000
  * rmq-node-attr-last-known-res_rabbitmq : rabbit@ha-kompira1
  * rmq-node-attr-res_rabbitmq : rabbit@ha-kompira1
* Node: ha-kompira2:
  * master-res_pgsql          : 1001
  * rmq-node-attr-last-known-res_rabbitmq : rabbit@ha-kompira2
  * rmq-node-attr-res_rabbitmq : rabbit@ha-kompira2

```

サーバーが復旧不能だった場合

ハードウェア障害などによって、シャットダウンした機器を交換する必要がある場合の手順です。この場合、OS インストール直後のサーバを用意し、スタンバイ状態として導入します。

冗長構成環境ではアクティブ機とスタンバイ機それぞれにライセンスファイルを登録する必要があります。install.sh を実行後、license_info コマンドを使用してハードウェア ID の確認およびライセンスファイルの登録を行ってください。

```

$ tar xzf kompira-<version>-bin.tar.gz
$ cd kompira-<version>-bin
# ./install.sh

$ cp kompira_KP-EVALM100-00000000001.lic /var/opt/kompira/kompira.lic
$ cd /var/opt/kompira
$ chown apache:apache kompira.lic
$ /opt/kompira/bin/manage.py license_info

# ./setup_cluster.sh --primary --slave-mode

```

上記コマンドは、ha-kompira1 をスタンバイ状態としてセットアップする場合の例です。

冗長構成環境ではアクティブ機とスタンバイ機それぞれにライセンスファイルを登録する必要があるため、setup_cluster.sh を実行する前にライセンスファイルの登録手順を行う必要があります。

setup_cluster.sh の実行において ha-kompira1 ではなく ha-kompira2 を追加する場合は、--primary オプションの代わりに--secondary オプションを使用します。

setup_cluster.sh の処理が完了したら、[状態確認](#) を参考に動作確認を行ってください。

参考:

[Kompira ライセンス](#)

1.9.6 setup_cluster.sh のオプション

setup_cluster.sh の動作オプションを以下に示します。

オプション	デフォルト値	説明
<code>--primary</code>	true(指定あり)	プライマリとしてセットアップを開始します。
<code>--secondary</code>	false(指定なし)	セカンダリとしてセットアップを開始します。
<code>--heartbeat-device=</code> DEVICE		ハートビート用ネットワークデバイスを指定します。
<code>--master-mode</code>		アクティブ状態としてセットアップします。
<code>--slave-mode</code>		スタンバイ状態としてセットアップします。
<code>--without-vip</code>		VIP 無しの構成でセットアップします。(別途ロードバランサ等による ACT/SBY 監視とアクセス振り分けの設定が必要です)
<code>--without-jobmanager</code>		ジョブマネージャ無しの構成でセットアップします。
<code>--hostname-prefix=</code> PREFIX_NAME	ha-kompira	設定するホスト名のプレフィックスを指定します。
<code>--heartbeat-netaddr=</code> NETWORK_ADDRESS	192.168.99.0	ハートビート用インタフェースに設定するネットワークアドレスを指定します。
<code>--manual</code>		パラメータの自動設定を行いません。
<code>--manual-heartbeat</code>		ハートビート用ネットワークを手動設定します。 <code>--heartbeat-primary</code> および <code>--heartbeat-secondary</code> の指定が必要です。 <code>--heartbeat-netaddr</code> の指定は無視します。ハートビートはユニキャストモードで動作します。
<code>--heartbeat-primary=</code> NETWORK_ADDRESS		プライマリの IP アドレスを指定します。
<code>--heartbeat-secondary=</code> NETWORK_ADDRESS		セカンダリの IP アドレスを指定します。
<code>--cluster-name=NAME</code>		クラスタ名を指定します (15 文字まで)。

次のページに続く

表 9 – 前のページからの続き

オプション	デフォルト値	説明
<code>--cluster-device=DEVICE</code>		VIP を割り当てるネットワークデバイスを指定します。
<code>--token=TOKEN</code>	30000	トークンタイムアウト (ミリ秒) を指定します。
<code>--consensus=CONSENSUS</code>		コンセンサスタイムアウト (ミリ秒) を指定します。
<code>--proxy=PROXY</code>		プロキシサーバを以下の形式で指定します。 <code>[user:passwd@]proxy.server:port</code>
<code>--noproxy=HOSTS</code>		プロキシの対象外となるホストをコンマ区切りのリストで指定します。
<code>--offline</code>		オフラインモードでセットアップします。
<code>--dry-run</code>		ドライランモードで実行します。パラメータチェックのみで、実際のセットアップは行いません。
<code>--help</code>		ヘルプメッセージを表示します。

バージョン 1.6.7 で変更: `--token` オプションのデフォルト値を 30000 に変更しました。

1.10 監査ログ管理

1.10.1 はじめに

ユーザが Kompira に対して各種操作をしたときに、その操作の種類や、認可されたかどうか、また成功したかどうか、といった情報をログに記録します。

監査ログの対象となる操作

ブラウザでの操作や API を用いた連携操作、サーバ上の管理コマンドによる操作などが監査ログの記録対象となります。

一方で、以下については、監査ログの記録対象となりません。

- ジョブフロー動作によるデータ操作やプロセス操作
- Kompira システム外部での操作 (DB 管理コマンドを用いた直接的なデータ操作など)
- static コンテンツへのアクセス

操作レベルと記録レベル

ある記録対象の操作が監査ログに実際に記録されるかどうかは、その操作の種類や結果から算出される「操作レベル値」と、設定項目である「記録レベル値」によって決まります。算出された操作レベル値が設定項目の記録レベル値以上のとき、監査ログに当該エントリが出力されます。

監査ログの記録条件： 操作レベル値 \geq 記録レベル値

操作レベル値は操作における複数の項目から算出します。いくつかの項目ごとに設定された操作レベルの基準値が決まり、その最大値が最終的な操作レベル値となります。通常この値は 1 から 3 の間の数値となります。各項目の操作レベル基準値のデフォルトについては [監査ログの項目詳細](#) を参照してください。

たとえば、「ブラウザ上で既存のジョブフローオブジェクトを編集した（許可され、成功した）」という場合、以下のような項目ごとの操作レベル基準値が適用されて、最終的な操作レベル値は 2 となります。

項目	値	操作レベル (基準値)
interface	"web"	1
class	"object"	1
type	"update"	2
permit	"allowed"	1
result	"succeeded"	1

記録レベル値のデフォルトは 2 です。詳細については [設定ファイル](#) を参照してください。

1.10.2 監査ログファイル

監査ログの記録先

監査ログファイルは以下のディレクトリに作成されます。

/var/log/kompira/

作成されるログファイル名は以下のようになります。

audit- $\{\text{USERNAME}\}$.log

ここで $\{\text{USERNAME}\}$ の部分は、その操作を処理したプロセスを実行した OS 上のユーザ名となります。たとえばブラウザで操作を行った場合、サーバ上の Apache サービスが実際の処理をしており、 $\{\text{USERNAME}\}$ 部分は `apache` となります。ブラウザ上で Kompira にログインしているユーザ名とは異なることに注意してください。

監査ログファイルは Kompira 自身によるローテートは行わず、OS 標準のサービスによりローテートされるようにインストール時に設定されます。

監査ログファイルは作成時に `umask` 値として `027` が適用されます。ログファイルの所有者は $\{\text{USERNAME}\}$ と同じになり、グループには書き込み権限がマスクされ、他ユーザには全アクセス権限がマスクされます。

監査ログのファイル形式

監査ログは UTF-8 でエンコードされたテキストファイルで、1 エントリを 1 行の JSON 形式で出力します。

監査ログの記録項目

監査ログの 1 エントリに記録される項目を以下に示します。

項目	名称	形式	説明
操作レベル	level	整数	操作レベル値
操作開始日時	started	日時	操作を開始した日時
操作終了日時	finished	日時	操作が終了した日時
操作元情報	exec	辞書	操作元 Linux プロセスの情報（辞書形式）
操作ユーザ	user	文字列	操作した Kompira ユーザ名
操作方式	interface	文字列	ブラウザによる操作か管理コマンドによる操作かなどの区別
操作分類	class	文字列	セッション操作やオブジェクト操作などの区分
操作対象	target_path	文字列	オブジェクトパス（セッション操作以外の時）
	target_type	文字列	型オブジェクト（オブジェクト操作時）
操作種別	type	文字列	「参照」や「削除」など操作の種類を示す区分
操作認否	permit	文字列	操作が「許可」または「拒否」されたかを示す区分
操作成否	result	文字列	操作が「成功」または「失敗」したかの記録
結果理由	reason	文字列	失敗の場合の原因（原因が分かる場合）
詳細情報	detail	辞書	操作に関する詳細情報（操作ごとに異なる辞書形式）

監査ログのサンプル

以下にブラウザで操作したときの監査ログファイル `/var/log/kompira/audit-apache.log` のサンプルを示します。ログは 1 エントリ 1 行で出力されていますが、ここでは分かりやすく整形して表示しています。

```
{
  "level": 3,
  "started": "2021-10-05T15:51:31.403016+09:00",
  "finished": "2021-10-05T15:51:31.452097+09:00",
  "exec": {
    "pid": 1286192,
    "name": "/usr/sbin/httpd",
    "user": "apache",
    "remote": "10.10.0.110"
  },
  "user": "root",
  "interface": "web",
  "class": "session",
  "target_path": null,
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
"target_type": null,
"type": "login",
"permit": "allowed",
"result": "succeeded",
"reason": null,
"detail": {
  "next_page": "/"
}
}
{
  "level": 2,
  "started": "2021-10-05T15:51:43.447941+09:00",
  "finished": "2021-10-05T15:51:43.486984+09:00",
  "exec": {
    "pid": 1285426,
    "name": "/usr/sbin/httpd",
    "user": "apache",
    "remote": "10.10.0.110"
  },
  "user": "root",
  "interface": "web",
  "class": "object",
  "target_path": "/config/license",
  "target_type": "/system/types/License",
  "type": "read",
  "permit": "allowed",
  "result": "succeeded",
  "reason": null,
  "detail": {
    "http_method": "GET",
    "http_status": 200
  }
}
```

1.10.3 監査ログの項目詳細

監査ログに記録される項目についての詳細を示します。以下の節におけるテーブルで「操作レベル」は、操作レベル基準値のデフォルトを示しています。

操作レベル (level)

操作の内容や結果によって算出された操作レベルを数値で示します。この操作レベル値が設定項目の記録レベル値以上のとき、監査ログに当該エントリが出力されます。

操作日時 (started, finished)

項目 **started** は操作の開始日時を、項目 **finished** は操作の終了日時を示します。これらは以下のように、ローカルタイムで ISO8601 形式で記録されます。

```
"2021-10-01T11:45:08.977356+09:00"
```

操作元情報 (exec)

操作元を示す辞書には以下のような情報が記録されます。

項目	名称	形式	説明
操作元プロセス ID	<code>exec["pid"]</code>	整数	Kompira サーバ上の処理プロセス ID
操作元プロセス名	<code>exec["name"]</code>	文字列	Kompira サーバ上の処理プロセス名
操作元ユーザ名	<code>exec["user"]</code>	文字列	Kompira サーバ上の処理プロセスの実行ユーザ名
操作元アドレス	<code>exec["remote"]</code>	文字列	操作元の IP アドレス（ブラウザ操作の場合）

操作ユーザ (user)

操作を行った Kompira ユーザ名を記録します。ブラウザ上で Kompira にログインして操作をした場合は、そのログインユーザ名となります。サーバのコンソール上で管理コマンドによる操作を行なった場合などでは、Kompira の認証を伴っていないため空文字列になります。

操作方式 (interface)

どのような方式を用いて操作したのかの区分を記録します。

値	操作レベル	説明
"web"	1	Web ブラウザによる操作
"api"	1	REST-API による操作
"mng"	2	管理コマンド (manage.py など) による操作

操作分類 (class)

何を操作したのか、その分類を示します。

値	操作レベル	説明
"session"	3	セッション操作（ログイン・ログアウト）
"user"	3	ユーザ情報操作（ユーザ追加・削除、パスワード変更など）
"group"	3	グループ情報操作
"object"	1	オブジェクト操作
"task"	1	タスク操作
"incident"	1	インシデント操作
"process"	1	プロセス操作
"schedule"	1	スケジュール操作
"packages"	1	システムパッケージ情報操作

操作対象 (target_path, target_type)

何を操作したのか、その具体的な対象を示します。

操作分類が `session` 以外のときは、操作対象をそのパスで識別することができます。以下のようにパスを項目 `target_path` として記録します。

```
"/system/user/id_1"
```

さらに、オブジェクト操作の場合では、その型オブジェクトのパスを項目 `target_type` に記録します。

```
"/system/types/Directory"
```

操作種別 (type)

どのような操作をしたのかという種類を記録します。

値	操作レベル	操作例
"login"	3	ログイン
"logout"	3	ログアウト
"create"	3	オブジェクトの新規作成
"rename"	3	オブジェクトの名称変更
"copy"	3	オブジェクトのコピー
"move"	3	オブジェクトの移動
"export"	3	エクスポート
"import"	3	インポート
"execute"	3	ジョブフローやスクリプトジョブの実行
"suspend"	3	プロセスの停止
"resume"	3	プロセスの続行
"terminate"	3	プロセスの中止
"read"	1	オブジェクトの参照
"list"	1	オブジェクトの一覧
"search"	1	オブジェクトの検索
"new"	1	新規オブジェクトの編集（作成前）
"edit"	1	既存オブジェクトの編集（更新前）
"confirm"	1	オブジェクト操作の確認（削除前）
"update"	2	オブジェクトの更新
"clear"	2	チャンネルのメッセージクリアや管理領域のクリア
"recv"	2	チャンネルからのメッセージ受信
"send"	2	チャンネルへのメッセージ送信
"delete"	3	オブジェクトの削除

いくつかの操作種別は特定の操作分類でのみ利用されます。たとえばログインやログアウトは操作分類が `session` のときだけです。

ある操作種別が複数の操作分類で利用される場合がありますが、操作分類ごとに異なる操作レベル基準値を設定することはできません。

操作の結果 (permit, result)

操作の結果としてその認否と成否が記録されます。

項目 `permit` は操作が許可されたかどうかを示します。例えばオブジェクト操作では設定されたパーミッションによって、操作が許可されたり拒否されたりします。

値	操作レベル	説明
"allowed"	1	操作が許可された
"denied"	3	操作が拒否された

項目 `result` は操作に成功したかどうかを示します。

値	操作レベル	説明
"succeeded"	1	操作に成功した
"failed"	1	操作に失敗した

詳細情報 (detail)

操作ごとに追加の詳細情報を辞書形式で記録します。

※ 詳細情報については、監査ログ機能がリリースされた後も仕様が調整される可能性がありますのでご注意ください。

ログイン

項目	説明
<code>next_page</code>	ログイン後に遷移するページ
<code>invalid_password</code>	不正パスワード（認証エラー時）

REST-API

項目	説明
<code>invalid_token</code>	不正 API トークン（認証エラー時）

エクスポート

項目	説明
<code>export_format</code>	エクスポート形式 ('json' or 'dir')
<code>export_options</code>	エクスポート時に指定したオプション
<code>export_paths</code>	エクスポート対象のパス
<code>export_counters</code>	エクスポート結果のカウンタ情報

インポート

項目	説明
<code>import_format</code>	インポート形式 ('json' or 'dir')
<code>import_options</code>	インポート時に指定したオプション
<code>import_sources</code>	インポートしたファイル名
<code>import_counters</code>	インポート結果のカウンタ情報

オブジェクトの検索

項目	説明
<code>search_params</code>	検索パラメータ

オブジェクトの新規作成

項目	説明
create_name	新規作成するオブジェクトの名称
create_type	新規作成するオブジェクトの型オブジェクトのパス

ジョブフローやスクリプトジョブの実行

項目	説明
execute_pid	実行したプロセス ID
execute_params	実行時に指定したパラメータ
execute_form	実行に利用したフォームのパス（フォームから実行した場合）
execute_table	実行に利用したテーブルのパス（テーブルから実行した場合）

オブジェクトの名称変更

項目	説明
rename_to	変更する名前

オブジェクトのコピー

項目	説明
copy_objects	コピー元オブジェクトのリスト
copy_rename	コピー時に指定したオブジェクトの名称

オブジェクトの移動

項目	説明
move_objects	移動元オブジェクトのリスト
move_rename	移動時に指定したオブジェクトの名称

オブジェクトの削除

項目	説明
delete_objects	削除したパスまたはオブジェクト ID のリスト
delete_file	削除した添付ファイルのファイル名

チャンネルへのメッセージ送信

項目	説明
send_form	送信に利用したフォームのパス（フォームから送信した場合）

管理コマンド: `compile_jobflow / compile_library`

項目	説明
compile_paths	コンパイル対象として指定したパスのリスト
compile_result	コンパイル結果（個数情報）

管理コマンド: `license_info / license_update`

項目	説明
license_id	ライセンス ID
license_path	導入したライセンスファイル名（license_update した場合）

管理コマンド: `process`

項目	説明
process_query	プロセスオブジェクトの検索クエリ
process_count	検索されたプロセスの個数
process_listed	表示したプロセスの個数
process_deleted	削除したプロセスの個数
process_terminated	終了させたプロセスの個数
process_suspended	停止させたプロセスの個数
process_resumed	続行させたプロセスの個数

その他の詳細情報

項目	説明
http_method	HTTP 操作時のメソッド名
http_status	HTTP 操作時のステータスコード
target_attr	操作対象の属性名
target_index	操作対象のインデックス値
bulk_deleted	一括削除時の詳細情報

1.10.4 設定ファイル

監査ログに関する設定を以下のファイルで行うことができます。

```
/opt/kompira/kompira_audit.yaml
```

設定ファイルの形式

設定ファイルは `kompira_audit.yaml` は YAML 形式で記述します。全体としては辞書構造で、以下の設定項目が必要になります。

名称	形式	説明
<code>logging_level</code>	整数	監査ログの記録レベル値
<code>operation_levels</code>	辞書	操作ごとの操作レベル基準値テーブル
<code>target_levels</code>	配列	オブジェクト操作等における操作対象ごとの操作レベル基準値テーブル

設定ファイルの自動再読み込み

監査ログの設定ファイルをサーバー上で更新すると、次の監査ログ記録のタイミングで自動的に再読み込みされます。サービスの再起動などは不要です。

デフォルトの設定ファイル

```
#-----
# kompira_audit.yaml
#
# Configuration file to control audit log output.
#-----
#
# logging_level: recording level value
#
# If the calculated operation level value is less than the recording
# level value, no audit log will be recorded.
#
logging_level: 2

#
# operation_levels: basic operation level table
#
# Table of operation level reference values for each operation.
# The operation level value for an operation is the maximum of
# several operation level criteria values.
#
operation_levels:
interface:
  web: 1
  api: 1
  mng: 2
class:
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
    session: 3
    user: 3
    group: 3
    object: 1
    task: 1
    incident: 1
    process: 1
    schedule: 1
    packages: 1
type:
    login: 3
    logout: 3
    create: 3
    rename: 3
    copy: 3
    move: 3
    export: 3
    import: 3
    execute: 3
    suspend: 3
    resume: 3
    terminate: 3
    read: 1
    list: 1
    search: 1
    edit: 1
    confirm: 1
    update: 2
    clear: 2
    recv: 2
    send: 2
    delete: 3
permit:
    allowed: 1
    denied: 3
result:
    succeeded: 1
    failed: 1

#
# target_levels: operation level table for object operation
#
# Operation level reference value to be applied to each target
# during object manipulation.
#
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
target_levels:
- {path: '/config/*', type: null, level: 2}
- {path: '/system/*', type: '/system/types/Config', level: 2}
```

1.11 システムパッケージ管理

Kompira 環境にインストールされている Python や Web 用のパッケージの情報が以下で閲覧できます。各パッケージ種別ごとにインストールされているパッケージのバージョンやライセンスに関する情報を確認することができます。

パス	説明
/system/packages/PIP	Kompira 環境で PIP で管理されている Python パッケージ情報
/system/packages/Web	Kompira 環境で static コンテンツとして管理されている Web 用パッケージ情報

注釈: システムパッケージ情報は Kompira をインストールまたはアップデートした後に kompirad が起動したタイミングで自動的に収集および更新されます。

1.11.1 パッケージ情報の管理コマンド

Kompira サーバ上で以下のコマンドを利用することでパッケージ情報を管理することができます。

```
$ /opt/kompira/bin/manage.py packages_info [options...]
```

パッケージ情報の表示

オプションを省略または `--show` オプションを指定した場合、すでに収集されているパッケージ情報をコンソールに一覧表示します。

```
$ /opt/kompira/bin/manage.py packages_info --show
```

パッケージ情報の一覧表示の例を以下に示します。

```
+-----+-----+-----+-----+
| Type | Name           | Installed | Latest | License       |
+-----+-----+-----+-----+
| pip  | APScheduler    | 3.6.3     | 3.8.1   | MIT License   |
| pip  | Creoleparser    | 0.7.5     | None    | MIT License   |
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

pip	Django	3.0.5	3.2.8	BSD License	
pip	Genshi	0.7.5	None	BSD License	
pip	GitPython	3.1.18	None	BSD License	
:	:	:	:	:	:

パッケージ情報の収集

`--collect` オプションを指定した場合、インストールされているパッケージ情報を収集します。ただし、Kompira サーバ上の `root` または `kompira` ユーザのみが実行できます。

```
$ /opt/kompira/bin/manage.py packages_info --collect
```

このとき、各パッケージの最新バージョン情報を収集するためにインターネット接続が必要になります。プロキシ接続が必要な場合は `--proxy` オプション（または `https_proxy` 環境変数）で指定してください。

インターネットに接続できないなど、最新バージョン情報の収集を行わない場合は `--no-collect-latest` オプションを追加で指定してください。あるいは、明示的に最新バージョン情報の収集を行なうことを指定したい場合は `--collect-latest` オプションを追加で指定してください。

注釈: なお、収集されたパッケージ情報はサーバ上の `/var/opt/kompira/packages/` 配下に保存されます。

パッケージ情報の更新

`--update` オプションを指定した場合、収集済みパッケージ情報をもとに Kompira 上のシステムパッケージ情報オブジェクト（Wiki 型）を更新します。ただし、Kompira サーバ上の `root` または `kompira` ユーザのみが実行できます。

```
$ /opt/kompira/bin/manage.py packages_info --update
```

`--update` オプションと `--collect` オプションを併用した場合は、パッケージ情報の収集に続けてシステムパッケージ情報オブジェクトの更新を行ないます。

1.12 SSL 証明書管理

Kompira では SSL 接続のために次の証明書を利用します。

- 以下の SSL 証明書に署名するための CA 証明書
- AMQPS 接続用のサーバ証明書 (rabbitmq-server が利用します)
- AMQPS 接続用のクライアント証明書 (kompira_jobmgrd, kompira_senddevt が利用します)

注釈: この節の説明は Kompira サーバを SSL 証明書による検証を行なうように構成した場合のためにあります。たとえばインストール時に `install.sh` に `--amqps-verify` オプションを付けた場合などが該当します。SSL 証明書の検証が有効になっていない場合は、この節の説明で登場する「SSL 証明書の検証」は行なわれません。

1.12.1 証明書ファイルの配置

Kompira が利用する SSL 証明書は以下のディレクトリに配置します。

パス	説明
<code>/opt/kompira/ssl/ca-source/</code>	SSL 証明書に署名するための CA 証明書ファイルを配置するディレクトリ
<code>/opt/kompira/ssl/certs/</code>	SSL 接続で用いる SSL 証明書ファイル、SSL 証明書の検証に用いる CA 証明書ファイルを配置するディレクトリ

これらのディレクトリに配置する証明書ファイルについて以下で説明します。なお、各証明書ファイルには拡張子が `.csr` および `.key` となる、CSR ファイルと秘密鍵ファイルも同じ場所に配置されています。

1.12.2 `/opt/kompira/ssl/ca-source/`

SSL 証明書に署名するための CA 証明書ファイルを `/opt/kompira/ssl/ca-source/` に配置します。

`kompira-local-ca.crt`

この Kompira サーバで作成した SSL 証明書に署名する CA 証明書です。

この CA 証明書は Kompira をインストールした時に自動的に作成されます。

`kompira-other-ca.crt`

冗長構成において対向 Kompira サーバの `kompira-local-ca.crt` をコピーしたものです。後述の `ssl_utils.sh get-other-ca` コマンドで対向 Kompira サーバから `scp` でコピーするか、別の手段を用いてコピーしてください。

Kompira はこの CA 証明書を直接利用することではなく、後述する CA 証明書をまとめた `kompira-bundle-ca.crt` を利用して SSL の検証を行ないます。

1.12.3 /opt/kompira/ssl/certs/

SSL 接続で用いる SSL 証明書ファイルおよび検証に用いる CA 証明書ファイルを /opt/kompira/ssl/certs/ に配置します。

kompira-bundle-ca.crt

/opt/kompira/ssl/ca-source/ に配置された CA 証明書を 1 つにまとめたファイルです。通常は自動的に作成されますが、後述する `ssl_utils.sh update-bundle-ca` コマンドで更新することもできます。

Kompira サーバ上の `rabbitmq-server` は、この CA 証明書をクライアント SSL 証明書の検証に用いるように設定されます。すなわち、これに含まれるいずれかの CA 証明書によって署名された SSL 証明書を持ったクライアントだけが SSL 接続できるようになります。他の Kompira サーバが生成した CA 証明書によって署名された SSL 証明書を持つクライアントは、この Kompira サーバには SSL 接続できないことに注意してください。

`kompira_jobmgrd` および `kompira_sendvt` は、この CA 証明書をサーバ SSL 証明書の検証に用いるように設定されます (`kompira.conf` で指定することもできます)。すなわち、これに含まれるいずれかの CA 証明書によって署名された SSL 証明書を持ったサーバにのみ SSL 接続できるようになります。単独で `kompira_jobmgrd` または `kompira_sendvt` をインストールしたノードでは、この CA 証明書を事前にコピーする必要があることに注意してください。手順については `ssl_utils.sh client-setup` コマンドを参考にしてください。

`kompira-bundle-ca.crt` は、Kompira をインストールした時点ではそのサーバの `kompira-local-ca.crt` のみを含んでいます。

冗長構成をセットアップしたときは、2 台のサーバで相互に対向の `kompira-local-ca.crt` を取得して `kompira-bundle-ca.crt` を更新しておくことを推奨します。それにより、いずれかの CA 証明書で署名された SSL 証明書を持つクライアントが、どちらのサーバにも SSL 接続できるようになります。たとえば、VIP アドレスに対して `kompira_sendvt` でイベントを送信する場合、実際にどちらのサーバに接続するかは事前に分からないため、2 つの CA 証明書をまとめた `kompira-bundle-ca.crt` をクライアント側で持っておく必要があることに注意してください。詳細については [冗長構成での CA 証明書管理](#) を参考にしてください。

amqp-server.crt

AMQP サーバ側 (`rabbitmq-server`) が利用する SSL 証明書です。 `kompira-local-ca.crt` によって署名されています。この証明書は Kompira をインストールした時に自動的に作成されます。

amqp-client-kompira.crt

AMQP クライアント側 (`kompira_jobmgrd`, `kompira_sendvt`) が利用する SSL 証明書です。 `kompira-local-ca.crt` によって署名されています。この証明書は Kompira をインストールした時に自動的に作成されます。

単独で `kompira_jobmgrd` または `kompira_sendvt` をインストールしたノードでは、この SSL 証明書を事前にコピーする必要があることに注意してください。手順については `ssl_utils.sh client-setup` コマンドを参考にしてください。

1.12.4 SSL 証明書管理スクリプト

ssl_utils.sh スクリプトを用いることで、SSL 証明書作成などの管理を行なうことができます。

```
# /opt/kompira/bin/ssl_utils.sh command [options]
```

ssl_utils.sh スクリプトは root 権限で実行する必要があります。

サーバ側 SSL 環境のセットアップ

```
# /opt/kompira/bin/ssl_utils.sh server-setup
```

Kompira サーバ上で利用する CA 証明書および SSL 証明書を作成します。内部的には以下の処理を行っています。

- ローカル CA 証明書の作成
- バンドル CA 証明書の更新
- SSL 証明書の作成 (AMQP サーバ用)
- SSL 証明書の作成 (AMQP クライアント用)

すべての証明書は有効期限 10000 日で作成されます。

この処理は install.sh で Kompira をインストールするときに自動的に実行されるため、通常は利用することはありません。

クライアント側 SSL 環境のセットアップ

```
# /opt/kompira/bin/ssl_utils.sh client-setup kompira-server
```

Kompira サーバとは別のノードにインストールした kompira_jobmgrd または kompira_sendvt が SSL 接続するには、Kompira サーバから CA 証明書および SSL 証明書を取得しておく必要があります。このコマンドはコマンドライン引数 kompira-server で指定した Kompira サーバから scp コマンドを用いて必要な証明書を取得します。install.sh に --jobmgr または --sendvt オプションを付けたときは自動的に実行されますので、通常は利用することはありません。

このコマンドを実行すると、内部で scp コマンドを用いてファイル転送するため、Kompira サーバの root アカウントのパスワードを入力する必要があります。以下のような表示がありますので、パスワードを入力してください。

```
[2023-01-16 18:34:12] INFO:
[2023-01-16 18:34:12] INFO: !!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
→!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
[2023-01-16 18:34:12] INFO:
[2023-01-16 18:34:12] INFO: Start copying the SSL/CA certificates from the kompira_
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```

→server with scp.
[2023-01-16 18:34:12] INFO:
[2023-01-16 18:34:12] INFO: PLEASE ENTER THE PASSWORD OF THE REMOTE KOMPIRA SERVER (
→<kompira-server>) FOR SCP.
[2023-01-16 18:34:12] INFO:
[2023-01-16 18:34:12] INFO: !!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
→!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
[2023-01-16 18:34:12] INFO:
[2023-01-16 18:34:12] VERBOSE: run: scp -q -p -o StrictHostKeyChecking=no -o
→UserKnownHostsFile=/dev/null root@<kompira-server>:/opt/kompira/ssl/certs/{kompira-
→bundle-ca.crt,amqp-client-kompira{.crt,.key}} /opt/kompira/ssl/certs/
root@<kompira-server>'s password:

```

何らかの理由で scp コマンドでファイル転送ができない場合は、他の実施可能な手段で Kompira サーバ上の以下のファイルを同じディレクトリにコピーしてください。

- /opt/kompira/ssl/certs/kompira-bundle-ca.crt
- /opt/kompira/ssl/certs/amqp-client-kompira.crt
- /opt/kompira/ssl/certs/amqp-client-kompira.key

手動でコピーした場合はこれらのファイルのグループを kompira に設定して kompira_jobmgrd からアクセスできるようにしてください。

```
# chown :kompira /opt/kompira/ssl/certs/*
```

また、kompira_sendvt を SSL 接続で利用する場合は、実行するユーザがこれらのファイルにアクセスできる必要があることにも注意してください。必要に応じて実行ユーザを調整するか、これらのファイルのパーミッションを調整してください。

注釈: Windows 環境に kompira_sendvt をインストールした場合は、Kompira サーバから取得した証明書ファイルを C:\Kompira\SSL\Certs ディレクトリに配置してください。詳細は [Windows へのインストール](#) を参照してください。

CA 証明書の管理

バンドル CA 証明書の更新

```
# /opt/kompira/bin/ssl_utils.sh update-bundle-ca
```

/opt/kompira/ssl/ca-source/ に配置された CA 証明書を、一つの CA 証明書 kompira-bundle-ca.crt としてまとめます。ssl_utils.sh server-setup または ssl_utils.sh get-other-ca コマンドを実行したときは内部で処理されますので、通常は利用することはありません。

ローカル CA 証明書の作成

```
# /opt/kompira/bin/ssl_utils.sh create-local-ca
```

ローカル CA 証明書 `kompira-local-ca.crt` を作成します。ディレクトリ `/opt/kompira/ssl/ca-source/` に以下のファイルが作成されます。

- `kompira-local-ca.key` : 秘密鍵ファイル (RSA-key 2048 bit)
- `kompira-local-ca.crt` : CA 証明書ファイル

CA 証明書の有効期限は 10000 日となります。

`ssl_utils.sh server-setup` コマンドを実行したときは内部で処理されますので、通常は利用することはありません。

冗長構成での CA 証明書管理

他ノードの CA 証明書の取得 (scp)

```
# /opt/kompira/bin/ssl_utils.sh get-other-ca [other-server]
```

コマンドライン引数 `other-server` で指定した Kompira サーバから CA 証明書 `kompira-local-ca.crt` を取得します。取得した CA 証明書を `kompira-other-ca.crt` として保存したのち、バンドル CA 証明書を更新します。

このコマンドを実行すると、内部で `scp` コマンドを用いてファイル転送するため、Kompira サーバの root アカウントのパスワードを入力する必要があります。以下のような表示がありますので、パスワードを入力してください。

```
[2023-01-16 18:34:12] INFO:
[2023-01-16 18:34:12] INFO: !!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
→!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
[2023-01-16 18:34:12] INFO:
[2023-01-16 18:34:12] INFO: Start copying the SSL/CA certificates from the other_
→kompira server with scp..
[2023-01-16 18:34:12] INFO:
[2023-01-16 18:34:12] INFO: PLEASE ENTER THE PASSWORD OF THE OTHER KOMPIRA SERVER (
→<other-server>) FOR SCP..
[2023-01-16 18:34:12] INFO:
[2023-01-16 18:34:12] INFO: !!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
→!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
[2023-01-16 18:34:12] INFO:
[2023-01-16 18:34:12] VERBOSE: run: scp -q -p -o StrictHostKeyChecking=no -o_
→UserKnownHostsFile=/dev/null root@<other-server>:/opt/kompira/ssl/ca-source/kompira-
→local-ca.crt /opt/kompira/ssl/ca-source/kompira-other-ca.crt
root@<other-server>'s password:
```

何らかの理由で `scp` コマンドでファイル転送ができない場合は、他の実施可能な手段で対向 Kompira サーバ上の `/opt/kompira/ssl/ca-source/kompira-local-ca.crt` を自サーバの `/opt/kompira/ssl/ca-source/kompira-other-`

ca.crt としてコピーしてください。その後 `ssl_utils.sh update-bundle-ca` コマンドでバンドル CA 証明書を更新してください。

SSL 証明書の作成

```
# /opt/kompira/bin/ssl_utils.sh create-cert certname subject
```

新しい SSL 証明書を作成します。オプション `certname` で指定した名前をもとに、ディレクトリ `/opt/kompira/ssl/certs/` に以下のファイルが作成されます。

- `<certname>.key` : 秘密鍵ファイル (RSA-key 2048 bit)
- `<certname>.csr` : CSR ファイル
- `<certname>.crt` : SSL 証明書ファイル

証明書のサブジェクトにはオプション `subject` で指定した値が設定され、また有効期限は 10000 日となります。SSL 証明書ファイルは `kompira-local-ca.crt` で署名されています。

`ssl_utils.sh server-setup` コマンドを実行したときに、AMQP サーバ用および AMQP クライアント用の証明書は自動的に作成されます。

第2章 操作ガイド

著者

Kompira 開発チーム

2.1 はじめに

Kompira が提供する Web ユーザーインターフェースによって Kompira の機能を利用するための情報について記述します。

2.2 基本的な操作方法

2.2.1 ログインとログアウト

以下の URL にアクセスすることで、Kompira のログイン画面にアクセスすることができます。

`https://<Hostname or ipaddress of Kompira server>/`

Kompira ログイン画面からユーザー名とパスワードを入力して、ログインしてください。

デフォルトで使用可能なユーザー一覧は [ユーザー管理](#) を参照してください。

ログインすると画面右上部にログインしたユーザー名が表示されます。ユーザ名をクリックするとドロップダウンメニューが表示されるので、その中から「ログアウト」を選択することでログアウトできます。

注釈: ログイン情報はブラウザの Cookie に保存されます。ログイン情報 Cookie の有効期限は 2 週間となっており、有効期限を過ぎた場合は再度ログイン処理を行っていただく必要があります。

注釈: [システム設定](#) の最大ログイン試行回数が設定されている場合、ログインに一定回数以上失敗するとアカウントがロックされ、以降は同じ IP アドレスから、対象のユーザにログインすることができなくなります。アカウントロック期間が設定されている場合、最後にログイン失敗した時点から、その期間が経過するとアカウントロックは自動的に解除され、再びログインできるようになります。root など管理者権限を持つユーザは、ロックされたユーザの詳細画面から手動でロックを解除することも可能です。一般ユーザでもロックされていない別 IP アドレスからログインして、自分のユーザ詳細画面からロックを解除することもできます。

2.2.2 メニュー操作

ログインした状態では画面上部のメニューから、ホーム、ファイルシステム、タスク一覧、インシデント一覧、**プロセス管理**、**スケジューラ**、**設定**、ヘルプに移動することができます。

メニュー左端に表示されているロゴ画像および "Kompira" 表記部分はホームへのリンクになっていて、ユーザごとにホームとして設定されているオブジェクト（通常はディレクトリ）のページに移動します。

メニュー「ファイルシステム」はいくつかの代表的なディレクトリとその子オブジェクトへのショートカットになっています。

2.2.3 キーボード操作

Kompira では表示しているページごとに対応する機能の一部について、キーボードで操作することもできます。共通的なキー操作を以下に示します。

キーバインド	操作	備考
?	ヘルプ表示	キーボードショートカットの一覧をダイアログで表示
/	検索ボックスにフォーカス	検索ボックスがある場合
~	ホームに移動	
^	親ディレクトリに移動	
Ctrl-Left	前のページに移動	複数ページ表示があるオブジェクトの場合
Ctrl-Right	次のページに移動	複数ページ表示があるオブジェクトの場合
Alt-E	オブジェクトの編集	オブジェクトの詳細画面でそのオブジェクトが編集が可能な場合
Alt-S	オブジェクトの保存	オブジェクトの編集画面の場合

注釈: Alt-E など一部のキーバインドは OS やブラウザによっては Alt-Shift-E など実際のキー操作が異なる場合があります。

バージョン 1.6.6 で追加: キーボード操作の説明を追加しました。

2.3 Kompira ファイルシステム

ジョブフロー定義やノード情報など、Kompira で扱う情報定義は Kompira オブジェクトとして、Kompira ファイルシステム上で一元的に管理されます。

以下では、Kompira オブジェクトの種類によらない設定、値について説明します。

2.3.1 オブジェクトの名称

Kompira オブジェクトの名称は、以下の規則内で自由に命名することができます。

- アルファベット、数字、アンダーバー ("_")、日本語を使うことができる
- 先頭の文字は数字以外でなければならない
- アルファベットの大文字と小文字は区別される
- オブジェクトの名称の長さは 128 文字以内でなければならない
- 絶対パスの長さは 1024 文字以内でなければならない

2.3.2 オブジェクトのプロパティ

全ての Kompira オブジェクトにはプロパティが存在しており、オブジェクトの所有者もしくはルート権限を持つユーザーはプロパティの各項目を編集することができます。

プロパティで設定できる項目の一覧を以下に示します。

フィールド	説明
表示名	オブジェクトの表示に使用する名称。(オブジェクトの名称とは異なる)
説明	オブジェクトについての説明。
所有者	オブジェクトの所有者。
ユーザーパーミッション	ユーザーに与えるアクセス許可リスト。
グループパーミッション	グループに与えるアクセス許可リスト。

ユーザーパーミッション、グループパーミッションの項ではユーザー、グループごとにアクセス許可を設定することができます。

全てのユーザーに対して共通のアクセス許可を設定したい場合、全てのユーザーが所属する other グループを利用するとよいでしょう。

プロパティの設定対象がディレクトリかテーブルの場合、プロパティ編集画面に、「変更を子孫オブジェクトにも適用する」チェックボックスが、所有者、および、ユーザーパーミッション、グループパーミッションの各項目にそれぞれ表示されます。ここにチェックを入れて保存することで、対応するプロパティ設定の変更内容が子孫オブジェクトにも反映されます。

注釈: プロパティを編集できるのはアクセス許可の設定に関わらず、常にオブジェクトの所有者もしくはルート権限を持つユーザーのみです。書き込み権限を持つユーザーはオブジェクトの内容を編集することはできますが、プロパティは編集できないことに注意してください。

注釈: 多数の子孫オブジェクトが含まれるディレクトリで、プロパティの変更を子孫オブジェクトにも適用する場合、完了するまでに長い時間がかかることがありますのでご注意ください。

2.3.3 オブジェクトのアクセス許可

全ての Kompira オブジェクトにはアクセス許可の設定が存在しています。

以下に Kompira オブジェクトが持つアクセス許可種別の一覧を示します。

許可種別	説明
読み取り	オブジェクトの内容を読み取ることができます。権限がないオブジェクトのパスに移動しようとするエラーとなります。
書き込み	オブジェクトの内容を編集することができます。ディレクトリまたはテーブルオブジェクトにおいて書き込み許可を持たない場合、新規にオブジェクトを追加することはできません。
実行	オブジェクトを実行することができます。実行可能なオブジェクト (ジョブフロー、スクリプトジョブ) でのみ有効な権限種別です。

ルート権限を持つユーザーには、明示的に指定されていない場合でも全てのアクセスが許可されています。

オブジェクトのアクセス許可設定は [オブジェクトのプロパティ](#) から編集することができます。

注釈: ディレクトリまたはテーブルオブジェクトにオブジェクトを追加する場合、アクセス許可の設定は継承されません。

2.4 Kompira オブジェクト

Kompira ファイルシステム上で作成されるオブジェクトには、ジョブフローやノード情報など様々な種類のものがあります。これらは、やはり Kompira ファイルシステム上のオブジェクトである型オブジェクトによって規定されています。あらかじめ用意されている型オブジェクトは、`/system/types` で一覧を参照することができます。

現バージョンでは、標準で以下に示す型オブジェクトが定義されています。

型名	説明
TypeObject (型オブジェクト)	型オブジェクトを既定するためのオブジェクトです。型オブジェクトを作成すると、作成した型のオブジェクトを作成できるようになります。
Directory (ディレクトリ)	複数のオブジェクトを格納することができるオブジェクトです。
License (ライセンス)	ライセンスファイルを登録するためのオブジェクトです。システムで使用する特殊なオブジェクトであり、新規に作成することはありません。
Virtual (仮想オブジェクト)	仮想オブジェクトを既定するためのオブジェクトです。プロセス一覧 (/process)、タスク一覧 (/task) は仮想オブジェクトとして定義されています。一般に使用することはありません。
Jobflow (ジョブフロー)	ジョブフローの記述と実行をすることができるオブジェクトです。
Channel (チャネル)	メッセージを格納することができるキューを持つオブジェクトです。メッセージの送受信に利用することができます。

次のページに続く

表 3 – 前のページからの続き

型名	説明
Wiki (Wiki ページ)	Creole 形式の Wiki ページを作成をすることができるオブジェクトです。
ScriptJob (スクリプトジョブ)	スクリプトの記述と実行をすることができるオブジェクトです。
Environment (環境変数)	key-value 形式の環境情報を格納することができるオブジェクトです。
Template (テンプレート)	タスクなどのメッセージで使用するテンプレートテキストを格納することができるオブジェクトです。
Table (テーブル)	同じ型の複数のオブジェクトを格納することができるオブジェクトです。
Realm (管理領域)	ジョブマネージャが管理する領域を既定するためのオブジェクトです。管理領域一覧オブジェクト以下で作成されることを前提としており、通常のディレクトリやテーブル以下に作成することはありません。
AttachedFile (添付ファイル)	任意のファイルを保存することができるオブジェクトです。
NodeInfo (ノード情報)	サーバの IP アドレスや SSH のポート番号など、ノードを特定するための情報を格納することができるオブジェクトです。
AccountInfo (アカウント情報)	リモートログインに必要なアカウント情報を格納することができるオブジェクトです。
Repository (リポジトリ)	バージョン管理システムと連携するための情報を定義するオブジェクトです。
MailChannel (メールチャネル)	IMAP サーバからのメールを取り込むことができるチャネルです。
Form (フォーム)	ユーザ入力フォームを作成することができるオブジェクトです。
Config (設定)	設定フォームを作成することができるオブジェクトです。
Library (ライブラリ)	ジョブフローから呼び出し可能な Python のライブラリを定義するオブジェクトです。
MailTemplate (メールテンプレート)	メール送信で使用するテンプレートテキストを格納することができるオブジェクトです。
Text (テキスト)	プレーンテキストや HTML テキストなどテキスト情報を保持するオブジェクトです。
SystemInfo (システム情報型)	Kompira のシステム情報を提供するオブジェクトです。
NodeType (ノード種別)	リモートジョブで利用できる接続相手の情報を定義するオブジェクトです。
CustomStyle (カスタムスタイル)	ブラウザで表示される画面の配色などを設定するオブジェクトです。
OAuth2Provider (OAuth2 プロバイダ)	OAuth2 認証を行う場合のサービスプロバイダ情報を定義するオブジェクトです。
SmtplibServer (SMTP サーバ)	メール送信時に利用する SMTP サーバの情報を定義するオブジェクトです。
LdapServer (LDAP サーバ)	ログインユーザを LDAP 連携する場合に利用する LDAP サーバの情報を定義するオブジェクトです。

各型オブジェクトはそれぞれのフィールドとその種別を定義しています。どのようなフィールドが定義されているかは、[組み込み型オブジェクト](#)を参照してください。

以下では一部の代表的な Kompira オブジェクトをとりあげ、その使用方法を記述します。

2.4.1 ディレクトリ

ディレクトリは、複数の異なる型のオブジェクトを格納できる Kompira オブジェクトです。ディレクトリオブジェクトのページを開くと、そのディレクトリに格納されているオブジェクトの一覧が表示されます。

格納されているオブジェクトの個数が多い場合は複数のページにわたって表示されます。オブジェクト一覧の右上に配置されたページネートボタンで、前後のページや先頭または最後のページに移動します。ページネートボタンの左側のメニューから、ページあたりに表示するオブジェクトの個数（ページサイズ）を変更できます。

オブジェクト一覧のヘッダ行の列名が表示されている部分をクリックすることで、一覧表示のソート順を変更できます。同じ列を再度クリックすると昇順と降順が切り替わります。

オブジェクトの一覧表示のソート順とページサイズについては、そのデフォルト値をディレクトリオブジェクトごとに設定することができます。オブジェクト一覧の右上に配置されたメニューボタンから「このディレクトリを編集する」を選ぶとディレクトリの編集画面に移動するので、そこで設定を保存してください。

ディレクトリオブジェクトから、以下の操作を行うことができます。これらの操作はオブジェクト一覧の左上に配置されたボタンおよび「その他」メニューから行なえます。また、オブジェクト一覧の上でマウス右クリックすると表示されるコンテキストメニューから操作することもできます。

操作	説明
新規作成	オブジェクトを作成します。作成する際は型オブジェクトを指定する必要があります。
閲覧	格納しているオブジェクトのページに移動します。
編集	オブジェクトの内容を編集します。
名前の変更	オブジェクトの名称を変更します。プロパティの表示名がオブジェクトの名称と等しい場合、表示名も同時に変更されます。
移動	オブジェクトを移動します。
コピー	オブジェクトを別のディレクトリにコピーします。
削除	オブジェクトを削除します。
エクスポート	選択したオブジェクトをエクスポートします。オブジェクト未選択時は、ディレクトリ以下のすべてのオブジェクトをエクスポートします。
インポート	ファイルから選択したディレクトリにオブジェクトをインポートします。ディレクトリ未選択時は現在のディレクトリ以下にオブジェクトをインポートします。
プロパティ	オブジェクトのプロパティを編集します。
検索	ディレクトリ配下の子孫オブジェクトを検索します。

ディレクトリオブジェクトの詳細画面では共通のキー操作に加えて以下のキー操作に対応しています。

キーバインド	操作
n	オブジェクトの新規作成
#	型オブジェクトの選択
j	次のオブジェクト
k	前のオブジェクト
Space	オブジェクトの選択切り替え
a	すべてのオブジェクトの選択切り替え
Delete	オブジェクトの削除
F2	名前を変更
c	オブジェクトのコピー
m	オブジェクトの移動
p	プロパティの編集

バージョン 1.6.6 で追加: キー操作の説明を追加しました。

オブジェクトの新規作成

ディレクトリ画面でオブジェクトを新規作成することができます。

- 最下行の「型」列で、新規作成したいオブジェクトの型を選択します。
- 最下行の「名称」列にある入力フォームに、新規作成したいオブジェクトの名称を入力します。
- 名称を入力したフォームの右側にある「+」記号のボタンを押下すると、選択した型に応じた編集画面に移動します。
- 編集画面で必要な情報を入力して「保存」ボタンを押下すると、オブジェクトが作成されます。

なお、ディレクトリ型など一部の型では編集画面に移動することなくオブジェクトが新規作成されます。

オブジェクトの閲覧と編集

ディレクトリ画面に一覧表示されているオブジェクトのリンクをクリックする、またはオブジェクトを 1 つ選択してエンターを押下するかメニューから「開く」を選ぶと、そのオブジェクトのページ（詳細画面）に移動します。

オブジェクトを 1 つ選択してメニューから「編集」を選ぶと、そのオブジェクトの編集画面に直接移動することもできます。

オブジェクトの名前変更

オブジェクトを1つ選択してメニューから「名前の変更」を選ぶと、そのオブジェクトの名称を変更することができます。選択している行の「名称」列の上に入力フォームが現れて、オブジェクトの現在の名称が入力された状態で表示されます。新しい名称を入力してエンターを押下することで名前が変更されます。または、ESC キーでキャンセルできます。

オブジェクトの移動とコピー

オブジェクトを1つ以上選択してメニューから「移動」または「コピー」を選ぶと、選択したオブジェクトを移動またはコピーすることができます。移動先またはコピー先を選ぶダイアログが表示されるので、目的の場所を選択して「移動」または「コピー」ボタンを押下してください。

なお、オブジェクトを1つだけ選択している場合はダイアログの名称フォームが入力可能になり、移動またはコピー先での新しい名前を指定することもできます。

注釈: 対象となるオブジェクトの個数が非常に多いコピー操作では、コピー処理に長時間かかる場合がありますのでご注意ください。

オブジェクトの削除

オブジェクトを1つ以上選択してメニューから「削除」を選ぶと、選択したオブジェクトを削除することができます。本当に削除するかを確認するダイアログが表示されるので、「削除」または「キャンセル」を選んでください。

オブジェクトのプロパティ編集

オブジェクトを1つ以上選択してメニューから「プロパティ」を選ぶと、選択したオブジェクトのプロパティを編集することができます。

オブジェクトを1つだけ選択している場合は、そのオブジェクトのプロパティ編集画面に移動します。変更したいプロパティを編集してから「保存」ボタンを押下することで、そのオブジェクトのプロパティが更新されます。

2つ以上の複数オブジェクトを選択した状態でプロパティメニューを選択すると、プロパティ編集のダイアログが表示されます。このダイアログでは、所有者とユーザーパーミッション、グループパーミッションを変更することができ、「変更を適用する」をチェックした項目を選択したオブジェクトに対して一括で反映することができます。なお、選択したオブジェクトにディレクトリやテーブルが含まれている場合、それらの子孫オブジェクトにはプロパティ変更は反映されません。

オブジェクトのインポート

メニューから「インポート」を選ぶと、エクスポートされた JSON ファイルを Kompira にインポートすることができます。ダイアログが表示されるのでインポートしたいファイルを選択したうえで「インポート」ボタンを押下するとインポート処理が開始されます。このとき、インポートで既存オブジェクトを上書きするかどうかを指定することもできます。

なお、ディレクトリ画面で1つもオブジェクトを選択していないときはそのディレクトリにインポートされます。ディレクトリまたはテーブルを1つ選択していたときは、選択したディレクトリまたはテーブルの中にインポートされます。

インポートできないオブジェクトを選択しているときや、2つ以上のオブジェクトを選択しているときはインポートできません。

オブジェクトのインポートは、当該ディレクトリの所有者、もしくはルート権限を持つユーザのみ可能です。

注釈: インポートする JSON ファイルが巨大な場合や、含まれるオブジェクトの個数が非常に多い場合などでは、インポート処理に長時間かかったりメモリを多く必要とする場合がありますのでご注意ください。

オブジェクトのエクスポート

メニューから「エクスポート」を選ぶと、Kompira オブジェクトのデータを JSON ファイルとしてエクスポートすることができます。表示されたダイアログで「エクスポート」ボタンを押下するとエクスポート処理が開始されます。エクスポートファイルの準備が完了すると、ファイルの保存先を確認するシステムダイアログが表示されるので、保存したい場所を指定してください。このとき、エクスポート対象に仮想オブジェクトを含めるかを指定することもできます。プロセス情報やユーザ・グループなど仮想オブジェクトを含めたい場合はチェックしてください。

オブジェクトのエクスポートは、当該ディレクトリの所有者、もしくはルート権限を持つユーザのみ可能です。

注釈: エクスポート対象となるオブジェクトの個数が非常に多い場合や、含まれるフィールドデータのサイズが巨大な場合などでは、エクスポート処理に長時間かかったりメモリを多く必要とする場合がありますのでご注意ください。

オブジェクトの検索

ディレクトリ一覧画面の右上の検索ボックスに検索キーを入力して検索ボタンをクリックすると、検索結果の一覧画面に遷移します。

検索キーの先頭に # を付けると、型の表示名で検索します。たとえば、検索キーに #ジョブフロー を指定すると、ジョブフロー型のオブジェクトを検索します。同様に @ を付けると、所有者で検索します。たとえば、検索キーに @guest を指定すると、guest ユーザが所有するオブジェクトを検索します。先頭文字

が # と @ 以外の検索キーの場合は、指定された文字列が表示名に含まれるオブジェクトを検索します。# や @ で始まる表示名を検索したい場合には、\# や \@ のようにバックスラッシュを付けて検索します。

複数の種類の検索キーを同時に指定した場合は、AND 条件による検索となります。複数の検索キーは、基本的に空白によって区切られますが、連続する表示名の場合は、空白を含む 1 つの表示名として扱われます。例えば、`some display name @root #ディレクトリ` と入力した場合、`some display name` という文字列を含む表示名で、かつ、所有者が `root` ユーザ、型がディレクトリであるようなオブジェクトを検索します。

同じ種類の検索キーを複数指定した場合は、最後の検索キーが有効になります。

2.4.2 テーブル

テーブルはディレクトリと同様に複数のオブジェクトを格納できる Kompira オブジェクトです。ただし、格納できるオブジェクトの型が 1 つに限定されている点がディレクトリとは異なります。

テーブルオブジェクトを作成する場合、初めに型オブジェクトと、その型オブジェクト内のフィールドを選択します。作成されたテーブルオブジェクトでは、ディレクトリオブジェクトで表示される情報に加えて作成時に選択したフィールド情報が表示されます。

テーブルオブジェクトを使用することで、格納されているオブジェクトのフィールドを一括で閲覧することができます。

テーブルオブジェクトの詳細画面ではディレクトリオブジェクトと同様のキー操作に対応しています。ただし # による型オブジェクトの選択は使えません。

2.4.3 ジョブフロー

ジョブフローオブジェクトから、ジョブフローの記述と実行ができます。ジョブフローの記述方法については、[Kompira チュートリアル](#) を参照してください。また、ジョブフロー言語の詳細については、[Kompira ジョブフロー言語リファレンス](#) が参考になります。

ジョブフローオブジェクトの詳細画面では共通のキー操作に加えて以下のキー操作に対応しています。

キーバインド	操作
Alt-X	ジョブフローの実行

ジョブフローの実行

ジョブフローを記述し、保存すると、ジョブフローの実行ボタンが有効になります。実行ボタンを押すと、ジョブフローの実行を開始し、プロセス詳細画面に移ります。

注釈: 記述したジョブフローに文法エラーがある場合や、Kompira エンジンが停止している場合は、ジョブフローの実行ボタンが無効になります。

ジョブフロー実行には以下のオプションが選択できます。

オプション名	内容
ステップモード	ジョブフローをデバッグする際に使用するモードです。コマンドの実行前にジョブフローが一時停止し、実行コマンドの内容を確認できます。
チェックポイントモード	ジョブフローの実行状態を随時保存するモードです。ジョブフロー実行中に万が一 Kompira サーバが異常終了した場合、保存されたチェックポイントの状態から、ジョブフロープロセスを再開できるようになります。
監視モード	ジョブフローの実行監視モードを指定します。ジョブフローの完了時や異常終了時に、ジョブフローを実行したユーザのメールアドレス宛にメールを送信して通知します。

2.4.4 スクリプトジョブ

スクリプトジョブを作成すると Bash や Perl、Ruby、Python などの言語で記述されたスクリプトをリモートのサーバ上で実行することができます。

スクリプトジョブオブジェクトの詳細画面では共通のキー操作に加えて以下のキー操作に対応しています。

キーバインド	操作
Alt-X	スクリプトジョブの実行

スクリプトの編集

編集ボタンを押すと、スクリプトの編集画面に移ります。ソースのテキストエリアに、実行させるスクリプトを記述してください。

Linux など、Unix 系 OS でスクリプトを実行させる場合、スクリプトの先頭行にシバン (shebang) を記述してください。

例

```
#!/bin/bash
echo hello
```

Windows 系 OS でスクリプトを実行させる場合、拡張子を指定する必要があります。スクリプトの種類に応じて、以下の拡張子を指定してください。

スクリプト	拡張子
バッチファイル	bat
VBScript	vbs
JScript	js
PowerShell スクリプト	ps1

スクリプトの実行方法

実行ボタンを押すと、スクリプトの実行が開始され、プロセス詳細画面に移ります。スクリプトの実行が完了すると、終了ステータス、標準出力、標準エラー出力の結果が、コンソールに表示されます。

実行ボタンの右側にあるテキストフィールドにて、コマンドライン引数を入力することができます。空白で区切ることで複数のコマンドライン引数を渡せます。

実行ノードは、スクリプトが実行されるリモートのサーバを指定します。指定しなかった場合は、ジョブマネージャが動作しているローカルサーバ上でスクリプトが実行されます。

実行アカウントは、リモートサーバにログインする場合のアカウント情報を指定します。

バージョン 1.4.0 で追加: スクリプトジョブをブラウザ上から直接実行できる機能を追加

2.4.5 メールチャネル

メールチャネルは、外部の IMAP4/POP3 サーバと連携して、ジョブフローからメールを受信するためのオブジェクトです。以下のように、作成したメールチャネルオブジェクトに対して、ジョブフローのメッセージ受信機能を用いることで、メールを受信して処理することが可能になります。(以下の例では /home/guest/test_mchan に作成したメールチャネルからの受信を想定しています)

```
</home/guest/test_mchan> ->
[mail = mail_parse($RESULT)] ->
print(' メール受信しました:', mail['Subject'])
```

メールチャネル設定方法

メールチャネルオブジェクトの編集画面で、以下の各項目を設定し、保存してください。

設定項目	内容
サーバ名	接続する IMAP4/POP3 サーバのホスト名か IP アドレスを設定します。
プロトコル	メール受信のプロトコルとして、IMAP4 もしくは POP3 のいずれかを設定します。
SSL	SSL による通信を行う場合はチェックします。
ポート番号	IMAP サーバのポート番号を設定します。指定しない場合デフォルトのポート番号が使用されます。
メールボックス	受信するメールボックスを設定します。デフォルトは "INBOX" です。
ユーザ名	IMAP4/POP3 サーバに接続するユーザー名を設定します。
パスワード	IMAP4/POP3 サーバに接続する際のパスワードを設定します。
受信チェック間隔	IMAP4/POP3 サーバに対して新着メッセージを確認する間隔を分単位で指定します。
接続タイムアウト	IMAP4/POP3 サーバに対する接続タイムアウトを秒単位で指定します。
OAuth2 使用	OAuth2 を用いて認証する場合はチェックします。この場合、パスワードの設定は不要となります。

次のページに続く

表 6 – 前のページからの続き

設定項目	内容
OAuth2 プロバイダ	OAuth2 のサービスプロバイダを選択します。OAuth2 認証を利用する場合には必須です。
無効	IMAP4/POP3 サーバへの接続を無効化します。
ログサイズ	ログの最大サイズを指定します。最大サイズを超えた場合、古いログメッセージから削除されます。

接続テスト

サーバ名の右側に配置された「接続テスト」ボタンをクリックすると、設定された IMAP4/POP3 サーバに対して接続、ユーザ名とパスワードによる認証、および、メールボックスの確認を行います。

OAuth2 認証を利用する場合の設定手順

OAuth2 認証を利用しての接続を行う場合、ユーザ名を設定し、接続先のメールサービスに対応している OAuth2 プロバイダを選択し、OAuth2 使用をチェックします。

その後、OAuth2 使用の右横に表示されている「承認フロー開始」ボタンをクリックして、承認フローを開始します。OAuth2 プロバイダの認証画面が別ウィンドウで表示されるので、設定したユーザ名でログインした後、内容を確認して承認ボタンをクリックします。リダイレクトに失敗して、ウィンドウ上に「このサイトにアクセスできません」と表示された場合には、ウィンドウのアドレスバー部分に表示されている URL をコピーし、もとの Kompira の画面に表示されているリダイレクト URL 入力のダイアログボックスにペーストしてから「提出」ボタンをクリックします。Kompira は入力されたリダイレクト URL に含まれる認可コードを用いて、アクセストークンを取得します。

トークンの取得に成功すると、メールチャネルの画面上に新たにトークン有効期限が表示されます。

プロバイダの設定を変更した場合などは、「トークン消去」ボタンをクリックして、Kompira 内部に保存されたトークンを消去した後で、再度、「承認フロー開始」を行ってトークンを再取得してください。

注釈: リフレッシュトークン付きの場合、期限切れのアクセストークンはメール送受信や接続テストの実行時に自動的にリフレッシュされて有効期限が延長されます。リフレッシュトークンは一般的にアクセストークンよりも長い有効期限が設定されていますが、リフレッシュトークンの期限が切れた場合は、トークンのリフレッシュに失敗します。その場合、「承認フロー開始」を行って、再度トークンを取得してください。リフレッシュ時には、リフレッシュトークンも更新されるため、定期的にメール送受信や接続テストを行うことで、リフレッシュトークンの有効期限切れを防ぐことが可能です。

注釈: ユーザーは、Kompira アプリケーションを OAuth2 プロバイダに登録し、そこでの設定情報をもとに OAuth2 プロバイダ型オブジェクトを定義しておく必要があります。アプリケーションの登録方法については、各 OAuth2 プロバイダの技術ドキュメントを参照してください。

2.4.6 SMTP サーバ

SMTP サーバは、メール送信時に利用する SMTP サーバの情報を定義するオブジェクトです。

SMTP サーバ設定方法

SMTP サーバオブジェクトの編集画面で、以下の各項目を設定し、保存してください。

設定項目	内容
ホスト名	接続する SMTP サーバのホスト名か IP アドレスを設定します。
ポート番号	SMTP サーバのポート番号を設定します。指定しない場合デフォルトのポート番号が使用されます。
ユーザ名	認証が必要な SMTP サーバに接続する場合のユーザー名を設定します。
パスワード	認証が必要な SMTP サーバに接続する場合のパスワードを設定します。
接続タイムアウト	SMTP サーバに対する接続タイムアウトを秒単位で指定します。
TLS 使用	TLS を用いて SMTP サーバに接続する場合にチェックします。
SSL 使用	SSL を用いて SMTP サーバに接続する場合にチェックします。
OAuth2 使用	OAuth2 を用いて認証する場合はチェックします。この場合、パスワードの設定は不要となります。
OAuth2 プロバイダ	OAuth2 のサービスプロバイダを選択します。OAuth2 認証を利用する場合には必須です。

「接続テスト」ボタンをクリックすると、SMTP サーバに対する接続確認を行います。また、ユーザー名とパスワードが設定されている場合は、ユーザー認証の確認も行います。

OAuth2 認証の設定手順については、メールチャネルと同様です。(OAuth2 認証を利用する場合の設定手順)

2.4.7 LDAP サーバ

LDAP サーバは、Kompira のログインアカウントを LDAP と連携するための LDAP サーバと設定情報を定義するオブジェクトです。システム設定の LDAP サーバ (ldapServer) フィールドに、連携する LDAP サーバオブジェクトを指定します。

LDAP サーバ設定方法

LDAP サーバオブジェクトの編集画面で、以下の各項目を設定し、保存してください。

設定項目	内容
サーバ URL	LDAP サーバの URL を指定します。(例: ldap://ldap.example.com)
接続タイムアウト	LDAP サーバの接続タイムアウトを指定します。
STARTTLS 使用	LDAP サーバへの接続に STARTTLS を用いる場合にセットします。

次のページに続く

表 8 – 前のページからの続き

設定項目	内容
フォールバックログイン	LDAP ログイン失敗時に、直近にログインした際のパスワードによるログインを許可する場合にセットします。
セッション有効期間	LDAP ユーザでログインしたときのセッションの有効期間を時間単位で指定します。
バインド DN	LDAP サーバへのバインド DN を指定します。空にした場合、匿名バインドを用います。
バインドパスワード	LDAP サーバへのバインド時のパスワードを指定します。
ユーザー検索 DN	ユーザー検索の基点となる DN を指定します。
ユーザー検索スコープ	ユーザー検索の基点からのスコープを BASE, ONELEVEL, SUBTREE の中から指定します。
ユーザー検索属性	ユーザー検索の対象となるオブジェクトの属性中からユーザー名が格納されているものを指定します。
対象ユーザ	LDAP 連携するユーザ名のリストを指定します。
所属グループ DN	LDAP 連携するユーザが所属するグループの DN を指定します。
グループ検索 DN	グループ検索の基点となる DN を指定します。
グループ検索スコープ	グループ検索の基点からの検索対象のスコープを BASE, ONELEVEL, SUBTREE の中から指定します。
グループ検索クラス	グループ検索の対象となるオブジェクト中からフィルタするクラス (object-Class) を指定します。
グループ種別	グループ検索の対象となるグループの種類を指定します。
反映グループ	LDAP ユーザが所属する LDAP のグループを Kompira のグループに反映させるグループ名を指定します。
ユーザデータ (名)	ユーザオブジェクトの「名」に LDAP の値を反映させる場合に、対応する LDAP ユーザの属性を指定します。
ユーザデータ (姓)	ユーザオブジェクトの「姓」に LDAP の値を反映させる場合に、対応する LDAP ユーザの属性を指定します。
ユーザデータ (Email)	ユーザオブジェクトの「E メール」に LDAP の値を反映させる場合に、対応する LDAP ユーザの属性を指定します。

「接続テスト」ボタンをクリックすると、LDAP サーバに対する接続確認を行います。

注釈: LDAP ユーザでの初回ログインに成功すると、Kompira のユーザー一覧 (/config/user) に LDAP ユーザが新規に作成されます。作成された LDAP ユーザは LDAP サーバ上から削除されても Kompira のユーザー一覧上には残されるので、必要に応じて削除してください。

注釈: セッション有効期間の設定は、LDAP でログインしたユーザにのみに影響します。ローカルユーザでログインした場合は、常にシステムのデフォルトのセッション有効期間 (2 週間=336 時間) が適用されます。また、セッション有効期間を 0 に設定した場合、ブラウザを閉じたときにセッションが破棄されるようになります。空に設定した場合は、デフォルトのセッション有効期間が適用されます。

注釈: グループ検索 DN や、ユーザデータ（名、姓、Email）が指定されている場合、LDAP ユーザでログインする度に、ユーザオブジェクトの対応フィールド（groups, first_name, last_name, email）が、LDAP サーバの最新の値に上書きされます。これらのフィールドの値を別途書き換えても、ログインする度に LDAP サーバの値で上書きされることに注意してください。ただし、ユーザーオブジェクトのグループフィールドに非 LDAP グループを設定している場合、その値は保存されます。

2.4.8 フォーム

フォームは、ユーザ入力フォームを作成することができるオブジェクトです。フォームは提出オブジェクトとして設定したオブジェクトの型によって、実行できる機能が異なります。

- 提出オブジェクトとしてチャンネル型オブジェクトが設定されている場合は、そのチャンネルにフォームで入力したメッセージを送信することができます。
- 提出オブジェクトとしてジョブフロー型オブジェクトが設定されている場合は、そのジョブフローをフォームで入力したパラメータで実行することができます。

フォームオブジェクトの詳細画面では共通のキー操作に加えて以下のキー操作に対応しています。

キーバインド	操作	備考
Alt-S	送信	提出オブジェクトがチャンネル型の場合
	実行	提出オブジェクトがジョブフロー型の場合

フォーム設定方法

フォームオブジェクトの編集画面で、以下の各項目を設定し、保存してください。

設定項目	内容
提出オブジェクト	このフォームから提出先となるチャンネル型またはジョブフロー型のオブジェクトを設定します。
型フィールド	提出オブジェクトに提出するデータの構造を設定します。

メッセージ送信

提出オブジェクトとしてチャンネル型オブジェクトが設定されている場合は、入力フォームの下に送信ボタンが表示されます。

フォームに値を入力して送信ボタンを押すと、入力された値が辞書型データとして提出オブジェクトに設定されたチャンネルオブジェクトに送信されます。

ジョブフロー実行

提出オブジェクトとしてジョブフロー型オブジェクトが設定されている場合は、入力フォームの下に実行ボタンが表示されます。

フォームに値を入力して実行ボタンを押すと、入力された値をパラメータとして提出オブジェクトに設定されたジョブフローオブジェクトを実行します。

2.4.9 リポジトリ

リポジトリオブジェクトを作成することで、Kompira のディレクトリと分散型バージョン管理システム (DVCS) 上のリポジトリを同期させることが可能です。リモートリポジトリから指定した Kompira ディレクトリにオブジェクトを取り込んだり、逆に、作成した Kompira オブジェクトをリモートリポジトリ上に保存したりすることができます。これによって、Kompira のジョブフローやスクリプトジョブなどのバージョン管理が可能になります。また、複数の Kompira 間でのジョブフローの共有なども簡単に行えるようになります。

リポジトリ設定方法

リポジトリオブジェクトの編集画面で、以下の各項目を設定し、保存してください。

設定項目	内容
URL	リモートリポジトリの URL を指定します。
リポジトリ種別	リモートリポジトリの種別を指定します。(現バージョンでは git または mercurial のみ選択可能)
ポート番号	リポジトリサーバのポート番号がデフォルトと異なる場合に指定します。
ユーザ名	リモートリポジトリにアクセスするアカウントのユーザ名を指定します。
パスワード	リモートリポジトリにアクセスするアカウントのパスワードを指定します。
ディレクトリ	同期対象となる Kompira のディレクトリオブジェクトを指定します。

注釈: リモートリポジトリは、あらかじめ作成しておく必要があります。

初期化

必要なリポジトリ設定項目が入力されると、リポジトリ画面から初期化ボタンが有効化されます。初期化ボタンを押すと、Kompira サーバ上のローカルリポジトリが初期化され、リモートリポジトリの内容が指定した Kompira ディレクトリオブジェクトに取り込まれます。

プッシュ

プッシュボタンは、初期化後に有効になります。Kompira ディレクトリの更新情報をリモートリポジトリ側に送信する場合、プッシュボタンを押します。

プル

プルボタンは、初期化後に有効になります。リモートリポジトリ側の更新情報を Kompira 側に反映させる場合、プルボタンを押します。

2.5 プロセス管理

ジョブフローおよびスクリプトジョブの実行状態を管理するためのプロセスについて記述します。

プロセスが作成されるのは、ジョブフローおよびスクリプトジョブが実行されたときです。実行の開始については [ジョブフロー](#) および [スクリプトジョブ](#) を参照してください。

2.5.1 プロセス一覧

プロセス一覧画面では、実行中もしくは過去に実行されたプロセスの一覧を確認することができます。

デフォルトでは「実行中のプロセス」が選択された状態で、プロセスのステータスが NEW(新規)、READY(実行可能)、RUNNING(実行中)、WAITING(入力/コマンド完了待ち) のプロセスが表示されます。

プロセスのステータスが DONE(実行完了)、もしくは ABORTED(異常終了) のプロセスは既に終了したプロセスです。これらを確認したい場合は「全てのプロセス」を選択してください。

既に実行が終了しているプロセスについては、一覧画面より削除をすることができます。

注釈: 一般ユーザーは自身が実行したプロセスのみ閲覧することができます。ルート権限を持つユーザーは全てのプロセスを閲覧することができます。

2.5.2 プロセス詳細

プロセス詳細画面では、プロセスの実行状況の確認と制御を行うことができます。

プロセス詳細画面におけるボタン操作、表示されるタブについて次節以降に記述します。

また、プロセス詳細画面では共通のキー操作に加えて以下のキー操作に対応しています。

キーバインド	操作	備考
F6	プロセスの中止	確認ダイアログが表示されます
F7	プロセスの停止	スクリプトジョブでは対応していません
F8	プロセスの続行	スクリプトジョブでは対応していません
CTRL-[前のタブに切り替え	
CTRL-]	次のタブに切り替え	
a	テキスト選択切り替え	コンソールタブまたは結果タブで操作できます

バージョン 1.6.6 で追加: プロセス詳細画面でキー操作が可能になりました。

中止 (Terminate)

プロセスの実行を中止します。中止が選択されたプロセスはステータスが ABORTED(異常終了) となり、再開することはできません。

実行中の子プロセスが存在する場合、子プロセスのステータスも ABORTED(異常終了) となります。

停止 (Suspend)

プロセスの実行を一時的に停止します。

実行中の子プロセスが存在する場合、子プロセスも停止状態となります。

続行 (Resume)

停止状態のプロセスを再開します。

停止中の子プロセスが存在する場合、子プロセスも再開します。

コンソール

プロセス実行時の出力です。

ジョブフローの場合、print 文のメッセージ、リモートコマンドの実行結果、エラー時のスタックトレース等が表示されます。

スクリプトジョブの場合、スクリプトの終了ステータス、標準出力、標準エラー出力が表示されます。

注釈: コンソールバッファの最大サイズは 64KB に制限されています。64KB 以上の出力があった場合、確認できるメッセージは最新の 64KB 分のみであることに注意してください。

ジョブフロー/スクリプト

実行されたジョブフローおよびスクリプトが表示されます。

ジョブフローの場合は現在実行中の行も合わせて表示されます。

結果

プロセス終了時の結果 **\$RESULT** の内容が JSON 形式で表示されます。

子プロセス

ジョブフローが実行された場合のみ表示される画面で、子プロセスの一覧が確認できます。

子プロセスは、fork や pfor 構文を使用して子プロセスを作成するジョブフローを実行した時に作成されます。

設定

ジョブフローが実行された場合のみ表示される画面で、プロセスの設定が確認できます。また、停止中には設定を変更することができます。

ここで確認または変更できるのは、**ジョブフローの実行** に示したジョブフロー実行に関するオプションです。

2.5.3 管理コマンドによるプロセス操作

Kompira サーバ上において管理コマンド `/opt/kompira/bin/manage.py process [options...]` を用いて、Kompira プロセスに対して以下のような操作を行なうことができます。

- プロセスの一覧表示
- プロセスの個数表示
- プロセスの削除
- プロセスの中止
- プロセスの停止
- プロセスの続行

このとき、操作の対象とするプロセスを絞り込む条件を指定することができます。

- プロセスの状態
- 実行しているジョブフロー
- スケジュール起動のプロセスかどうか

- 起動オブジェクトが指定されたプロセスかどうか
- 実行したユーザ
- 開始日時および終了日時
- 実行時間
- コンソール出力に含まれる文字列

プロセス操作オプション

Kompira プロセスに対して行う操作を指定するオプションを以下に示します。

オプション	説明
-L, --list	プロセスの一覧を表示します。デフォルトではアクティブ状態のプロセスを表示します。
-C, --count	プロセスの個数を表示します。デフォルトでは全ての状態のプロセスの個数を表示します。
-D, --delete	プロセスを削除します。アクティブ状態のプロセスは対象外となります。
-T, --terminate	プロセスを中止します。既に終了しているプロセスは対象外となります。
-S, --suspend	プロセスを停止します。既に終了しているまたは停止中のプロセスは対象外となります。
-R, --resume	プロセスを続行します。既に終了しているまたは停止中でないプロセスは対象外となります。

操作を指定するオプションはいずれか 1 つのみ指定可能で、複数指定した場合は最後のオプションが適用されます。上記のいずれも指定しなかった場合は、プロセスの一覧表示を行いません。

注釈: 大量のプロセスが処理対象となるような場合に、メモリや CPU などのリソース負荷が大きくなる場合がありますのでご注意ください。

プロセス情報の変更を伴う操作（削除、中止、停止、続行）が指定された場合は、実際に制御を適用するかの確認（yes/no の入力）が行なわれます。制御前の確認を行わずに適用したい場合は `-y` オプションを指定してください。制御を適用せずに動作を確認したい場合は `--dry-run` オプションを指定してください。

オプション	説明
-y, --noinput	確認を行わずに制御を適用する
--dry-run	変更を伴う処理を実際には適用しない

プロセス絞り込みオプション

操作対象とする Kompira プロセスを絞り込む条件を指定するオプションを以下に示します。

オプション	説明
<code>-i PID, --pid PID</code>	プロセス ID が PID であるプロセス（複数指定可能）
<code>-a, --all</code>	全ての状態のプロセス
<code>--active</code>	アクティブ状態 (NEW, READY, RUNNING, WAITING のいずれか) のプロセス
<code>--finish</code>	終了状態 (ABORTED, DONE のいずれか) のプロセス
<code>--status {NEW,READY,RUNNING,WAITING,ABORTED,DONE}</code>	指定した状態のプロセス（複数指定可能）
<code>--suspended</code>	停止中のプロセス
<code>--not-suspended</code>	停止中でないプロセス
<code>--parent PARENT</code>	親プロセス ID が PARENT であるプロセス（複数指定可能）
<code>--anyones-child</code>	任意の親プロセスを持つプロセス
<code>--min-children MIN_CHILDREN</code>	子プロセスの個数が MIN_CHILDREN 以上あるプロセス
<code>--job JOB</code>	開始ジョブフローが JOB に正規表現でマッチするプロセス
<code>--current-job CURRENT_JOB</code>	実行中ジョブフローが CURRENT_JOB に正規表現でマッチするプロセス
<code>--scheduled</code>	スケジューラによって起動されたプロセス
<code>--not-scheduled</code>	スケジューラ以外で起動したプロセス
<code>--scheduler-id SCHEDULER_ID</code>	ID が SCHEDULER_ID のスケジューラによって起動されたプロセス（複数指定可能）
<code>--scheduler-name SCHEDULER_NAME</code>	名称が SCHEDULER_NAME に正規表現でマッチするスケジューラによって起動されたプロセス
<code>--invoked</code>	起動オブジェクトが記録される方式で実行されたプロセス
<code>--not-invoked</code>	起動オブジェクトが記録されない方式で実行されたプロセス
<code>--invoker INVOKER</code>	起動オブジェクトが INVOKER (abspath) であるプロセス（複数指定可能）
<code>--invoker-type INVOKER_TYPE</code>	起動オブジェクトの型が INVOKER_TYPE (abspath) であるプロセス（複数指定可能）
<code>--user USER</code>	実行ユーザの名称が USER に一致するプロセス（複数指定可能）
<code>--started-since STARTED_SINCE</code>	開始日時が STARTED_SINCE 以降のプロセス
<code>--started-before STARTED_BEFORE</code>	開始日時が STARTED_BEFORE より前のプロセス
<code>--finished-since FINISHED_SINCE</code>	終了日時が FINISHED_SINCE 以降のプロセス
<code>--finished-before FINISHED_BEFORE</code>	終了日時が FINISHED_BEFORE より前のプロセス
<code>--elapsed-more ELAPSED_MORE</code>	経過時間（秒数）が ELAPSED_MORE 以上長いプロセス
<code>--elapsed-less ELAPSED_LESS</code>	経過時間（秒数）が ELAPSED_LESS より短いプロセス

次のページに続く

表 13 – 前のページからの続き

オプション	説明
<code>--console CONSOLE</code>	コンソール出力に <code>CONSOLE</code> を含むプロセス
<code>--head HEAD</code>	絞り込み結果の先頭 <code>HEAD</code> 件を処理対象とします
<code>--tail TAIL</code>	絞り込み結果の末尾 <code>TAIL</code> 件を処理対象とします
<code>-r, --reverse</code>	並び順を逆にします
<code>--order ORDER</code>	<code>ORDER</code> で指定した順番で並べます

- 複数指定可能な絞り込みオプションを複数回指定した場合は、それらを OR 条件として絞り込みます。
- 異なる種類の絞り込みオプションを複数指定した場合は、それらを AND 条件として絞り込みます。
- オプションの日時はジョブフローの `datetime()` 組み込み関数が認識できる形式で指定できます。

その他のオプション

オプション	説明
<code>--format {table,json,export}</code>	プロセスの一覧表示を行なうときの形式
<code>--datetime-format DATETIME_FORMAT</code>	日時情報を表示するときの形式

2.6 スケジューラ

Kompira 上に作成したジョブフローおよびスクリプトジョブをスケジューラに登録することで、定期的にジョブを実行させることができます。

スケジューラで設定できる項目の一覧を以下に示します。

フィールド	デフォルト値	説明
スケジュール名	なし	スケジュールの名称
説明	なし	スケジュールについての説明
ユーザー		ジョブの実行ユーザー
ジョブ		スケジューラにより実行されるジョブ
年	*	スケジュールを実行する年 (4 桁の数字で指定)
月	*	スケジュールを実行する月 (1-12 を指定)
日	*	スケジュールを実行する日 (1-31 を指定)
ISO 週番号	*	スケジュールを実行する週 (1-53 を指定) ISO8601 で定められた週番号
曜日名もしくは曜日番号	*	スケジュールを実行する曜日 (0(月曜日)-6(日曜日)、または mon,tue,wed,thu,fri,sat,sun を指定)
時	*	スケジュールを実行する時 (0-23 を指定)
分	*	スケジュールを実行する分 (0-59 を指定)

次のページに続く

表 15 – 前のページからの続き

フィールド	デフォルト値	説明
スケジュールの無効化	false (チェックなし)	true の場合 (チェックがつけられている場合)、ジョブを実行しない

2.6.1 日時設定フィールドの書式

日時設定のフィールドには、以下のように Unix の cron と同じ書式を用いることができます。

書式	フィールド	説明
*	全て	各値ごとに発火します。
*/a	全て	a 間隔ごとに発火します。
a-b	全て	値が a から b の範囲にあるときに毎回発火します。
a-b/c	全て	値が a から b の範囲にあるときに、c 間隔毎に発火します。
xth y	日 (Day)	その月の x 番目の y 曜日に発火します。
last x	日 (Day)	その月の最終の x 曜日に発火します。
last	日 (Day)	その月の最終日に発火します。
x,y,z	全て	条件 x か y か z に発火します (上記の書式の任意の組み合わせが可能)

注釈: 上記書式において、',', '/', '-' の隣に空白を入れないように注意してください。

例 1: 毎年 12 月の最初の月曜日と最終金曜日の 0 時 0 分に発火:

```
Month: 12
Day: 1st mon,last fri
```

例 2: 2012 年の 4 月と 8 月の 15-20 の 12 時 30 分に発火:

```
Year: 2012
Month: 4,8
Day: 15-20
Hour: 12
Minute: 30
```

例 3: 平日に 1 時間毎に発火:

```
Day of week: mon-fri
Hour: *
```

例 4: 毎年 1 月 1 日 0 時 0 分に発火:

```
Year: *
```

2.7 設定

Kompira 画面上部の「設定」より行える各種設定について記述します。

2.7.1 ユーザー管理

Kompira 上に登録されているユーザーの一覧を確認することができます。

初期状態で用意されているユーザーを以下に示します。

ユーザー名	パスワード	説明
guest	guest	ゲスト用ユーザーです。
root	root	ルートユーザーです。
admin	admin	管理用ユーザーです。アクセス許可設定とは無関係に全てのオブジェクトに対してアクセス可能です。デフォルトでは無効のユーザーとなっています。

ユーザーを新規作成すると/home/<ユーザー名>/ディレクトリが作成され、自動的にホームとして設定されます。

一般ユーザーは自身のユーザー情報のみ編集可能です。ただし、自身のグループや有効フィールドを変更することはできません。全てのユーザー情報を編集できるのはルート権限を持つユーザーに限定されています。

ユーザーごとに設定できる項目の一覧を以下に示します。

フィールド	説明
ユーザー名	システムでユーザーの識別に使用する名称
姓	ユーザーの姓
名	ユーザーの名
Eメール	ユーザーのメールアドレス
グループ	ユーザーが所属するグループ
有効	false(チェックなし)の場合、ユーザーのログインを許可しない
LDAP ユーザ	true(チェックあり)の場合、LDAP ユーザを表す
ホーム	ユーザーがログインしたときに最初に表示するページ
環境変数	ジョブフロー実行時、自動的に変数として読み込まれる環境変数オブジェクト

注釈: guest、root、admin ユーザーを削除することはできません。また、自分自身を削除することもできません。

注釈: グループ、有効、LDAP ユーザの各フィールドは、特権ユーザのみ変更することができます。ただし、組み込みユーザ (admin, root, guest) の LDAP ユーザフィールドを変更することはできません。また、LDAP ユーザのパスワードを変更することはできません (必要な場合は LDAP サーバ側でパスワード変更

を行ってください)。

アカウントロックの解除

アカウントがロックされるとロックされたユーザの情報表示画面の下部に警告メッセージとともにアクセス元の IP アドレスの一覧が表示されます。合わせて表示されるロック解除ボタンを押すことで、当該ユーザのアカウントロックを解除できます。

また、Kompira サーバに端末ログインして、以下の管理コマンドを実行してロック解除することも可能です。

`axes_reset` は全てのアカウントロックを一斉に削除します。

```
/opt/kompira/bin/manage.py axes_reset
```

`axes_reset_ip` は指定した IP アドレスからのアカウントロックを解除します。

```
/opt/kompira/bin/manage.py axes_reset_ip [ip ...]
```

`axes_reset_username` は指定したユーザのアカウントロックを解除します。

```
/opt/kompira/bin/manage.py axes_reset_username [username ...]
```

また、`axes_list_attempts` コマンドを実行するとログインに失敗した履歴の一覧が表示されます。(ロックを解除すると該当する履歴は削除されます)

```
/opt/kompira/bin/manage.py axes_list_attempts
```

2.7.2 グループ管理

Kompira 上に登録されているグループの一覧を確認することができます。

初期状態で用意されているグループを以下に示します。

グループ名	説明
other	Kompira 上の全てのユーザが属するグループ
wheel	ルート特権を持つユーザが属するグループ

グループ情報を編集できるのはルート権限を持つユーザーに限定されています。

注釈:

- other と wheel グループを削除することはできません。
 - other グループに所属するユーザーの判定は設定にかかわらず、上記のとおりとなります。すなわち、other グループに所属するユーザ設定は無視されます。
-

2.7.3 管理領域設定

管理領域とは、ジョブマネージャごとに管理するネットワーク領域のことです。

Kompira で複数のジョブマネージャを使用する際、ジョブマネージャ A は 192.168.1.* へのアクセス、ジョブマネージャ B は 192.168.2.* へのアクセスというように、各ジョブマネージャが管理する領域を定めることができます。

管理領域ごとに設定できる項目の一覧を以下に示します。

フィールド	説明
表示名	管理領域の表示名を指定します。
説明	管理領域の説明を記述します。
無効化	対象管理領域を一時的に無効にする場合にセットします。
範囲	管理領域の範囲を IP アドレスやホスト名で指定します。複数指定することができ、またワイルドカード (*) も使用可能です。

管理領域情報を編集できるのはルート権限を持つユーザーに限定されています。

デフォルトでは、default という管理領域があり、その範囲は '*' と設定されています。この場合、管理領域が default のジョブマネージャで全てのリモートコマンドを実行します。

ジョブマネージャが 1 台のみの構成で Kompira を使用する場合、もしくはジョブマネージャごとに管理領域を設定しなくてもよいという場合、管理領域設定を変更する必要はありません。

ジョブマネージャの状態確認

管理領域設定画面では、各管理領域に登録されているジョブマネージャの動作状況を確認することができます。

ジョブマネージャ状態として、以下の項目が表示されます。

値	説明
ホスト名	ジョブマネージャが動作しているホストの名称
プロセス ID	ジョブマネージャプロセス (kompira_jobmgrd) のプロセス ID
バージョン	ジョブマネージャの Kompira バージョン
ステータス	ジョブマネージャの動作状況 ('動作中' もしくは 'ダウン')

ステータスが「動作中」となっていれば、ジョブマネージャは Kompira と通信可能で、リモートコマンドが実行できる状態です。

2.7.4 システム設定

システム設定画面では、Kompira システム全体の設定を行います。

設定項目の一覧を以下に示します。

項目名 (キー名)	説明
サーバ URL (serverUrl)	Kompira サーバの URL
管理者メールアドレス (adminEmail)	Kompira サーバの管理者のメールアドレスを設定します。メール送信時に、from アドレスのデフォルト値として使われます。
正常終了時メールテンプレート (doneMailTemplate)	ジョブフローが正常に終了した場合に送信するメールのテンプレートを選択します。
異常終了時メールテンプレート (abortMailTemplate)	ジョブフローが異常終了した場合に送信するメールのテンプレートを選択します。
SMTP サーバ (smtpServer)	メール送信時の SMTP サーバを選択します。省略した場合は、localhost の SMTP サーバが使われます。
LDAP サーバ (ldapServer)	LDAP 連携に使用する LDAP サーバを選択します。省略した場合、LDAP 連携は行いません。
最大ログイン試行回数 (loginFailureLimit)	指定した回数で連続してログインに失敗した場合、アカウントをロックします。0 以下の値や空に設定した場合、アカウントロックを行いません。
アカウントロック期間 (accountLockoutTime)	アカウントをロックする期間を分単位で指定します。指定した期間が経過するとロックが自動的に解除されます。0 以下の値や空に設定した場合、アカウントロックの自動解除は行いません。
コマンド表示可否 (showCommandEnabled)	実行ジョブによるコマンドまたはスクリプトの実行時、セッションブロックの開始時、および再起動ジョブの実行時に、実行するコマンドやジョブの情報をコンソールに表示する場合はチェックします。
コマンド表示形式 (showCommandFormat)	実行するコマンドやジョブの情報を表示する場合のフォーマットを指定します。

次のページに続く

表 18 – 前のページからの続き

項目名 (キー名)	説明
標準出力表示可否 (showStdoutEnabled)	コマンド実行による標準出力をコンソールに表示する場合はチェックします。
標準出力表示フィルタ (showStdoutFilter)	標準出力のコンソールへの表示が許可されているとき、どれだけ表示するかを設定します。
標準エラー出力表示可否 (showStderrEnabled)	コマンド実行による標準エラー出力をコンソールに表示する場合はチェックします。
標準エラー出力表示フィルタ (showStderrFilter)	標準エラー出力のコンソールへの表示が許可されているとき、どれだけ表示するかを設定します。
セッション表示可否 (showSessionEnabled)	セッション実行中に受信した出力をコンソールに表示する場合はチェックします。
セッション表示フィルタ (showSessionFilter)	セッション出力のコンソールへの表示が許可されているとき、どれだけ表示するかを設定します。
編集時のパスワード非表示 (hidePasswordWhileEditing)	チェックするとオブジェクト編集時にパスワードフィールドに設定されているパスワードが表示できなくなります。新たに入力したパスワードはオブジェクトを保存するまでは目のアイコンをクリックして表示することができます。
カスタムスタイル (customStyle)	ブラウザで表示される画面の配色などの設定を持つカスタムスタイルを選択します。複数の Kompira サーバを利用している際などに区別しやすくなります。
ブランドタグ (brandTag)	メニューバー左上などにあるブランド名表記に続けて表示されるブランドタグを文字列で設定できます。デフォルトは指定無しで、最大 16 文字設定できます。ブランドタグが指定されている場合は、ブランド名のあとに空白をあけて【と】に挟んで表示されます。

注釈: システム設定 (/system/config) は設定型オブジェクト (**Config**) ですので、ジョブフローから設定のデータ辞書に対して、キー名で参照することが可能です。

注釈: パスワード非表示モードが有効な場合、パスワード辞書 (Dictionary<Password>) フィールドやパスワード配列 (Array<Password>) フィールドを含むオブジェクトを複数の場所から同時に編集すると、後から保存されたパスワードが未変更の場合、その値が常に反映されることは保証されません。

バージョン 1.6.8 で追加: 最大ログイン試行回数 (loginFailureLimit) とアカウントロック期間 (accountLockoutTime)、編集時のパスワード非表示 (hidePasswordWhileEditing) が追加されました。

バージョン 1.6.8 で変更: コマンド表示可否 (showCommandEnabled) のデフォルト値が false に変更になりました。

コマンド表示形式

コマンド表示する際の表示形式を文字列で指定します。項目名を {} で囲って記述することで、実行時の情報が埋め込まれてコンソールに表示されます。コマンド表示形式のデフォルト値は以下の通りです。

```
[{username}@{hostname}]{sudomark} {command}
```

コマンド表示形式では以下の項目を指定することができます。規定されていない項目名を指定した場合は無視されます。

項目名	説明
now	現在日時
jobtype	ジョブの種別 ("COMMAND", "SCRIPT", "SESSION", "REBOOT" のいずれか)
conntype	制御変数で指定された接続種別 ("ssh", "windows/http", など)
hostname	制御変数で指定されたリモートホスト名または IP アドレス (ローカルの場合は "localhost")
port	制御変数で指定されたポート番号 (指定されていない場合は "")
username	制御変数で指定されたリモートアクセス時のユーザ名 (ローカルの場合は "kompira")
sudomark	通常は \$ となり、__sudo__=true の場合は # となります。
command	コマンドラインを示す文字列で、ジョブ種別ごとに異なります。ジョブ種別ごとの詳細なフォーマットは指定できません。

このうち、項目 `command` はジョブ種別ごとに以下のように展開されます。

- コマンド実行の場合 (jobtype="COMMAND")
 - 実行ジョブに指定されたコマンドライン全体
- スクリプトジョブ実行の場合 (jobtype="SCRIPT")
 - {script_job.abspath}.{script_jop["ext"]} {args}
 - ここで script_job は実行ジョブに渡されたスクリプトジョブオブジェクトを、args は実行ジョブに渡されたパラメータを意味します。
- セッションブロックの場合 (jobtype="SESSION")
 - <SESSION: {session_id}>

- 再起動ジョブの場合 (jobtype="REBOOT")
 - reboot

コマンド表示形式には Python3 の `str.format()` と同じ形式が利用できます。設定された表示形式の不正によりエラーが発生するような場合は、デフォルトの表示形式が適用されます。

コンソール表示フィルタ

標準出力表示フィルタ、標準エラー出力表示フィルタ、セッション表示フィルタは、共通の形式でコンソール表示に際してのフィルタ条件を設定することができます。

設定された形式によって、いくつかのフィルタの種類があり、出力が得られたときにコンソールに表示するかどうかなどの振る舞いが異なります。

フィルタが空の場合、無制限に表示されます。

- 得られた出力をすべてコンソールに表示します。

フィルタを `<数値><単位>` という形式で設定すると、指定した量だけ表示されます。例えば `10L` と設定すると、先頭の 10 行分だけ表示されます。

- ジョブ開始時点から指定した数量まではコンソールに表示し、それ以降は抑止されて表示しなくなります。
- `<数値>` は整数で指定できます。
- `<単位>` は省略可能で、以下のいずれかが指定できます。大文字・小文字は区別しません。
 - `L`, `LINES` が指定された場合は行数でカウントします。出力がバイナリの場合は `0x0A` で区切ってカウントします。
 - 単位を省略した時は文字数でカウントします。出力がバイナリの場合はバイト数でカウントします。
 - 規定されていない単位が指定された場合は、文字数またはバイト数でカウントします。
- `<数値>` に 0 (または負の値) を指定すると、まったく表示されなくなります。
- 指定された数量に達したあとに 1 文字以上の出力を得た場合は、一度だけ `...` と改行をコンソールに表示します。

2.7.5 スタートアップジョブフロー

スタートアップディレクトリ (`/system/startup`) には、Kompira サーバ起動時に自動的に実行を開始するスタートアップジョブフローを登録することができます。複数のジョブフローが登録されている場合、名前順に実行されます。スタートアップディレクトリの下には、ジョブフロー以外のオブジェクトも作成することができます。スタートアップディレクトリの下にサブディレクトリを作成し、その中にジョブフローを登録した場合、それらのジョブフローは実行されません。スタートアップジョブフローは、引数を持ちません。また、root ユーザーで実行されます。

2.7.6 ライセンス管理

Kompira のライセンスを確認することができます。

ライセンス管理画面で確認できる項目の一覧を以下に示します。

フィールド	説明
ライセンス ID	ライセンスファイルの固有 ID
エディション	ライセンスの種類
ハードウェア ID	Kompira サーバのハードウェア固有 ID
有効期限	ライセンスの有効期限
登録済みノード数	ジョブフローから接続したことのあるノードの数 リセットを選択することで接続の履歴を削除する
ジョブフロー数	オブジェクトとして登録されているジョブフローの数
スクリプト数	オブジェクトとして登録されているスクリプトジョブの数
使用者	ライセンスの使用者
署名	ライセンスファイル署名

登録済みノード数、ジョブフロー数、スクリプト数の欄にはライセンスに応じた上限数が合わせて表示されます。

ライセンスファイルが未登録の場合、Kompira は仮ライセンスとして動作します。仮ライセンスは Kompira インストールから 1 週間の間自由にお使い頂けるライセンスです。

ライセンスの登録

ライセンス管理画面右側の編集ボタンを押すと、ライセンスファイルのアップロード画面に移動します。

「ファイルを選択」を押してライセンスファイルを登録後、保存ボタンを押すことでライセンス登録が完了します。

注釈: ライセンスファイルは/var/opt/kompira/kompira.lic に保存されます。上記パスにライセンスファイルを直接配置すれば、ライセンス管理画面にアクセスすることなくライセンスの登録をすることが可能です。

2.8 トラブルシューティング

Kompira をブラウザから操作してエラーが発生した場合の原因と対処方法を記述します。

2.8.1 「Jobflow の数が制限を超えました。」「ScriptJob の数が制限を超えました。」と表示される

Kompira で作成できるジョブフロー、スクリプトジョブオブジェクトの数は、ライセンスによる制限があります。

ライセンスが定める制限数を超えてオブジェクトを作成しようとすると、エラーメッセージが表示されて作成に失敗します。

ライセンス管理ページより、オブジェクトの数を確認してください。

2.8.2 「Kompira エンジンが停止しています」と表示される

kompirad プロセスが停止している場合に表示されるメッセージです。

/var/log/kompira 以下のログファイルを確認の上、kompirad プロセスの起動を行ってください。

参考:

Kompira デモンの起動・停止・状態確認, *Kompira* ログ

2.8.3 「データベース接続エラーです」と表示される

データベースに接続できない場合に表示されるメッセージです。

下記コマンドにより、データベースプロセスの状態確認と再起動処理を行なうことができます。

```
# systemctl status postgresql-12.service
# systemctl restart postgresql-12.service
```

2.8.4 「内部エラーです」と表示される

Kompira 内部で予期しないエラーが発生した際に表示されます。

/var/log/kompira 以下のログファイルを確認の上、support@kompira.jp までご連絡ください。

2.8.5 kompira_dump.sh による情報収集とサポートへの問合せ

Kompira 上の問題を解決するために各種ログファイルや設定ファイルなど、様々な情報の確認が必要になる場合があります。

Kompira サーバ上で `/opt/kompira/bin/kompira_dump.sh` を root 権限で実行すると、以下のように問題の解決に役立つ情報を自動的に収集します。なお、データベースのダンプを含むためサイズが大きくなる場合があります。スクリプトを実行する場所に十分に空き容量があることを確認してください。

```
$ sudo /opt/kompira/bin/kompira_dump.sh
2014-11-18 15:18:52 # mkdir /home/ec2-user/kompira_dump-20141118-151852
###
### kompira_dump ver 1.0.0
### dump started: 2014-11-18 15:18:52
###
===== system =====
2014-11-18 15:18:52 # mkdir /home/ec2-user/kompira_dump-20141118-151852/system
2014-11-18 15:18:52 # cp -a /etc/os-release /etc/system-release ./
2014-11-18 15:18:52 # printenv
2014-11-18 15:18:52 # who -aH
      :
      :
      :
===== kompira =====
2014-11-18 15:19:09 # mkdir /home/ec2-user/kompira_dump-20141118-151852/kompira
2014-11-18 15:19:09 # /opt/kompira/bin/kompirad --version
2014-11-18 15:19:09 # /opt/kompira/bin/manage.py license_info
2014-11-18 15:19:10 # /opt/kompira/bin/manage.py dumpdata -a
2014-11-18 15:19:16 # cp -a /opt/kompira/kompira.conf ./
2014-11-18 15:19:16 # cp -a /var/opt/kompira/kompira.lic ./
2014-11-18 15:19:16 # tar -cf - /var/log/kompira
tar: Removing leading '/' from member names
----- kompira -----
###
### dump finished: 2014-11-18 15:19:16
###
compressing...
/home/ec2-user/kompira_dump-20141118-151852.tar.gz
```

最後の行に収集結果をまとめたファイルが表示されます（上の例では `kompira_dump-20141118-151852.tar.gz`）ので、問題の状況と共にこのファイルを添付して support@kompira.jp までお問い合わせください。

なお、この `.tar.gz` ファイルは暗号化などの処理は行なっていないため、送付時にはお客様のセキュリティポリシーにしたがって必要な処理を行ってください。

収集しない項目

kompira_dump.sh では以下のような秘密情報は収集しません。

- Kompira サーバに設定されたアカウント・パスワード情報

収集する項目

kompira_dump.sh では以下のような情報を収集します。

- システム情報
 - プロセス情報 (ps ,top など)
 - サービス情報 (service, chkconfig など)
 - インストール済みパッケージ情報 (yum, rpm ,pip など)
 - カーネル情報 (sysctl, lsmod, /proc/{ version,*info,*stat } など)
 - ログファイル (/var/log/{ dmesg,messages } など)
- ネットワーク情報
 - インターフェース情報 (ip link, ip addr ,ip route など)
 - ファイアウォール情報 (iptables -L など)
 - ネットワーク状態 (netstat, traceroute など)
- Apache に関する情報
 - サービス状態 (service httpd status など)
 - ログファイル (/var/log/httpd/)
 - 設定ファイル (/etc/httpd)
- RabbitMQ に関する情報
 - サービス状態 (service rabbitmq-server status)
 - ログファイル (/var/log/rabbitmq/)
- PostgreSQL に関する情報
 - サービス状態 (service postgresql-<pgver> status)
 - ログファイル (/var/lib/pgsql/<pgver>/data/{ pg_log,pgstartup.log })
- Kompira に関する情報
 - バージョン (kompirad --version)
 - ライセンス情報 (manage.py license_info など)
 - データベースのダンプ (manage.py dumpdata -a)
 - 設定ファイル (/opt/kompira/kompira.conf)

- ログファイル (/var/log/kompira/)

注釈: Kompira データベースのダンプを含むため **Kompira** オブジェクトやジョブフロー上に記載されたノード情報、アカウント・パスワード情報は含まれる ことに注意してください。

第3章 Kompira チュートリアル

著者

Kompira 開発チーム

3.1 はじめに

このチュートリアルでは、Kompira ジョブフロー言語の基本的な書き方や仕様についてざっと紹介します。実際に Kompira 上でジョブフローを作成しながら学ぶことで、リモートノードの制御方法や Kompira オブジェクトの利用方法が理解できることでしょう。

Kompira 標準オブジェクトの仕様については、[Kompira 標準ライブラリ](#) を参照してください。また [Kompira ジョブフロー言語リファレンス](#) にはより形式的な言語の定義が書いてあります。

このチュートリアルは Kompira の機能を網羅的に紹介しているわけではありません。しかしこのチュートリアルを読むことで、Kompira の特筆すべき機能や特徴を学び、簡単なジョブフローであれば読み書きできるようになるでしょう。

3.2 ジョブフローを動かす

3.2.1 Hello World

最初のジョブフローは、コンソールに "Hello World" を表示する単純なものです。

```
print("Hello World")
```

このジョブフローを実行するとコンソールに以下のように出力されるはずです。

```
Hello World
```

注釈: ジョブフローに文法エラーがあると、保存しても実行できない状態になります。実行ボタンが押せない場合は、ジョブフローのエラーを修正して再度保存してください。

Kompira のジョブフロー言語は、1つの処理を表す **ジョブ** が基本的な実行の単位となります。

上の例では `print()` がジョブフローの **組み込みジョブ** のひとつで、丸括弧内に引数として与えられた文字列をコンソールに出力します。詳しくは [print](#) を参照してください。

3.2.2 コメントの書き方

ジョブフローではハッシュ文字 `#` から行末までがコメントとなります。コメントは行の先頭にも、ジョブの後にも書くことができます。ただし、文字列中に現れるハッシュ文字は対象外です。

```
# これはコメントです
print("# これはコメントではありません") # これはコメント
```

3.2.3 コマンドを実行する

実行したいコマンドを文字列として `[]` の中に記述することで、コマンドとして実行することができる **実行ジョブ** になります。

注釈: `[]` の中が文字列であれば実行すべきコマンドとして解釈しますので、コマンドラインの文字列を代入した変数を `[]` に記述して実行させることも可能です。(変数への代入については後ほど説明します)

コマンドの実行結果を表示する例を以下に示します。:

```
['whoami'] ->
print($RESULT)
```

このジョブフローを実行すると `whoami` コマンドを実行し、その結果（標準出力）が `print()` ジョブでコンソールに出力されます。通常はコンソールに以下のように表示されるはずです。:

```
[localhost] local: whoami

kompira
```

注釈: 特に指定しないとコマンドはジョブマネージャが動作しているホスト上で `kompira` アカウントで実行されるため、`whoami` コマンドの実行結果として `kompira` と表示されています。

`[localhost] local:` で始まる行はどのノードでどんなコマンドを実行したかを示しています。リモートでコマンドを実行した場合は `[<ホスト名>] run: <コマンド>` または `[<IP アドレス>] run: <コマンド>` のように表示されます。

3.2.4 \$RESULT

\$RESULT は直前のジョブの実行結果が格納されている特殊な変数（状態変数）です。この場合は `whoami` コマンドの実行結果、すなわち `"kompira"` という文字列が格納されることになります。

注釈: \$RESULT に格納される値の形式はジョブの種類によって異なります。コマンドジョブの場合は、標準出力が文字列として格納されていますが、ジョブによっては数値や辞書型の場合もあります。

3.2.5 ジョブの連結

ジョブとジョブの間の矢印 `->` は、前のジョブが成功したら、後続のジョブを実行する、という意味です。したがって、ジョブを `->` でつないでいくことで、順番にジョブを実行していくことができます。

ジョブが失敗した場合（コマンドの実行ステータスが 0 以外を返した場合）でも次の処理を継続したい場合には、二重矢印 `=>` を使います。なお、直前のコマンドの実行ステータスは `$STATUS` 状態変数で参照することができます。

こうしたジョブを連結する矢印を **結合子** といい、ジョブフローでは 4 種類あります。

3.3 変数を使う

3.3.1 変数の定義

変数は `{ <変数定義> | <ジョブ> }` という構文を用いて定義することができます。<変数定義> の部分は `変数名 = 値 (または式)` という形式で記述します。コンマで区切って複数の変数定義を記述することもできます。

```
{ x = 'what do you get if you multiply six by nine?', y = 6 * 9 |
  print(x) -> print(y) }
```

この場合、変数 `x` が `'what do you get if you multiply six by nine?'` という文字列で初期化され、変数 `y` が `6 * 9` と式の計算結果で初期化されます。変数定義の後に縦棒 `|` で区切って、その変数を参照するジョブを記述することができます。

上のジョブフローを実行すると、コンソールには以下のように表示されます。

```
what do you get if you multiply six by nine?
54
```

3.3.2 識別子

変数名などに用いる識別子には、Unicode で単語文字として分類される文字が使用できます。これには日本語の漢字や平仮名、英数字やアンダースコアが含まれています（アンダースコア以外の記号は含まれません）。ただし、識別子の先頭に数字 [0-9] は使用できません。

したがって、以下のような文字列は識別子として使用可能です。

```
x, foo123, 結果, __reserved_variable__
```

次のような文字列は識別子として使用できません。

```
1st, foo-bar, @id, #hash
```

なお、以下は予約語またはキーワードとして扱われるため、変数名などに用いることはできません。

and	break	case	choice
continue	elif	else	false
for	fork	if	in
not	null	or	pfor
then	true	while	

3.3.3 スコープ

変数の有効範囲（スコープ）は { と } で囲まれた範囲です。スコープ内で定義されていない変数は参照できないため、以下のようなジョブフローは実行時にエラーとなります。

```
{ x = 'hello' |      # 変数 x のスコープは
  print(x) }        # ここまで
-> print(x)          # ここはスコープ外
```

なお、以下のようにスコープを入れ子にすることは可能です。

```
{ x = 'outer', y = 999 |
  print(x) -> print(y)
  -> { x = 'inner' |
    print(x) -> print(y) }
  -> print(x) -> print(y)
}
```

このジョブフローを実行すると以下のようになり、`x = 'inner'` のスコープが 3~4 行目であり、5 行目では外側のスコープを参照していることが分かります。

```
outer
999
inner
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
999
outer
999
```

すなわち、ジョブフローでの変数のスコープ規則は、C や Java などと同様です。

3.3.4 変数の代入

定義された変数の値を変更するには、[変数 = 値 (または式)] という形式の **代入ジョブ** を使います。

```
{ x = 'outer', y = 'foo' |
  print(x) -> print(y) ->
  { x = '1st' |
    print(x)
    -> [x = '2nd'] -> print(x)
    -> [x = '3rd'] -> print(x)
    -> [y = 'bar']
    -> [z = 'baz'] }
  -> print(x) -> print(y) }
-> print(z)
```

スコープが入れ子になっている場合、代入はその位置を含む外側のスコープのうち対象となる変数定義を含む **もっとも内側のスコープ** に対して行われます。上の例で言うと、5~6 行目で値を代入している変数 **x** は 3 行目で定義したもの、7 行目で代入している変数 **y** は 1 行目で定義したものです。

未定義の変数に対して値を代入すると、**最も外側のスコープ (ジョブフロースコープ)** で変数が新たに定義され、その値にセットされます。上の例で言うと、8 行目で値を代入している変数 **z** はその時点では未定義であるため、最も外側のスコープに新たに定義され、10 行目で表示できることとなります。

最も外側のスコープというのは明示的に {} で囲まれてはいませんが、ジョブフロー全体を囲んでいるスコープがあると考えてください。

上記のジョブフローの実行結果は以下のようになります。

```
outer
foo
1st
2nd
3rd
outer
bar
baz
```

注釈: \$RESULT や \$STATUS など状態変数は Kompira が内部的に値を設定するもので、ジョブフローで状態変数への値の代入はできません。

3.3.5 配列と辞書

配列

複数の値を一度に保持したい場合は配列や辞書を使います。配列は `[式, ...]` と角括弧の中にコンマで複数の値や式を区切って記述します。配列要素へのアクセスは 0 始まりのインデックスを角括弧で指定することで可能です。また配列要素の書き換えは `[値 >> 配列要素]` で可能です。

```
[arr = [1, true, 'foo' ,['nested', 'array']]] ->
print(arr[1]) ->                # 配列要素の参照
[false >> arr[1]] ->            # 配列要素の書き換え
[arr = arr + ['added']] ->      # 配列要素の追加
print(arr[3][1]) ->            # 入れ子になった配列要素の参照
print(arr)                      # print() は配列自体の表示も可能
```

このジョブフローを実行すると、以下のようになります。

```
true
array
[1, false, 'foo', ['nested', 'array'], 'added']
```

また負の値をインデックスに指定すると、配列の後ろから要素にアクセスします。

```
[arr = [1, true, 'foo']] -> print(arr[-1])
```

このジョブフローの実行結果は次のようになります。

```
foo
```

辞書

辞書は `{ 識別子=式, ... }` と波括弧の中にコンマで複数の `識別子=値` を区切って記述します。辞書要素へのアクセスはドット記法または識別子を角括弧で指定することで可能です。また辞書要素の書き換えは `[値 >> 辞書要素]` で可能です。

```
[dic = {foo=1, bar=true, baz={a=123, b=456}}] ->
print(dic.foo) ->                # 辞書要素の参照（ドット記法）
[false >> dic.bar] ->            # 辞書要素の書き換え
print(dic['bar']) ->             # 辞書要素の参照（角括弧記法）
[[1,2,3] >> dic.arr] ->         # 辞書要素の追加
print(dic.baz.a) ->             # 入れ子になった辞書要素の参照
[777 >> dic.baz.a] ->           # 入れ子になった辞書要素の書き換え
[999 >> dic['baz']['b']] ->      # 入れ子になった辞書要素の書き換え
print(dic)                      # print() は辞書自体の表示も可能
```

このジョブフローを実行すると、以下のようになります。

```
1
false
123
{foo=1, bar=false, baz={a=777, b=999}, arr=[1, 2, 3]}
```

3.3.6 テンプレート文字列

ジョブフローでは文字列中に変数の値を展開することができます。以下のように文字列中に \$ と識別子からなるプレースホルダがあると、その部分が識別子の示す変数値で置き換えられます。

```
[service = 'http', port = 80] ->
print('Port $port is used by $service')
```

このジョブフローを実行すると以下ようになります。

```
Port 80 is used by http
```

プレースホルダは \$識別子 のほかに \${識別子} という記法も可能ですので、文字列中で識別子の区切りがつかない場合に使用してください。

```
[w=640, h=480] ->
print("width=${w}px, height=${h}px")
```

また、文字列のあとに % を書くと続く辞書に含まれる値を展開することもできます。その場合は文字列中に % と識別子からなるプレースホルダを記述します。

```
print('Port %port is used by %service' % {service = 'http', port = 80})
```

% に続ける辞書はもちろん変数でもよいので以下のようにも書けます。

```
[ctx = {service = 'http', port = 80}] ->
print('Port %port is used by %service' % ctx)
```

いずれの記法でもプレースホルダが指定する変数や辞書要素が未定義である場合は、\$ や % も含めてそのまま文字列中に残ります。

3.3.7 パラメータ

ジョブフローはその実行時にパラメータを受け取ることができます。

ジョブフローの先頭で変数名を縦棒で囲む |変数名| という記法で、その変数をパラメータとして定義することができます。また、|変数名 = 値 (または式)| と記述することで、パラメータのデフォルト値を定義することができます。デフォルト値が定義されていないパラメータは、ジョブフローの実行時に値を指定する必要がある (省略できない) ことに注意してください。

以下のジョブフローでは、`command` と `wait` という 2 つのパラメータを定義していて、`wait` にはデフォルト値として 10 が設定されています。

```
| command |
| wait = 10 |

print('Execute the command "$command" after $wait seconds.') ->
["sleep $wait"] ->
[command] ->
print($RESULT)
```

注釈: パラメータはジョブフローの実行開始時に上から順番に評価されます。そのため先に登場したパラメータの値を参照する式を使うこともできます。

3.4 リモートでコマンド実行する

次は、ジョブマネージャが動作しているホストとは別のホスト上でコマンドを実行させてみましょう。

3.4.1 制御変数による指定

まずは制御変数によるコマンドを実行するホストやアカウントの指定方法です。

```
[__host__ = '<ホスト名 もしくは IP アドレス>',
 __user__ = '<ユーザー名>',
 __password__ = '<パスワード>']
-> ['hostname'] -> print($RESULT)
-> ['whoami'] -> print($RESULT)
-> ['echo Hello World'] -> print($RESULT)
```

注釈: <ホスト名> や <ユーザー名>、<パスワード> は、自分の環境に合わせて書き変えてください。

`__host__`、`__user__`、`__password__` は、Kompira で予約済みの**制御変数**で、これらの変数にそれぞれ、ホスト名(または IP アドレス)、ユーザー名、パスワードを設定しておくことで、以降のリモートを処理対象とするジョブを設定したホストとユーザー名で実行します。

成功すれば、実行結果は以下のように表示されるはずです。

```
<ホスト名>
<ユーザー名>
Hello World
```

もし、ホスト名が間違っていたり、ユーザー名やパスワードが間違っていると、ジョブフローが失敗し、処理が中止 (abort) されます。

3.4.2 ノード情報とアカウント情報の指定

ノード情報オブジェクトとアカウント情報オブジェクトを Kompira ファイルシステム上に作成しておくと、それらをコマンド実行の対象サーバとしてジョブフローから指定することができます。

今、ノード情報オブジェクト `test_node` とアカウント情報オブジェクト `test_account` を作成し、ホスト名やユーザ名、パスワード情報が適切に設定されているとします。すると、同じディレクトリにあるジョブフローからのコマンド実行は、ノード情報オブジェクトの指定には制御変数 `__node__` を、アカウント情報オブジェクトの指定には `__account__` を使用することで、以下のように簡潔に記述することができます。

```
[__node__ = ./test_node, __account__ = ./test_account]
-> ['hostname'] -> print($RESULT)
-> ['whoami'] -> print($RESULT)
-> ['echo Hello World'] -> print($RESULT)
```

注釈: ジョブフローから Kompira オブジェクトの参照は、相対パスまたは絶対パスで記述することで行えます。上の例では `./` で始まる同じディレクトリにあるオブジェクトを指定していますが、`../` や `/` で始まるパスで親ディレクトリやルートディレクトリを基準とした指定も可能です。

なおノード情報オブジェクト `test_node` にデフォルトアカウントを設定している場合は、`__account__` の指定を省略することも可能です。

```
[__node__ = ./test_node]
-> ['hostname'] -> print($RESULT)
-> ['whoami'] -> print($RESULT)
```

また、制御変数をジョブフローのパラメータとして指定することもできるので、実行時に制御対象ノードを指定するジョブフローを作ることができます。

```
|__node__ = ./test_node|
-> ['hostname'] -> print($RESULT)
```

3.4.3 sudo による実行

コマンドの実行に root 権限が必要な場合、`__sudo__` 制御変数に `true` をセットして sudo モードに移行します。

```
|__node__ = ./test_node|
-> ['whoami'] -> print($RESULT)
-> [__sudo__ = true]
-> ['whoami'] -> print($RESULT)
```

このジョブフローを実行するとコンソールには以下のように表示されます。

```
<ユーザー名>
root
```

警告: sudo モードでコマンドを正しく実行するためには、そのユーザーが `sudoers` ファイルに登録されている必要があります。そうでない場合には、sudo モードでのリモートコマンド実行時に処理が失敗 (abort) します。詳しくはマニュアル `sudoers(5)` を参照してください。

注釈: ホストを指定しないコマンド実行ジョブを sudo モードで実行する場合、ジョブマネージャを実行しているサーバ（通常は Kompira をインストールしたサーバ）の `kompira` ユーザーを `sudoers` ファイルに登録する必要があります。さらに、以下のように `requiretty` フラグを無効にする設定を `sudoers` ファイルに追加しておく必要もあります。

```
Defaults:kompira    !requiretty
```

3.5 制御構造でジョブを操る

3.5.1 条件分岐

直前のジョブの実行結果や変数の内容によって処理を分岐させるには、`if` ブロックもしくは `case` ブロックを利用します。

if ブロック

`if` ブロックを使うと条件式の結果によって、処理を分岐させることができます。

```
['echo $$RANDOM'] ->
[x = int($RESULT)] ->
{ if x % 2 == 0 |
    then: print('$x は偶数です')
    else: print('$x は奇数です')
}
```

上記では、変数 `x` の値を 2 で割った余りが 0 に等しければ `then` 節が実行され、それ以外の場合は `else` 節が実行されます。なお、`['echo $$RANDOM']` は乱数を返す環境変数である `RANDOM` を表示しており、`[x = int($RESULT)]` はその結果の文字列を整数化して変数 `x` に代入しています。

真・偽だけでなく、さらに処理を分岐させたい場合は `elif` 節を使います。


```
{ if x % 3 == 0 and x % 5 == 0 |
    then: print('FizzBuzz')      # x が 3 でも 5 でも割り切れれば 'FizzBuzz' と表示
    elif x % 3 == 0: print('Fizz') # x が 3 で割り切れれば 'Fizz' と表示
    elif x % 5 == 0: print('Buzz') # x が 5 で割り切れれば 'Buzz' と表示
    else: print(x)               # それ以外の場合は x を表示
}
```

逆に `else` 節を省略することも可能です。さらにその場合は `then` キーワードを省略することもできます。

```
[command] =>
{ if $STATUS != 0 | print(' エラーが発生しました: ' + $ERROR) }
```

上記の例では変数 `command` の内容が示すコマンドを実行し、その結果ステータス `$STATUS` の値が 0 でないとき、`print` ジョブで標準エラー出力 (`$ERROR`) を表示します。

case ブロック

`case` ブロックによる条件分岐は以下のように書けます。

```
['cat /etc/redhat-release'] ->
{ case $RESULT |
    'CentOS*release 7.*': print("CentOS です")
    'Red Hat*release 7.*': print("Red Hat です")
    else: print("CentOS/Red Hat 7.x が必要です")
}
```

この例では、ファイル `/etc/redhat-release` の内容で OS の種別を判定するために条件分岐を行っています。パターン文字列には `*` や `?` など Unix のワイルドカードが使用できます。

`case` ブロックでの文字列のマッチングは先頭のパターンから順次行われ、最初にマッチしたパターンに続くジョブフロー系列のみが実行されます。

どのパターンにもマッチしなかった場合は以下ようになります。

- `else` 節が含まれる場合はそのジョブフロー系列が実行されます。
- `else` 節が含まれない場合は `case` ブロック全体が失敗します (`$STATUS` に 1 がセットされます)。

注釈: `if` ブロックとは異なり、`case` ブロックでは `else` 節を省略していてどの条件にもマッチしなかった場合はブロック全体が失敗することに注意が必要です。`case` ブロックでマッチしなかった場合に何もせずエラーにもしない場合は、`else: []` とスキップジョブを `else` 節に書くようにしてください。

3.5.2 繰り返し

繰り返しは `for` ブロックや `while` ブロックを用います。

for ブロック

Kompira が扱えるオブジェクトには、配列や辞書といった複合データまたはディレクトリなど子要素を含むものがあります。あるオブジェクトに含まれる子要素（値やオブジェクト）に対して同じ処理を行いたい場合 `for` ブロックを用います。`for` ブロックの構文は以下のようなものです。

```
{ for <ループ変数> in <子要素を含むオブジェクト> | ジョブ... }
```

たとえば `in` 節に `<ディレクトリパス>` を記述することで、そのディレクトリの中にあるオブジェクトのリストを参照することができます。

```
{ for t in /system/types | print(t) }
```

この例では `/system/types` ディレクトリの中にあるすべてのオブジェクトを、1つずつループ変数 `t` で参照して `print()` ジョブでコンソールに出力しています。なお Kompira オブジェクトを `print()` ジョブに渡すと、その絶対パスがコンソールに出力されるため、結果は以下のようになります。

```
/system/types/TypeObject
/system/types/Directory
/system/types/License
/system/types/Virtual
/system/types/Jobflow
/system/types/Channel
:
```

`in` 節には以下のように直接配列を記述することも可能です。

```
{ sum = 0 |
  { for i in [1,2,3,4,5,6,7,8,9,10] |
    [sum = sum + i]
  } ->
  print('The total of 1 to 10 is ${sum}.')
}
```

このジョブフローは、1 から 10 までの合計値を計算して出力します。

```
The total of 1 to 10 is 55.
```

また辞書を `in` 節に続けて記述した場合は、その辞書に含まれる識別子のリストを順次参照することができます。

```
[dic = {a=10, b=20, c=30}] ->
{ for k in dic |
    print("$k = ${$k}" % dic)
}
```

このジョブフローを実行するとコンソールには以下のように表示されます。

```
a = 10
b = 20
c = 30
```

注釈: ``${$k}`` となっている部分は `%` によるテンプレート展開の前に `$k` の部分が辞書の識別子によって置き換えられます。そのため、繰り返しのたびにまず `%a,%b,%c` と展開され、それが辞書 `dic` の各要素の値でテンプレート展開されて `10, 20, 30` と表示されます。

while ブロック

繰り返す対象が決まっているのではなく、ある条件を満たすあいだはジョブを繰り返し処理したいという場合は `while` ブロックを用います。 `while` ブロックの構文は以下のようなものです。

```
{ while <式> | ジョブ... }
```

例えば、与えられた2つの数の最大公約数を求める「ユークリッドの互除法」は剰余が0になるまで繰り返すアルゴリズムですが、これを `while` ブロックを用いて記述すると以下ようになります。

```
|x = 165|
|y = 105|
[m = x, n = y] ->
{ while n != 0 |
    [r = m % n] ->
    print("$m と $n の剰余は $r です") ->
    [m = n, n = r]
} ->
print("$x と $y の最大公約数は $m です")
```

この `while` ブロックの部分では、`n` が0ではない間、`m` には `n` を、`n` には `m` と `n` の剰余を代入する（および表示する）、というジョブを繰り返しています。実行すると以下のように表示されます。

```
165 と 105 の剰余は 60 です
105 と 60 の剰余は 45 です
60 と 45 の剰余は 15 です
45 と 15 の剰余は 0 です
165 と 105 の最大公約数は 15 です
```

3.5.3 ジョブの呼び出し

ジョブフローの呼び出し

あるジョブフローから別のジョブフローを呼び出すには以下の様な構文を用います。

```
[<ジョブフローオブジェクト>]
```

ここでは「サブジョブ」というジョブを作成して、それを呼び出す例を示します。まず、サブジョブを適当なディレクトリの下で、以下のように定義します。

```
print("サブジョブです") ->
return("成功しました")
```

`return` ジョブは、サブジョブを終了し、結果を呼び出し側のジョブに返します。

次に、このサブジョブを呼び出すメインジョブを同じディレクトリの下に作成します。

```
print("サブジョブを呼び出します")
-> [./サブジョブ]           # サブジョブを呼び出す
-> print($RESULT)          # サブジョブの実行結果を出力する
```

「サブジョブ」の呼び出しを指定するところで、文字列の先頭に「./」を追加していることに注意してください。これは、現在のジョブフローが定義されているディレクトリと同じディレクトリ内に「サブジョブ」が定義されていることを示しています。

サブジョブの実行結果は `$RESULT` で受け取ることができます。上記のメインジョブを実行すると、以下のように表示されます。

```
サブジョブを呼び出します
サブジョブです
成功しました
```

ジョブフローへのパラメータ渡し

ジョブフローを呼び出すときに、次のような構文を用いてパラメータを渡すこともできます。

```
[<ジョブフローオブジェクト> : <パラメータ列> ... ]
```

まず、サブジョブを拡張して、以下のようパラメータを追加してみましょう。

```
|パラメータ 1 = 'Hello'|
|パラメータ 2 = 'World'|

print("サブジョブです")
-> print(パラメータ 1)
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
-> print(パラメータ 2)
-> return("成功しました")
```

この状態でさきほどのメインジョブをそのまま実行すると、以下のように表示されます。呼び出し時にパラメータを指定していないため、サブジョブ側で定義したデフォルトパラメータが使われていることがわかります。

```
サブジョブを呼び出します
サブジョブです
Hello
World
成功しました
```

このサブジョブにパラメータを渡して呼び出すには、メインジョブを以下のように拡張します。サブジョブ呼び出し時に、`:` に続けて値を記述することで、それらをパラメータ値としてサブジョブに渡すことができます。

```
print("パラメータ付きでサブジョブを呼び出します")
-> [./サブジョブ: 'こんにちは', '世界']
-> print($RESULT)
```

これを実行すると、以下のような結果となります。

```
パラメータ付きでサブジョブを呼び出します
サブジョブです
こんにちは
世界
成功しました
```

呼び出されるジョブフロー側で定義したパラメータ名を指定して、パラメータ値を渡すこともできます。一部のパラメータだけ指定したい場合などに便利です。

```
[./サブジョブ: パラメータ 2='世界']
```

注釈: 呼び出される側で定義されていないパラメータ名を指定したり、定義されたより多くのパラメータ値を渡そうとしたりするとエラーになるので注意してください。

スクリプトジョブの実行

より複雑なジョブを作成したい場合、Kompira ジョブフロー言語よりも、bash, perl, ruby, python などの既存のスクリプト言語を組み合わせ使った方が良いでしょう。Kompira ファイルシステム上で、スクリプトジョブを作成することで、これらのスクリプト言語のプログラムをジョブフローから呼び出すことが可能になります。

ここでは、シェルスクリプトを用いてスクリプトジョブを記述し、それをジョブフローから呼び出す例をみてみます。まず、以下に示すような簡単なシェルスクリプトをスクリプトジョブとして保存します。

```
#!/bin/sh
echo Hello world from shell script
```

Unix 環境で実行させるスクリプトの場合は、1 行目の `#!` で始まる shebang 行を適切に記述してください。Windows 環境で実行するスクリプトの場合は拡張子 (bat/vbs/ps1 など) を適切に指定する必要があります。

このスクリプトジョブを「サンプルスクリプト」として保存したとすると、これを実行するためのジョブフローは、以下のようになります。

```
print(' スクリプトジョブを実行します') ->
[./サンプルスクリプト] ->
print($RESULT)
```

`__node__` や `__host__` を指定しない場合、このスクリプトはジョブマネージャが動作しているマシン上に転送された上で実行されます。実行結果の出力は、リモートコマンドの実行結果と同じように `$RESULT` に格納されます。

注釈: スクリプトは実行時に指定したホストに一時ファイルとして転送され、実行後に削除されます。

スクリプトジョブにもパラメータを渡すことができます。スクリプトジョブ側では、コマンドライン引数としてパラメータを受け取ります。

スクリプトの呼び出し側では、以下のようにキーワード無しの引数としてパラメータを渡します。

```
[./サンプルスクリプト: 'パラメータ 1', 'パラメータ 2']
```

3.6 オブジェクトを操作する

3.6.1 オブジェクトの参照

ジョブフローや環境変数定義など、Kompira で扱う情報は **Kompira オブジェクト** として、Kompira ファイルシステム上で一元的に管理されています。そしてこれらのオブジェクトは Unix のファイルシステムのようなパス指定によってジョブフローからアクセスすることができます。

これまでの例では、Kompira オブジェクトの参照は相対パスによって指定していました。この場合、オブジェクトのパスは、実行中のジョブフローが定義されているディレクトリを基準にして特定されます。

たとえば、実行中のジョブが `/some/path/jobflow` であるときに、`./subdir/object` という相対パスによってオブジェクトを参照すると、`/some/path/subdir/object` がアクセスされることになります。

また、`../object` という相対パスによって参照すると、`/some/object` がアクセスされることになります。`../` で始まる相対パスは親ディレクトリにあるオブジェクトを参照することを意味します。

もちろん絶対パスで `/some/path/object` のように直接オブジェクトを参照することもできます。

警告: Kompira オブジェクトの参照では先頭に、`./` や `../`、`/` を付けるのを忘れないでください。Kompira は `./` や `../`、`/` から始まる文字列を **パス識別** と認識し、それ以外は変数の識別子と認識します。

パスを連結させてオブジェクトを参照したい場合は、`path()` 組み込み関数を利用します。たとえばノードの種類毎に「リソース情報取得」を行なうジョブフローを用意しておき、ノードとノード種別を指定してそのジョブフローを実行したい場合、パスを動的に組み立ててジョブフローを参照することができます。

```
|node|
|node_type = 'Linux'|
|job_name = 'リソース情報取得'|
[job = path(./ノード別定義, node_type, job_name)] ->
[job: node]
```

ここでデフォルト引数がそのまま `path()` 関数に渡された場合、`./ノード別定義/Linux/リソース情報取得` というジョブフローを変数 `job` で参照し、`node` をパラメータとして渡して実行することになります。

3.6.2 プロパティの参照と更新

各 Kompira オブジェクトはシステムで定義された「プロパティ」を持っています。例えばオブジェクトの名称やパス、作成日時などがプロパティです。Kompira オブジェクトが持つプロパティの詳細については [プロパティ](#) を参照してください。

Kompira オブジェクトのプロパティを参照するにはドット記法 `オブジェクト.プロパティ名` を用います。以下のジョブフローではパラメータ `dir` でしたディレクトリにある Kompira オブジェクトを列挙し、そのプロパティである「所有者 (owner)」、「更新日時 (update)」、「型名 (type_name)」、「表示名 (display_name)」をドット記法で参照して表示しています。

```
| dir = / |
{ for obj in dir |
  [attr = {
    owner = obj.owner,
    updated = obj.updated,
    type = obj.type_name,
    name = obj.display_name
  }] ->
  print("%owner %updated <%type> %name" % attr)
}
```

Kompira オブジェクトのプロパティ値を更新するには、出力ジョブ [値 >> オブジェクト. プロパティ] を用います。

```
["オブジェクトの説明文" >> obj.description]
```

注釈: ただし、プロパティの中にはジョブフローからは更新できない書き込み不可なものもありますので注意してください。詳細は [プロパティ](#) を参照してください。

3.6.3 フィールドの参照と更新

各 Kompira オブジェクトは型ごとに定義された「フィールド」を持っています。システムで定義された各型にどのようなフィールドが定義されているかは、`/system/types/` 下にある各型の定義情報を見るとわかります。

Kompira オブジェクトが持つフィールドは オブジェクト [フィールド名] または オブジェクト. フィールド名 という記法で参照できます。

注釈: オブジェクトのプロパティにもドット記法でアクセスできることに注意してください。プロパティと同名のフィールドをユーザが定義することもできますが、ドット記法はプロパティ値を優先して参照します。

たとえば、ノード情報オブジェクトには「ホスト名 (hostname)」や「IP アドレス (ipaddr)」といったフィールドが定義されています。ジョブフローでこれらの値を参照するには以下のように記述します。

```
|node = ./node|
print(node['hostname'], node.ipaddr)
```

フィールドの値は辞書のように参照できるため、% によるテンプレート展開もできます。

```
|node = ./node|
print('%hostname: %ipaddr' % node)
```

また、Kompira オブジェクトのフィールド値を更新するには、出力ジョブで [値 >> オブジェクト [フィールド名]] または [値 >> オブジェクト. フィールド名] という記法を用います。例えば Wiki ページ型の「Wiki テキスト」フィールド ('wikitext') を更新するには、以下のように記述します。

```
['= Sample Wiki\n' >> ./wiki['wikitext']]
```

式の結果を出力ジョブで書き込むこともできるので、以下のように参照したフィールド値を加工して再度書き込む、ということもできます。

```
|wiki = ./wiki|
|types = /system/types|
["= Type list\n" >> wiki.wikitext] ->
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
{ for type in types |
  [wiki.wikitext + "*" $type: (" + type.description + ")\\n" >> wiki.wikitext]
}
```

上の例では `/system/types` にあるシステム標準の型オブジェクトについて、そのパスと説明の一覧を記載した Wiki ページを作成しています。

3.6.4 メソッドの呼び出し

Kompira オブジェクトの中にはメソッドを備えているものがあります。オブジェクトのメソッドを呼び出すには、以下のような構文を用います。

```
[ <オブジェクト> . <メソッド名> : <パラメータ列> ... ]
```

例えば、オブジェクトの追加を行なうためにディレクトリ型のオブジェクトには `add` というメソッドがあります。 `add` メソッドは `name`, `type_obj`, `data` という3つのパラメータを指定して呼び出します。以下の例ではジョブフローと同じディレクトリに `'ENV'` という名前で環境変数型 (`/system/types/Environment`) オブジェクトを作成し、`'environment'` という名前の（辞書型）フィールドに `{k1='value1', k2='value2'}` という初期データを与えています。

```
[./add: 'ENV', /system/types/Environment, {
  environment={k1='value1', k2='value2'}
}]
```

ここでは `./` という相対パス識別が、このジョブフローがあるディレクトリを示す Kompira オブジェクトを参照しています。オブジェクトの参照を変数で受け渡すこともできますので、以下のように書くこともできます。

```
[dir = ./, type=/system/types/Environment] ->
[dir.add: 'ENV', type, {environment={k1='value1', k2='value2'}}]
```

またパラメータ列ではパラメータ名を指定して値を渡すこともできます。

```
[dir = ./, type=/system/types/Environment] ->
[dir.add: 'ENV', type_obj=type, data={environment={k1='value1', k2='value2'}}]
```

3.7 イベントを待ち合わせる

チャンネルを用いて、ジョブの同期やイベントの待ち合わせ処理をジョブフローで記述することができます。

3.7.1 メッセージの送受信

作成したチャンネルに対して、メッセージを送信するには `send` メソッドを用います。「/home/guest/テストチャンネル」に新しいチャンネルを作成して試してみましょう。

チャンネルに対してメッセージを送信するジョブフローは、以下のようになります。

```
[/home/guest/テストチャンネル.send: ' こんにちは']  
-> print(' メッセージを送信しました')
```

次に、チャンネルからメッセージを受信するジョブフローを以下のように定義します。

```
</home/guest/テストチャンネル>  
-> [mesg = $RESULT]  
-> print(' メッセージ「$mesg」を受信しました。')
```

上記の各ジョブフローを実行してみてください。受信側のジョブフロー実行のプロセスコンソールに以下のようにメッセージが出力されれば成功です。

```
メッセージ「こんにちは」を受信しました。
```

送信側ジョブフローを複数回実行すると、チャンネルにその分だけメッセージが溜まります。受信側のジョブフローを 1 回実行するたびに、そのチャンネルから 1 つ分のメッセージを取り出して出力します。もし、チャンネルのメッセージが空の場合、受信側のジョブフローは新しいメッセージが到着するまで待ちます。

注釈: `kompira_sendevt` コマンドを用いることで、外部のシステムから任意の情報をチャンネルに送信することができます。たとえば監視システムからアラート情報をチャンネルに送信することで、障害発生時の手順をジョブフローで処理させることなども可能でしょう。`kompira_sendevt` コマンドの利用方法については [他システムとの連携](#) を参照してください。

3.7.2 イベントジョブについて

<と>で囲まれたジョブをイベントジョブと呼びます。イベントジョブは、他のジョブと同じようにジョブフローの中で組み合わせて使用することができます。

イベントジョブの形式は以下のとおりです。

```
< <オブジェクト名> : <パラメータ列> ... >
```

オブジェクト名にはチャンネル型（およびそれに類する型：メールチャンネル型など）のオブジェクトを指定します。それ以外のイベント待ち合わせ不可能なオブジェクトを指定すると実行時エラーとなります。

3.7.3 メッセージ受信のタイムアウト指定

チャンネルからのメッセージの到着を待ち、一定時間内に来なかったらタイムアウトして処理を先に進めるにはイベントジョブにパラメータ `timeout` を指定します。

```
print(' チャンネルからメッセージを待ちます')
-> <./テスト用チャンネル: timeout=10>
=> { if $STATUS==0 |
    then: [mesg=$RESULT]
        -> print(' メッセージ「$mesg」を受信しました')
    else: print(' タイムアウトしました') }
```

`timeout` で指定した秒数の間にメッセージが到着しなかった場合、イベントジョブは失敗しますので => で次のジョブと結合していることに注意してください。

注釈: メッセージからの到着を待っている時に、チャンネルが削除されると、イベントジョブは失敗して `$STATUS` に -1 をセットします。また、メールチャンネルでは、イベントジョブに `detect_error=true` パラメータが渡されると、メールのフェッチに失敗したり、無効化フラグが設定されている場合にも、`$STATUS` に -1 をセットします。

3.7.4 複数チャンネルからの選択的受信

`choice` ブロックを使うことで、複数のチャンネルからのメッセージの到着を待つことも可能です。この場合、先にメッセージ到着したチャンネルについての処理が続行されます。

`choice` ブロックの使用例

```
print(' チャンネル 1 とチャンネル 2 からメッセージの受信を待ちます')
-> { choice |
    <./チャンネル 1> -> [mesg=$RESULT]
        -> print(' チャンネル 1 からメッセージ「$mesg」を受信しました')
    <./チャンネル 2> -> [mesg=$RESULT]
        -> print(' チャンネル 2 からメッセージ「$mesg」を受信しました')
}
-> print('OK')
```

3.8 外部にアクセスする

3.8.1 メールを送信する

メールの送信には、組み込み `mailto` ジョブを用います。

```
[subject = 'テストメール',
 body = 'テストメールを送信します。\\n 受け取ったら破棄してください']
-> mailto(to='taro@example.com', from='hanako@example.com',
          subject=subject, body=body)
-> print('メールを送信しました')
```

`mailto` ジョブの引数には、`to` (あて先メールアドレス)、`from` (送信元メールアドレス)、`subject` (メール表題)、`body` (メール本文) を指定します。

複数のアドレスにメールを送信する場合、以下のように `to` 引数にメールアドレス文字列のリストを渡して下さい。

```
mailto(to=['taro@example.com', 'jiro@example.com'], from='hanako@example.com',
        subject=subject, body=body)
```

注釈: Kompira はメール送信のときに、指定された SMTP サーバに接続してメールを送信します。メールがうまく送信できない場合、指定した SMTP サーバ型オブジェクトの設定が正しいかどうか、および、SMTP サーバ側での設定やログを確認してください。

3.8.2 HTTP アクセスする

Web サーバなどに HTTP アクセスするには、組み込み `urlopen` ジョブを用います。単純に `urlopen()` に URL だけを渡した場合は GET アクセスになります。

```
|url = 'http://www.kompira.jp'|
urlopen(url)
=> [status = $STATUS, result = $RESULT]
-> { if status != 0 |
then:
    print('HTTP access failed.')
elif result.code != 200:
    print('HTTP status code is %code.' % result)
else:
    print(result.body)
}
```

`urlopen()` でアクセスに成功した場合の結果は辞書で返されます。`code` には HTTP のステータスコードが、`body` にはレスポンスの内容が格納されています。

なお、バージョン 1.5.0 時点での Kompira は HTML を解析する機能は持っていないので、以下のような簡単なスクリプトジョブを `html_parse` という名前で作成しておきます。このスクリプトは標準入力に渡した HTML から、パラメータで指定した箇所をテキストで抜き出します。

```
#!/usr/bin/python
import sys;
from lxml import html;
if __name__ == '__main__':
    doc = html.fromstring(sys.stdin.read().decode("utf-8"))
    for e in doc.xpath(sys.argv[1]):
        print html.tostring(e, method="text", encoding="utf-8")
```

さて、`urlopen()` はパラメータ `data` に辞書データを渡すことで POST アクセスさせることもできます。例として、ネットワークインターフェースに付与された MAC アドレスの前半部分 (OUI) から製品ベンダーを調べる、というジョブフローを考えます。OUI は IEEE という組織が管理しており、<http://standards.ieee.org/develop/regauth/oui/public.html> から検索することができます。このページにはフォームがあり、`x` という名前の入力欄に OUI を入力するようになっています。また、検索すると `/cgi-bin/ouisearch` という CGI が実行されるようになっているので、OUI を `x` という名前でデータとしてその CGI に渡す POST アクセスをすればよいことになります。

```
|oui = '00-00-00'|
urlopen('http://standards.ieee.org/cgi-bin/ouisearch', data={x=oui})
-> [./html_parse << $RESULT.body: '//pre']
-> print($RESULT)
```

検索結果のページでは `<pre>` タグに結果がありますので、そこを抜き出すために `//pre` というパラメータを `html_parse` スクリプトに渡しています。このパラメータは XPath という XML 文書の部分指定をするための構文で指定します。

このジョブフローを実行すると、以下のようにベンダー情報を外部の Web ページから取得できていることが分かります。

```
[localhost] local: (/tmp/tmpxaL7DG //pre) < /tmp/tmpktOTMU
```

OUI/MA-L	Organization
company_id	Organization
	Address
00-00-00 (hex)	XEROX CORPORATION
000000 (base 16)	XEROX CORPORATION
	M/S 105-50C
	800 PHILLIPS ROAD
	WEBSTER NY 14580
	UNITED STATES

3.9 プロセスを制御する

ジョブフローを実行すると、その終了の時まで Kompira 上ではプロセスという実行単位で管理され、プロセスはジョブフローに記述されたジョブを連続的に順次実行することになります。ここではプロセスを制御する方法について説明します。

3.9.1 プロセスの終了

ジョブフローの終端に到達するなどして継続すべきジョブが無くなった場合や、実行したコマンドが失敗した状態で `->` を使ってジョブを結合した場合などは、プロセスは自動的に終了します。

そうした場合以外で、実行中のプロセスを明示的に終了させたいには `exit` ジョブあるいは `abort` ジョブを用います。

exit

実行中のプロセスを終了させるには、組み込み `exit` ジョブを用います。引数を指定せず `exit()` と呼出すと、プロセスをただちに正常終了します。

`exit()`

`exit` ジョブの引数で終了ステータスコードを指定することもできます。以下の例では、パラメータ `command` で指定されたコマンドを実行したのち、結果（成功・失敗）にかかわらず標準エラー出力と標準出力を表示してから、コマンド実行結果をステータスコードとしてプロセスを終了します。

```
| command|
[command]
=> [status=$STATUS, stderr=$ERROR, stdout=$RESULT]
-> { if stderr | print(stderr) }
-> { if stdout | print(stdout) }
-> exit(status)
```

`exit` と `return` の違いに注意してください。例えば、メインジョブから呼び出されたサブジョブで `exit` ジョブを呼び出すと実行中のプロセスを終了させます（メインジョブに制御が戻らず即座に終了します）。一方、サブジョブで `return` ジョブを呼び出すと、プロセスを終了させるのではなく、メインジョブに制御が戻り、サブジョブを呼び出した実行ジョブの直後から処理が継続されます。

ただし、呼び出し元が存在しない場合、たとえば直接「実行ボタン」を押して実行したジョブフローから `return` ジョブを呼び出した場合は、その時点で継続するジョブが無くなりますのでプロセスが終了します。

abort

ジョブを継続できない状態になった場合などに、組み込み `abort` ジョブを呼出すことで、実行中のプロセスを異常終了させることができます。以下の例ではパラメータで指定した URL に `urlopen` でアクセスした時に、HTTP アクセスに失敗したか、HTTP ステータスコードが 200 以外の場合にプロセスを異常終了させます。

```
|url|
urlopen(url)
=> [result = $RESULT, status = $STATUS]
-> { if status != 0 | abort('HTTP access failed.') }
-> { if result.code != 200 | abort('HTTP status code is %code.' % result) }
-> return(result.body)
```

`abort()` ジョブは自動的に終了ステータスコードを 1 にセットしてプロセスを終了させるため、`exit(status=1)` とほぼ同じです。

3.9.2 子プロセスの起動

Kompira が持つ複数プロセスの並行動作という特徴は、ジョブフローでは「子プロセス」を起動するという方法で利用することができます。

子プロセスは起動した時点では親プロセス（子プロセスを起動したプロセスのこと）のコピーであり、ローカル変数や特殊変数は同じ値を持っていますが、プロセス間での共有や参照はできないので、子プロセスから親プロセスの変数を書き換えたりすることは出来ないことに注意してください（逆方向も同じ）。

fork

`fork` ブロックを用いて、複数の子プロセスを一度に起動することが可能です。以下では「処理A」というサブジョブの実行結果を、「処理B」と「処理C」というサブジョブでそれぞれ並行して処理させるジョブフローの例になります。

```
[./処理A] -> [result = $RESULT] ->
{ fork |
  [./処理B: result] -> print(' 処理B終了')
  [./処理C: result] -> print(' 処理C終了')
} -> print(' すべての子プロセスが終了しました')
```

`fork` ブロックの中でジョブ間を結合子で接続していない箇所がありますが、これが「ジョブフロー式」の区切りであり、上の例では `fork` ブロックに2つのジョブフロー式があることになります。この2つのジョブフロー式の部分がそれぞれ子プロセスとして並行に動作し、それらの実行が全て完了すると、親プロセスのジョブが継続して「すべての子プロセスが終了しました」とコンソールに出力されます。

なおジョブフローで子プロセスを起動したとき、そのプロセスのプロセス詳細画面の「子プロセス一覧」タブには起動した子プロセスが表示されます。逆に、子プロセスは「プロセス一覧」画面には表示されないことに注意してください。

pfor

for ブロックの代わりに pfor ブロックを使うことで、繰り返し処理が並列プロセスとして一度に実行することができます。

例えば管理対象のノードを「ノード一覧」で管理しており、管理対象すべてのノードに対して同じジョブ「構成情報収集」を実行したい場合、for ブロックを用いて以下のように書けます（構成情報収集はパラメータで処理対象のノードを指定するものとします）。

```
|job = ./構成情報収集|
{ for node in ./ノード一覧 |
  [job: node]
} -> print("すべてのノードに対する処理が終了しました")
```

もしこの「構成情報収集」ジョブがリモートノードに対して処理時間のかかるコマンドを投入しているような場合、このプロセスは「待ち状態」になっている割合が多くなります。結果的に、負荷は低いがすべてのノードに対する処理が終了するまでに長い時間がかかる、ということになります。

こうしたときに for の代わりに pfor を使うと、各ノードごとに子プロセスを起動してその子プロセスで「構成情報収集」ジョブを実行することになります。そうすると、あるノードに対する処理で「待ち状態」になっていても、別のノードの処理を並列に実行できるため、全体でのジョブの実行効率を上げて処理時間を短縮できるようになります。

```
|job = ./構成情報収集|
{ pfor node in ./ノード一覧 |
  [job: node]
} -> print("すべてのノードに対する処理が終了しました")
```

3.9.3 親プロセスからの切り離し

子プロセスを fork や pfor を使って起動した親プロセスはすべての子プロセスの終了を待つため、その間親プロセスは新たなジョブを動作させることはできません。しかし、子プロセスの終了を待たずに親プロセス側の処理を継続させたい、という場合もあります。そういう場合には detach() を用いて親プロセスから切り離すことで対応できます。

detach

例えばチャンネルからメッセージを受信するたびに同じジョブフローを実行したい、ということがしばしばあります。以下ではメッセージを受信するたびに「メッセージ処理」というジョブフローに、メッセージをパラメータとして渡して呼び出しています。

```
|chan = /system/channels/Alert|
|proc = ./メッセージ処理|
{ while true |
  <chan>
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
-> [msg = $RESULT]
-> [proc: msg]
}
```

チャネルから受信する複数のメッセージ間に関連性が無いときは、メッセージ処理を同時に実行させるようにすることで、メッセージが連続して到着したときに全体での処理効率の向上につながることがあります。そのためには、メッセージを受信するジョブフローと「メッセージ処理」を別のプロセスとして動作させる必要があります。そこで `fork` を用いて「メッセージ処理」を子プロセスで動作させるようにしてみます。

```
|chan = /system/channels/Alert|
|proc = ./メッセージ処理|
{ while true |
  <chan>
  -> [msg = $RESULT]
  -> { fork | [proc: msg] }
}
```

しかし、これでは「メッセージ処理」のジョブが完了するまで親プロセスは待ってしまうため、メッセージ処理の最中に新しいメッセージが到着しても、同時に処理することはできません。そこで子プロセス側で `detach()` 組み込みジョブを用いて、子プロセスを親プロセスから切り離すようにします。

```
|chan = /system/channels/Alert|
|proc = ./メッセージ処理|
{ while true |
  <chan>
  -> [msg = $RESULT]
  -> { fork | detach() -> [proc: msg] }
}
```

親プロセス側は子プロセスの `detach()` により、処理完了を待つべき子プロセスがなくなるため、その時点で次のジョブを継続できることになります。すなわちチャネルから次のメッセージを受信を行ない、先に起動した「メッセージ処理」がまだ完了していなくても新しい「メッセージ処理」を起動できることになります。

子プロセス側は `detach()` により子プロセスではなく通常のプロセスとなり、親プロセスの「子プロセス一覧」ではなく「プロセス一覧」画面に表示されるようになります。

このように `fork` や `pfor` と `detach()` を組合せることで、多少複雑な並行処理でも簡単に記述することができます。

第4章 Kompira ジョブフロー言語リファレンス

著者

Kompira 開発チーム

4.1 イントロダクション

本ドキュメントは、ジョブフロー言語の字句と構文、および、意味について説明します。組み込み関数、組み込みジョブについての記述は *Kompira 標準ライブラリ* にあります。

4.1.1 構文の表記法

本ドキュメントでは、拡張 BNF を用いて構文を示します。拡張 BNF は通常の BNF に加えて、0 回以上の繰り返しを表す「*」、1 回以上の繰り返しを表す「+」、省略可能な要素を表す「?」といった記号を用います。また、複数の要素をまとめるために丸カッコ「(」と「)」も使用します。

4.2 字句構造

この章では、ジョブフロー言語の字句構造について規定します。ジョブフロー言語のプログラムテキストは Unicode で記述します。テキストは、Kompira の字句解析器によって、トークンと呼ばれる語彙の単位に区切られます。

注釈: ジョブフローのプログラムテキストとして記述できるのは最大 65536 文字です。

4.2.1 コメント

コメントは文字列リテラル内に含まれないハッシュ文字 (#) から始まり、行末までになります。コメントは字句解析器によって読み飛ばされます。

4.2.2 空白

改行文字、スペース、タブ、フォームフィードは空白として扱われます。空白は字句解析器によって読み飛ばされます。

4.2.3 識別子

識別子 (IDENTIFIER) は、以下の正規表現によって定義されます。:

`IDENTIFIER = [^\W0-9]\w*`

`\w` は任意の Unicode 単語文字にマッチします。これにはあらゆる言語で単語の一部になりうる文字、数字、およびアンダースコアが含まれます。`\W` は `[^\w]` を意味します。識別子の長さに制限はありません。大小文字は区別されます。

キーワード

以下の文字の並びは、キーワードとして予約されているため識別子として用いることはできません。:

<code>and</code>	<code>break</code>	<code>case</code>	<code>choice</code>
<code>continue</code>	<code>elif</code>	<code>else</code>	<code>false</code>
<code>for</code>	<code>fork</code>	<code>if</code>	<code>in</code>
<code>not</code>	<code>null</code>	<code>or</code>	<code>pfor</code>
<code>session</code>	<code>then</code>	<code>true</code>	<code>try</code>
<code>while</code>			

予約済みの識別子クラス

`__*` の形式の識別子は制御変数用にシステムで予約されていて特別な意味があります。ジョブフローの予期せぬ動作を引き起こす可能性があるため、ユーザーが識別子としてこれらの名前を用いることは避けた方が良いでしょう。

特殊識別子

以下で定義されるように `$` で始まる識別子は特殊変数に用いられる特殊識別子です。:

`SPECIAL_IDENTIFIER = "$" IDENTIFIER`

4.2.4 オブジェクトパス

オブジェクトパスは、Kompira ファイルシステム上のオブジェクトの位置を指し示します。以下のように定義されています。:

```
OBJECT_PATH = RELATIVE_PATH
              | ("/" | RELATIVE_PATH) PATH_ELEMENT* LAST_PATH_ELEMENT
RELATIVE_PATH = "./" | "../"
PATH_ELEMENT = RELATIVE_PATH | IDENTIFIER "/"
LAST_PATH_ELEMENT = RELATIVE_PATH | IDENTIFIER
```

注釈: 単独の "/" もオブジェクトパスとして扱われますが、除算演算子 "/" と字句解析上は区別がつかないため、字句としての OBJECT_PATH には含まれません。

4.2.5 リテラル

リテラルは、文字列 (String) 型、バイナリ (Binary) 型、整数 (Integer) 型、浮動小数型 (Float) 型、ブール (Boolean) 型、ヌル (Null) 型、パターン (Pattern) 型の値のソースコード上の表記です。

文字列リテラル (STRING)

文字列リテラルは、一重引用符 (')、もしくは、二重引用符 (") で囲まれた 0 個以上の文字から構成されます。

```
""           # 空文字列
'"'"         # "を保持した文字列
'\''         # 'を保持した文字列
"This is a string" # 16 文字を保有した文字列
'これは文字列です' # 8 文字を保有した文字列
```

また、対応する 3 連の一重引用符や二重引用符で囲むこともできます。この場合には、エスケープされていない改行や引用符を書くことができます。

```
''''''       # 'を保持した文字列
""""改行を含む
文字列""""   # 改行コードを含む文字列
```

文字列リテラル中では、エスケープシーケンスを使用することによって、改行文字やタブ文字など、ある種の表現できない文字を表現することができますようになります。

エスケープシーケンスの一覧を以下に示します。

エスケープシーケンス	意味
\	バックスラッシュ ()
'	一重引用符 (')
"	二重引用符 (")
a	ASCII 端末ベル (BEL)
b	ASCII バックスペース (BS)
f	ASCII フォームフィード (FF)
n	ASCII 行送り (LF)
r	ASCII 復帰 (CR)
t	ASCII 水平タブ (TAB)
v	ASCII 垂直タブ (VT)
ooo	8 進数値 <i>ooo</i> を持つ文字
xhh	16 進数値 <i>hh</i> を持つ文字

バイナリリテラル (BINARY)

バイナリリテラルは、プレフィックス記号 **b** の後に一重引用符 (')、もしくは、二重引用符 (") で囲まれた 0 個以上の文字から構成されます。

<code>b""</code>	# 空バイナリ
<code>b'"'</code>	# "を保持したバイナリ
<code>b'\''</code>	# ' を保持したバイナリ
<code>b"This is a string"</code>	# 16bytes を保有したバイナリ

文字列リテラルとは異なり、対応する 3 連の引用符による複数行の記述は使えません。また、日本語などの非 ASCII 文字を含めることもできません。エスケープシーケンスは、文字列リテラルと同様に使用することができます。

整数リテラル (INTEGER)

整数リテラルは 10 進数で表現することができます。以下の字句定義で記述されます。:

INTEGER	= NONZERO_DIGIT DIGIT* "0"
DIGIT	= [0-9]
NONZERO_DIGIT	= [1-9]

浮動小数リテラル (FLOAT)

浮動小数リテラルは整数部と小数部からなる仮数部と指数部から構成される浮動小数点方式の数の表現です。字句定義で記述されます。:

```

FLOAT      = DIGIT+ "." DIGIT* ( [eE] [+-]? DIGIT+ )?
DIGIT      = [0-9]

```

以下に例を示します。

```

3.1415926
0.5e-3      # 0.0005
12.3e+2     # 1230.0
9.E5        # 900000.0

```

真偽リテラル (BOOLEAN)

真偽リテラルはブール型の真 (true) と偽 (false) の 2 つの値の表記があります。:

```

BOOLEAN = "true" | "false"

```

ヌルリテラル (NULL)

ヌルリテラルは値が無いことを示す値で、null と表記されます。:

```

NULL = "null"

```

パターンリテラル (PATTERN)

パターンリテラルは、パターンの種別を表す 'e', 'g', 'r' のいずれかの文字に引き続き、一重引用符 (')、もしくは、二重引用符 (") で囲まれた 0 個以上の文字 (パターン文字列) からなります。最後にモードを示す 'i' がオプションとして付加される場合もあります。

```

r"(From|Subject): "      # 正規表現パターン
g'*.txt'                 # glob パターン
e'kompira'i              # 大文字小文字を区別しない完全一致パターン
r"windows(95|nt|2000)"i  # 大文字小文字を区別しない正規表現パターン

```

パターン文字列内ではエスケープシーケンスは無効となり、そのままの文字として扱われます。\${identifier} による文字列置換は有効です。

4.2.6 記号

記号は、演算子記号 (OPERATOR)、結合子記号 (COMBINATOR)、デリミタに分類されます。

演算子

以下のトークンは演算子です。:

+	-	*	/	%			
<	>	<=	>=	==	!=	=~	!~

結合子

以下のトークンは結合子です。:

->	=>	->>	=>>
----	----	-----	-----

デリミタ

以下のトークンはデリミタです。:

()	{	}	[]		,	.	=	>>	<<	?	??
---	---	---	---	---	---	--	---	---	---	----	----	---	----

4.3 値と型

Kompira のジョブフロー言語では、整数や文字列、日付など様々な値（データ）を扱うことができます。値はその種類毎にいくつかの型に分類されます。ある型の値は暗黙的に別の型に変換される場合があります。たとえば、整数型の値を文字列型のフィールドに書き込む場合、対応する文字列型の値に暗黙的に変換されてから書き込まれます。

4.3.1 プリミティブ型

プリミティブ型は、Kompira のジョブフロー言語が提供する基本的なデータの型の総称で、整数型、文字列型、ブール型、ヌル型の 4 つがあります。プリミティブ型の値は、他のプリミティブ型の値と状態が共有されることはありません。

整数型 (Integer)

整数型は 0 や 1, 1000, -9999 など、整数を表す値の型を取り扱います。Kompira の整数型は、(メモリの許す限り) 範囲に限りはありません。

注釈: Kompira オブジェクトの Integer 型フィールドは範囲が制限されているため、ジョブフローから範囲外のデータを Integer 型フィールドに書き込むと実行時エラーとなります。

文字列型 (String)

文字列型は、"kompira" や "今日は晴天なり" のような文字列の値のための型です。文字列の各要素は文字です。Kompira のジョブフロー言語では文字型は存在しません。単一の文字は、要素が 1 つだけの文字列として表現されます。各文字は内部的には Unicode で表現されています。

"123" や "-999" など、整数を表す文字列の値を、整数型のフィールドに書き込む場合、対応する整数型の値に暗黙的に変換されます。

文字列型の値が、ブール型に変換される場合、空文字列("") が false、それ以外の文字列が true と対応します。したがって、文字列 "false" はブール型の true に対応するので注意が必要です。

文字列型のデータは、以下のメソッドを備えています。

String.format(*args, **kwargs) : *String*

文字列の書式化操作を行います。このメソッドを呼び出す文字列は通常の文字、または、{} で区切られた置換フィールドを含みます。それぞれの置換フィールドは位置引数のインデックスナンバー、または、キーワード引数の名前を含みます。返り値は、それぞれの置換フィールドが対応する引数の文字列値で置換された文字列のコピーです。

String.join(list) : *String*

リスト中の文字列を結合した文字列オブジェクトを返します。要素間の区切り文字列は、このメソッドを提供する文字列です。

String.find(sub[, start[, end]]) : *Integer*

文字列のスライス s[start:end] に部分文字列 sub が含まれる場合、その最小のインデックスを返します。オプション引数 start および end はスライス表記と同様に解釈されます。sub が見つからなかった場合 -1 を返します。

String.rfind(sub[, start[, end]]) : *Integer*

文字列中の領域 s[start:end] に sub が含まれる場合、その最大のインデックスを返します。オプション引数 start および end はスライス表記と同様に解釈されます。sub が見つからなかった場合 -1 を返します。

String.startswith(prefix[, start[, end]]) : *Boolean*

文字列が指定された prefix で始まるなら true を、そうでなければ false を返します。prefix は見つけたい複数の接頭語のリストでも構いません。オプションの start があれば、その位置から判定を始めます。オプションの end があれば、その位置で比較を止めます。

String.encode([encoding]) : *Binary*

文字列を指定した encoding で指定されたエンコーディングで符号化したバイト列に変換します。encoding の指定を省略した場合は、'utf-8' として符号化されます。

String.endswith(prefix[, start[, end]]) : *Boolean*

文字列が指定された suffix で終わるなら true を、そうでなければ false を返します。suffix は見つけたい複数の接尾語のタプルでも構いません。オプションの start があれば、その位置から判定を始めます。オプションの end があれば、その位置で比較を止めます。

String.lower() : *String*

全ての大小文字の区別のある文字が小文字に変換された、文字列のコピーを返します。

String.upper() : *String*

全ての大小文字の区別のある文字が大文字に変換された、文字列のコピーを返します。

String.replace(old, new[, count]) : *String*

文字列をコピーし、現れる部分文字列 old 全てを new に置換して返します。オプション引数 count が与えられている場合、先頭から count 個の old だけを置換します。

String.split([sep[, maxsplit]]) : *Array<String>*

文字列を sep をデリミタ文字列として区切った単語のリストを返します。maxsplit が与えられていれば、最大で maxsplit 回分割されます。

String.rsplit([sep[, maxsplit]]) : *Array<String>*

sep を区切り文字とした、文字列中の単語のリストを返します。maxsplit が与えられた場合、文字列の右端から最大 maxsplit 回分割を行います。

String.splitlines([keepends]) : *Array<String>*

文字列を改行部分で分解し、各行からなるリストを返します。

String.strip([chars]) : *String*

文字列の先頭および末尾部分を除去したコピーを返します。引数 chars は除去される文字集合を指定する文字列です。

バイナリ型 (Binary)

バイナリ型は、バイト列を値とする型です。バイト列は文字列と似ていますが、バイト列を構成する単位は文字ではなくバイト値 (0~255 の 8bit 整数値) となります。

バイナリ型のデータは、以下のメソッドを備えています。

Binary.decode([encoding]) : *String*

バイト列を指定した encoding で指定されたエンコーディングで解釈して文字列に変換します。encoding の指定を省略した場合は、'utf-8' として解釈されます。

Binary.hex() : *String*

バイト列の各バイト値を 2 桁の 16 進表記で表した文字列に変換します。

浮動小数型 (Float)

浮動小数型は、浮動小数点数を値にとる型です。

ブール型 (Boolean)

ブール型は、真理値の真 (true) と偽 (false) という 2 つの値をとる型です。

ヌル型 (Null)

ヌル型は、null 値のみを持つ型です。

パターン型 (Pattern)

パターン型は、文字列とマッチングを行うためのパターンを表す値の型です。パターンの種別は、'r' (正規表現パターン)、'g' (glob パターン)、'e' (完全一致パターン) の 3 種類あります。また、パターンマッチングのモードとして、大文字、小文字を区別しないモード ('i') を組み合わせることもできます。

正規表現パターンは、プログラミング言語 Python の re モジュールの正規表現に準じています。

glob パターンでは、Unix のシェル形式のワイルドカードを用いることができ、以下の特別な文字に対応しています。

パターン	意味
*	すべてにマッチします
?	任意の一文字にマッチします
[seq]	seq にある任意の文字にマッチします
[!seq]	seq にない任意の文字にマッチします

完全一致パターンは単に文字列の比較となります。

パターン型のデータは、以下のメソッドを備えています。

Pattern.match(s) : *Boolean* | *Dictionary*

文字列 s とパターンとのマッチングを試みます。マッチした場合は true、もしくはパターンが正規表現パターンの場合はマッチした情報を格納した辞書を返します。マッチしなかった場合は、false を返します。

正規表現パターンがマッチした際に返す辞書データには、以下のエントリが含まれます。

キー	意味
group	正規表現にマッチした文字列
groups	すべてのサブグループの文字列を含むリスト
groupdict	名前付きグループの辞書
start	マッチの開始位置
end	マッチの終了位置

4.3.2 複合データ型

複合データ型は、他の型の複数の要素を保持することができるデータの型の総称で、配列型と辞書型および遅延評価配列型の 3 種類があります。

配列型 (Array)

配列型のデータは、要素を 1 次元に並べたデータ構造で、整数のインデックスで要素にアクセスすることができます。配列の長さが n の場合、インデックスは $0, 1, \dots, n - 1$ となります。配列 a の要素 i は $a[i]$ で参照することができます。インデックス i が負の場合、 $a[i]$ は要素 $n+i$ を参照します。

配列の範囲外の要素にアクセスした場合、実行時エラーとなります。また、配列は拡張することはできません。

配列型のデータは、以下のメソッドを備えています。

Array.add_item(value)

配列 a の最後にデータ $value$ を追加します。

Array.del_item(index)

配列 a の要素 $a[index]$ を削除します。

Array.pop_item([index])

配列 a の要素 $a[index]$ を削除します。index が指定されなければ最後の要素を削除します。

辞書型 (Dictionary)

辞書型のデータは、要素を複合データ型を除く任意の型のキーで関連づけられた要素にアクセスすることができるデータ構造です。辞書 d のキー k で関連づけられた要素は、 $d[k]$ で参照することができます。キー k が文字列型の値で、かつ、識別子 (IDENTIFIER) の字句要件を満たす文字列の場合、 $d.k$ で参照することもできます。

辞書に含まれていないキーで要素を参照しようとした場合、実行時のエラーになります。書き込みジョブ (後述) によって新しいキーと要素を追加することができます。

辞書型のデータは、以下のメソッドを備えています。

Dictionary.del_item(key)

辞書 d の要素 $d[key]$ を削除します。

Dictionary.get_item(key[, default])

辞書 d の要素 $d[key]$ を取得します。要素 $d[key]$ が存在しない場合、default を返します。default のデフォルト値は null です。

Dictionary.pop_item(key[, default])

辞書 d の要素 $d[key]$ を削除します。要素 $d[key]$ が存在しない場合、default を返します。default が与えられず、かつ、要素 $d[key]$ が存在しない場合は、エラーとなります。

Dictionary.get_keys()

辞書 d のキーのリストを返します。

遅延評価配列型 (LazyArray)

遅延評価配列型のデータは配列型と似たデータ構造で、整数インデックスで要素にアクセスすることができます。ただし、名前が示すようにデータの内容は実際にアクセスしたときにはじめて決まるという特徴があります。

遅延評価配列型はオブジェクトの検索結果などを示す結果として返される型として利用されます。そのためジョブフローで遅延評価配列型のデータを直接記述することは出来ません。

オブジェクトの検索結果を示す結果として遅延評価配列型が返されたとしても、その時点では指定した検索条件などを内部に持っているだけです。実際にアクセスしたときにその検索条件でデータベースに問い合わせる、という動きをすることから遅延評価と呼ばれます。このことから、遅延評価配列型はそのデータにアクセスするタイミングで結果が異なる場合があることに注意してください。

以下では、通常の配列型とは内部的な振る舞いが異なる点について簡単に説明します。

length() 組み込み関数に遅延評価配列型を渡した場合は、その時点での検索条件に該当するオブジェクトの個数をデータベースに問い合わせ返します。また、遅延評価配列型に整数インデックスで要素にアクセスする場合、アクセスのたびに 1 件ずつデータベースに問い合わせ返してオブジェクトを返します。

こうした特徴から length() で件数を取得して、その個数によるループ処理で整数インデックスでアクセスすると、個数に応じてデータベースへの問い合わせ回数が増えることになります。

```
[found = /root.find()] ->
{ for i in length(found) |
  [obj = found[i]] ->
  ...
}
```

遅延評価配列型は for ブロック（または pfor ブロック）で反復処理することもできます。この場合は、ブロック開始時に検索条件に該当するオブジェクトをデータベースに問い合わせ、1 件ずつメモリに展開されてブロック内部の処理に渡されます。

整数インデックスによる繰り返しアクセスではなく、for ブロックでの反復処理にすることでデータベースへの問い合わせ回数を減らすことができます。

```
[found = /root.find()] ->
{ for obj in found |
  ...
}
```

for ブロック内部では、当該オブジェクトのフィールド値を更新したり、オブジェクトを削除することもできます。

遅延評価配列型は + 演算子で配列型（または遅延評価配列型）と結合することができます。この場合は、その時点での検索条件に該当するオブジェクトをデータベースに全件を問い合わせます。また、結合され

た値は通常の配列型となり、すべての要素をメモリ上に持つことになります。このような全件問い合わせを伴う処理では、該当するオブジェクトの個数が多いほど、処理時間とメモリ使用量が増加することに注意してください。

遅延評価配列型はその特徴から、`add_item`, `del_item`, `pop_item` メソッドなどで要素を追加したり削除したりすることは出来ません。

遅延評価配列型のデータは、以下のメソッドを備えています。

`LazyArray.delete()`

このメソッドを呼び出した時点で該当するオブジェクトをすべて削除します。このメソッドは削除したオブジェクトの個数を返します。

バージョン 1.6.8 で追加: 新たに遅延評価配列型が追加されました。

4.3.3 不透明データ型

不透明データ型は、データの内部構造が隠ぺいされたデータ型の総称です。また、対応するデータコンストラクタを持たないため、複合データ型のようにジョブフロープログラムのソースコード中の表記によって直接データを生成することはできません。

オブジェクト型 (Object)

オブジェクト型の値は、Kompira ファイルシステム上のオブジェクトの参照を表現します。オブジェクト型の値の文字列表現はそのオブジェクトの絶対パスとなります。オブジェクト `o` のプロパティ `p` は、`o.p` で、フィールド `f` は `o[f]` という表記でアクセスすることができます。フィールド `f` と同名のプロパティ名やメソッド名が無ければ、`o.f` という表記でフィールドを参照できます。

Kompira のオブジェクトは、型オブジェクト (TypeObject) によって定義されるフィールドとメソッドを備えています。詳細は Kompira オブジェクトリファレンス ([Kompira 標準ライブラリ](#)) を参照してください。

ファイル型 (File)

ファイル型の値は、ファイル型フィールドを持つオブジェクトに添付されるファイルデータを表します。

ファイル型の値には以下のフィールドが定義されています。

フィールド名	
<code>name</code>	添付ファイル名
<code>data</code>	添付ファイルデータ
<code>size</code>	データサイズ (読み取り専用)
<code>url</code>	ダウンロード URL (読み取り専用)

`name` と `data` をキーとする辞書データを以下のように更新ジョブに渡すことで、ファイル型フィールドに値を書き込む (すなわちジョブフローからファイルを作成する) ことが可能です。

```
[{'name': 'binary.txt', 'data': b'\xde\xad\xbe\xef \xca\xfe'} >> ./some_obj['attached1'
→ ']]
```

基本的に data にはバイナリデータを渡しますが、以下のように文字列を渡すこともできます。

```
[{'name': 'some.txt', 'data': ' こんにちは'} >> ./some_obj['attached1']]
```

この場合は、UTF-8 でエンコードされ、バイナリデータとしてファイルに書き込まれます。

以下のように既存ファイルの名称やデータのみを更新することも可能です。

```
['update.txt' >> ./some_obj['attached1']['name']] -> # ファイル名を "update.txt" に更新
['new text' >> ./some_obj['attached1']['data']] # ファイルデータを "new text"
→ に更新
```

ジョブフローによってファイルを削除する場合は、以下のように null 値を更新ジョブに渡します。

```
[null >> ./some_obj['attached1']]
```

日時型 (Datetime)

日時型の値は、日付と時刻の両方を含むデータを表します。

日時型の値は以下の読み取り専用のプロパティを備えています。

Datetime.year : *Integer*

年を示す値

Datetime.month : *Integer*

月を示す 1 から 12 までの値

Datetime.day : *Integer*

1 から与えられた月と年における日数までの値

Datetime.hour : *Integer*

時を示す 0 から 23 までの値

Datetime.minute : *Integer*

分を示す 0 から 59 までの値

Datetime.second : *Integer*

秒を示す 0 から 59 までの値

Datetime.weekday : *Integer*

月曜日を 0、日曜日を 6 として、曜日を整数で表した値

Datetime.date : *Date*

日時型データのうち日付部分

Datetime.time : *Time*

日時型データのうち時刻部分

日時型のデータは、以下のメソッドを備えています。

Datetime.format(dt_fmt) : *String*

dt_fmt で指定されたフォーマットで日時データを文字列に変換します。フォーマットの書式指定は、C 言語の strftime() 関数に準じています。

以下に例を示します。

```
[dt = now()] -> print(dt.format('%Y 年%m 月%d 日 %H 時%M 分%S 秒'))
```

Datetime.isoformat() : *String*

YYYY-MM-DDTHH:mm:ssZ の形式 (ISO 8601 フォーマット) の文字列を返します。タイムゾーンは常に UTC となり、Z の接尾辞がつきます。

日付型 (Date)

日付型の値は、日付のデータを表します。

日付型の値は以下の読み取り専用のプロパティを備えています。

Date.year : *Integer*

年を示す値

Date.month : *Integer*

月を示す 1 から 12 までの値

Date.day : *Integer*

日を示す、1 から与えられた月と年における日数までの値

Date.weekday : *Integer*

月曜日を 0、日曜日を 6 として、曜日を整数で表した値

日付型のデータは、以下のメソッドを備えています。

Date.format(dt_fmt) : *String*

dt_fmt で指定されたフォーマットで日付データを文字列に変換します。フォーマットの書式指定は、C 言語の strftime() 関数に準じています。

時刻型 (Time)

時刻型の値は、時刻のデータを表します。

時刻型の値は以下の読み取り専用のプロパティを備えています。

Time.hour : *Integer*

時を示す 0 から 23 までの値

Time.minute : *Integer*

分を示す 0 から 59 までの値

Time.second : *Integer*

秒を示す 0 から 59 までの値

時刻型のデータは、以下のメソッドを備えています。

Time.format(dt_fmt) : *String*

dt_fmt で指定されたフォーマットで時刻データを文字列に変換します。フォーマットの書式指定は、C 言語の strftime() 関数に準じています。

経過時間型 (Timedelta)

経過時間型の値は、日時型の値の差分を表すデータです。日時型の値と経過時間型の値の間で、加算と減算が可能です。また、日時型の値同士の差分は経過時間型となります。

経過時間型の値は以下の読み取り専用のプロパティを備えています。

Timedelta.days : *Integer*

日数

Timedelta.seconds : *Integer*

秒数

Timedelta.microseconds : *Integer*

マイクロ秒数

Timedelta.total_seconds : *Float*

経過時間のトータル秒数

4.4 変数

変数は値を保持するための記憶領域に付けた名前のことです。Kompira ジョブフロー言語における変数は、任意の型の値を保持することができます。

注釈: fork や pfor ブロックによって生成された子プロセス同士、あるいは親プロセスと子プロセスの間では、同じスコープであっても変数は共有されません。ただし、子プロセスから、子プロセスが生成された時点の親プロセスのスコープの変数を参照する（読み取る）ことは可能です。

4.4.1 ローカル変数

ローカル変数は、ジョブフローのパラメータ、代入ジョブによって導入されます。ローカル変数はその変数が導入されるソースコード上の位置によって異なるスコープを持ちます。

ジョブフロースコープ

ジョブフロースコープは、その変数が導入されたジョブの後続の任意のジョブから参照できるスコープです。ジョブフローパラメータはジョブフロースコープを持ちます。また代入ジョブによって未定義変数が新たに導入された場合には、その変数はジョブフロースコープを持ちます。

ジョブフロースコープの変数は、同名の変数が内側のブロックスコープで再定義された場合、隠されます。

ブロックスコープ

ブロックスコープは、そのブロックの内側からのみ参照できるスコープです。単純ブロックで定義される変数や、for や pfor ブロックによって導入されるループ変数は、ブロックスコープを持ちます。

4.4.2 環境変数

バージョン 1.6 で非推奨: 環境変数はバージョン 1.6.0 で廃止されました。代わりに\$ENV 状態変数を使用してください。

4.4.3 特殊変数

特殊変数は、システムによってあらかじめ定義された特別な意味を持つ変数です。

状態変数

状態変数はリモートジョブなどの実行結果やステータスコードなどを一時的に格納するための予約された変数であり、\$で始まる変数です。これらの変数は、Kompira エンジンによって自動的に値がセットされるものであり、ジョブフローの中で明示的に代入を行うことはできません。

状態変数には、以下の種類があります。

変数名	意味
\$RESULT	ジョブの実行結果 (標準出力)
\$STATUS	ジョブの実行ステータス
\$ERROR	ジョブ実行のエラーメッセージ (標準エラー出力)
\$DEBUG	デバッグ情報
\$ENV	環境変数辞書

注釈: ジョブの実行結果の文字コードは自動判別され、適切な文字列に変換されます。文字列への変換に失敗した場合、ジョブの実行は失敗とみなされ、エラーを返します。

\$ENV 状態変数は、ジョブフロー実行ユーザの設定する環境変数型 (Environment) オブジェクトの環境変数フィールドの辞書が格納されます。

制御変数

制御変数は、リモートジョブを実行する際のホスト名やログイン名などを指定するための変数であり、__*___のように2つ続きのアンダースコア (__) が前後に付加された形式の変数です。

制御変数はローカル変数として定義することもできますし、環境変数として設定しておくことも可能です。

制御変数には、以下の種類があります。

変数名	意味
__realm__	リモートコマンドを実行する管理領域を指定する
__host__	リモートコマンドの実行ホスト名を指定する
__conntype__	リモートコマンドの実行ホストの接続種別を指定する。(指定できる接続種別については ノードの設定 を参照)
__user__	リモートコマンドの実行ユーザー名を指定する
__password__	パスワードを指定する
__node__	リモートコマンドを実行するノード情報オブジェクトを指定する
__account__	リモートコマンドを実行するために必要なアカウント情報オブジェクトを指定する
__sudo__	sudo モードで実行する場合は true にセットする
__dir__	リモートコマンドの実行ディレクトリを指定する
__port__	ssh ポート番号を指定する
__keyfile__	ssh 鍵ファイルパスを指定する
__passphrase__	ssh 鍵ファイルのパスフレーズを指定する (パスフレーズ無しの場合や__password__と同じなら省略可能)
__timeout__	リモートコマンドがタイムアウトするまでの秒数を指定する
__proxy__	実行ホストに接続する際の経由ホストを指定する
__shell__	リモートコマンド実行時に利用する shell を指定する (デフォルト: "/bin/bash")
__use_shell__	リモートコマンド実行時に shell を利用しない場合は false をセットする

次のページに続く

表 1 – 前のページからの続き

変数名	意味
<code>__use_pty__</code>	リモートコマンド実行時に PTY を利用する場合は true をセットする
<code>__use_cache__</code>	リモート接続キャッシュを利用しない場合は false をセットする
<code>__raw_stdout__</code>	標準出力をバイナリとして受け取る場合は true をセットする
<code>__raw_stderr__</code>	標準エラー出力をバイナリとして受け取る場合は true をセットする
<code>__winrs_auth_type__</code>	WinRS 接続の認証方式を "ntlm" (デフォルト), "credssp" から指定する。
<code>__winrs_scheme__</code>	WinRS 接続のスキームを "https" (デフォルト), "http" から指定する。
<code>__winrs_use_tls1_0__</code>	WinRS 接続にて CredSSP 認証を行う際に TLS1.0 を使用する場合は true をセットする。(WindowsServer2008 など、TLS1.2 を使用出来ない環境向け)

バージョン 1.4 で非推奨: 制御変数 `__via__` はバージョン 1.4.0 で廃止されました。かわりに `__proxy__` を使用してください。

バージョン 1.6.0 で追加: 制御変数 `__raw_stdout__`, `__raw_stderr__` が追加されました。

バージョン 1.6.2.post6 で追加: 制御変数 `__use_cache__` が追加されました。

バージョン 1.6.4 で変更: 制御変数 `__conntype__` が拡張されて、ネットワーク機器を指定できるようになりました。

バージョン 1.6.4 で変更: 制御変数 `__conntype__` において Windows 機器の指定方法が変更になりました。

注釈: WinRS 接続の場合は、`__use_cache__` の設定にかかわらず常にリモート接続キャッシュは使用しません。

注釈: `__dir__` で指定するディレクトリ文字列に (や), " や ' など、シェルのメタ文字が含まれる場合は、以下のように適切にエスケープする必要があります。:

```
[__dir__ = 'somedir\\(foo\\)']
```

注釈: `__sudo__ = true` かつ `__use_shell__ = false` のとき、`__dir__` は指定できません。

注釈: `__timeout__` を指定しない場合、もしくは、0 の値を設定した場合、リモートコマンド実行時にタイムアウトはしません。`__timeout__` に負の値を設定した場合の動作は未定義です。

バージョン 1.4.9 で変更.

winrs モードでは、実行しているリモートコマンドが出力を続けている限りはタイムアウトしません。すなわち、`__timeout__` で指定した秒数の時間、出力が無い場合にタイムアウトします。

バージョン 1.5.4.post5 で変更.

winrs モードでコマンドの出力があっても `__timeout__` で指定した秒数でタイムアウトするようになります。

した。

注釈: バージョン 1.4.8.post6 で変更.

winrs モードによるリモートコマンド実行では、__timeout__ で指定した値と WinRM 側の MaxTimeoutms で設定した値のうち、より小さい値が適用されます。

バージョン 1.5.4.post5 で変更.

winrs モードでのコマンド実行において、__timeout__ によるタイムアウト指定が MaxTimeoutms より優先されるようになりました。

4.5 式

ジョブフロープログラム中の式は、ジョブフローの実行過程の中で評価され、結果として何らかの値を持ちます。

4.5.1 アトミック式

アトミックな式は、式を構成する基本単位となります。識別子やオブジェクトパス、リテラルはアトミックな式に含まれます。また、カッコで囲まれた形式も文法的にはアトミックな式に分類されます。

```
atomic_expression ::= IDENTIFIER | OBJECT_PATH | SPECIAL_IDENTIFIER
                    | literal
                    | parenth_form
                    | array_expression
                    | dict_expression
```

識別子 (IDENTIFIER)

アトミックな式としての識別子は、変数名を表します。変数名を評価すると、評価時の実行環境の下でその変数名に束縛された値を返します。

オブジェクトパス

オブジェクトパスは、そのパスが指し示す Kompira のオブジェクトを値として返します。オブジェクトパスが相対パス形式の場合は、相対パスの起点はそのジョブフローオブジェクトが所属するディレクトリとなります。たとえば、ジョブフロー `/root/test_jobflow` の中で、`./test_object` が指し示すオブジェクトは、`/root/test_object` となります。

オブジェクトが存在しない場合、実行時エラーとなります。

特殊識別子

特殊識別子はジョブ実行後の状態変数を表します。ジョブフロー開始時点で、`$STATUS` は 0 に、`$RESULT` と `$ERROR` は空文字列("")にそれぞれ初期化されます。

リテラル

リテラルは、文字列、バイナリ、整数値、浮動小数、真偽値、ヌルがあります。

```
literal ::= STRING | BINARY | INTEGER | FLOAT | BOOLEAN | NULL
```

リテラルを評価すると、そのリテラルが示す値になります。

文字列リテラルの場合、その文字列に含まれる `$` で前置された変数が展開されます。以下の規則に従います。

- `$identifier` は置換プレースホルダの指定で、`"identifier"` というキーへの対応付けに相当します。デフォルトは、`"identifier"` の部分には Kompira の識別子が書かれていなければなりません。`$` の後に識別子に使えない文字が出現すると、そこでプレースホルダ名の指定が終わります。
- `${identifier}` は `$identifier` と同じです。プレースホルダ名の後ろに識別子として使える文字列が続いていて、それをプレースホルダ名の一部として扱いたくない場合に必要な書き方です。

例えば、以下に示すジョブフローを実行すると、コンソールには `"Hello Kompira"` と出力されます。:

```
[name = 'Kompira']
-> print('Hello $name')
```

丸カッコ形式

丸カッコ形式は、囲まれている式を評価し、その値を返します。

```
parenth_form ::= "(" expression ")"
```

配列式

配列式は、角カッコで囲われた式のカンマ区切りの並びです。式の並びは省略することも可能です。

```
array_expression ::= "[" expression_list? "]"
expression_list  ::= expression ("," expression_list)*
```

配列式を評価すると、新たに作成された配列型のデータを値として返します。配列の各要素は左から右へと順に評価されます。

辞書式

辞書式は、波カッコで囲われたキーと値のペアのカンマ区切りの並びです。ペアの並びは省略することも可能です。ペアが等号で結ばれる場合、キーは識別子でなくてはなりません。キーが重複している場合はコンパイル時にエラーを報告します。コロンで結ばれる場合は、キーは任意の式を記述することができます。この場合はキーの重複はチェックされません。

```
dict_expression ::= "{" ( binding_list | key_val_list )? "}"
binding_list    ::= binding ("," binding_list)*
binding         ::= IDENTIFIER "=" expression
key_val_list    ::= key_val ("," key_val_list)*
key_val         ::= expression ":" expression
```

辞書式を評価すると、新たに作成された辞書型のデータを値として返します。カンマ区切りの一連のキーと値のペアが与えられると、その要素は左から右へ評価され、辞書の項目を定義します。重複したキーを与えると文法エラーとなります。

4.5.2 後置式

後置式は、式の中で最も結合性が高くなります。

```
postfix_expression ::= attribute_reference
                  | subscript_reference
                  | function_call
                  | atomic_expression
```

属性参照

属性参照は、後置式の後にドットがあり、さらに識別子が続く形式です。

```
attribute_reference ::= postfix_expression "." IDENTIFIER
```

後置式の評価結果は、オブジェクト型でなければいけません。後置式の評価結果のオブジェクトの識別子で指定された属性が評価結果の値となります。指定された属性が存在しない場合は、識別子の文字列をキーとしてオブジェクトのフィールド値となります。そのようなフィールドも存在しない場合は、実行時エラーとなります。

添字参照

角カッコで囲まれた式が後に付いている後置式は、オブジェクトのフィールドや配列、辞書データから要素を取り出す式を表します。

```
subscript_reference ::= postfix_expression "[" expression "]"
```

後置式の評価結果は、オブジェクト型、辞書型、配列型のいずれかでなければいけません。後置式の評価結果がオブジェクト型か辞書型の場合、角カッコの中の式の評価結果は文字列型である必要があります。この場合、文字列をキーとしてオブジェクトのフィールドや辞書データの要素が選択されます。後置式が配列型の場合、角カッコの中の式は整数型である必要があります。この場合、整数値をインデックスとして該当する配列の要素が選択されます。

キーやインデックスに対応する要素が存在しない場合、実行時エラーとなります。

関数呼び出し

関数呼び出しは、組み込み関数やライブラリ型オブジェクトで定義された関数、オブジェクトのメソッドを引数のリストとともに呼び出します。引数リストは式リストとそれに続く束縛リスト（キーワード引数リスト）から構成され、それぞれ空でもかまいません。

```
function_call ::= postfix_expression "(" argument_list? ")"
argument_list ::= expression_list ("," ".*" atomic_expression)?
                ("," binding_list)? ("," ".*" atomic_expression)?
                | binding_list ("," ".*" atomic_expression)?
                | ".*" atomic_expression ("," binding_list)?
                ("," ".*" atomic_expression)?
                | ".*" atomic_expression
```

関数呼び出しの際に構文 `*atomic_expression` が使われるなら、`atomic_expression` の評価は配列型でなくてはなりません。この配列型の要素は、追加の固定引数のように扱われます。

関数呼び出しで `**atomic_expression` 構文が使われた場合、`atomic_expression` の値評価結果は辞書型でなければなりません。辞書の内容は追加のキーワード引数として扱われます。

引数リストの各要素は、関数呼び出しの前に評価されます。

4.5.3 演算子式

単項演算子

単項演算子には、`+` と `-` があります。単項演算子は右結合となるため、`+x` は `+(-x)` と同じ意味になります。

```
unary_expression ::= postfix_expression
                  | ( "+" | "-" ) unary_expression
```

単項 `-` 演算子は、引数となる数値の符号を反転します。

単項 `+` 演算子は、数値引数を変更しません。

乗除演算子

乗除演算子には、`*`, `/`, `%` があります。これらはどれも同じ優先順位で、左結合となります。

```
multiplicative_expression ::= unary_expression
                           | multiplicative_expression "*" unary_expression
                           | multiplicative_expression "/" unary_expression
                           | multiplicative_expression "%" unary_expression
```

`*` 演算は、引数間の積になります。どちらかの引数が文字列や配列で、一方が整数の場合、文字列や配列がその数だけ繰り返された値となります。たとえば、式 `'foo' * 3` は `'foofoofoo'` に評価されます。

`/` 演算は、引数間の商になります。ゼロによる除算を行うとエラーとなります。

`%` 演算は、2つの引数が整数の場合、第1引数を第2引数で除算したときの剰余になります。第1引数が文字列で、第2引数が辞書の場合、テンプレート文字列を置換した結果を返します。

加減演算子

加減演算子には、`+`, `-` があります。これらはどれも同じ優先順位で、左結合となります。

```
additive_expression ::= multiplicative_expression
                       | additive_expression "+" multiplicative_expression
                       | additive_expression "-" multiplicative_expression
```

+ 演算は、引数を加算した値を返します。両引数が文字列や配列の場合、連結された値を返します。

- 演算は、引数間で減算を行った値を返します。

比較演算子

比較演算子には、<, >, ==, >=, <=, !=, =~, !~ があります。これらはどれも同じ優先順位をもっており、左結合となります。

```
comparison_expression ::= additive_expression
                        | comparison_expression "<" additive_expression
                        | comparison_expression ">" additive_expression
                        | comparison_expression "==" additive_expression
                        | comparison_expression ">=" additive_expression
                        | comparison_expression "<=" additive_expression
                        | comparison_expression "!=" additive_expression
                        | comparison_expression "=~" additive_expression
                        | comparison_expression "!~" additive_expression
```

比較の結果はブール型の値 `true` または `false` となります。比較はいくらでも連鎖することができます。たとえば、`x < y <= z` は `x < y` and `y <= z` と等価になります。ただし、この場合、前者では `y` はただ一度だけ評価されます。また、`x < y <= z` と `(x < y) <= z` は意味が異なります。後者は、`x < y` 評価した結果のブール型の値を `z` と比較します。

同じ型の値同士の比較の意味は、型によって異なります。

- 整数同士の比較では、算術的な比較が行われます。
- 文字列同士の比較では、辞書的な比較が行われます。
- 配列同士の比較では、対応する各要素の比較結果を使って辞書的な比較が行われます。
- 辞書同士の比較は等価判定のみ定義されています。キーが同じ順序で並んでいて、かつ、キーと値の対応する各要素が等しいときのみ、等価となります。

`x != y` は `not (x == y)` と等価です。

`=~` は類似比較を行います。意味は型によって異なります。

- パターンと文字列の比較では、パターンマッチによる比較が行われます。
- 文字列とそれ以外の型の比較では、文字列以外の値を文字列化して比較が行われます。
- 配列同士の比較では、対応する各要素を類似比較します。
- 辞書同士の比較は、キーの順序の違いを無視して、各キーに対応する値を類似比較します。
- 上記以外は通常の `==` による等価比較と同じ結果となります。

`x !~ y` は `not (x =~ y)` と等価です。

包含演算子

包含演算子は、`in`, `not in` があります。これらはどれも同じ優先順位を持っており、左結合となります。

```
membership_expression ::= comparison_expression
                        | membership_expression "in" membership_expression
                        | membership_expression "not" "in" membership_expression
```

包含演算 `x in y` は値 `x` が `y` の要素として含まれている場合は `true`、含まれていなければ `false` を返します。
`x not in y` は `not (x in y)` と同じです。

`y` が配列型以外の値の場合、要素かどうかの判定は以下のとおりになります。

- `x` と `y` がともに文字列の場合、`x` が `y` の部分文字列の場合に要素とみなされます。
- `y` が辞書型の値の場合、`x` が `y` のキー集合に含まれている場合に要素とみなされます。
- `y` がディレクトリ/テーブル型オブジェクトの場合、`x` が `y` の子オブジェクトの場合に要素とみなされます。

論理演算子

論理演算子には、`not`, `and`, `or` があります。論理演算のコンテキストや式の結果として真偽値を要求される場合、`false`, `null`, `0`, 空の文字列 (`""`), 空の配列 (`[]`), 空の辞書 (`{}`) は全て偽と解釈されます。それ以外の値は真と解釈されます。

```
logical_not_expression ::= membership_expression
                        | "not" membership_expression
logical_and_expression ::= logical_not_expression
                           | logical_and_expression "and" logical_not_expression
logical_or_expression  ::= logical_and_expression
                           | logical_or_expression "or" logical_and_expression
expression              ::= logical_or_expression
```

演算子 `not` は、引数が偽である場合には `true` を、それ以外の場合は `false` になります。

式 `x and y` は、式 `x` と `y` をそれぞれ評価し、`x` が偽なら `x` の評価結果を返します。それ以外の場合は `y` の評価結果を返します。

式 `x or y` は、式 `x` と `y` をそれぞれ評価し、`x` が真なら `x` の評価結果を返します。それ以外の場合は `y` の評価結果を返します。

4.6 ジョブ

ジョブは、コマンドの実行やイベントの待ち合わせ、あるいは繰り返しや条件分岐などの制御を指示します。ジョブの構文は以下の通りです。

```
job ::= skip_job
      | execution_job
      | assignment_job
      | update_job
      | event_job
      | builtin_job
      | control_job
      | block_job
```

4.6.1 スキップジョブ

スキップジョブは、\$STATUS を 0 にセットする以外には何も行いません。

```
skip_job ::= "[" "]"
```

4.6.2 実行ジョブ

実行ジョブは、式を評価した結果の値の型によって、異なる処理を実行します。

```
execution_job ::= "[" expression ("<<" expression)? (":" argument_list)? "]"
```

1 番目の式を評価した結果が文字列の場合、実行ジョブは制御文脈に応じて、リモートサーバもしくはローカルサーバで文字列をコマンドと解釈して実行します。記号 << に引き続いて 2 番目の式がある場合、その式の評価結果を文字列とみなして、コマンドの標準入力に渡されます。

1 番目の式を評価した結果がジョブフローオブジェクトの場合、そのジョブフローオブジェクトを呼び出します。引数リストがある場合には、リスト中の引数の式を評価した値がジョブフローのパラメータとして渡されます。

1 番目の式を評価した結果がスクリプトオブジェクトの場合、そのスクリプトがリモート、もしくはローカルサーバで実行されます。記号 << に引き続いて 2 番目の式がある場合、その式の評価結果を文字列とみなして、スクリプト実行時の標準入力に渡されます。引数リストがある場合には、リスト中の引数の式を評価した値がスクリプトのコマンドライン引数として渡されます。

1 番目の式を評価した結果が、Kompira オブジェクトのメソッドの場合、引数リストをパラメータとして、そのメソッドを呼び出します。

1 番目の式を評価した結果が、ライブラリオブジェクトの関数の場合、引数リストをパラメータとして、その関数を呼び出します。

警告: コマンドの文字列の長さ、スクリプトとスクリプトのコマンドライン引数のサイズは、112KB に制限されています。この制限を超えた場合、ジョブの実行は失敗し、\$STATUS に -1 をセットします。

4.6.3 代入ジョブ

代入ジョブは、変数に = の右辺式の評価結果を代入します。

```
assignment_job ::= "[" binding_list "]"
```

変数が未定義の場合、ジョブフロースコープを持つ変数が新たに定義され、評価した値で初期化されます。

4.6.4 更新ジョブ

更新ジョブは、最初の式を評価し、その結果の値で、ターゲット式を評価した結果の変数やオブジェクト、フィールドの内容を更新します。

```
update_job      ::= "[" expression ">>" target_expression "]"
target_expression ::= IDENTIFIER | OBJECT_PATH
                  | target_expression "." IDENTIFIER
                  | target_expression "[" expression "]"
```

4.6.5 イベントジョブ

イベントジョブは、最初の式を評価し、その型に応じた待ち合わせをします。

```
event_job ::= "<" expression (("?" | "??") expression)? (":" argument_list)? ">"
           | "<" ">"
```

イベントジョブは、1 つ目の式を評価した結果がチャンネルオブジェクト、もしくは、タスクオブジェクトの時、そのオブジェクトのイベントを待ち合わせします。\$RESULT には受信したオブジェクトが格納されます。

```
<./ChannelObject> ->
[message = $RESULT]
```

プロセスオブジェクトを渡した場合は、そのプロセスが終了するまで待ち合わせします。この場合、\$RESULT

にはプロセスオブジェクトが格納されます。

チャンネルやタスク、プロセスオブジェクトを要素とするリストを渡した場合は、いずれかのオブジェクトのイベントを待ち合わせします。`$RESULT` には、後述する 2 つの要素を持つリストが格納されます。リストの 1 つ目の要素はイベントが発生したオブジェクト、2 つ目の要素は受信したオブジェクトです。

```
# ./ChannelTable is a Table object that contains Channel objects.
<./ChannelTable.children> ->
[chan = $RESULT[0], message = $RESULT[1]]
```

? の後に式（ガード式）が続く場合、ガード付きのイベントジョブとなります。この場合、ガード式が評価された結果の値とチャンネルのメッセージキューの先頭にあるオブジェクトがマッチした場合のみ、メッセージを受信します。?? の場合も同様ですが、メッセージキューの先頭から順にオブジェクトがマッチするかどうかを調べ、マッチした場合には、それまでのオブジェクトを破棄して、マッチしたオブジェクトを受信します。プロセスオブジェクトを待つ場合、ガードの指定は単に無視されます。

引数リストがある場合、タイムアウト指定となります。最初の式の値が日時型の場合はタイムアウトする日時が指定され、整数型の場合、タイムアウトまでの秒数が指定されます。タイムアウトした場合、`$STATUS` は 1 にセットされます。

パラメータとしてキーワード引数 `peek_mode=true` を渡すと、受信したメッセージの扱いと結果の構造が変化します。チャンネルオブジェクトに対するイベントジョブで `peek_mode=true` を指定すると、メッセージ受信時に対象チャンネルのメッセージキューの先頭メッセージを（削除せずに）参照して、対象チャンネルオブジェクト内で当該メッセージを識別する ID 値とメッセージ本体を含むリスト `[msgid, message]` を `$RESULT` に返します。このときチャンネルから当該メッセージは削除されていないので、再度イベントジョブを実行すると同じメッセージを得ることになります。メッセージの処理を終えるなど、チャンネルから当該メッセージを再取得する必要がなくなった場合は、メッセージ ID を指定して `Channel.delete_message()` を呼び出すことで、当該メッセージを削除することができます。

```
[chan = ./ChannelObject] ->
<chan: peek_mode=true> ->
[msgid = $RESULT[0], message = $RESULT[1]] ->
...
[chan.delete_message: msgid]
```

`peek_mode` はガード式と合わせて利用することもできます。? に続けてガード式を指定してメッセージキューの先頭でマッチした場合は、そのメッセージの `[msgid, message]` のリストを返します。?? に続けてガード式を指定してメッセージキューの途中でマッチした場合は、先頭からそのメッセージの一つ手前までをメッセージキューから削除して、マッチしたメッセージの `[msgid, message]` のリストを返します。

リストに対するイベントジョブでも `peek_mode` を合わせて利用することができますが、得られる結果の構造が少し複雑になることに注意してください。

```
<[chanA, chanB, chanC]: peek_mode=true> ->
[chan = $RESULT[0], msgid = $RESULT[1][0], message = $RESULT[1][1]]
```

リストに対するイベントジョブの結果として得られる「受信したオブジェクト」の部分が、`peek_mode` によって `[msgid, message]` のリストになっています。

プロセスオブジェクトに対するイベントジョブで `peek_mode=true` を指定した場合、プロセス ID とプロセ

スオブジェクトを含むリスト [pid, process] を \$RESULT に返します。これにより、リストを指定したイベントジョブの呼び出し時にリストにチャンネルやプロセスを混在させても、結果の構造が同じになります。

メールチャンネルに対するイベントジョブのパラメータとしてキーワード引数 `detect_error=true` を渡すと、設定の不備やメールサーバの障害などの理由によりメールのフェッチに失敗した場合やメールチャンネルが無効化されている場合は、\$STATUS を -1 にセットして、イベント待ちが直ちに終了します。(メールチャンネル以外のイベントジョブパラメータに `detect_error` を渡しても単に無視されます)

空式 `<>` の場合、常に発火するイベントとなるため、ジョブフローの実行はただちに続きます。

バージョン 1.6.6 で変更: キーワード引数 `detect_error` が追加されました。

バージョン 1.6.7 で変更: キーワード引数 `peek_mode` が追加されました。

4.6.6 組み込みジョブ

組み込みジョブは、Kompira の組み込みジョブを呼び出します。

```
builtin_job ::= IDENTIFIER "(" argument_list? ")"
```

引数リストがある場合、リストの先頭か順に式が評価され、その結果が組み込みジョブのパラメータとして渡されます。

Kompira が提供する組み込みジョブの一覧と詳細については、[Kompira 標準ライブラリ](#)を参照してください。

4.6.7 制御ジョブ

制御ジョブは、`break` と `continue` の 2 つがあります。

```
control_job ::= "continue" | "break"
```

制御ジョブは、`while` ブロックと `for` ブロックの内部でのみ使用することができます。それ以外の場所で使用するとコンパイル時エラーとなります。

continue

continue は while/for ブロックの次の繰り返しの先頭に制御を移します。

break

break は while/for ブロックの繰り返しを中止し、ブロックの後続に制御を移します。

4.6.8 ブロックジョブ

ブロックジョブはブロックスコープを新しく作成します。

```
block_job ::= simple_block
           | if_block
           | for_block
           | while_block
           | case_block
           | choice_block
           | fork_block
           | pfor_block
           | session_block
           | try_block
```

単純ブロック

単純ブロックは、変数宣言付きの場合は、そのブロックスコープを持つローカル変数を新規に定義し、そのもとでブロック内のジョブフロー式を実行します。変数宣言が省略された場合は、単にブロック内のジョブフロー式を実行します。

```
simple_block ::= "{" (binding_list "|")? jobflow_expression "}"
```

if ブロック

if ブロックは、最初の条件式を評価し、その結果によって処理を分岐します。条件式が省略された場合、直前のジョブの実行結果である \$RESULT の値が使用されます。

```
if_block ::= "{" "if" expression? "|" jobflow_expression "}"
           | "{" "if" expression? "|" then_clause elif_clause* else_clause? "}"
```



```

then_clause ::= "then" ":" jobflow_expression
elif_clause ::= "elif" expression ":" jobflow_expression
else_clause ::= "else" ":" jobflow_expression

```

if ブロックの 1 番目の形式は、条件式が真の場合にのみブロック内のジョブフロー式が実行されます。

if ブロックの 2 番目の形式は、最初の条件式が真の場合に、then 節のジョブフロー式が実行されます。偽の場合には、次の elif 節の条件式が評価され、その値が真の場合に、elif 節のジョブフロー式が実行されます。どの条件式も偽の場合で、最後の else 節があれば else 節のジョブフロー式が実行されます。

case ブロック

case ブロックは最初の式を評価し、その値と各ケース節のパターン式を評価した値とのマッチングが試みられます。マッチングが成功すると、対応する case 節のジョブフローを実行します。case 節のパターン式がカンマ区切りで複数記述された場合、どれか一つのパターンとマッチするとマッチング成功とみなされ、その節のジョブフローが実行されます。

最初の式が省略された場合、直前のジョブの実行結果である \$RESULT の値が使用されます。

```

case_block ::= "{" "case" expression? "|" case_clause+ else_clause? "}"
case_clause ::= expression_list ":" jobflow_expression

```

case 節は、パターン式の後に、区切り記号であるコロン (:) とそのパターンに合致したときに実行するジョブフロー式が続きます。パターン式を評価した結果がパターンオブジェクトの場合、そのパターンオブジェクトに応じたマッチングが試みられます。パターン式の評価結果が文字列の場合、大文字小文字を区別する Glob パターンとして扱われます。それ以外の場合は、単純な == 比較によるマッチングを行います。

パターンは case 節の先頭から順番にマッチングが試みられます。どのパターンにもマッチしない場合、else 節があればそのジョブフロー式が実行されます。else 節が無ければ、マッチングに失敗したとみなされ、\$STATUS に 1 がセットされます。

for ブロック

for ブロックはリストやディレクトリ、テーブルなどの複数の要素を含むオブジェクト内の要素にわたって反復処理を行うために使われます。

```

for_block ::= "{" "for" IDENTIFIER "in" expression "|" jobflow_expression "}"

```

式は for ブロックの実行時に最初の一度だけ評価されます。式の評価結果は反復可能なオブジェクトか、もしくは、整数値である必要があり、それ以外の場合は実行エラーとなります。オブジェクトの各要素は識別子 (IDENTIFIER) で示されるローカル変数に代入されます。式の評価結果が整数値 N の場合、ローカル変数が 0 から N-1 の範囲で反復します。ただし、N が 0 もしくは負の場合は反復しません。このローカル変数は for ブロックのスコープを持つため、for ブロックを抜けた後で参照することはできません。

ジョブフロー式の中で break ジョブが実行されると、ループを終了します。continue ジョブが実行される

と、ジョブフロー式の後続の処理をスキップしてループを終了します。

for ブロック終了時の `$STATUS` は常に 0 にセットされます。

while ブロック

while ブロックは、式を繰り返し評価し、真であればジョブフロー式を実行します。式が偽であれば、while ブロックは繰り返しを終了します。

```
while_block ::= "{" "while" expression "|" jobflow_expression "}"
```

ジョブフロー式の中で break ジョブが実行されると、ループを終了します。continue ジョブが実行されると、ジョブフロー式の後続の処理をスキップして、式の評価に戻ります。

while ブロック終了時の `$STATUS` は常に 0 にセットされます。

choice ブロック

choice ブロックは複数のイベントジョブを待ち、いずれかが実行可能状態になると、そのイベントジョブに後続するジョブフロー式を実行します。

```
choice_block      ::= "{" "choice" "|" eventflow_expression+ "}"  
eventflow_expression ::= event_job ("->" | "=>" | "->>" | "=>>") jobflow_expression
```

複数のイベントジョブが同時に実行可能状態になった場合は、先頭に近いイベントジョブが優先されます。

fork ブロック

fork ブロックは、ジョブフロー式を子プロセスとして実行開始します。

```
fork_block ::= "{" "fork" "|" jobflow_expression+ "}"
```

fork ブロックは detach() していない全ての子プロセスが実行完了するまで待ちます。fork ブロック終了時の `$RESULT` には fork ブロックで生成した全ての子プロセスのリストがセットされ、`$STATUS` には異常終了した子プロセスの個数がセットされます。すべての子プロセスが正常終了すると `$STATUS` は 0 になります。

fork ブロックによって生成されるプロセスが、プロセス数の制限を超える場合、他のプロセスが実行完了し、プロセス数制限内に収まるまで fork ブロックは実行を待ちます。

pfor ブロック

pfor ブロックはリストやディレクトリ、テーブルなどの複数の要素を含むオブジェクト内の要素について、子プロセスを生成して並行処理を行います。

```
pfor_block ::= "{" "pfor" IDENTIFIER "in" expression "|" jobflow_expression "}"
```

式は pfor ブロックの実行時に最初の一度だけ評価されます。式の評価結果は反復可能なオブジェクトである必要があり、それ以外の場合は実行エラーとなります。オブジェクトの各要素について子プロセスが生成され、各子プロセス中で対応する要素が識別子 (IDENTIFIER) で示されるローカル変数に代入されて、子プロセスの実行が開始されます。式の評価結果が整数値 N の場合、ローカル変数が 0 から $N-1$ のそれぞれで子プロセスの実行が開始されます。ただし、 N が 0 もしくは負の場合、子プロセスは実行されません。

pfor ブロックは detach() していない全ての子プロセスの実行が終了するまで待ちます。pfor ブロック終了時の \$RESULT には pfor ブロックで生成した全ての子プロセスのリストがセットされ、\$STATUS には異常終了した子プロセスの個数がセットされます。すべての子プロセスが正常終了すると \$STATUS は 0 になります。

pfor ブロックによって生成されるプロセスが、プロセス数の制限を超える場合、他のプロセスが実行完了し、プロセス数制限内に収まるまで pfor ブロックは実行を待ちます。

session ブロック

session ブロックは、リモートサーバとのセッションを開始します。

```
session_block ::= "{" "session" IDENTIFIER "|" jobflow_expression "}"
```

セッションブロックが実行されると、まず、制御変数によって指定されたリモートサーバとのセッションを開始します。セッションでリモートサーバとのやりとりを行うためのセッションチャンネルが、識別子 (IDENTIFIER) で示されるローカル変数に代入されます。このセッションチャンネルに対して、文字列を送信 (send) すると、リモートサーバ側に文字列が送信されます。また、リモートサーバ側からの出力を取得するには、イベントジョブを用いてセッションチャンネルからデータを取得します。リモートサーバからの出力は行単位のメッセージとしてセッションチャンネルに格納されていきます。したがって、セッションチャンネルからのメッセージの読み込みは 1 行ずつとなります。

セッションブロックを抜けるとセッションが終了し、とセッションチャンネルがクローズされます。以後、セッションチャンネルに対する送信はエラーとなります。また、セッションチャンネルからのメッセージの読み込みもエラーとなります。(ただし、セッションクローズまでにリモートサーバから出力されたメッセージは読み込むことができます)

セッションブロック内で break を呼び出すと、セッションをクローズして、ブロックを終了します。

セッションブロックが正常に終了すると、\$STATUS に 0 がセットされます。また、\$RESULT には、セッションチャンネルが格納されます。セッションチャンネルの data 属性には、未読み込みのデータが格納されます。(メッセージの各行は連結され、1 つの文字列データとなります)

セッションの開始に失敗した場合は、セッションブロックの中は実行されずにセッションブロックは終了

し、\$STATUS には 非 0 がセットされます。また、\$ERROR にはエラーの原因を示すメッセージが格納されます。

注釈: セッションブロック内で、コマンドジョブを実行することは可能ですが、別のセッションを新たに開始することはできません。

以下では、su コマンドを実行して、対話的に処理を行うジョブフローのプログラム例を示します。

```
[__host__ = 'server.exmaple.com', __user__ = 'testuser', __password__ = 'password',
__use_pty__ = true    # su コマンド実行には PTY が必要なため true にセット
] ->
# server.example.com にログインしてセッションを開始
{ session s |
    [s.send: 'LANG=C su\n'] ->                # su コマンドを実行
    <s ?? 'Password: '> ->                    # パスワードプロンプトを待つ
    [s.send: 'root_password\n'] ->            # root のパスワードを送信
    <s ?? g'*]# '> ->                        # root プロンプトを待つ
    [s.send: 'service httpd restart\n'] ->    # httpd サービスを再起動
    <s ?? g'*]# '> ->                        # root プロンプトを待つ
    [s.send: 'exit\n']                        # root を 抜ける
} ->
print('OK')
```

try ブロック

try ブロックは、ブロック内のジョブフロー実行中に発生した異常終了をキャッチして、処理を続行します。

```
try_block ::=  "{" "try" "|" jobflow_expression "}"
```

try ブロックで囲まれたジョブフローが正常に終了した場合は、try ブロックは \$STATUS に 0 をセットし、異常終了した場合は、\$STATUS に 1 をセットします。また、\$DEBUG にデバッグ情報を格納します。

try ブロック内のジョブフローを実行中に exit が呼び出された場合は、ジョブフローは常に終了します。また、try ブロック内のジョブフローを実行中に、ユーザーによってジョブフローの実行が中止された場合も、ジョブフローは実行を終了します。

4.7 ジョブフロー式

ジョブフロー式は、ジョブを結合子で結びつけた式です。

```
jobflow_expression ::=  jobflow_expression "->" job
                     |  jobflow_expression "=>" job
                     |  jobflow_expression "->>" job
                     |  jobflow_expression "=>>" job
```

4.7.1 結合子

結合子には複数の種類があり、ジョブが失敗した場合にジョブフローの処理を継続するかどうか異なります。

以下に結合子の一覧と、ジョブが失敗した時の振る舞い、処理を継続する場合の状態変数の値を示します。

結合子	コマンド異常終了時	リモートログイン失敗時
->	強制終了	強制終了
=>	処理継続 \$STATUS >= 1 \$RESULT = (stdout) \$ERROR = (empty)	強制終了
->>	強制終了	処理継続 \$STATUS = -1 \$RESULT = (empty) \$ERROR = (error message)
=>>	処理継続 \$STATUS >= 1 \$RESULT = (stdout) \$ERROR = (empty)	処理継続 \$STATUS = -1 \$RESULT = (empty) \$ERROR = (error message)

リモートコマンドの実行ステータスが0以外の場合は、上表の「コマンド異常終了時」の動作となります。

このとき、リモートコマンドの実行ステータスの値が \$STATUS の値となります。

リモートアクセスがタイムアウトした場合や、ジョブフロー上で指定された IP アドレス、ユーザ名、パスワード等が正しくなかった場合は、上表の「リモートログイン失敗時」の動作となります。

注釈: Windows ノードに対してリモートコマンドを実行したとき、その実行ステータスは本来は符号あり 32bit 値ですが、Kompira では符号なし 32bit 値として扱います。

注釈: 1 つのジョブフロー式で結合できるジョブの最大数は 4096 個です。ブロックの中は別カウントになるので、例えば以下のジョブフロー式では 6 個となります。

```
x -> y -> { if true | a -> b -> c } -> z -> v -> w
```

バージョン 1.5.4.post5 で変更: リモートログイン失敗時の \$ERROR にはエラーの原因を示すメッセージが格納されます。

4.8 ジョブフロープログラム

ジョブフロープログラムは、0 個以上のパラメータ宣言とそれに続くジョブフロー式から構成されます。ジョブフロー式が空の場合は、ジョブフロープログラムは実行省略することができます。

```
jobflow_program ::= (parameter_declaration)* jobflow_expression?
```

4.8.1 パラメータ宣言

パラメータ宣言は、以下の形式をとります。

```
parameter_declaration ::= "|" IDENTIFIER ("=" expression)? "|"
```

パラメータ宣言で、parameter_declaration = expression の形式がある場合、そのジョブフローはデフォルトのパラメータを持ちます。デフォルト値を持つパラメータに対しては、ジョブフロー呼び出しの際に対応するパラメータが省略されると、パラメータの値はデフォルト値で置き換えられます。デフォルトパラメータ式は、ジョブフロー呼び出しのたびに値評価されます。

第5章 Kompira 標準ライブラリ

著者

Kompira 開発チーム

このライブラリリファレンスマニュアルでは、Kompira に標準で付属しているライブラリについて説明します。

5.1 組み込み関数/ジョブ

Kompira のジョブには組み込みジョブ、組み込み関数としてあらかじめ定義されているものがあります。

組み込みジョブは、ジョブマネージャを介さないローカルな組み込みジョブと、ジョブマネージャによって実行されるリモートの組み込みジョブの2種類に分けられます。

5.1.1 ローカル組み込みジョブ

ローカル組み込みジョブは、ジョブマネージャが動作していなくても実行可能なジョブです。

self()

自分自身のジョブフローを最初から再実行します。再実行のとき、そのジョブフローのパラメータは変更しません。また、多重度指定されているジョブフローの場合、ロックを保持したまま再実行します。

print([message[, args, ...]])

コンソールに message 文字列を出力し、改行します。

複数の引数を与えた場合、複数のメッセージ文字列を空白文字で区切って出力します。引数を全て省略すると、改行だけします。

sleep(timeout)

プロセスを timeout で指定した秒数だけスリープします。timeout が日時型の場合は、その日時までスリープします。

exit([status=0[, result="", error=""]])

プロセスを終了します。status で終了ステータスコードを指定することもできます。result でプロセス終了時の実行結果を指定します。error で、エラーメッセージを指定することもできます。

return([result="", status=0[, error=""]])

ジョブフローの呼び出し元に制御を戻します。result で実行結果を指定します。status で終了ステータスコードを指定することもできます。error でエラーメッセージを指定することもできます。

abort(*[message]*)

コンソールにメッセージを出力し、ジョブを異常終了させます。終了ステータスコードは 1 にセットされます。

assert(*value**[, message]*)

value が真であることを確かめ、そうでない場合には、コンソールに *message* を出力し異常終了します。

detach()

実行中の自身のプロセスを親プロセスから切り離します。これによって、親プロセス側は子プロセスの終了を待たずに処理を先に進めることができます。

suspend()

実行中のプロセスを一時停止状態にします。

urlopen(*url**[, ...options]*)

options には、*user*, *password*, *data*, *params*, *files*, *timeout*, *encode*, *http_method*, *verify*, *quiet*, *headers*, *cookies*, *charset*, *binary*, *proxies* を指定することができます。

引数で指定した *url* に対して、HTTP リクエストを送信し、結果を取得します。

user, *password* を指定すると、Basic 認証によるアクセスを行います。

data には POST リクエストで送信するデータを辞書型で指定することができます。送信データは *encode* 引数で指定した方式でエンコードされます。

params に辞書を渡すと URL のクエリ文字列として展開されます。例えば以下のように呼び出すと、実際にアクセスする URL は `http://example.com?key1=value1&key2=value2` となります。:

```
urlopen(url='http://example.com', params={key1='value1', key2='value2'})
```

files には、アップロードするファイルを渡すことができます。ファイルは *name* と *data* というフィールドを持つ辞書、ファイル名とコンテンツのリスト、Kompira サーバ上のファイル名、または添付ファイルフィールド、のいずれかの形式で指定することができます。:

```
files={file={name='filename', data='content'}}
files={file=['filename', 'content']}
files={file="/tmp/filename.xls"}
files={file=./attached_file.attached1}
```

なお、ここで *files* に渡す辞書のキー（上では *file*）は送信先 form のファイルフィールドの名前に合わせて指定してください。複数ファイルを受け付けるファイルフィールドに対しては、リスト形式でフィールド名とファイルを並べて渡すこともできます。:

```
files=[['file', {name='filename1', data='content1'}],
       ['file', {name='filename2', data='content2'}]]
```

この場合は、内側のフィールド名とファイルもリストで指定してください。*files* が指定された場合は `multipart/form-data` 形式でエンコードされます。

timeout には、タイムアウトするまでの時間を秒単位で指定します。

encode には、エンコードタイプとして "json" を指定することができます。data が指定され encode が "json" のとき、HTTP リクエストの Content-Type: ヘッダには自動的に application/json が設定されます。encode 引数を省略した場合、送信データは application/x-www-form-urlencoded 形式でエンコードされます。files が指定されている時に encode に "json" を指定するとエラーになります。

http_method には、HTTP リクエストのメソッドを 'GET', 'POST', 'PUT', 'DELETE', 'HEAD' のいずれかから指定します。http_method を省略したとき、data または files が指定されている場合は POST メソッド、指定されていない場合は GET メソッドとなります。

verify に true を指定すると、指定した URL が https アクセスである時に SSL 証明書のチェックを行います。不正な SSL 証明書を検出すると urlopen ジョブはエラーになります。verify のデフォルト値は false です。

quiet に true を指定すると、verify オプションが true 時に、https アクセスした際に表示される警告メッセージを抑止します。

headers には、HTTP リクエストに設定するヘッダ情報を辞書型の値で渡すことができます。

cookies には、サーバに渡すクッキーを辞書型の値で渡します。

charset には、レスポンスとして期待する文字コードを指定することができます。

プロキシサーバ経由で HTTP リクエストを送信する必要がある場合は、以下の例の用にプロキシサーバの URL の辞書を proxies パラメータに渡します。:

```
[proxies = {'http': 'http://10.10.1.10:3128', 'https': 'http://10.10.1.10:1080'}
->] ->
urlopen('http://www.kompira.jp', proxies=proxies)
```

取得したコンテンツがバイナリであるかどうかは Content-Type で判断します。Content-Type が image|audio|video で始まる時、または octet|binary を含む時はバイナリと判断します。ただし binary に true を指定すると、Content-Type にらずコンテンツをバイナリとして扱います

この組み込みジョブは、以下の要素を持つ辞書型の値を返します。

フィールド名	意味
url	レスポンスの URL
code	結果ステータスコード
version	HTTP バージョン (HTTP 1.1 なら 11 という数値になります)
text	レスポンスの内容 (エンコード情報をもとにレスポンス本文をテキストにデコードしたもの。ただし、バイナリコンテンツの場合は空文字になります)
content	レスポンスの内容 (バイナリのままのレスポンスの本文)
body	レスポンスの内容 (コンテンツがバイナリであると判断したとき content と同じ値になり、テキストであると判断したときは text と同じ値になります)
encoding	エンコード情報
headers	レスポンスに含まれるヘッダ情報 (辞書型)
cookies	サーバから渡されたクッキー値 (辞書型)
history	リダイレクトがあった場合にその履歴情報 (リスト型)
binary	バイナリコンテンツであるかの真偽値

mailto(*to, from, subject, body*[, ...options])

options には、*cc, bcc, reply_to, html_content, attach_files, parents, headers, charset, reply_to_all, inline_content, placeholder, as_string, smtp_server* を指定することができます。

メールを送信します。

to には、送信先メールアドレスを文字列で指定します。複数アドレスに送信したい場合、送信先メールアドレスを要素に持つリストで指定します。from には、送信元のメールアドレスを指定します。subject には、メール表題の文字列を指定します。body には、メール本文の文字列を指定します。cc と bcc には、Cc/Bcc 先メールアドレスをそれぞれ指定します。複数アドレスを指定したい場合は、リストを渡します。reply_to には、返信先のメールアドレスを指定します。

html_content を指定すると HTML 形式 (text/html) のメールを送信します。html_content を省略または null を指定した場合、body をテキスト形式 (text/plain) で持ったメールを送信します。body および html_content の両方を null にすると、mailto ジョブはエラーになります。attach_files には、メールに添付するファイルオブジェクト、もしくはファイルオブジェクトの一覧を渡すことができます。

parents に親メッセージ (mail_parse した結果の辞書) を渡すと、そのメッセージに対する返信としてのメールを送信します。このときメールヘッダ In-Reply-To: および References: が適切に設定されます。また宛先として親メッセージの (設定されていれば) Reply-To: または From: に設定されたアドレスが設定されます。複数の親メッセージを参照する場合はリストで渡してください。parents でメールを返信する際に reply_to_all を true を指定すると、「全員に返信」扱いとして親メッセージの To: と Cc: に指定された宛先を引き継いで設定します。

headers に辞書を渡すと、辞書の各キーをヘッダ項目としてメールヘッダに追加します。

charset で送信時の文字コードを指定できます。省略時は UTF-8 です。

inline_content に true を指定すると添付ファイルをインライン展開します。このときメール本体の MIME mixed サブタイプは "related" となり、各添付ファイルの Content-Disposition ヘッダは "inline" となります。また、メール本文 (body, html_content) 中に "%{Content-ID#num}" (num 部分は attach_files で指定した添付ファイルのインデックス) または "%{Content-ID:filename}" (filename 部分は添付ファ

イルのファイル名)と指定されたプレースホルダがある場合、各添付ファイルに自動的に割り当てられた Content-ID (両端の'<'と'>'を取り除いたもの)に置換されます。例えば、attach_files で画像ファイルを1つ添付し、html_content に '' という記述を含んでおくと、対応したメールクライアントではその記述部分に添付した画像ファイルがインラインで表示されるようになります。

as_string に true を指定するとメールを実際に送信するかわりに、メールヘッダを含むメッセージ全体を文字列化します。結果の文字列は\$RESULT で参照できます。

smtp_server に SMTP サーバ型オブジェクトを渡すと、その SMTP サーバを利用してメール送信を行います。引数を省略した場合は、システム設定で指定されている SMTP サーバが用いられます。null を渡した場合は、システム設定によらず localhost (Kompira がインストールされているサーバ) 上で稼働している SMTP サーバを用いてメール送信します。

mailto ジョブで送信したメールの User-Agent ヘッダは "Kompira ver X.XX" となります。"X.XX" の部分は Kompira のバージョンが入ります。

注釈: from が省略された場合、次の優先順位で送信元のメールアドレスを決定します。

- (1) プロセスオーナーのメールアドレス
 - (2) /system/config の管理者メールアドレス
 - (3) `webmaster@localhost`
-

download(from_file, to_path)

添付ファイルフィールド (File, Array<File>, Dictionary<File>型のフィールド) のファイルを指定したパスにダウンロードします。

from_file には、ダウンロード元の添付ファイルフィールドオブジェクトを指定します。to_path には、ダウンロード先のファイルパスを指定します。ダウンロード先はジョブマネージャの動作しているサーバ上のファイルシステムになります。ダウンロード先のファイルパスがディレクトリを指している場合、ファイル名は添付ファイルのファイル名となります。

以下は Kompira オブジェクト/root/Package の attached フィールドに添付されたファイルをローカルの/tmp ディレクトリにダウンロードします。:

```
download(from_file=/root/Package.attached, to_path='/tmp/')
```

upload(from_path, to_object, to_field[, to_subscript])

添付ファイルフィールド (File, Array<File>, Dictionary<File>型のフィールド) に指定したファイルをアップロードします。実行結果として添付ファイルのファイル名を返します。

from_path には、ダウンロード元のファイルパスを指定します。to_object には、添付先の Kompira オブジェクトを指定し、to_field で添付先 Kompira オブジェクトの添付ファイルフィールド名を指定します。添付ファイルフィールドが配列 (Array<File>) や 辞書 (Dictionary<File>) の場合は、to_subscript に配列のインデックスや辞書のキーを指定できます。to_subscript を省略すると、配列ではファイルを追加し、辞書ではファイル名をキーとして扱います。

以下はローカルに置かれたファイル/tmp/foo.tar.gz を/root/Package オブジェクトの attached フィールドにアップロードします。:

```
upload(from_path='/tmp/foo.tar.gz', to_object=/root/Package, to_field='attached')
```

5.1.2 リモート組み込みジョブ

リモート組み込みジョブは、ジョブマネージャを介して動作する組み込みのジョブです。ジョブマネージャが動作していない場合は、ジョブマネージャが起動するまで実行が待ち状態となります。

また、リモート組み込みジョブでは、制御変数からリモートホストの接続情報を参照します。

put(local_path, remote_path) : Array<String>

ジョブマネージャが動作しているホストからリモートホストにファイルを転送します。結果は転送先のファイルパスのリストを返します。

local_path には、転送元のファイルパスを指定します。ワイルドカードを用いて複数ファイルを転送することも可能です。local_path を相対パス指定した場合、ジョブマネージャが動作しているディレクトリ (通常はルートディレクトリ) からの相対パスとなります。

remote_path には、転送先のディレクトリパスもしくはファイルパスを指定します。remote_path を相対パス指定した場合、ログインユーザーのホームディレクトリからの相対パス、もしくは、__dir__ 制御変数で指定したパスからの相対パスとなります。

get(remote_path, local_path) : Array<String>

リモートホストからジョブマネージャが動作しているホストにファイルを転送します。結果は転送先のファイルパスのリストを返します。

remote_path には、転送元のファイルパスを指定します。ワイルドカードを用いて複数ファイルを転送することも可能です。

local_path には、転送先 (ジョブマネージャ側) のファイルパスか、ディレクトリパスを指定します。

reboot([wait=120])

リモートホストを再起動します。

wait には、リモートホストが再起動するまで待つ最大時間を指定 (単位は秒) します。

reboot ジョブは、sudo ジョブが実行できるユーザでなければ実行できません。

5.1.3 組み込み関数

組み込み関数は、Kompira の式として使用できる関数です。

式の中に記述する他に、組み込みジョブと同じように単独で使用することもできます。単独で使った場合、結果は\$RESULT に挿入されます。

なお、コロン (:) の右側は、関数が返す結果の型を示しています。

now() : Datetime

現在のローカルな日時を返します。

current() : *Process*

現在実行している自身のプロセスオブジェクトを取得します。

channel() : *Channel*

データを複数プロセス間で送受信するためのオンメモリのチャンネルオブジェクトを作成します。

datetime(dt_str_or_date[, dt_fmt_or_time, zone]) : *Datetime*

dt_str_or_date で指定された文字列から日時型データに変換します。dt_fmt_or_time で、フォーマット文字列を指定することも可能です。dt_str_or_date に日付型データを渡し、dt_fmt_or_time に時刻型データを渡すことで、これらを合わせた日時型データを構成することができます。zone で、タイムゾーン ID を指定することが可能です。

フォーマットの書式指定は、C 言語の strftime() 関数に準じています。以下に例を示します。

```
[dt = datetime('2015 年 1 月 1 日 10 時 30 分 05 秒', '%Y 年%m 月%d 日%H 時%M 分%S 秒',
↪ 'Asia/Tokyo')] ->
print(dt) ->
[dt2 = datetime(dt.date, dt.time)] ->
print(dt2)
```

注釈: dt_fmt を省略した場合、日付文字列のフォーマットは以下のような ISO 8601 形式として変換を試みます。

YYYY-MM-DD[T jhh:mm:ss(.mmmmmm)?]([Z][+-]jhh(:)?mm)?

日付けと時刻のセパレータは、T または空白が使えます。秒、マイクロ秒、タイムゾーンの指定は省略可能です。

zone を省略した場合、ローカルのタイムゾーンが指定されたとみなされます。

date(date_str[, dt_fmt]) : *Date*

date_str で指定された文字列から日付データに変換します。dt_fmt で、フォーマット文字列を指定することも可能です。

フォーマットの書式指定は、C 言語の strftime() 関数に準じています。

time(time_str[, dt_fmt]) : *Time*

time_str で指定された文字列から時刻データに変換します。dt_fmt で、フォーマット文字列を指定することも可能です。

フォーマットの書式指定は、C 言語の strftime() 関数に準じています。

timedelta(days=0, hours=0, minutes=0, seconds=0, microseconds=0) : *Timedelta*

経過時間を表すデータを作成します。timedelta 型の値と datetime 型の値は加算や減算が可能です。

int(x=0) : *Integer*

引数 x で与えられた文字列を整数型に変換します。

float(x=0.0) : *Float*

数または文字列 x から生成された浮動小数点数を返します。

pattern(pattern, typ='r', mode='') : *Pattern*

引数 pattern で与えられるパターンオブジェクトを生成します。typ はパターンの種別を表し、'r' (正規表現パターン)、'g' (glob パターン)、'e' (完全一致パターン) のいずれかを指定することができます。mode に'i' を指定すると大小文字を区別しないパターン照合となります。

path(str_or_obj[, args, ...]) : *Object*

パス名を表す文字列 str_or_obj から実際の Kompira オブジェクトを返します。str_or_obj には文字列の配列を指定することができます。配列、もしくは複数の引数を与えた場合、各要素を結合しパス名として解釈します。

以下の例はルートディレクトリ直下のオブジェクトを列挙します。使用例

```
{ for p in path('/') | print(p) }
```

str_or_obj に相対パスを指定した場合は、このジョブフローがあるディレクトリから相対位置にある Kompira オブジェクトを参照します。以下の例は、このジョブフローがあるディレクトリのパスを表示します。

使用例

```
print(path('..'))
```

また、str_or_obj には Kompira オブジェクトを指定することもできます。以下の例では、パラメータ 'dir' で指定された Kompira オブジェクトの親ディレクトリに含まれるオブジェクト、すなわち 'dir' で指定されたオブジェクトと同一階層にある Kompira オブジェクトを列挙します。

使用例

```
|dir = /home/guest|
{ for sibling in path(dir, '..') | print(sibling) }
```

user(user) : *User*

ユーザー名 user を持つ User オブジェクトを返します。user に整数値を与えると、その値をユーザ ID として持つ User オブジェクトを返します。User オブジェクトを与えると、それをそのまま返します。

group(group) : *Group*

グループ名 group を持つ Group オブジェクトを返します。group に整数値を与えると、その値をグループ ID として持つ Group オブジェクトを返します。Group オブジェクトを与えると、それをそのまま返します。

string(obj) : *String*

オブジェクト obj を文字列に変換します。

bytes([b[, encoding='utf-8']]) : *Binary*

b が整数値の場合、各バイト値が 0 で長さ b のバイナリ (バイト列) を生成します。b が文字列の場合、encoding で指定されたエンコーディングで符号化されたバイナリを生成します。b が 0-255 までの整数を各要素とする配列の場合、対応するバイナリを生成します。b がバイナリの場合、その値をそのまま返します。

type(obj) : String

オブジェクト obj の型名を返します。

decode(data[, encoding='utf-8']) : String

バイナリデータ data を encoding で指定された文字コード系で文字列にデコードします。

encode(message[, encoding='utf-8']) : Binary

文字列 message を encoding で指定された文字コード系でバイナリデータにエンコードします。

length(obj) : Integer

obj で渡された配列の長さを取得します。

has_key(obj, key) : Boolean

obj で渡された辞書データやオブジェクトに、指定されたキー key でフィールドアクセス可能かどうかをチェックします。

json_parse(data[, strict=false]) : any

JSON 形式で直列化された文字列を Kompira のオブジェクトに変換します。

使用例

```
[str = '[1,2,3,true,"foo","bar"]']
-> [obj = json_parse(str)]
-> { for elem in obj | print(elem) }
```

strict が true の場合、制御文字が文字列に含まれているとエラーになります。strict が false の場合、制御文字を文字列に含めることができます。ここで言う制御文字とは、'\t', '\n', '\r', '\0' を含む 0-31 の範囲のコードを持つ文字のことです。

バージョン 1.6.2.post3 で追加: パラメータ strict が追加されました。

json_dump(obj[, ensure_ascii=true, indent=null]) : String

Kompira のオブジェクトを JSON 形式で直列化された文字列に変換します。

ensure_ascii が true の場合、出力では入力された全ての非 ASCII 文字はエスケープされます。ensure_ascii が false の場合、これらの文字はそのまま出力されます。

indent が非負の整数または文字列であれば、JSON の配列要素と辞書要素はそのインデントレベルで見やすく変換されます。インデントレベルが 0 か負数または "" であれば改行だけが挿入されます。

バージョン 1.6.2.post3 で追加: パラメータ ensure_ascii, indent が追加されました。

mail_parse(data) : Dictionary

MIME 形式の文字列を Kompira の辞書オブジェクトに変換します。

メールのヘッダ情報に加え、'Body' キーでメールの本文に、'Filename' キーでファイル名にアクセスすることができます。(添付ファイルが存在しない場合は'Filename' キーは null となります)

メールの本文は、Content-Type が Text/plain で、かつ添付ファイルでない場合に限り utf-8 形式のエンコードされます。

Content-Type が multipart である場合は、'Is-Multipart' キーが true になり、'Body' キーの要素が Kompira 辞書オブジェクトの配列となります。

iprange(*address*) : *Array<String>*

CIDR 表記のネットワークアドレスを IP ネットワークオブジェクトに変換します。

使用例

```
{ for ip in iprange('192.168.0.1/24') |
  [__host__ = ip] ->
  ['hostname'] ->> []
}
```

警告: 組み込みジョブ iprange() は近い将来廃止される予定です。

5.2 Kompira オブジェクト

Kompira が扱う様々なデータは、ディレクトリ構造を備えた Kompira のファイルシステム上に Kompira オブジェクトとして格納されます。Kompira オブジェクトは、その型毎に固有のフィールドやメソッドを備えており、ジョブフロー上から操作することが可能です。

5.2.1 フィールド型

Kompira オブジェクトのフィールドで利用できる型は以下のとおりです。なお、コロン (:) の右側は、当該フィールドをジョブフローから参照した場合のデータの型を示しています。

String : *String*

文字列のフィールドを表します。

Binary : *Binary*

バイナリのフィールドを表します。16 進表記で入力します。

Integer : *Integer*

整数のフィールドを表します。整数以外の値は入力できません。未入力の場合は、null 値となります。

Float : *Float*

浮動小数点数のフィールドを表します。整数を入力すると浮動小数点に変換されます。未入力の場合は、null 値となります。

Boolean : *Boolean*

真偽値のフィールドを表します。フォーム上ではチェックボックスとして表示され、チェック時が true、未チェック時が false に対応します。

Enum : *String*

選択肢フィールドを表します。選択肢の一覧はフィールド修飾子によって規定します。

Text : *String*

テキストフィールドを表します。

LargeText : *String*

大きめのテキストフィールドを表します。

Password : *String*

パスワードフィールドを表します。フィールド表示時に文字列は隠されます。

File : *File*

添付ファイルフィールドを表します。添付ファイルのアップロードやダウンロードができるようになります。

Object : *Object*

Kompira オブジェクトフィールドを表します。Kompira オブジェクトを選択肢の中から選べるようになります。フィールド修飾子を指定することで、特定の型を持つオブジェクトや、特定のディレクトリ下にあるオブジェクトに選択肢を制限することも可能です。

Datetime : *Datetime*

日時フィールドを表します。入力する日時情報の形式は以下のとおりです。

フォーマット	例
%Y-%m-%d %H:%M:%S	2006-10-25 14:30:59
%Y-%m-%d %H:%M	2006-10-25 14:30
%Y-%m-%d	2006-10-25
%m/%d/%Y %H:%M:%S	10/25/2006 14:30:59
%m/%d/%Y %H:%M	10/25/2006 14:30
%m/%d/%Y	10/25/2006
%m/%d/%y %H:%M:%S	10/25/06 14:30:59
%m/%d/%y %H:%M	10/25/06 14:30
%m/%d/%y	10/25/06

Date : *Date*

日付フィールドを表します。

Time : *Time*

時刻フィールドを表します。

IPAddress : *String*

IP アドレスフィールドを表します。IPv4 アドレス形式の入力に対応しています。

Email : *String*

メールアドレスフィールドを表します。

URL : *String*

URL フィールドを表します。

Array<T> : *Array*

各要素の型が T の配列フィールドを表します。複数の T 型の要素を入力できます。(Array は Array<String>フィールドと同義です)

型変数 T に指定できる型は、String、Binary、Integer、Float、Boolean、Enum、Password、Object、Datetime、Date、Time、IPAddress、EMail、URL のみとなります。

Dictionary<T> : *Dictionary*

辞書フィールドを表します。複数のキーと値を入力できます。値の型は T となります。(Dictionary は Dictionary<String>フィールドと同義です)

バージョン 1.6.0 で追加: Binary、Float、Array<T>、Dictionary<T>フィールドが新たに追加されました。

5.2.2 フィールド修飾子

フィールド修飾子は、フィールド型に対してさらに細かいフィールド表示の制御や制約を加えます。フィールド修飾子は以下に示すような JSON オブジェクトの形式で記述します。

```
{ "<フィールド修飾子名 1>" : <値 1>, "<フィールド修飾子名 2>" : <値 2>, ... }
```

フィールド修飾子は以下の種類があります。

なお、コロン (:) の右側は、各フィールド修飾子で記述する型を示しています。

default : *any*

- Target fields: any

フィールドのデフォルト値を指定します。

invisible : *Boolean*

- Target fields: any

フォームやビューからフィールドを隠します。

help_text : *String*

- Target fields: any

フィールドについての説明を記述します。この修飾子を指定した場合、オブジェクトの編集時に指定したテキストが表示されます。

object : *String | Array | Dictionary*

directory : *String | Array | Dictionary*

- Target fields: Object

オブジェクト型フィールドにおいて、選択肢を絞り込みます。

修飾子 "object" では、型オブジェクトのパスを記述するとその型を持つオブジェクトが選択肢として表示されます。また、ディレクトリやテーブルのパスを指定すると、そのオブジェクトの子オブジェ

クトが選択肢として表示されます。以下にジョブフロー型のオブジェクトを選択肢とする例を示します。

```
{ "object" : "/system/types/Jobflow" }
```

修飾子 "directory" では、ディレクトリやテーブルのパスを記述すると、その子孫オブジェクトが選択肢として表示されます。以下に /user 配下にある全てのオブジェクトを選択肢とする例を示します。

```
{ "directory" : "/user" }
```

先頭に "~" または "~(ユーザ名)" と記述したパスを指定すると、その部分がユーザのホームディレクトリに展開されます。ユーザ名を省略した場合はログイン中のユーザが対象になります。

```
{ "object" : "~" }
{ "directory" : "~" }
```

これらの修飾子では、配列形式で複数のオブジェクトを指定することができます。

```
{ "object" : ["~", "/user"] }
{ "directory" : ["~", "/user"] }
```

複数のディレクトリや型オブジェクトが指定されている場合は、それぞれで OR 条件となります。ディレクトリと型オブジェクトが指定されている場合は、AND 条件となります。

修飾子 "object" と修飾子 "directory" を合わせて指定することで、あるディレクトリ配下にある特定の型のオブジェクトを選択させる、といったことが可能になります。

例

```
{ "object" : "/system/types/NodeInfo", "directory" : "~" }
```

存在しないまたは読み込み権限のないオブジェクトを指定した場合は無効になります。有効なパスを1つも記述していない場合は、選択肢が空になります。これは、いずれにも合致しない条件で絞り込まれた、という意味となります。

例

```
{ "object" : "/invalid_path" }
{ "directory" : "/invalid_path" }
```

null が指定されている場合は、絞り込みをしないこととなります。これは修飾子を指定していないことと同じ意味となります。

例

```
{ "object" : null }
{ "directory" : null }
```

このフィールドにおける選択肢の絞り込み条件を固定ではなく、他のオブジェクトの状態によって切り替えたい場合、以下に示すいくつかの方法があります。

別のオブジェクトが持つ Object 型フィールドに記録されたオブジェクトをもとに、このフィールドの選択肢の絞り込み条件を切り替えたい場合は、以下のようにパス表記に続けて [reference_field] とフィールド名を指定することができます。

例

```
{ "object" : "/foo/bar/SomeObject[reference_field]" }
{ "directory" : "/foo/bar/SomeObject[reference_field]" }
```

この場合、reference_field という名前のフィールドを「参照フィールド」と言います。

参照フィールドに記録されたオブジェクトが、この修飾子 "object" または "directory" として適用されることになります。ただし、参照フィールドにディレクトリやテーブルまたは型オブジェクトが記録されていないと、修飾子として指定するオブジェクトとしては有効ではないことに注意してください。

なお、Config 型オブジェクトの設定項目としての Object 型フィールドを参照したい場合は、Config 型オブジェクトのパス指定に .data という属性名を付与する必要があります。

例

```
{ "object" : "/foo/bar/SomeConfig.data[reference_field]" }
{ "directory" : "/foo/bar/SomeConfig.data[reference_field]" }
```

同じオブジェクト内の別の Object 型フィールドの選択に応じて、このフィールドで絞り込む選択肢を切り替えたい場合は、以下のようにパス表記の代わりに \${depend_field} とフィールド名を指定することができます。

例

```
{ "object" : "${depend_field}" }
{ "directory" : "${depend_field}" }
```

この場合、depend_field という名前のフィールドを「依存フィールド」と言います。

依存フィールドで選択されたオブジェクトが、この修飾子 "object" または "directory" として適用されることになります。編集画面においては、依存フィールドを選択すると、このフィールドの選択肢が切り替わるためにその時点の選択は一旦リセットされます。

ただし依存フィールドで選択されたオブジェクトがディレクトリやテーブルまたは型オブジェクトでない場合、修飾子として指定するオブジェクトとしては有効でないことに注意してください。依存フィールド側にも、型を限定するフィールド修飾子を指定しておくことを推奨します。

また、依存フィールドで選択したオブジェクトが Object 型フィールドを持っているとき、そのフィールドに記録されているオブジェクトを参照フィールドとして指定することもできます。

例

```
{ "object" : "${depend_field}[reference_field]" }
{ "directory" : "${depend_field}[reference_field]" }
```

依存フィールドで選択された別のオブジェクトが持つ参照フィールドに記録されたオブジェクトが、この修飾子 "object" または "directory" として適用されることになります。ただし、上記と同様に参照フィールドにディレクトリやテーブルまたは型オブジェクトが記録されていないと、修飾子として指定するオブジェクトとしては有効ではないことに注意してください。

別の Enum 型または Object 型フィールドの選択に応じて、このフィールドで絞り込む選択肢を切り替える別の方法を選ぶこともできます。

例

```
{
  "object" : {
    "switch" : "${depend_field}",
    "case" : {
      "Directory": ["/system/types/Directory", "/system/types/Table"],
      "Jobflow": "/system/types/Jobflow",
      "*": null
    }
  }
}
```

この形式では "switch" 部と "case" 部が必要になります。"switch" 部は前述の依存フィールドまたは参照フィールドと同様に記述します。"case" 部は辞書形式で、パターンをキーに、マッチした場合に適用する修飾子を値として、複数の組を記述することができます。この場合、"switch" 部に記述された依存フィールドまたは参照フィールドの値を参照して、"case" 部のキーに記述されたパターンにマッチするか上から順番に評価されます。いずれかのパターンにマッチした場合、対応する値がこの修飾子として適用されます。

いずれのパターンにもマッチしなかった場合はこの修飾子としては無効になり、別の修飾子で有効な絞り込みが指定されていない限り、このフィールドの選択肢は空となります。上の例では、"case" 部の最後に任意にマッチするパターン "*" を指定することで、無効にならないようにしています。

デフォルトでは、パターン部は glob パターンで記述することができ、大文字小文字を区別します。パターンの種類は "case_pattern_type" で "exact", "glob", "regex" のいずれかを指定することができます。また "case_ignorecase" に true を指定すると、大文字小文字を区別しないようになります。

例

```
{
  "object" : {
    "switch" : "${depend_field}",
    "case" : {
      "[0-9a-f]+\.\bin": ...
    },
    "case_pattern_type": "regex",
    "case_ignorecase": true
  }
}
```

JSON 形式でフィールド修飾子として regex パターンを記述する場合は、エスケープ文字 \ を \\ として記述します。

とすることが必要であることを注意してください。

filter : *Dictionary*

- Target fields: Object

オブジェクト型フィールドにおいて、選択肢を絞り込みます。修飾子 "object" および "directory" による絞り込みに加えて、ここで指定した絞り込み条件が適用されます。絞り込み条件は *Directory.find()* メソッドのパラメータを辞書形式で指定できます。

例

```
{
  "directory" : "/user",
  "filter" : {
    "type_object" : "/system/types/TypeObject",
    "abspath__contains" : "kompira"
  }
}
```

なお、修飾子 "object" で型オブジェクトを指定していて、かつ、修飾子 "filter" でも "type_object" で型オブジェクトを指定している場合は、OR 条件として適用されます。

ただし、修飾子 "filter" の "type_object" による型オブジェクト指定では、"~" または "~(ユーザ名)" によるホームディレクトリの展開は行なわれないので注意してください。

order_by : *String*

- Target fields: Object

オブジェクト型フィールドにおいて、ソート順を指定します。ソート順には一般オブジェクトに共通の属性名 (abspath, display_name など) を指定することができます。また、"-abspath" などと先頭に "-" を記述するとソート結果が逆順となります。

例

```
{ "object" : "/system/types/NodeInfo", "order_by" : "abspath" }
```

省略した場合は、修飾子 "object" または "directory" で指定されたディレクトリに設定されたソート順が適用されます。ただし、複数のディレクトリが指定されている場合の動作は未定義となりますので、修飾子 "order_by" で明示的に指定してください。

フィールド値による並び順の指定には対応していません。また、不正なソート順を指定した場合は無視されます。

no_empty : *Boolean*

- Target fields: Object

Object 型フィールドの入力フォームにおいて、空の選択肢を許さないようにします。

例

```
{ "object" : "/system/types/TypeObject", "no_empty" : true }
```

enum : [Array](#) | [String](#) | [Dictionary](#)

- Target fields: Enum

Enum 型フィールドにおいて、選択肢となる文字列の一覧を指定します。

例

```
{ "enum" : ["サーバー", "スイッチ", "ルーター"] }
```

格納されるデータと表示名を別にする場合は、["<データ>", "<表示名>"] のペアを用いて、以下のよう指定することもできます。

```
{ "enum" : [{"SV", "サーバー"}, {"SW", "スイッチ"}, {"RT", "ルーター"}] }
```

このフィールドにおける選択肢を固定ではなく、他のオブジェクトの状態によって切り替えたい場合、以下に示すいくつかの方法があります。

別のオブジェクトが持つ Array または Dictionary 型フィールドに記録された値を、このフィールドの選択肢として切り替えたい場合は、以下のように [参照フィールド](#) として指定することができます。

例

```
{ "enum" : "/foo/bar/SomeObject[reference_field]" }
```

参照フィールドに記録された値が、この修飾子 "enum" として適用されることになります。参照フィールドが配列の場合はそのまま選択肢となります。参照フィールドが辞書の場合、その各要素のキーがデータとして値が表示名として、選択肢となります。

ただし、存在しないオブジェクトまたは読み込み権限の無いオブジェクトを指定した場合、およびオブジェクトが指定した参照フィールドを持っていない場合は、選択肢は空になります。

なお、Config 型オブジェクトの設定項目としての Array または Dictionary 型フィールドを参照したい場合は、Config 型オブジェクトのパス指定に `.data` という属性名を付与する必要があります。

例

```
{ "enum" : "/foo/bar/SomeConfig.data[reference_field]" }
```

同じオブジェクト内の別の Object 型フィールドで選択したオブジェクトが Array または Dictionary 型フィールドを持っている場合は、以下のように [依存フィールド](#) とともに参照フィールドを指定することができます。

例

```
{ "enum" : "$[depend_field][reference_field]" }
```

依存フィールドで選択された別のオブジェクトが持つ参照フィールドに記録された値をもとに、このフィールドの選択肢が切り替わります。編集画面においては、依存フィールドを選択すると、このフィールドの選択肢が切り替わるためにその時点の選択は一旦リセットされます。

別の Enum 型または Object 型フィールドの選択に応じて、このフィールドの選択肢を切り替える別の方法を選ぶこともできます。

例

```
{
  "enum" : {
    "switch" : "${depend_field}",
    "case" : {
      "Server": ["Server-A", "Server-B", "Server-C"],
      "Switch": ["Switch-A", "Switch-B", "Switch-C"],
      "Router": ["Router-A", "Router-B", "Router-C"],
      "*": ["Unknown"]
    }
  }
}
```

この形式では "switch" 部と "case" 部が必要になります。"switch" 部は前述の依存フィールドまたは参照フィールドと同様に記述します。"case" 部は辞書形式で、パターンをキーに、マッチした場合に適用する修飾子を値として、複数の組を記述することができます。この場合、"switch" 部に記述された依存フィールドまたは参照フィールドの値を参照して、"case" 部のキーに記述されたパターンにマッチするか上から順番に評価されます。いずれかのパターンにマッチした場合、対応する値がこの修飾子として適用されます。

いずれのパターンにもマッチしなかった場合はこの修飾子としては無効になり、このフィールドの選択肢は空となります。上の例では、"case" 部の最後に任意にマッチするパターン "*" を指定することで、無効にならないようにしています。

デフォルトでは、パターン部は glob パターンで記述することができます。object フィールド修飾子と同様に *case_pattern_type* でパターン種別を指定することもできます。

pattern : *String*

- Target fields: String

文字列型フィールドの入力フォームにおいて、入力可能なパターンを正規表現で指定します。

min_length : *Integer*

- Target fields: String

文字列型フィールドの入力フォームにおいて、最小長および最大長を指定します。

max_length : *Integer*

- Target fields: String

文字列型フィールドの入力フォームにおいて、最小長および最大長を指定します。

strip : *Boolean*

- Target fields: String, Text, LargeText, Password

入力された文字列の両端の空白文字を削除します。デフォルトは false です。

key_strip : *Boolean*

- Target fields: Dictionary<T>

辞書型フィールドにおいて、入力されたキー文字列の両端の空白文字を削除します。デフォルトは false です。

min_value : *Integer*

- Target fields: Integer, Float

整数型、および、浮動小数型フィールドの入力フォームにおいて、最小値を指定します。

max_value : *Integer*

- Target fields: Integer, Float

整数型、および、浮動小数型フィールドの入力フォームにおいて、最大値を指定します。

file_accept : *String* | *Array*

- Target fields: File

ファイル型フィールドにおいて、選択可能なファイル種別を指定します。

例

```
{ "file_accept" : ".xls" }
```

複数のファイル種別を指定する場合は、リストで指定します。

例

```
{ "file_accept" : [".png", ".jpg"] }
```

schemes : *String* | *Array*

- Target fields: URL

URL 型フィールドの入力フォームにおいて、許容するスキームを文字列、または、文字列のリストで指定します。デフォルトは、http, https, ftp, ftps です。

例

```
{ "schemes": "https" }

{ "schemes": ["ldap", "ldaps"] }
```

なお、URL 型フィールドに入力した URL に含まれるスキーム文字列は自動的に小文字に変換して保存されるため、schemes 修飾子で指定するスキーム文字列は小文字で指定するようにしてください。

注釈: Array<T>や Dictionary<T>フィールドでは、要素である T 型に対する修飾子を指定することが可能です。

バージョン 1.5.1 で追加: 新しいフィールド修飾子: `pattern`, `min_length`, `max_length`, `min_value`, `max_value`, `file_accept` が追加されました。

バージョン 1.6.2.post5 で追加: 新しいフィールド修飾子: `strip`, `key_strip` が追加されました。

バージョン 1.6.4 で追加: 新しいフィールド修飾子: `filter`, `order_by` が追加されました。

バージョン 1.6.4 で追加: `object`, `directory` または `enum` 修飾子で、依存フィールドおよび参照フィールドの指定ができるようになりました。

バージョン 1.6.4 で追加: `object`, `directory` または `enum` 修飾子で、"switch" および "case" によってパターンに応じて適用する修飾子を指定できるようになりました。

バージョン 1.6.4 で変更: `object` または `directory` 修飾子で指定されたオブジェクトに設定されたソート順が適用されるようになりました。

バージョン 1.6.8 で追加: 新しいフィールド修飾子: `schemes` が追加されました。

5.2.3 プロパティ

Kompira オブジェクトは、以下のプロパティを提供しています。

Object.id : *Integer*

オブジェクトの ID の値です。オブジェクト ID は、オブジェクト生成時に自動で割り当てられる一意な整数値です。更新はできません。

Object.abstractmethod : *String*

オブジェクトの絶対パスの値です。更新はできません。

Object.name : *String*

オブジェクト名の値です。オブジェクト名に使用できる文字列の形式は、Kompira ジョブフロー言語における識別子と同じです。同じディレクトリ中に同名のオブジェクトを作成することはできません。

Object.description : *String*

オブジェクトを説明する文字列となります。

Object.display_name : *String*

オブジェクトの表示名です。表示名の文字列にはオブジェクト名のような形式の制限はありません。

Object.field_names : *Array<String>*

オブジェクトが備えるフィールド名の一覧です。リスト型の値となります。更新はできません。

Object.owner : *User*

オブジェクトの所有ユーザーです。ユーザーオブジェクトとなります。

Object.created : *Datetime*

オブジェクトの作成日時です。日時型の値となります。更新はできません。

Object.updated : *Datetime*

オブジェクトの更新日時です。日時型の値となります。更新はできません。

Object.parent_object : *Object*

オブジェクトの親オブジェクト、すなわちディレクトリ（もしくはテーブル）オブジェクトです。更新はできません。

Object.children : *LazyArray<Object>*

オブジェクトの子オブジェクト一覧となる検索結果を返します。オブジェクトが、テーブルかディレクトリ以外の場合など、子オブジェクトを持たない場合は、空の結果となります。更新はできません。

Object.type_object : *TypeObject*

オブジェクトの型オブジェクトです。更新はできません。

Object.type_name : *String*

オブジェクトの型名です。更新はできません。

Object.user_permissions : *Dictionary<Permission>*

ユーザパーミッション情報です。writable, readable, executable をキーに持つ辞書型のオブジェクトとなります。

Object.group_permissions : *Dictionary<Permission>*

グループパーミッション情報です。writable, readable, executable, priority をキーに持つ辞書型のオブジェクトとなります。

バージョン 1.6.8 で変更: プロパティ children を LazyArray 型に変更しました。

5.2.4 メソッド

Kompira オブジェクトは、以下のメソッドを提供しています。

Object.delete()

オブジェクトを削除します。

Object.update([*key1=val1, key2=val2, ...*])

オブジェクトのフィールド *key1, key2, ...* の値を *val1, val2, ...* に更新します。

Object.rename(*name*)

オブジェクトの名前を *name* に変更します。

5.3 組み込み型オブジェクト

このセクションでは、Kompira にあらかじめ組み込まれている標準の型オブジェクトについて説明します。

Kompira のオブジェクトは、型オブジェクトで示される型を持ちます。例えば、ジョブフローオブジェクトは、ジョブフロー型を持ちますし、ディレクトリオブジェクトはディレクトリ型を持ちます。Kompira では、ジョブフロー型やディレクトリ型といった型もオブジェクトとして定義されているので、これらも型オブジェクトという型を持っています。ちなみに、型オブジェクトの型は型オブジェクトです。

Kompira のオブジェクトは、その型に特有のフィールドやメソッドを備えています。

5.3.1 型オブジェクト (TypeObject)

型オブジェクト型はその型に属する Kompira オブジェクトのフィールドやメソッドを定義します。新しく型オブジェクトを定義することで、ユーザーは Kompira オブジェクトの型を自由に追加することができます。

注釈: 既存の型にフィールドを追加したり、不要なフィールドを削除したりなど、型オブジェクトを変更する場合、Kompira では、以下のような規則にしたがって処理されます。

- 変更後の型オブジェクトで削除されたフィールドは無視され、アクセス不可能となる。
 - 変更後の型オブジェクトで新たに追加されたフィールドは自動的に null 値で初期化される。
-

フィールド

型オブジェクト型では、以下のフィールドを定義しています。

TypeObject.extend : *String*

- Display name: 拡張モジュール

型オブジェクトが参照する Python の拡張モジュールパスを指定します。デフォルトは、kompira.extends となります。

型オブジェクトの振る舞いやビューを拡張する場合、拡張モデルモジュール models.py と拡張ビューモジュール views.py を Python モジュールとして作成し、ここで指定したパスの下に配置します。

TypeObject.fieldNames : *Array*

- Display name: フィールド名の列

この型のオブジェクトが持つフィールド名の一覧を配列として指定します。フィールド名で利用できる文字列の規則は、ジョブフロー言語の識別子と同じです。

TypeObject.fieldDisplayNames : *Array*

- Display name: フィールド表示名の列

この型のオブジェクトが持つフィールド表示名の一覧を配列として指定します。フィールド表示名には任意の文字列を使用することができます。配列要素の順序は、フィールド名の列と対応させる必要があります。

TypeObject.fieldTypes : *Array*

- Display name: フィールド型の列

この型のオブジェクトが持つフィールド型の一覧を配列として指定します。配列要素の順序は、フィールド名の列と対応させる必要があります。

メソッド

型オブジェクト型に特有のメソッドは特に定義されていません。

5.3.2 ディレクトリ (Directory)

ディレクトリ型は、ディレクトリオブジェクトの型を規定します。ディレクトリオブジェクトの下に複数の異なる型の Kompira オブジェクトを持つことができます。これによって、Unix のファイルシステムと同様に Kompira オブジェクトも階層構造を持つことができます。

フィールド

ディレクトリ型では、以下のフィールドを定義しています。

Directory.orderBy : *String*

- Display name: ソート順

このディレクトリの一覧画面で表示するオブジェクトの並び順を指定します。

Directory.pageSize : *Integer*

- Display name: ページサイズ
- Minimum value: 10
- Maximum value: 1000
- Default value: 25

このディレクトリの一覧画面で表示するオブジェクトの個数を指定します。

メソッド

ディレクトリ型には以下のメソッドが定義されています。

Directory.add(name, type_obj[, data, overwrite]) : *Object*

ディレクトリの下に、name で指定された名前を持つ type_obj 型の Kompira オブジェクトを追加します。data には辞書型のデータを渡すことができ、これによって、オブジェクトのフィールド値を初期化することができます。\$RESULT には新規追加されたオブジェクトが格納されます。overwrite 引数に true を渡した場合、同名のオブジェクトがディレクトリの下に存在している場合でも、エラーにはならずオブジェクトを更新します。

Directory.move(obj[, name])

ディレクトリの下に obj で指定されたオブジェクトを移動します。name が指定された場合、移動対象のオブジェクトの名前が name に変更されます。

Directory.copy(obj[, name]) : *Object*

ディレクトリの下に obj で指定されたオブジェクトを複製します。name が指定された場合、複製されたオブジェクトの名前は name に変更されます。obj がディレクトリやテーブルの場合、子オブジェクトは再帰的に複製されます。\$RESULT には新規作成されたオブジェクトが格納されます。

Directory.has_child(name) : *Boolean*

ディレクトリの下に name で指定された子オブジェクトが存在すれば true を返し、存在しなければ、false を返します。

Directory.find(params) : *LazyArray<Object>*

ディレクトリの配下で params で指定したフィルタリング条件に該当するオブジェクトの検索結果を返します。オブジェクトの属性でフィルタリングする場合は、params に <属性名>=<値> を指定します。

例えば型オブジェクトの一覧を取得する場合は、以下のように指定します。

```
[result = /.find(type_object=/system/types/TypeObject)]
```

また、属性名にルックアップを付与することでより細かなフィルタリング条件を指定できます。ルックアップを付与する場合は params に <属性名>__<ルックアップ>=<値> を指定します。

例えばパスに kompira を含むオブジェクトを指定する場合は、以下のように指定します。

```
[result = /.find(abspath__contains='kompira')]
```

指定できるルックアップとフィルタリング方法は以下のとおりです。

ルックアップ	フィルタリング方式
exact, iexact	属性が指定した値に一致する。iexact では大小文字を区別しない。
contains, icontains	属性が指定した値を含む。icontains では大小文字を区別しない。
startswith, istartswith	属性が指定した値で始まる。istartswith では大小文字を区別しない。
endswith, iendswith	属性が指定した値で終わる。iendswith では大小文字を区別しない。
regex, iregex	属性が指定した正規表現にマッチする。iregex では大文字小文字区別しない。
gt, gte	属性が指定した値より大きい(gt)、または、属性が指定した値以上である(gte)。
lt, lte	属性が指定した値より小さい(lt)、または、属性が指定した値以下である(lte)。
in	属性が指定した値に含まれる。

仮想オブジェクト以外の一般のオブジェクトにおける属性値によるフィルタリングでは、属性によって指定できるルックアップが異なります。属性の一覧と指定できるルックアップは以下のとおりです。

属性	指定できるルックアップ
owner	exact, in
abspath	exact, iexact, contains, icontains, startswith, istartswith, endswith, iendswith, regex, iregex
display_name	exact, iexact, contains, icontains, startswith, istartswith, endswith, iendswith, regex, iregex
description	exact, iexact, contains, icontains, startswith, istartswith, endswith, iendswith, regex, iregex
created	exact, gt, gte, lt, lte
updated	exact, gt, gte, lt, lte
type_object	exact, in
parent_object	exact, in

また、仮想オブジェクトでは、属性のデータ型によって指定できるルックアップが異なります。

属性の型	指定できるルックアップ
文字列型	exact, iexact, contains, icontains, startswith, istartswith, endswith, iendswith, regex, iregex
整数型	exact, gt, gte, lt, lte
日時型	exact, gt, gte, lt, lte
オブジェクト型	exact
ユーザ型	exact
真偽型	exact

なお、ルックアップを指定していないときは `exact` が適用されます。属性は複数指定することができます。

また、`type_object` 属性フィルタリングによって型オブジェクトが指定されている場合、フィールド値によるフィルタリング条件も指定できます。フィールド値でフィルタリングする場合は、`params` に `fields={<フィールド名>=<値>}`、もしくは `fields={<フィールド名>__<ルックアップ>=<値>}` で指定します。

型オブジェクトが指定されていない状況でフィールド値によるフィルタリングを指定するとエラーとなります。

例えばソースコードに `urlopen` を含むジョブフローを指定する場合は、以下のように指定します。

```
[result = /.find(type_object=/system/types/Jobflow, fields={source__contains=
↪ 'urlopen'})]]
```

フィールド値によるフィルタリングで使用できるルックアップは以下のようになります。

フィールドの型	指定できるルックアップ
文字列型	exact, iexact, contains, icontains, startswith, istartswith, endswith, iendswith, regex, iregex, in, range
整数型	exact, isnull, gt, gte, lt, lte, in, range
真偽値型	exact
日時型	exact, isnull, gt, gte, lt, lte, range
オブジェクト型	exact, isnull
添付ファイル型	(文字列型と同じ、ファイル名がフィルタ対象になります)
配列型	(文字列型と同じ、配列の値がフィルタ対象になります)
辞書型	(文字列型と同じ、辞書の値がフィルタ対象になります)

フィールド値においても、ルックアップを指定していないときは **exact** が適用されます。またフィールド値のフィルタリングも複数指定することができます。

`find` メソッドは標準では結果のオブジェクト一覧は当該ディレクトリに設定された並び順で得られます。明示的に並び順を指定したい場合は `params` に `order_by=<属性名>` と指定することができます。以下の例では作成日時の古い順になります。

```
[result = /.find(order_by='created')]
```

`order_by` で並び順を指定できる属性は以下の通りです。

属性	適用される並び順
id	オブジェクトの ID 順
owner	所有者の ID 順
abspath	絶対パス順
display_name	表示名順
description	説明順
created	作成日時順 (古い順)
updated	更新日時順 (古い順)
type_object	型オブジェクトの ID 順
parent_object	親オブジェクトの ID 順

並び順を逆にしたい場合は先頭に `-` を付けて指定します。以下の例では更新日時の新しい順になります。

```
[result = /.find(order_by='-updated')]
```

カンマで区切って複数の並び順を指定することができます。先に指定した属性の値が同じ場合に、後で指定した属性の値の順に並びます。

```
[result = /.find(order_by='type_object,created')]
```


また、`type_object` 属性フィルタリングによって型オブジェクトが指定されている場合は、フィールド値による並び順を指定することもできます。フィールド値で並び替えする場合は、`params` に `order_by=field:<フィールド名>` で指定します。ただし、フィールド値による並び替えは1つしか指定できません。フィールド値による並び順を逆にしたい場合は `order_by=-field:<フィールド名>` のように指定してください。

```
[result = /.find(type_object=/system/types/Wiki, order_by='field:wikitext')]
```

`find` メソッドは標準では条件と一致するすべてのオブジェクトの一覧を返しますが、場合によっては多数のオブジェクトが該当して扱いにくい場合もあります。取得するオブジェクトの最大の個数を制限したい場合は `params` に `limit=<個数>` を指定することができます。以下の例では最大で最初の10個のオブジェクトを返します。

```
[result = /.find(limit=10)]
```

取得するオブジェクトの先頭位置を指定したい場合は `params` に `offset=<先頭位置>` で指定することができます。先頭位置は0始まりで指定します。以下の例では11番目から最大で10個のオブジェクトを返します。

```
[result = /.find(offset=10, limit=10)]
```

なお、指定した先頭位置が該当するオブジェクトの実際の個数より大きくてもエラーにはならず、空の一覧が結果として得られます。

バージョン 1.6.6post1 で追加: オブジェクト属性のフィルタリングで `parent_object` が指定できるようになりました。`order_by` に `description` と `parent_object` 属性が指定できるようになりました。

バージョン 1.6.8 で変更: `find()` メソッドの結果を `LazyArray` 型に変更しました。

Directory.glob(pattern) : *LazyArray<Object>*

ディレクトリの配下で `pattern` で指定したフィルタリング条件に該当するオブジェクトの検索結果を返します。パターンは次の形式で記述します。

```
"<オブジェクト名>"
```

オブジェクト名は `glob` パターンで指定します。例えば名前が `kompira` で始まるオブジェクトを指定する場合は以下のようになります。

```
[result = /.glob("kompira*")]
```

また、オブジェクト名に加えて次の要素を指定することが可能です。

- パス
- 型オブジェクト
- 所有者
- 属性値フィルタリング
- フィールド値フィルタリング

パスを指定した場合そのパスの下オブジェクトを返します。パターンは次の形式で記述します。

```
"<パス>/<オブジェクト名>"
```

パスには `/*` と `/**` を指定できます。それぞれ任意の1段のディレクトリと任意の深さのディレクトリにマッチします。

例えば、パスに `user` が含まれ、名前が `kompira` で始まるオブジェクトを指定する場合は以下のようになります。

```
[result = /.glob("/**/user/**/kompira*")]
```

型オブジェクトを指定した場合その型オブジェクトを持つオブジェクトを返します。パターンは次の形式で記述します。

```
"<オブジェクト名>.<型オブジェクト名>"
```

例えば、ジョブフロー型のすべてのオブジェクトを指定する場合は以下のようになります。

```
[result = /.glob("*.Jobflow")]
```

所有者を指定した場合所有するオブジェクトを返します。パターンは次の形式で記述します。

```
"<オブジェクト名>@<所有者>"
```

例えば、`root` が所有するすべてのオブジェクトを指定する場合は以下のようになります。

```
[result = /.glob(" *@root")]
```

属性値フィルタリングを指定した場合、マッチするオブジェクトを返します。パターンは次の形式で記述します。

```
"<オブジェクト名>(<属性値>=<値>)" もしくは "<オブジェクト名>(<属性値>_<ルックアップ>=<値>)"
```

属性値に指定できるルックアップの一覧は `find` メソッドをご参照下さい。

例えば、表示名に `kompira` が含まれるオブジェクトを指定する場合は以下のようになります。

```
[result = /.glob("*(diplay_name__contains='kompira')")]
```

フィールド値フィルタリングを指定した場合、マッチするオブジェクトを返します。パターンは次の形式で記述します。

```
"<オブジェクト名>[<フィールド値>=<値>]" もしくは "<オブジェクト名>[<フィールド値>_<ルックアップ>=<値>]"
```

フィールド値に指定できるルックアップの一覧は `find` メソッドをご参照下さい。

例えば、ソースコードに `urlopen` が含まれるオブジェクトを指定する場合は以下のようになります。

```
[result = /.glob("[source__contains='urlopen']")]
```

またこれらは組み合わせて指定することができます。すべて指定した場合のパターンは次のようになります。

```
"<パス>/<オブジェクト名>.<型オブジェクト名>@<所有者>(<属性フィルタリング>)[<フィールドフィルタリング>]"
```

例えば、下のようなオブジェクトを指定する場合は次のようになります。

- /user/app の下にあるオブジェクト
- root が所持
- 名前が kompira から始まる
- ジョブフロー
- 表示名にこんぴらが含まれる
- 多重度が 1 以下

```
[result =
/.glob("/user/app/**/kompira*.Jobflow
@root(display_name__contains='こんぴら')[multiplicity__lt=1]")]
```

バージョン 1.6.8 で変更: glob() メソッドの結果を LazyArray 型に変更しました。

5.3.3 ライセンス (License)

ライセンス型は Kompira のライセンスファイルを管理するオブジェクトを定義します。

フィールド

ライセンス型には固有のフィールドは定義されていません。

メソッド

ライセンス型には固有のメソッドは定義されていません。

プロパティ

ライセンス型オブジェクトは、以下のプロパティを提供しています。

`License.node_count` : *Integer*

現在使用中のノード数を取得します。

5.3.4 仮想オブジェクト (Virtual)

仮想オブジェクト型のオブジェクトは、プロセスやインシデントなど、Kompira の特殊オブジェクトを定義するための実装モジュールを指定します。

フィールド

仮想オブジェクト型では、以下のフィールドを定義しています。

`Virtual.virtual` : *String*

- Display name: 実装モジュール

特殊オブジェクトの Python の実装モジュールのパスを指定します。

メソッド

仮想オブジェクト型に特有のメソッドは特に定義されていません。

5.3.5 ジョブフロー (Jobflow)

ジョブフロー型はジョブフローオブジェクトの型を規定します。

フィールド

ジョブフロー型では、以下のフィールドを定義しています。

`Jobflow.source` : *LargeText*

- Display name: ソース

ジョブフローのソースコード文字列です。

Jobflow.code : *LargeText*

- Display name: コード
- Invisible field

ジョブフローのソースをコンパイルした結果の中間コード文字列が格納されます。ブラウザ上から編集することはできません。

Jobflow.parameters : *Dictionary*

- Display name: パラメータ
- Invisible field

ジョブフローのパラメータのデフォルト値をコンパイルした結果の中間コード文字列が、パラメータの辞書として格納されます。不可視設定されているため、ブラウザ上から編集することはできません。

Jobflow.executable : *Boolean*

- Display name: 実行可能
- Invisible field

ジョブフローが実行可能な場合は `true` となります。コンパイルエラーなどで、ジョブフローが実行できない場合には `false` が格納されます。ブラウザ上から編集することはできません。

Jobflow.errors : *Dictionary*

- Display name: エラー
- Invisible field

コンパイル時のエラーメッセージが、対応するソースコードの行番号をキーとした辞書に格納されます。ブラウザ上から編集することはできません。

Jobflow.compilerVersion : *String*

- Display name: コンパイラバージョン
- Invisible field

ジョブフローのコンパイルに用いられたコンパイラのバージョン文字列が格納されます。ブラウザ上から編集することはできません。

Jobflow.multiplicity : *Integer*

- Display name: 多重度

ジョブフローの多重度を設定します。多重度の数を超えるジョブフロープロセスが同時にこのジョブフローを呼び出した場合、そのプロセスは他のプロセスがこのジョブフロー呼び出しを完了するまで待たされます。多重度を 0 以下の値に設定した場合、多重度は無制限と解釈されます。

Jobflow.defaultCheckpointMode : *Boolean*

- Display name: デフォルトチェックポイントモード

ジョブフローのデフォルトのチェックポイントモードを指定します。

`Jobflow.defaultMonitoringMode` : *Enum*

- Display name: デフォルト監視モード
- Enum choices: "NOTHING" | "MAIL" | "ABORT_MAIL"

ジョブフローのデフォルトの監視モードを指定します。

`Jobflow.compiledDatetime` : *Datetime*

- Display name: コンパイル日時
- Invisible field

ジョブフローのコンパイル日時が格納されます。ブラウザ上から編集することはできません。

注釈: 多重度が指定されているジョブフローを呼び出すと、ジョブフロープロセスはロックを獲得します。ジョブフロー呼び出しから戻るか、もしくはジョブフローが終了すると、ロックが解放されます。ロックは再帰的に獲得可能です。したがって、多重度指定されているジョブフローを再帰的に呼び出した場合でも、そのプロセスの実行がブロックすることはありません。

多重度指定されたジョブフローの中で別のジョブフローを末尾で呼び出した場合、獲得したロックは解放されます。

メソッド

ジョブフロー型に特有のメソッドは特に定義されていません。

5.3.6 チャネル (Channel)

チャネル型 は、チャネルオブジェクトの型を規定します。チャネルオブジェクトを用いて、異なるジョブフロープロセス同士でメッセージの送受信を同期的行うことができます。

アクションを指定することで、メッセージを受信したときの動作を指定することができます。

フィールド

チャネル型では、以下のフィールドを定義しています。

`Channel.message_queue` : *Array<Binary>*

- Display name: メッセージキュー
- Invisible field

チャネルに送信されたメッセージが格納されるキューです。ブラウザ上から編集することはできません。

`Channel.event_queue` : *Array<Binary>*

- Display name: イベントキュー
- Invisible field

チャンネルでメッセージの受信を待っているイベントが格納されるキューです。ブラウザ上から編集することはできません。

`Channel.action_type` : *Enum*

- Display name: アクション種別
- Enum choices: "NoAction" | "ExecuteJobflow"
- Default value: "NoAction"

チャンネルがメッセージを受信したときに動作するアクションの種別を指定します。

アクション種別	アクションの動作
NoAction	何もしない
ExecuteJobflow	アクションターゲットで指定したジョブフローを実行する

`Channel.action_target` : *Object*

- Display name: アクションターゲット
- Choices by object: Depends on the field action_type

アクション種別に応じて、処理対象となるアクションターゲットを指定します。アクション種別が ExecuteJobflow の場合、実行するジョブフローを指定します。そのジョブフローは第一パラメータに受信したメッセージを渡して、チャンネルオブジェクトの所有者をユーザとして実行されます。

警告: アクション種別が ExecuteJobflow のときに指定するジョブフローは、パラメータが少なくとも 1 つは必要で、2 つめ以降のパラメータがある場合はデフォルト値定義が必要です。

バージョン 1.6.6 で変更: 新しいフィールド `action_type`, `action_target` が追加されました。

メソッド

チャンネル型には以下のメソッドが定義されています。

`Channel.send(message)`

チャンネルにメッセージ `message` を送信します。

`Channel.pop_message(index=0)` : *any*

チャンネルのメッセージキューから指定したインデックス（省略時は先頭）のメッセージを取得します。取得したメッセージはメッセージキューから削除されます。

インデックスに負の値を指定すると、末尾からの位置を指定することになります。メッセージが存在しないインデックスを指定した場合は実行時エラーになります（イベントジョブと異なりメッセージの受信を待ちません）。

Channel.peek_message(index=0) : *Array*

チャンネルのメッセージキューから指定したインデックス（省略時は先頭）のメッセージを参照します。参照したメッセージはメッセージキューから削除されずに残ります。

結果はリストで、1 つめの要素には参照したメッセージの ID が格納され、2 つめの要素は参照したメッセージ自体が格納されます。これは、**イベントジョブ** で peek_mode=true を指定したときの結果と同じ構造になります。

インデックスに負の値を指定すると、末尾からの位置を指定することになります。メッセージが存在しないインデックスを指定した場合は実行時エラーになります（イベントジョブと異なりメッセージの受信を待ちません）。

メッセージ ID はチャンネルごとに個別のメッセージを識別する ID で、後述する delete_message() メソッドで利用します。別のチャンネルオブジェクトでは同じメッセージ ID が使われることがありますので、メッセージ ID がシステムユニークではないことに注意してください。

Channel.delete_message(*msgid)

チャンネルのメッセージキューから指定したメッセージ ID に対応するメッセージを削除します。メッセージ ID は複数指定することが出来ます。

存在しないメッセージ ID を指定した場合は実行時エラーになります。

Channel.clear_messages()

チャンネルのメッセージキューを空にします。

バージョン 1.6.7 で変更: 新しいメソッド pop_message, peek_message, delete_message, clear_messages が追加されました。

プロパティ

チャンネル型オブジェクトは、以下のプロパティを提供しています。

Channel.message_count : *Integer*

メッセージキューに溜まっているメッセージの数を示します。

Channel.event_count : *Integer*

イベントキューに溜まっているイベントの数を示します。

5.3.7 Wiki ページ (Wiki)

Wiki ページ型 は、Wiki ページオブジェクトの型を規定します。Kompira の Wiki ページオブジェクトは、Wiki Creole/Markdown/Textile 記法をサポートしています。

フィールド

Wiki ページ型では、以下のフィールドを定義しています。

Wiki.wikitext : *LargeText*

- Display name: Wiki テキスト

wiki ページのテキストを格納します。

Wiki.style : *Enum*

- Display name: スタイル
- Enum choices: "Creole" | "Markdown" | "Textile"
- Default value: "Creole"

wiki ページの記法を Creole, Markdown, Textile の中から選択します。

メソッド

Wiki ページ型に特有のメソッドは特に定義されていません。

5.3.8 スクリプトジョブ (ScriptJob)

スクリプトジョブ型 は、スクリプトジョブオブジェクトの型を規定します。

フィールド

スクリプトジョブ型では、以下のフィールドを定義しています。

ScriptJob.source : *LargeText*

- Display name: ソース

スクリプトのソーステキストを格納します。

ScriptJob.ext : *String*

- Display name: 拡張子

スクリプトの拡張子を設定します。Windows サーバ上でスクリプトを実行する場合、スクリプトの拡張子を適切に設定する必要があります。

`ScriptJob.multiplicity` : *Integer*

- Display name: 多重度

スクリプトジョブの多重度を設定します。多重度の数を超えるジョブフロープロセスが同時にこのスクリプトジョブを呼び出した場合、そのプロセスは他のプロセスがこのスクリプトジョブ呼び出しを完了するまで待たされます。多重度を 0 以下の値に設定した場合、多重度は無制限と解釈されます。

メソッド

スクリプトジョブ型に特有のメソッドは特に定義されていません。

5.3.9 環境変数 (Environment)

環境変数型 は、環境変数オブジェクトの型を規定します。ユーザー設定の環境変数の項目に、環境変数オブジェクトを設定すると、そのユーザーがジョブフローを実行した場合、環境変数辞書が\$ENV に格納され、辞書のに格納されている各値をジョブフローから参照することができるようになります。

フィールド

環境変数型では、以下のフィールドを定義しています。

`Environment.environment` : *Dictionary*

- Display name: 環境変数

環境変数辞書を格納します。

メソッド

環境変数型に特有のメソッドは特に定義されていません。

5.3.10 テンプレート (Template)

テンプレート型 は、テンプレートオブジェクトの型を規定します。

フィールド

テンプレート型では、以下のフィールドを定義しています。

Template.template : *LargeText*

- Display name: テンプレート

テンプレート文字列を格納します。

メソッド

テンプレート型に特有のメソッドは特に定義されていません。

バージョン 1.4.7 で非推奨: 代わりにテキスト型オブジェクトを使用してください。

5.3.11 テーブル (Table)

テーブル型 は、テーブルオブジェクトの型を規定します。テーブルオブジェクトは、ディレクトリオブジェクトのように、複数の子オブジェクトを持つことができます。ただし、子オブジェクトの型は固定されます。

フィールド

テーブル型では、以下のフィールドを定義しています。

Table.typeObject : *Object*

- Display name: オブジェクト型
- Choices by object: TypeObject
- No empty field

このテーブルに格納する子オブジェクトの型を指定します。

Table.relatedObject : *Object*

- Display name: 関連オブジェクト
- Choices by object: Jobflow | Form

このテーブルのメニューから実行できるジョブフローやフォームを指定します。テーブル一覧から選択したオブジェクトに対して、ジョブフローやフォームを実行できるようになります。ジョブフロー実行の場合は、ジョブフローの最初のパラメータに選択されたオブジェクトリストが渡されます。フォーム実行の場合、objects パラメータに選択されたオブジェクトリストが渡されます。

Table.displayList : *Array*

- Display name: 表示フィールド一覧

テーブルのビューで表示させる子オブジェクトのフィールド名を配列で指定します。

Table.orderBy : *String*

- Display name: ソート順

このテーブルの一覧画面で表示するオブジェクトの並び順を指定します。

Table.pageSize : *Integer*

- Display name: ページサイズ
- Minimum value: 10
- Maximum value: 1000
- Default value: 25

このテーブルの一覧画面で表示するオブジェクトの個数を指定します。

メソッド

テーブル型のメソッドはディレクトリ型が提供する [メソッド](#) と同じですが、add メソッドでは `type_obj` パラメータは省略可能となり、find メソッドでは型オブジェクトの特定が不要になります。

Table.add(name[, type_obj, data, overwrite]) : *Object*

テーブルの下に、name で指定された名前を持つ テーブルのオブジェクト型フィールドで指定された型の Kompira オブジェクトを追加します。data には辞書型のデータを渡すことができ、これによって、オブジェクトのフィールド値を初期化することができます。overwrite 引数に true を渡した場合、同名のオブジェクトがテーブルの下に存在している場合でも、エラーにはならずオブジェクトを更新します。

Table.find(params) : *LazyArray<Object>*

テーブルの配下で params で指定したフィルタリング条件に該当するオブジェクトの検索結果を返します。基本的には [Directory.find\(\)](#) メソッドと同じですが、フィールド値によるフィルタリングまたはフィールド値による並び替えの指定する場合でも、`type_object` 属性フィルタリングによる型オブジェクトの特定は不要になります。

バージョン 1.6.8 で変更: find() メソッドの結果を LazyArray 型に変更しました。

5.3.12 管理領域 (Realm)

管理領域型 は、管理領域オブジェクトの型を規定します。管理領域オブジェクトを定義することにより、ジョブマネージャごとに、管理対象のネットワークを分割して管理できるようになります。

フィールド

管理領域型では、以下のフィールドを定義しています。

Realm.range : *Array*

- Display name: 対象範囲

この管理領域が管轄するネットワークアドレスの対象範囲を指定します。

Realm.disabled : *Boolean*

- Display name: 無効

この値を true に設定すると、管理領域の設定が無効化されます。

メソッド

管理領域型に特有のメソッドは特に定義されていません。

5.3.13 添付ファイル (AttachedFile)

添付ファイル型 は、添付ファイルオブジェクトの型を規定します。

フィールド

添付ファイル型では、以下のフィールドを定義しています。

AttachedFile.attached1 : *File*

- Display name: 添付ファイル 1

1 番目の添付ファイルオブジェクトが格納されるフィールドです。

AttachedFile.attached2 : *File*

- Display name: 添付ファイル 2

2 番目の添付ファイルオブジェクトが格納されるフィールドです。

AttachedFile.attached3 : *File*

- Display name: 添付ファイル 3

3 番目の添付ファイルオブジェクトが格納されるフィールドです。

メソッド

添付ファイル型に特有のメソッドは特に定義されていません。

5.3.14 ノード情報 (NodeInfo)

ノード情報型 は、ノード情報オブジェクトの型を規定します。ノード情報オブジェクトをジョブフロー中の `__node__` 制御変数に指定することで、コマンドを実行する対象ノードを指定することができます。

フィールド

ノード情報型では、以下のフィールドを定義しています。

NodeInfo.nodetype : *Object*

- Display name: ノード種別
- Choices by object: NodeType

Kompira で定義されているノード種別を選択します。

NodeInfo.conntype : *Enum*

- Display name: 接続種別
- Enum choices: Depends on the field NodeType.conntypes of the object selected in field nodetype

ノードの接続種別を選択します。指定できる接続種別は上で選択したノード種別ごとに切り替わります。詳細は [ノードの設定](#) を参照してください。

NodeInfo.hostname : *String*

- Display name: ホスト名

ノードのホスト名を指定します。

NodeInfo.ipaddr : *IPAddress*

- Display name: IP アドレス

ノードの IP アドレスを指定します。

NodeInfo.port : *Integer*

- Display name: ポート番号
- Minimum value: 0
- Maximum value: 65535

ノードのポート番号を指定します。指定しない場合、接続種別に応じたデフォルトのポート番号が使用されます。

NodeInfo.shell : *String*

- Display name: シェル

リモート接続時に使用するシェルを指定します。指定しない場合、デフォルトとして '/bin/bash' が使用されます。

NodeInfo.use_shell : *Boolean*

- Display name: シェル使用
- Default value: false

リモート接続時にシェルを使用しない場合、false に設定します。ネットワーク機器など、シェルを備えていない機器への接続時には、false を設定すると良いでしょう。デフォルトは false です。

NodeInfo.proxy : *Object*

- Display name: プロキシ
- Choices by object: NodeInfo

踏み台サーバ経由で SSH 接続する場合、踏み台サーバとなるノード情報オブジェクトを指定します。SSH 接続時のみ使用されます。

NodeInfo.account : *Object*

- Display name: アカウント
- Choices by object: AccountInfo

リモート接続時に使用するアカウント情報を指定します。ジョブフローの __account__ 制御変数を明示的に指定した場合は、そちらが優先されます。

バージョン 1.6.4 で追加: ノード種別フィールドが追加されました。

バージョン 1.6.4 で変更: 接続種別フィールドの選択肢がノード種別によって切り替わるようになりました。

メソッド

ノード情報型に特有のメソッドは特に定義されていません。

5.3.15 アカウント情報 (AccountInfo)

アカウント情報型 は、アカウント情報オブジェクトの型を規定します。アカウント情報オブジェクトをジョブフロー中の __account__ 制御変数にセットすることで、リモート接続時に使用するアカウント情報を指定することができます。

フィールド

アカウント情報型では、以下のフィールドを定義しています。

AccountInfo.user : *String*

- Display name: ユーザ名

アカウントのユーザ名を設定します。

AccountInfo.password : *Password*

- Display name: パスワード

アカウントのパスワードを設定します。パスフレーズ付きの SSH 鍵ファイルが設定されている場合、パスフレーズとしても使用されます。

AccountInfo.keyfile : *File*

- Display name: SSH 鍵ファイル

SSH 鍵ファイルを使ってログインする場合、鍵ファイルを添付します。

AccountInfo.passphrase : *Password*

- Display name: SSH 鍵パスフレーズ

パスフレーズ付きの SSH 鍵の場合に指定するパスフレーズです。パスフレーズ無しの場合やパスワードと同じ場合には指定を省略することができます。

メソッド

アカウント情報型に特有のメソッドは特に定義されていません。

5.3.16 リポジトリ (Repository)

リポジトリ型 は、リポジトリオブジェクトの型を規定します。リポジトリオブジェクトを用いて、外部の VCS リポジトリと連携することができ、Kompira のディレクトリのデータをリポジトリにプッシュしたり、逆にリポジトリ上のデータを Kompira ディレクトリにプルしたりといった、データの同期が可能となります。

フィールド

リポジトリ型では、以下のフィールドを定義しています。

Repository.URL : *URL*

- Display name: URL

同期対象リポジトリの URL を設定します。

Repository.repositoryType : *Enum*

- Display name: リポジトリ種別
- Enum choices: "git" | "mercurial"

リポジトリ種別を指定します。現バージョンでは、'git' と 'mercurial' のみサポートしています。デフォルトは 'git' です。

Repository.port : *Integer*

- Display name: ポート番号
- Minimum value: 0
- Maximum value: 65535

外部リポジトリに接続するポート番号を指定します。未指定の場合、デフォルトのポート番号が使用されます。

Repository.username : *String*

- Display name: ユーザー名

リポジトリ接続時のユーザー名を指定します。

Repository.password : *Password*

- Display name: パスワード

リポジトリ接続時のパスワードを指定します。

Repository.directory : *Object*

- Display name: ディレクトリ
- Choices by object: Directory

同期対象の Kompira ディレクトリを指定します。

Repository.updateConfig : *Boolean*

- Display name: 設定データを上書きする

外部リポジトリからオブジェクトデータをプルする際に Config 型オブジェクトの設定データも上書きします。

Repository.log : *LargeText*

- Display name: ログ
- Invisible field

同期実行時のログが格納されます。

バージョン 1.6.7 で追加: フィールド updateConfig が追加されました。

メソッド

リポジトリ型に特有のメソッドは特に定義されていません。

5.3.17 メールチャネル (MailChannel)

メールチャネル型 は、IMAP4/POP3 サーバからメールをチャネルに取り込むメールチャネルオブジェクトの型を規定します。

ジョブフローがメールチャネルからメール受信待ち状態になる、あるいはメールチャネルに何らかの動作を伴うアクションが設定されているとき、メールチャネルは設定されている IMAP4/POP3 サーバからメールを受信するポーリングを開始します。

ポーリングにおいて IMAP4/POP3 サーバからメールを受信できたとき、以下のように動作します。

- メールチャネルを待つジョブフローが 1 つ以上ある場合は、最も長く待っているジョブフローに受信したメールが渡され、そのジョブフローは処理を継続します。
- 上記に該当せず、メールチャネルにアクションが設定されている場合は、受信したメールをもとにアクションが開始されます。
- メールを受信したときに上記のいずれにも該当しない場合は、受信したメールはメールチャネルのメッセージキューに蓄積されます。

受信する対象のメール（全てのメールまたは未読メール）、および、受信したメールを削除するかについては、受信モードで指定できます。

メールボックスに受信する対象のメールがなかった場合は、`checkInterval` で設定された時間が経過した後再度、IMAP4/POP3 サーバからメールを取り込みます。ただし、メールチャネルを待つジョブフローが存在しない、かつメールチャネルにアクションが設定されていない場合は、メール受信のポーリング処理は休止します。

フィールド

メールチャネル型では、以下のフィールドを定義しています。

MailChannel.message_queue : **Array<Binary>**

- Display name: メッセージキュー
- Invisible field

メールチャネルに送信されたメッセージが格納されるキューです。ブラウザ上から編集することはできません。

MailChannel.event_queue : **Array<Binary>**

- Display name: イベントキュー
- Invisible field

メールチャンネルでメッセージの受信を待っているイベントが格納されるキューです。ブラウザ上から編集することはできません。

MailChannel.serverName : *String*

- Display name: サーバ名

接続する IMAP4/POP3 サーバのホスト名か IP アドレスを設定します。空にした場合は localhost に接続します。

MailChannel.protocol : *Enum*

- Display name: プロトコル
- Enum choices: "IMAP4" | "POP3"
- Default value: "IMAP4"

メール受信のプロトコルとして、IMAP4 もしくは POP3 のいずれかを設定します。

MailChannel.SSL : *Boolean*

- Display name: SSL

SSL による通信を行う場合 true にセットします。

MailChannel.port : *Integer*

- Display name: ポート番号
- Minimum value: 0
- Maximum value: 65535

IMAP サーバのポート番号を設定します。指定しない場合デフォルトのポート番号が使用されます。

MailChannel.username : *String*

- Display name: ユーザ名

IMAP4/POP3 サーバに接続するユーザー名を設定します。

MailChannel.password : *Password*

- Display name: パスワード

IMAP4/POP3 サーバに接続する際のパスワードを設定します。

MailChannel.timeout : *Integer*

- Display name: 接続タイムアウト
- Minimum value: 0
- Default value: 60

IMAP4/POP3 サーバに対する接続タイムアウトを秒単位で指定します。空、もしくは、0 を設定すると、TCP/IP 接続におけるシステムのデフォルトのタイムアウトとなります。デフォルトは 60 秒です。負の値を設定することはできません。

`MailChannel.use_oauth2` : *Boolean*

- Display name: OAuth2 使用

OAuth2 を用いて認証する場合はチェックします。この場合、パスワードの設定は不要となります。

`MailChannel.oauth2_provider` : *Object*

- Display name: OAuth2 プロバイダ
- Choices by object: OAuth2Provider

OAuth2 のサービスプロバイダを選択します。OAuth2 認証を利用する場合には必須です。

`MailChannel.refresh_token` : *Password*

- Display name: リフレッシュトークン
- Invisible field

OAuth2 認証によって取得したリフレッシュトークンが格納されます。隠しフィールドとなっており、ブラウザ上から編集することはできません。

`MailChannel.access_token` : *Password*

- Display name: アクセストークン
- Invisible field

OAuth2 認証によって取得したアクセストークンが格納されます。隠しフィールドとなっており、ブラウザ上から編集することはできません。

`MailChannel.token_expires_at` : *Datetime*

- Display name: トークン有効期限
- Invisible field

アクセストークンの有効期限が格納されます。隠しフィールドとなっており、ブラウザ上から編集することはできません。

`MailChannel.mailbox` : *String*

- Display name: メールボックス
- Default value: "INBOX"

受信するメールボックスを設定します。デフォルトは "INBOX" です。POP3 プロトコルの場合、メールボックスの設定は無視されます。

警告: 日本語のメールボックス名を設定することはできません。

`MailChannel.receive_mode` : *Enum*

- Display name: 受信モード

- Enum choices: Depends on the field protocol

メールチャンネルがメールを受信するときの動作を指定します。

受信モード	メール受信時の動作
ReceiveAllAndDelete	全てのメールを受信して削除する
ReceiveUnseenAndSetSeen	未読のメールを受信して既読にする

警告: ReceiveUnseenAndSetSeen はプロトコルが POP3 のときは指定できません。

`MailChannel.checkInterval` : *Integer*

- Display name: 受信チェック間隔
- Minimum value: 0
- Default value: 10

IMAP4/POP3 サーバに対して新着メッセージを確認する間隔を分単位で指定します。デフォルトは 10 分です。0 を指定するとデフォルトの値となります。負の値を設定することはできません。

`MailChannel.action_type` : *Enum*

- Display name: アクション種別
- Enum choices: "NoAction" | "ExecuteJobflow"
- Default value: "NoAction"

メールチャンネルがメッセージを受信したときに動作するアクションの種別を指定します。

アクション種別	アクションの動作
NoAction	何もしない
ExecuteJobflow	アクションターゲットで指定したジョブフローを実行する

`MailChannel.action_target` : *Object*

- Display name: アクションターゲット
- Choices by object: Depends on the field action_type

アクション種別に応じて、処理対象となるアクションターゲットを指定します。アクション種別が ExecuteJobflow の場合、実行するジョブフローを指定します。そのジョブフローは第一パラメータに受信したメッセージを渡して、メールチャンネルオブジェクトの所有者をユーザとして実行されます。

警告: アクション種別が ExecuteJobflow のときに指定するジョブフローは、パラメータが少なくとも 1 つは必要で、2 つめ以降のパラメータがある場合はデフォルト値定義が必要です。

`MailChannel.log` : *LargeText*

- Display name: ログ
- Invisible field

IMAP4/POP3 サーバの接続ログが格納されます。

`MailChannel.logSize` : *Integer*

- Display name: ログサイズ
- Default value: 65536

ログの最大サイズを指定します。最大サイズを超えた場合、古いログメッセージから削除されます。

`MailChannel.disabled` : *Boolean*

- Display name: 無効
- Default value: true

IMAP4/POP3 サーバへの接続を無効化します。

バージョン 1.6.6 で変更: `timeout` (受信タイムアウト) の表示名を接続タイムアウトに変更しました。 `timeout` と `checkInterval` に負の値を設定できないようにしました。 `use_oauth2`, `oauth2_provider`, `refresh_token`, `access_token`, `token_expires_at` の各フィールドが追加されました。新しいフィールド `receive_mode` が追加されました。新しいフィールド `action_type`, `action_target` が追加されました。いくつかのフィールドの並び順が変更されました。

メソッド

メールチャネル型には以下のメソッドが定義されています。

`MailChannel.conn_check()`

設定されている IMAP4/POP3 サーバに対して接続テスト (ユーザ名とパスワードによる認証、および、メールボックスの確認も含む) を行います。接続に成功した場合は、`$STATUS` に 0 がセットされます。失敗した場合には、`$STATUS` に 1 がセットされ、失敗の理由を示す文字列が `$ERROR` にセットされます。 `disabled` (無効) フラグがセットされている状態でも接続テストは実行されます。

バージョン 1.6.6 で追加: 新規に `conn_check` メソッドが追加されました。

5.3.18 フォーム (Form)

フォーム型 は、ユーザ入力フォームのビューを提供するフォームオブジェクトの型を規定します。入力フォームの項目は、ユーザーが自由に定義することができます。

ユーザがフォームを提出するとフォームに入力された情報は、辞書型のデータとして、指定した提出オブジェクトに提出されます。提出オブジェクトがチャネル型の場合、データはそのチャネルオブジェクトのメッセージキューに置かれます。提出オブジェクトがジョブフローの場合、辞書データはそのジョブフローのパラメータに展開され、実行を開始します。

フィールド

Form.submitObject : *Object*

- Display name: 提出オブジェクト
- Choices by object: Jobflow | Channel
- No empty field

フォームに入力されたデータの提出先オブジェクトを指定します。

Form.fieldNames : *Array*

- Display name: フィールド名の列

入力フォームが持つフィールド名の一覧を配列として指定します。フィールド名で利用できる文字列の規則は、ジョブフロー言語の識別子と同じです。

Form.fieldDisplayNames : *Array*

- Display name: フィールド表示名の列

入力フォームが持つフィールド表示名の一覧を配列として指定します。フィールド表示名には任意の文字列を使用することができます。配列要素の順序は、フィールド名の列と対応させる必要があります。

Form.fieldTypes : *Array*

- Display name: フィールド型の列

入力フォームが持つフィールド型の一覧を配列として指定します。配列要素の順序は、フィールド名の列と対応させる必要があります。

メソッド

フォーム型に特有のメソッドは特に定義されていません。

5.3.19 設定 (Config)

設定型 は、設定フォームのビューを提供する設定オブジェクトの型を規定します。設定フォームの項目は、ユーザーが自由に定義することができます。

ユーザが設定フォームを保存するとフォームに入力された情報は、辞書型のデータとして、設定オブジェクトの `data` プロパティに保存されます。

注釈: 設定オブジェクトの設定情報 (`data` プロパティ) の変更には、当該オブジェクトに対する実行可能 (`executable`) 権限が必要です。

フィールド

Config.fieldNames : *Array*

- Display name: フィールド名の列

設定フォームが持つフィールド名の一覧を配列として指定します。フィールド名で利用できる文字列の規則は、ジョブフロー言語の識別子と同じです。

Config.fieldDisplayNames : *Array*

- Display name: フィールド表示名の列

設定フォームが持つフィールド表示名の一覧を配列として指定します。フィールド表示名には任意の文字列を使用することができます。配列要素の順序は、フィールド名の列と対応させる必要があります。

Config.fieldTypes : *Array*

- Display name: フィールド型の列

設定フォームが持つフィールド型の一覧を配列として指定します。配列要素の順序は、フィールド名の列と対応させる必要があります。

プロパティ

設定型オブジェクトは、以下のプロパティを提供しています。

Config.data : *Dictionary*

設定フォームに入力されたデータ辞書の値です。

メソッド

設定型に特有のメソッドは特に定義されていません。

5.3.20 ライブラリ (Library)

ライブラリ型は、ジョブフローから呼び出し可能な Python で実装されたライブラリを定義します。

フィールド

Library.libraryType : *Enum*

- Display name: ライブラリ種別
- Enum choices: "source" | "safe_source" | "module"
- Default value: "source"

ライブラリの定義方法を指定します。'source' を選択すると、ソーステキストに格納された文字列が Python のモジュールプログラムとしてロードされます。'safe_source' を選択すると、ソーステキストに格納された文字列が安全な Python のモジュールプログラムとしてロードされます。'module' を選択すると、モジュールパスに指定された文字列が、Kompira パッケージ内の `kompira.library` 以下のモジュールとしてロードされます。デフォルト値は 'source' です。このフィールドはブラウザ上から編集することはできません。

Library.modulePath : *String*

- Display name: モジュールパス

ロードする Python ライブラリのモジュールパスを指定します。libraryType が 'module' の時に使用されるフィールドです。このフィールドはブラウザ上から編集することはできません。

Library.sourceText : *LargeText*

- Display name: ソーステキスト

Python のソースコードを記述します。

Library.document : *LargeText*

- Display name: ドキュメント
- Invisible field

Python モジュールのドキュメント文字列が格納されます。ロードエラー時にはエラーメッセージが格納されます。このフィールドはブラウザ上から編集することはできません。

Library.executable : *Boolean*

- Display name: 実行可能
- Invisible field

Python モジュールが正しくロードされ、ジョブフローから呼び出し可能な場合は `true` となります。ロードに失敗した場合は、`false` となります。このフィールドはブラウザ上から編集することはできません。

メソッド

設定型に特有のメソッドは特に定義されていません。

呼び出し例

ライブラリオブジェクトでは、定義した Python の関数をジョブフローから呼び出すことができます。たとえば、以下のような Python のプログラムをソーステキストとして test_lib オブジェクトを定義します。

Python プログラム

```
def split(s):
    return s.split()

def hello():
    print('Hello, world!')
```

このライブラリで定義された関数を呼び出すジョブフローは以下のようになります。:

```
[str = 'foo bar baz']
-> [result = ./test_lib.split(s)]
-> [./test_lib.hello]
```

上記のジョブフローを実行すると、result 変数には split の結果のリスト ['foo', 'bar', 'baz'] が格納されます。また、ジョブフロープロセスのコンソールには、"Hello, world!" が出力されます。

警告: ライブラリオブジェクトで定義する Python の関数名に、display_name や update や delete といった、Kompira オブジェクトにあらかじめ組み込まれているプロパティ名 (**プロパティ**) やメソッド名 (**メソッド**) を使った場合、名前が衝突するため、その関数は呼び出すことができません。

5.3.21 メールテンプレート (MailTemplate)

メールテンプレート型は、メールテンプレートオブジェクトの型を規定します。

フィールド

メールテンプレート型では、以下のフィールドを定義しています。

MailTemplate.subject : *String*

- Display name: 件名

メールの件名となるテンプレート文字列を格納します。

MailTemplate.body : *LargeText*

- Display name: 本文

メールの本文となるテンプレート文字列を格納します。

メソッド

メールテンプレート型に特有のメソッドは特に定義されていません。

5.3.22 テキスト (Text)

テキスト型 は、プレインテキストや HTML テキストを保持するテキストオブジェクトの型を規定します。

テキストオブジェクトは、`http://<Kompira サーバ>/<テキストオブジェクト>.render` にブラウザからアクセスすることで、テンプレートエンジンによってレンダリングされたレンダービューを表示させることができます。

注釈: テンプレートエンジンには、Jinja2 を使用しています。テンプレートの記法については、Jinja2 のドキュメント <http://jinja.pocoo.org/docs/dev/templates/> を参照してください。

`include` や `extends` タグで、別のテキストオブジェクトのパス指定することで、テンプレートの取り込みや継承も可能です。

フィールド

テキスト型では、以下のフィールドを定義しています。

Text.text : *LargeText*

- Display name: テキスト

テキスト文字列を格納します。

Text.ext : *String*

- Display name: 拡張子

レンダービューを表示するブラウザアクセス用の拡張子を指定します。たとえば、拡張子として "html" を指定すると、`http://<Kompira サーバ>/<テキストオブジェクトパス>.html` にアクセスするとレンダービューが表示され、`http://<Kompira サーバ>/<テキストオブジェクトパス>` にアクセスすると通常のビューが表示されます。

Text.contentType : *String*

- Display name: コンテンツタイプ

テキストのコンテンツタイプを指定します。コンテンツタイプの指定を省略した場合は、拡張子からコンテンツタイプが推測されます。また、拡張子の指定を省略し、コンテンツタイプのみ指定した場合は、拡張子なしでブラウザアクセスした場合でも、通常ビューではなくレンダービューが表示されます。

Text.context : *Object*

- Display name: コンテキスト
- Choices by object: Environment

テンプレートに渡すコンテキストとして環境変数オブジェクトを指定します。テンプレート中から環境変数のキー値を変数として参照することができます。

メソッド

テキスト型には以下のメソッドが定義されています。

Text.render() : *String*

テンプレートエンジンによってレンダリングされたテキストを取得します。

プロパティ

テキスト型オブジェクトは、以下のプロパティを提供しています。

Text.content_type : *String*

推測されたコンテンツタイプを示します。

バージョン 1.4.7 で追加: 新規にテキスト型が追加されました。

5.3.23 システム情報型 (SystemInfo)

システム情報型 は Kompira のシステム情報を提供するオブジェクトを定義します。

フィールド

システム情報型には固有のフィールドは定義されていません。

メソッド

システム情報型には固有のメソッドは定義されていません。

プロパティ

システム情報型オブジェクトは、以下のプロパティを提供しています。

SystemInfo.engine_started : *Datetime*

Kompira エンジンの起動日時を示します。

SystemInfo.server_datetime : *Datetime*

Kompira サーバの現在日時を示します。

SystemInfo.version : *String*

Kompira のバージョン番号を示します。

バージョン 1.4.8.post2 で追加: 新規にシステム情報型が追加されました。

5.3.24 ノード種別型 (NodeType)

ノード種別型 は Kompira がリモートジョブで利用できる接続相手の情報を定義するものです。作成したノード種別型のオブジェクトは、ノード情報型オブジェクトの編集画面において、ノード種別フィールドの選択肢の一つとして表示されます。Kompira がサポートするノード種別オブジェクトは /system/nodetypes に定義されています。

フィールド

NodeType.conntypes : *Dictionary*

- Display name: 接続種別

このノード種別が対応する接続種別を定義します。ノード情報オブジェクトの接続種別フィールドはこのフィールドをもとに選択肢を表示します。

メソッド

ノード種別型には固有のメソッドは定義されていません。

バージョン 1.6.4 で追加: 新規にノード種別型が追加されました。

5.3.25 カスタムスタイル型 (CustomStyle)

カスタムスタイル型 はブラウザで表示される画面の配色などを設定するカスタムスタイルオブジェクトの型を規定します。

フィールド

CustomStyle.mainBackColor : *String*

- Display name: メイン背景色

メニューバー以外の領域の背景色を設定します。

CustomStyle.menuBarBackColor : *String*

- Display name: メニューバー背景色

メニューバーの領域の背景色を設定します。

CustomStyle.menuBarTextColor : *String*

- Display name: メニューバー文字色

メニューバーの領域の文字色を設定します。マウスオーバーしていないときは少し暗くなります。

CustomStyle.invertMode : *Boolean*

- Display name: 反転モード

チェックするとメニューバーを含む画面全体を反転されます。

注釈: 背景色や文字色などの色情報については Web Colors を文字列で指定することが出来ます。`#000000`, `rgb(255,255,255)`, `blue` などが指定できます。

メソッド

カスタムスタイル型には固有のメソッドは定義されていません。

バージョン 1.6.6 で追加: 新規にカスタムスタイル型が追加されました。

5.3.26 OAuth2 プロバイダ型 (OAuth2Provider)

OAuth2 プロバイダ型 は OAuth2 認証で使用するサービスプロバイダの設定情報を定義するものです。OAuth2 認証を利用する場合、サービスプロバイダへ Kompira をアプリケーションとして事前に登録しておき、登録情報にもとづいて OAuth2 プロバイダ型オブジェクトを作成する必要があります。

フィールド

OAuth2Provider.client_id : *String*

- Display name: クライアント ID

サービスプロバイダに登録したアプリケーションのクライアント ID を格納します。

OAuth2Provider.client_secret : *Password*

- Display name: クライアントシークレット

サービスプロバイダに登録したアプリケーションのクライアントシークレットを格納します。

OAuth2Provider.auth_endpoint : *URL*

- Display name: 認証エンドポイント

サービスプロバイダの認証エンドポイントを指定します。

OAuth2Provider.token_endpoint : *URL*

- Display name: トークンエンドポイント

サービスプロバイダのトークンエンドポイントを指定します。

OAuth2Provider.scope : *Array*

- Display name: スコープ

Kompira からのアクセスを許可するメール送受信のスコープを指定します。スコープ名はサービスプロバイダ毎に固有に定義されているため、サービスプロバイダ側のドキュメントを参照して、メール送受信に必要なスコープ名を指定してください。

OAuth2Provider.redirect_url : *URL*

- Display name: リダイレクト URL

承認フロー完了後のリダイレクト先の URL を指定します。空の場合は自 Kompira サーバにリダイレクトします。

メソッド

OAuth2 プロバイダ型には固有のメソッドは定義されていません。

バージョン 1.6.6 で追加: 新規に OAuth2 プロバイダ型が追加されました。

5.3.27 SMTP サーバ型 (SmtpServer)

SMTP サーバ型 は Kompira からメール送信時に利用できる SMTP サーバの設定情報を定義するものです。作成した SMTP サーバ型オブジェクトは、mailto 組み込みジョブの `smtp_server` パラメータに渡すことで、ジョブフローからのメール送信時に利用する SMTP サーバを指定できます。

フィールド

SmtpServer.hostname : *String*

- Display name: ホスト名

SMTP サーバのホスト名を指定します。空に設定した場合は localhost として扱われます。

SmtpServer.port : *Integer*

- Display name: ポート番号
- Minimum value: 0
- Maximum value: 65535

SMTP サーバの接続ポート番号を指定します。空に設定した場合、通常は 25 番ポート、TLS 接続の場合は 587 番ポート、SSL (SMTPS) 接続の場合は 465 番ポートで接続します。

SmtpServer.username : *String*

- Display name: ユーザー名

SMTP サーバの接続に認証が必要な場合、ユーザー名を設定します。

SmtpServer.password : *Password*

- Display name: パスワード

SMTP サーバの接続に認証が必要な場合、パスワードを設定します。

SmtpServer.timeout : *Integer*

- Display name: 接続タイムアウト
- Minimum value: 0
- Default value: 60

SMTP サーバに対する接続タイムアウトを秒単位で指定します。空、もしくは、0 を設定すると、TCP/IP 接続におけるシステムのデフォルトのタイムアウトとなります。デフォルトは 60 秒です。負の値を設定することはできません。

SmtpServer.use_tls : *Boolean*

- Display name: TLS 使用

SMTP サーバへ TLS を用いて接続する場合はチェックします。

SmtpServer.use_ssl : *Boolean*

- Display name: SSL 使用

SMTP サーバへ SSL (SMTPS) を用いて接続する場合はチェックします。TLS と同時に使用することはできません。

SmtpServer.use_oauth2 : *Boolean*

- Display name: OAuth2 使用

OAuth2 を用いて認証する場合はチェックします。この場合、パスワードの設定は不要となります。

SmtpServer.oauth2_provider : *Object*

- Display name: OAuth2 プロバイダ
- Choices by object: OAuth2Provider

OAuth2 のサービスプロバイダを選択します。OAuth2 認証を利用する場合には必須です。

SmtpServer.refresh_token : *Password*

- Display name: リフレッシュトークン
- Invisible field

OAuth2 認証によって取得したリフレッシュトークンが格納されます。隠しフィールドとなっており、ブラウザ上から編集することはできません。

SmtpServer.access_token : *Password*

- Display name: アクセストークン
- Invisible field

OAuth2 認証によって取得したアクセストークンが格納されます。隠しフィールドとなっており、ブラウザ上から編集することはできません。

SmtpServer.token_expires_at : *Datetime*

- Display name: トークン有効期限
- Invisible field

アクセストークンの有効期限が格納されます。隠しフィールドとなっており、ブラウザ上から編集することはできません。

メソッド

`SmtplibServer.conn_check()`

設定されている SMTP サーバに対して接続テストを行います。接続に成功した場合は、`$STATUS` に 0 がセットされます。失敗した場合には、`$STATUS` に 1 がセットされ、失敗の理由を示す文字列が `$ERROR` にセットされます。ユーザー名とパスワードのいずれかの設定が空の場合、SMTP サーバに対する接続確認は行いますが、ユーザー認証の確認までは行わないません。このため、ログインが必要な SMTP サーバではメール送信時にエラーとなることがあります。

バージョン 1.6.6 で追加: 新規に SMTP サーバ型が追加されました。

5.3.28 LDAP サーバ型 (LdapServer)

LDAP サーバ型 は Kompira ログインアカウントを LDAP 連携するために利用する LDAP サーバの設定情報を定義するものです。

フィールド

`LdapServer.server_url` : *URL*

- Display name: サーバ URL
- Other field qualifier: {"schemes": ["ldap", "ldaps"]}

LDAP サーバの接続 URL を指定します。URL スキームとして `ldap` もしくは `ldaps` のいずれかを指定することができます。

`LdapServer.timeout` : *Integer*

- Display name: 接続タイムアウト (秒)
- Default value: 10

LDAP サーバに対する接続タイムアウトを秒単位で指定します。空、もしくは、負の値に設定した場合、システムの TCP 接続タイムアウトが用いられます。

`LdapServer.use_starttls` : *Boolean*

- Display name: STARTTLS 使用

LDAP サーバへの接続に STARTTLS を用いる場合にセットします。`ldaps` で接続する場合には、この設定は無視されます。

`LdapServer.fallback_login` : *Boolean*

- Display name: フォールバックログイン

LDAP ログイン失敗時に、直前にログインした際のパスワードによるログインを許可する場合にセットします。この場合、LDAP 側でユーザが削除された場合でも、過去に一度でも LDAP ユーザでログインしていれば、引き続きログインできることに注意してください。

`LdapServer.session_expiration` : *Float*

- Display name: セッション有効期間 (時間)
- Minimum value: 0
- Maximum value: 10000000
- Default value: 0

LDAP ユーザでログインした場合のセッションの有効期間を時間単位で指定します。0 をセットするとブラウザを閉じたときにセッションが破棄されます。空にした場合は、有効期間はシステムのデフォルト (2 週間=336 時間) となります。デフォルトは 0 です。

`LdapServer.bind_dn` : *String*

- Display name: バインド DN

LDAP サーバへのバインド DN を指定します。空にした場合、匿名バインドを用います。

`LdapServer.bind_password` : *Password*

- Display name: バインドパスワード

LDAP サーバへのバインド時のパスワードを指定します。

`LdapServer.user_search_dn` : *String*

- Display name: ユーザー検索 DN

ユーザ検索の基点となる DN を指定します。

`LdapServer.user_search_scope` : *Enum*

- Display name: ユーザー検索スコープ
- Enum choices: "BASE" | "ONELEVEL" | "SUBTREE"
- Default value: "SUBTREE"

ユーザ検索の基点からのスコープを BASE, ONELEVEL, SUBTREE の中から指定します。BASE はユーザ検索 DN が示すオブジェクト自身が対象、ONELEVEL はオブジェクトの直下の子オブジェクトが対象、SUBTREE はオブジェクト自身とその子孫オブジェクト全てが対象となります。

`LdapServer.user_search_attribute` : *String*

- Display name: ユーザー検索属性
- Default value: "name"

ユーザ検索の対象となるオブジェクトの属性中からユーザ名が格納されているものを指定します。ログイン時に入力したユーザ名でオブジェクトを検索する際に、ここで指定した属性が用いられます。デフォルトは "name" です。

`LdapServer.target_users` : *Array*

- Display name: 対象ユーザ

LDAP 連携するユーザ名のリストを指定します。空の場合、検索対象に含まれる全てのユーザが対象となります。

`LdapServer.required_group_dn` : *Array*

- Display name: 所属グループ DN

LDAP 連携するユーザが所属するグループの DN を指定します。複数指定した場合、ユーザはいずれかのグループに所属している必要があります。空の場合、検索対象に含まれる全てのユーザが対象となります。

`LdapServer.group_search_dn` : *String*

- Display name: グループ検索 DN

グループ検索の基点となる DN を指定します。空の場合、LDAP のグループは Kompira のグループに反映されません。

`LdapServer.group_search_scope` : *Enum*

- Display name: グループ検索スコープ
- Enum choices: "BASE" | "ONELEVEL" | "SUBTREE"
- Default value: "SUBTREE"

グループ検索の基点からの検索対象のスコープを BASE, ONELEVEL, SUBTREE の中から指定します。BASE はユーザ検索 DN が示すオブジェクト自身が対象、ONELEVEL はオブジェクトの直下の子オブジェクトが対象、SUBTREE はオブジェクト自身とその子孫オブジェクト全てが対象となります。

`LdapServer.group_search_class` : *String*

- Display name: グループ検索クラス
- Default value: "group"

グループ検索の対象となるオブジェクト中からフィルタするクラス (objectClass) を指定します。デフォルトは "group" です。空にした場合は、すべてのオブジェクトが対象となります。

`LdapServer.group_type` : *Enum*

- Display name: グループ種別
- Enum choices: "PosixGroup" | "GroupOfNames" | "NestedGroupOfNames" | "GroupOfUniqueNames" | "NestedGroupOfUniqueNames" | "ActiveDirectoryGroup" | "NestedActiveDirectoryGroup" | "OrganizationalRoleGroup" | "NestedOrganizationalRoleGroup"

グループ検索の対象となるグループの種類を指定します。種類によってグループに所属するメンバーの判定に使用する属性名が異なります。*Nested* で始まる種類を選択すると、グループが他のグループを含むような場合も対象となります。

`LdapServer.mirror_groups` : *Array*

- Display name: 反映グループ

LDAP ユーザが所属する LDAP のグループを Kompira のグループに反映させるグループ名を指定します。空の場合は、すべてのグループが反映されます。Kompira にグループオブジェクトが登録されていない場合は自動的に作成されます。

`LdapServer.user_data_first_name` : *String*

- Display name: ユーザデータ (名)
- Default value: "givenName"

LDAP ユーザの名 (first name) を Kompira のユーザオブジェクトに反映させる場合に、名が格納されている LDAP ユーザの属性を指定します。デフォルトは "givenName" です。

`LdapServer.user_data_last_name` : *String*

- Display name: ユーザデータ (姓)
- Default value: "sn"

LDAP ユーザの姓 (last name) を Kompira のユーザオブジェクトに反映させる場合に、姓が格納されている LDAP ユーザの属性を指定します。デフォルトは "sn" です。

`LdapServer.user_data_email` : *String*

- Display name: ユーザデータ (Email)
- Default value: "mail"

LDAP ユーザの E メールアドレスを Kompira のユーザオブジェクトに反映させる場合に、E メールアドレスが格納されている LDAP ユーザの属性を指定します。デフォルトは "mail" です。

メソッド

LDAP サーバ型には固有のメソッドは定義されていません。

バージョン 1.6.8 で追加: 新規に LDAP サーバ型が追加されました。

5.4 特殊オブジェクト

特殊オブジェクトは、通常のオブジェクトとは異なり、Kompira の型オブジェクトによって規定されていない組み込みのオブジェクトです。その種類毎に固有のプロパティとメソッドを備えています。フィールドは持ちません。

5.4.1 プロセス (Process)

ジョブフローの実行時のプロセス情報を表すオブジェクトです。

プロパティ

プロセスオブジェクトで定義されているフィールドは以下のとおりです。

Process.checkpoint_mode : *Boolean*

プロセスがチェックポイントモードで実行している場合は true、そうでない場合は false が設定されます。書き込み可能なプロパティです。

Process.children : *LazyArray<Process>*

子プロセスの一覧となる検索結果を返します。

Process.console : *String*

コンソールに表示されている文字列です。

Process.current_job : *Object*

プロセスの現在実行しているジョブフローオブジェクト、もしくはスクリプトジョブオブジェクトが格納されます。ジョブフローの中から別のジョブフローを呼び出すと、current_job の値が変更されます。

Process.elapsed_time : *Timedelta*

プロセスの実行経過時間を表します。

Process.error : *any*

プロセス終了時の \$ERROR の値が格納されます。

Process.exit_status : *Integer*

プロセス終了時のステータスコードが格納されます。

Process.finished_time : *Datetime*

プロセスの実行終了した日時です。

Process.invoker : *Object*

プロセスがオブジェクトから起動された場合、該当するオブジェクトが格納されます。

プロセスの起動方法	invoker に記録されるオブジェクト
スタートアップジョブフロー	スタートアップディレクトリ
フォームからジョブフロー実行	フォームオブジェクト
テーブルからジョブフロー実行	テーブルオブジェクト
チャンネルのアクションによるジョブフロー実行	チャンネルオブジェクト
メールチャンネルのアクションによるジョブフロー実行	メールチャンネルオブジェクト

上記以外の、ジョブフローを直接実行した場合やスケジューラから起動された場合などは null が格納されます。

Process.job : *Object*

プロセスを開始したジョブフロー、もしくは、スクリプトジョブオブジェクトを表します。

Process.monitoring_mode : *String*

プロセスの監視モードを表す文字列です。書き込み可能なプロパティです。

文字列	監視モード
NOTHING	メール通知しない
MAIL	プロセス終了時にメール通知する
ABORT_MAIL	プロセス異常終了時にメール通知する

Process.pid : *Integer*

プロセス ID です。

Process.parent : *Object*

親プロセスのジョブフローオブジェクトです。

Process.result : *any*

プロセス終了時の \$RESULT の値が格納されます。

Process.schedule : *Schedule*

プロセスがスケジューラから起動された場合、該当するスケジュールオブジェクトが格納されます。

Process.started_time : *Datetime*

プロセスを実行開始した日時です。

Process.status : *String*

プロセスの実行状態を表す文字列です。

文字列	実行状態
NEW	新規（開始待ち）
READY	実行可能
RUNNING	実行中
WAITING	入力/コマンド完了待ち
ABORTED	異常終了
DONE	実行完了

Process.step_mode : *Boolean*

プロセスがステップ実行モードで実行している場合は true、そうでない場合は false が設定されます。書き込み可能なプロパティです。

Process.suspended : *Boolean*

プロセスが一時停止状態の場合は true、そうでない場合は false となります。

Process.user : *User*

プロセスの実行ユーザーです。特権ユーザーに限り、実行ユーザーを変更することができます。

バージョン 1.5.0.post1 で追加: `monitoring_mode` が追加されました。

バージョン 1.6.6 で追加: プロパティ `invoker` が追加されました。

バージョン 1.6.8 で変更: プロパティ `children` を `LazyArray` 型に変更しました。

メソッド

`Process.delete()`

プロセスオブジェクトを削除します。

5.4.2 プロセス一覧 (/process)

プロセス一覧 (`/process`) は、プロセスオブジェクトのリストを保持するオブジェクトであり、仮想オブジェクト (Virtual) として実装されています。

以下のように `for` や `pfor` ブロックにおいて、各プロセスオブジェクトに対して繰り返し処理を行うことが可能です。

```
{ for p in /process |
  print(p)
}
```

メソッド

プロセス一覧 には以下のメソッドが定義されています。

`ProcessRoot.find([...params])` : [`LazyArray<Process>`](#)

プロセス一覧の中から `params` で指定したフィルタリング条件に該当するプロセスの検索結果を返します。 `params` には [`Directory.find\(\)`](#) メソッドと同様にフィルタリングを指定することができます。

指定可能な属性とルックアップは以下のとおりです。

属性名	指定できるルックアップ
<code>job</code>	<code>exact</code>
<code>user</code>	<code>exact</code>
<code>started_time</code>	<code>exact</code> , <code>gt</code> , <code>gte</code> , <code>lt</code> , <code>lte</code>
<code>finished_time</code>	同上
<code>status</code>	<code>exact</code>
<code>schedule</code>	<code>exact</code>
<code>invoker</code>	<code>exact</code> , <code>isnull</code>
<code>parent</code>	<code>exact</code>
<code>current_job</code>	<code>exact</code>
<code>suspended</code>	<code>exact</code>

次のページに続く

表 1 – 前のページからの続き

属性名	指定できるルックアップ
<code>lineno</code>	<code>exact, gt, gte, lt, lte</code>
<code>console</code>	<code>exact, iexact, contains, icontains, startswith, istartswith, endswith, iendswith, regex, iregex</code>

バージョン 1.6.3 で追加: `find` メソッドが追加されました。

バージョン 1.6.6 で追加: 指定可能な属性に `invoker` が追加されました。

バージョン 1.6.8 で変更: `find()` メソッドの結果を `LazyArray` 型に変更しました。

5.4.3 スケジュール (Schedule)

スケジュールオブジェクトは、Kompira のスケジューラに登録されたスケジュールを表します。

プロパティ

Schedule.day : *String*

スケジュールを実行する日 (1 ~ 31) を表します。

Schedule.day_of_week : *String*

スケジュールを実行する曜日名、もしくは、曜日番号を表します。0(月曜日)-6(日曜日)、または `mon,tue,wed,thu,fri,sat,sun` を指定します。

Schedule.description : *String*

スケジュールの内容を説明する文字列が格納されます。

Schedule.disabled : *Boolean*

スケジュールの無効化を示すフィールドです。スケジュールが無効な場合は `true`、有効な場合は `false` となります。

Schedule.hour : *String*

スケジュールを実行する時 (0 ~ 23) を表します。

Schedule.job : *Object*

スケジュールによって実行されるジョブフロー、もしくは、スクリプトジョブが格納されます。

Schedule.minute : *String*

スケジュールを実行する分 (0 ~ 59) を表します。

Schedule.month : *String*

スケジュールを実行する月 (1 ~ 12) を表します。

Schedule.name : *String*

スケジュールの名称を表す文字列です。

`Schedule.next_run_time` : *Datetime*

スケジュールが有効な場合、次に実行される日時が格納されます。(読み取り専用)

`Schedule.parameters` : *Array<String>*

ジョブフローやスクリプトに渡すパラメータの文字列が可能されます。

`Schedule.user` : *User*

スケジュールのユーザーです。

`Schedule.week` : *String*

スケジュールを実行する ISO 週番号 (1 ~ 53) を表します。

`Schedule.year` : *String*

スケジュールを実行する年 (4 桁の数字) を表します。

注釈: 上記、プロパティのうち、実行日時を指定するフィールドについては、[日時設定フィールドの書式](#)が使用できます。

メソッド

`Schedule.delete()`

スケジュールオブジェクトを削除します。

5.4.4 スケジューラ一覧 (/scheduler)

スケジューラ一覧 (/scheduler) は、スケジュールオブジェクトのリストを保持するオブジェクトであり、仮想オブジェクト (Virtual) として実装されています。スケジューラ一覧は、for や pfor ブロックで用いることで、各スケジュールオブジェクトを繰り返し処理することが可能です。

メソッド

スケジューラ一覧 には以下のメソッドが定義されています。

`SchedulerRoot.add(name, job[, parameters, datetime])` : *Schedule*

スケジューラ一覧に、name で指定された名前を持ち、job で指定されたジョブフローまたはスクリプトジョブを実行するスケジュールを追加します。parameters 引数にジョブフローやスクリプトジョブの実行時に与えるパラメータリストをオプションとして指定することができます。オプションな datetime 引数にジョブの実行日時を表す日時型の値を指定することができます。

`SchedulerRoot.find([...params])` : *LazyArray<Schedule>*

スケジューラ一覧の中から params で指定したフィルタリング条件に該当するスケジュールの検索結果を返します。params には [Directory.find\(\)](#) メソッドと同様にフィルタリングを指定することができます。

指定可能な属性とルックアップは以下のとおりです。

属性名	指定できるルックアップ
name	exact, iexact, contains, icontains, startswith, istartswith, endswith, iendswith, regex, iregex
description	同上
user	exact
job	exact
year	exact, contains
month	exact, contains
day	exact, contains
week	exact, contains
day_of_week	exact, contains
hour	exact, contains
minute	exact, contains
disabled	exact, contains

バージョン 1.6.3 で追加: find メソッドが追加されました。

バージョン 1.6.8 で変更: find() メソッドの結果を LazyArray 型に変更しました。

5.4.5 ユーザー (User)

Kompira のユーザーを表すオブジェクトです。

プロパティ

ユーザーオブジェクトで定義されているプロパティは以下のとおりです。

User.username : *String*

ユーザー名です。

User.first_name : *String*

ユーザーの姓名の名の部分を表します。

User.last_name : *String*

ユーザーの姓名の姓の部分を表します。

User.full_name : *String*

ユーザーの姓名を表します。

User.mailbox : *String*

以下の形式のアドレスを表します。

ユーザー名 <メールアドレス>

User.email : *String*

ユーザーのメールアドレスです。書き込み可能なプロパティです。

User.environment : *Object (Environment)*

環境変数オブジェクトです。書き込み可能なプロパティです。

User.home_directory : *Object (Directory)*

ユーザーのホームです。書き込み可能なプロパティです。

User.groups : *Array<Group>*

ユーザーが所属するグループ一覧です。

User.is_active : *Boolean*

有効なユーザかどうかを示します。

User.is_ldap_user : *Boolean*

LDAP ユーザかどうかを示します。

User.enable_restapi : *Boolean*

REST API を有効化するかどうかを示します。書き込み可能なプロパティです。

User.auth_token : *String*

ユーザーの認証トークンです。読み込み専用のプロパティです。REST API が無効の時は null となります。

User.last_login : *Datetime*

ユーザーの最終ログイン日時です。

バージョン 1.6.3 で追加: last_login プロパティが追加されました。

バージョン 1.6.8 で追加: is_active と is_ldap_user プロパティが追加されました。

メソッド

公開されているメソッドはありません。

5.4.6 ユーザー一覧 (/config/user)

ユーザー一覧 (/config/user) は、ユーザーの一覧を保持するオブジェクトであり、仮想オブジェクト (Virtual) として実装されています。

メソッド

ユーザー一覧 には以下のメソッドが定義されています。

`UserRoot.find([...params])` : **LazyArray<User>**

ユーザー一覧の中から params で指定したフィルタリング条件に該当するユーザーの検索結果を返します。params には [Directory.find\(\)](#) メソッドと同様にフィルタリングを指定することができます。

指定可能な属性とルックアップは以下のとおりです。

属性名	指定できるルックアップ
username	exact, iexact, contains, icontains, startswith, istartswith, endswith, iendswith, regex, iregex
first_name	同上
last_name	同上
email	同上
last_login	exact, gt, gte, lt, lte
is_active	exact
is_ldap_user	exact
home_directory	exact
environment	exact

バージョン 1.6.3 で追加: find メソッドが追加されました。

バージョン 1.6.8 で変更: find() メソッドの結果を LazyArray 型に変更しました。

5.4.7 グループ (Group)

Kompira のグループを表すオブジェクトです。

プロパティ

グループオブジェクトで定義されているプロパティは以下のとおりです。

`Group.name` : **String**

グループ名です。

`Group.users` : **Array<User>**

このグループに所属するユーザー一覧です。

`Group.is_ldap_group` : **Boolean**

LDAP グループかどうかを示します。

バージョン 1.6.3 で追加: name と users プロパティが追加されました。

バージョン 1.6.8 で追加: is_ldap_group プロパティが追加されました。

メソッド

公開されているメソッドはありません。

5.4.8 グループ一覧 (/config/group)

グループ一覧 (/config/group) は、グループの一覧を保持するオブジェクトであり、仮想オブジェクト (Virtual) として実装されています。

メソッド

グループ一覧 には以下のメソッドが定義されています。

`GroupRoot.find([...params])` : *LazyArray*<*Group*>

グループ一覧の中から `params` で指定したフィルタリング条件に該当するグループの検索結果を返します。`params` には *Directory.find()* メソッドと同様にフィルタリングを指定することができます。

指定可能な属性とルックアップは以下のとおりです。

属性名	指定できるルックアップ
<code>name</code>	<code>exact</code> , <code>iexact</code> , <code>contains</code> , <code>icontains</code> , <code>startswith</code> , <code>istartswith</code> , <code>endswith</code> , <code>iendswith</code> , <code>regex</code> , <code>iregex</code>
<code>is_ldap_group</code>	<code>exact</code>

バージョン 1.6.3 で追加: `find` メソッドが追加されました。

バージョン 1.6.8 で変更: `find()` メソッドの結果を *LazyArray* 型に変更しました。

第6章 他システムとの連携

著者

Kompira 開発チーム

6.1 はじめに

Kompira で他システムにデータを受け渡す、また他システムからデータを受け取るための方法、必要な設定等について説明します。

6.2 Kompira へのイベント送信

[ジョブマネージャパッケージ](#) および [イベント送信パッケージ](#) に含まれる `kompira_sendevt` コマンドを用いることで、Kompira に対してイベント情報を送信することができます。ここでは、`kompira_sendevt` を用いた Kompira へのイベント送信について説明します。

`kompira_sendevt` スクリプトは、引数で指定された `<keyword>=<value>` の組をメッセージに詰めて、Kompira サーバに送信します。

```
/opt/kompira/bin/kompira_sendevt [options] [<key1>=<value1> ...]
```

`key1` と `value1` を結ぶ '=' の両側にスペースを入れないように注意してください。ジョブフローは、受信したメッセージを辞書型のデータとして参照することができます。

引数が指定されなかった場合は、標準入力を 1 つの `key` として Kompira サーバに送信します。

インストール時に `--amqps-verify` オプションを付けるなどして、SSL 証明書の検証が有効になっている Kompira サーバに `kompira_sendevt` でメッセージを送信するためにはその Kompira サーバが発行した SSL 証明書が必要になります。その場合は、以下について注意してください。

- 事前に Kompira サーバから SSL 証明書を取得しておく必要があります。 [SSL 証明書管理](#) を参照してください。
- `kompira_sendevt` コマンドを実行するユーザが SSL 証明書を読み込める必要があります。証明書ファイルにアクセスできるユーザで実行するか、証明書ファイルのパーミッションを調整してください。

6.2.1 Windows からのイベント送信

Windows へのインストール に従って Windows にイベント送信パッケージをインストールすることで、Linux の場合と同様に `kompira_sendevt` コマンドを用いて Windows からイベント送信を行うことができます。

注釈: 手順 *Windows へのインストール* に沿ってインストールした場合、`kompira_sendevt` コマンドは `C:\Kompira\Scripts\kompira_sendevt.exe` にインストールされます。

また、Windows 環境ではデフォルトのログディレクトリが `C:\Kompira\Log` になりますので、事前に作成しておいてください。ログディレクトリが存在しない場合は `kompira_sendevt` コマンドを実行する時に警告が表示され、標準出力上にログが出力されます。

バージョン 1.6.8 で変更: Windows 環境でのデフォルトのログディレクトリが `C:\Kompira\Log` になりました。

6.2.2 kompira_sendevt のオプション

`kompira_sendevt` コマンドには以下のオプションがあります。コマンドラインで指定したオプションは、設定ファイルでの指定より優先されます。

オプション	説明
<code>-c</code> , <code>--config=CONF</code>	設定ファイルを指定します (CONF は設定ファイルのパス)。デフォルトでは <code>/opt/kompira/kompira.conf</code> (Windows 環境では <code>C:\Kompira\kompira.conf</code>) が読み込まれます。
<code>-s</code> , <code>--server=SERVER</code>	送信先の Kompira サーバの IP アドレス、もしくはサーバ名を指定します。
<code>-p</code> , <code>--port=PORT</code>	送信先 Kompira サーバのメッセージキューのポート番号を指定します。
<code>--user=USER</code>	送信先 Kompira メッセージキューのユーザー名を指定します。
<code>--password=PASSWORD</code>	送信先 Kompira メッセージキューのパスワードを指定します。
<code>--test-connection</code>	AMQP サーバへの接続テストを行いません。データは送信しません。
<code>--ssl</code>	メッセージキューの接続に SSL を用います。
<code>--ssl-verify</code>	SSL でサーバ証明書を検証します。
<code>--ssl-cacertfile=SSL_CACERTFILE</code>	SSL 接続時の証明書の検証に利用する CA 証明書を指定します。
<code>--ssl-certfile=SSL_CERTFILE</code>	SSL 接続するときの証明書ファイルを指定します。
<code>--ssl-keyfile=SSL_KEYFILE</code>	SSL 接続するときの秘密鍵ファイルを指定します。
<code>--channel=CHANNEL</code>	メッセージを送信するチャンネルの Kompira ファイルシステム上のパスを指定します。
<code>--site-id=SITE_ID</code>	Kompira サイト ID を指定します。
<code>--max-retry=MAX_RETRY</code>	イベントの送信を最大何回試みるかを指定します。
<code>--retry-interval=RETRY_INTERVAL</code>	イベントの送信間隔を指定します (単位は秒)。
<code>--dry-run</code>	実際にはデータを送信せずに、送信内容を標準出力に表示します。

コマンドラインオプションで指定していない AMQP の接続に関するパラメータは設定ファイルのデフォルト

ト値が適用されます。例えばユーザ名とパスワードは接続先のサーバ名が localhost の場合は guest/guest になり、それ以外では kompira/kompira になります。詳しくは [Kompira 設定ファイル](#) を参照してください。

バージョン 1.6.8 で変更: 設定ファイルが指定されていないとき、Windows 環境では C:\Kompira\kompira.conf が適用されるようになりました。

バージョン 1.6.8 で追加: 新しいオプション --test-connection, --ssl-verify, --ssl-cacertfile, --ssl-certfile, --ssl-keyfile が追加されました。

6.3 Kompira でのメール受信

Kompira_sendvt を用いて、Kompira サーバが受信したメール内容をジョブフローで扱えるようにする方法を説明します。

注釈: IMAP サーバを使用している場合、以下に紹介する方法の他に、メールチャネルを使用することでメール内容をジョブフローで扱うことができます。詳しくは [MailChannel](#) を参照してください。

6.3.1 Linux の設定

Sendmail 用のエイリアスである /etc/aliases ファイルに設定を記述することで、Kompira サーバの特定のアカウント宛のメールに対して、任意のコマンドの実行を指定することができます。

以下は kompira サーバの kompira アカウント宛にメールが送られた際、メールを kompira_sendvt に送る場合の設定です。

```
kompira:    "|LANG=ja_JP.UTF-8 /opt/kompira/bin/kompira_sendvt --channel=/system/
↳ channels/Mail"
```

/etc/aliases に上記を記述した後、下記のコマンドを実行することで設定が反映されます。

```
% newaliases
```

注釈: お使いのシステムによっては smrsh を使用する必要がある場合があります。その場合、kompira_sendvt コマンドのシンボリックリンクを smrsh のディレクトリに作成してください。

6.3.2 Kompira の設定

kompira_sendevt は任意のチャンネルに値を送ることができます。ここでは/system/channels/Mail というメールを受信する専用のチャンネルを作成しておきましょう。

以下はメール内容を受信し、内容を表示するジョブフロー例です。

```
</system/channels/Mail>
-> [mail = $RESULT]
-> mail_parse(mail)
-> [parsed_mail = $RESULT]
-> print(parsed_mail['Subject'])
-> print(parsed_mail['Body'])
```

Kompira の組み込みジョブである mail_parse を使うことで、MIME 形式のメールテキストをパースし、辞書形式で値を扱うことができますようになります。

6.4 監視システムとの連携

Kompira は、Zabbix や Nagios など外部の監視サーバと連携することが可能です。連携したい外部システムから、Kompira のメッセージキュー（RabbitMQ）に対してイベント情報を送信することで、ジョブフローからそのイベントを受信できるようになります。

ここでは、Zabbix を例にして、障害の発生を Kompira に通知する方法について説明します。

6.4.1 イベント送受信の確認

Zabbix が動作しているサーバに、Kompira に対してイベント情報を送信するためのスクリプトを準備します。ここでは、kompira_sendevt を用いた方法について説明します。

1) Zabbix サーバに Kompira エージェントをインストールする。

Kompira マニュアル([イベント送信パッケージ](#))にしたがって Kompira のイベント送信パッケージを Zabbix が動作しているサーバにインストールします。(ジョブマネージャを動作させない場合、ジョブマネージャの起動設定は不要です。)

2) 設定ファイルの変更

Zabbix サーバ側の/opt/kompira/kompira.conf ファイルの書き換えます。

具体的には、[amqp-connection] セクションの server 項目に、Kompira サーバの IP アドレス、もしくはホスト名を設定します。また、[event] セクションの channel 項目が/system/channels/Alert に設定されていることも確認してください。

3) メッセージの通知確認

この時点で、kompira_sendevt を実行して、Kompira サーバに対して正しくイベントが通知できることを確認します。Zabbix サーバ側で、以下のコマンドを実行してください。:

```
$ /opt/kompira/bin/kompira_sendevt test=hello
```

次に、Kompira にログインし、/system/channels/Alert のページを参照し、メッセージ数が増えていることを確認してください。

4) メッセージの受信方法

次に、/system/channels/Alert に到着したメッセージはジョブフローから読み出してみます。以下のようなジョブフローを定義して、実行してみてください。

```
</system/channels/Alert> -> [message = $RESULT] -> print(message.test)
```

コンソールに、hello と表示されたら成功です。

6.4.2 Zabbix の設定

次に、Zabbix の設定を行います。

Zabbix にログインし、「アクションの設定」メニューからアクションを新規に作成し、その中にアクションのオペレーションを新規に作成してください。オペレーションのタイプはリモートコマンドにします。

リモートコマンドの内容はたとえば以下のようにします。

```
Zabbix server:python /opt/kompira/bin/kompira_sendevt status="{TRIGGER.STATUS}"
severity="{TRIGGER.NSEVERITY}" hostname="{HOSTNAME}"
trigger_name="{TRIGGER.NAME}" trigger_key="{TRIGGER.KEY}"
detail="{TRIGGER.KEY}: {ITEM.LASTVALUE}"
```

ここでは、以下のようなキーを含む辞書データを Kompira に送るように設定しています。

キー名	内容（値）
status	トリガーの状態
severity	深刻度
hostname	障害の発生したホスト名
trigger_name	トリガー名
trigger_key	トリガーキー
detail	イベント詳細情報(トリガーキーとイベント値の組み)

あとは、ここで登録したアクションが、障害イベントをトリガーとしてキックされるように設定を行います。詳しくは、Zabbix のマニュアル等を参照してください。

6.5 Redmine との連携

外部のチケットングシステムとの連携例として、Kompira のジョブフローから Redmine に対してチケットを発行する方法について説明します。

6.5.1 Redmine の設定

1) REST API の有効化

「管理」->「設定」->「認証」から、「REST による Web サービスを有効にする」チェックをつけて保存します。

2) プロジェクトの作成

「管理」->「プロジェクト」から「新しいプロジェクト」を選択し、プロジェクト「test」を作成します。

3) 優先度の設定

「管理」->「列挙項目」でチケットの優先度に値を設定します。(例:「高」「中」「低」)

また、どれか 1 つを「デフォルト値」と設定します。

(※) デフォルト値を設定しない場合は、API 呼び出しの際に priority_id の値が必要となります。

4) ユーザの作成

「管理」->「ユーザ」から「新しいユーザー」を選択し、任意のユーザを作成します。

作成したユーザでログインし、「個人設定」ページにある API アクセスキーを控えておきます。

6.5.2 チケットを発行する

Redmine のチケットを発行するには、必要な情報を json 形式のデータに変換し、POST リクエストを Redmine の URL に送信します。

そのためには、Kompira の組み込みジョブである urlopen に辞書型のデータを渡して呼び出します。

具体的には以下のようなジョブフローを記述することで、Redmine に対してチケットを発行することができます。

```
|redmine_server = '192.168.0.1'|
|redmine_key = '1234567890abcdef1234567890abcdef12345678'|
|ticket_title = 'Task from Kompira'|
|project_name = 'test'|

[url = 'http://$redmine_server/issues.json?format=json&key=$redmine_key']
-> [ticket = {issue = {subject = ticket_title, project_id = project_name}}]
-> urlopen(url=url, data=ticket, timeout=60, encode='json')
```

「redmine_key」には「4. ユーザの作成」で確認した API アクセスキーを設定します。

上記に加えて、チケットの優先度、説明、担当者、カテゴリなどの情報を含めることもできます。

また、チケットの更新・削除、チケット情報の一覧の取得なども行うことができます。詳しくは Redmine API 仕様を参照してください。

6.6 SNMP トラップの受信

Linux コマンドの `snmptrapd(8)` と `snmptrap(1)` を用いて、Kompira のジョブフローで SNMP トラップを受信する方法を説明します。

6.6.1 環境

	IP Address	OS
Kompira サーバ	192.168.213.100	CentOS 6.5
SNMP エージェントサーバ	192.168.213.101	CentOS 6.5

6.6.2 Kompira サーバの設定

Kompira サーバには Kompira がインストール済みであるとします。

1) `snmptrapd` をインストール

```
$ yum install net-snmp
```

2) `/etc/snmp/snmptrapd.conf` を編集

SNMP トラップをハンドルするため、`snmptrapd.conf` を編集します。

```
authCommunity      log,execute,net default
traphandle default  /opt/kompira/bin/kompira_sendvt --channel=/system/channels/
↪ snmptrap
```

ここで `default` は「全ての OID」を表します。

3) Kompira にジョブフローを追加

「`/system/channels/snmptrap`」チャンネルを作成し、このチャンネルへのデータを待ち受けるジョブフローを作成、実行します。

```
</system/channels/snmptrap> ->
print($RESULT)
```

4) `snmptrapd` を起動

```
$ service snmptrapd start
```

6.6.3 SNMP エージェントサーバの設定

snmptrapd コマンドをインストール

```
$ yum install net-snmp-utils
```

6.6.4 SNMP トラップの送信

SNMP エージェントサーバ上で snmptrapd コマンドを実行します。

```
$ snmptrap -v 2c -c default 192.168.213.100 ' ' netSnmp.99999 netSnmp.99999.1 s "hello
→world"
```

Kompira サーバ側で正しく受信できた場合、/var/log/messages に以下のようなログが表示されます。

```
$ tail -f /var/log/messages
Dec 13 16:29:30 kompira-server snmptrapd[6110]: 2012-12-13 16:29:30 <UNKNOWN>
[UDP: [192.168.213.101]:56313->[192.168.213.100]]:#012DISMAN-EVENT-
→MIB::sysUpTimeInstance = Timeticks: (590254) 1:38:22.54
#011SNMPv2-MIB::snmpTrapOID.0 = OID: NET-SNMP-MIB::netSnmp.99999#011NET-SNMP-
→MIN::netSnmp.99999.1 = STRING: "hello world"
```

また、Kompira 上で実行していたジョブフロープロセスのコンソールには以下のような受信結果が表示されます。

```
<UNKNOWN>
UDP: [192.168.213.101]:56313->[192.168.213.100]
DISMAN-EVENT-MIB::sysUpTimeInstance 0:0:18:39.04
SNMPv2-MIB::snmpTrapOID.0 NET-SNMP-MIB::netSnmp.99999
NET-SNMP-MIB::netSnmp.99999.1 "hello world"
```

第7章 Kompira の監視

著者

Kompira 開発チーム

7.1 はじめに

このドキュメントでは、Zabbix などの監視システムを用いて Kompira の状態を監視する方法について説明します。

7.2 Zabbix での監視

Zabbix で Kompira の動作中のプロセス数や対応中インシデントの数などを取得する方法について説明します。

Zabbix の監視方法は様々なものがありますが、ここでは Zabbix Agent の「UserParameter」機能を用いた監視と、「外部スクリプト」による監視の方法について説明します。

※ このドキュメントでは Zabbix 2.4 を用いた監視方法について紹介します。

7.2.1 準備

`kompira_jq.sh`

いずれの監視方法でも、Kompira が提供するスクリプト `kompira_jq.sh` を利用します。

なお、「外部スクリプト」による監視の場合は Zabbix サーバ上で、「UserParameter」による監視の場合は Zabbix Agent をインストールした Kompira サーバ上で、`kompira_jq.sh` を実行します。

`kompira_jq.sh` は内部で `curl` コマンドおよび `jq` コマンドを利用していますので、これらが利用できるよう監視方法に合わせて Zabbix サーバまたは Kompira サーバに、必要なパッケージをインストールしておいてください。

※ CentOS 環境では `jq` は EPEL リポジトリから、AWS 環境では `amzn-main` リポジトリからインストールできます。

注釈: Kompira 1.4.6 以降に付属する `kompira_jq.sh` は REST-API 対応版になったため、旧バージョンに付属するものとオプション指定方法などで互換性がありません。

Kompira サーバのホスト設定

いずれの監視方法でも Kompira サーバに対してアクセスを行なうため、Kompira サーバの URL と REST API トークンを Zabbix の「マクロ」として登録しておく必要があります。

Zabbix 上で Kompira サーバの「ホスト設定」→「マクロ」設定画面で、以下のマクロ名で REST API トークンを設定してください。

Macro	Value
{ \$KOMPIRA_URL }	Kompira サーバの URL
{ \$KOMPIRA_TOKEN }	REST API トークン

7.2.2 UserParameter による監視

こちらは Zabbix Agent が Zabbix サーバから指定された項目に対して事前に設定されたコマンドを実行することで、監視項目の値を収集する方法になります。

Zabbix Agent の設定

Zabbix Agent をインストールした Kompira サーバ上に、UserParameter の設定ファイルを準備する必要があります。/etc/zabbix/zabbix_agentd.d に userparameter_kompira.conf をコピーしてください。

設定ファイルが準備できたら Zabbix Agent を再起動してください。

```
$ sudo service zabbix-agent restart
Shutting down Zabbix agent:          [ OK ]
Starting Zabbix agent:               [ OK ]
```

Zabbix Server の設定

Zabbix Server には UserParameter を利用した監視項目を設定する必要がありますが、zbx_kompira_basic_templates.xml をインポートすることで標準的な監視項目をすぐに利用できます。

Template Kompira Server という名前のテンプレートが作成されますので、監視したい Kompira サーバにこのテンプレートを適用してください。

監視項目

標準で以下の監視項目を利用可能です。

Name	概要
Kompira active incidents	アクティブなインシデント数
Kompira active processes	アクティブなプロセス数
Kompira active schedulers	アクティブなスケジュール数
Kompira active tasks	アクティブなタスク数
Kompira jobflows	ジョブフロー総数
Kompira license remain_days	ライセンスの残り日数
Kompira objects	Kompira オブジェクト総数
Memory usage of kompirad process	メモリ使用量 (kompirad)
Memory usage of kompira_jobmgrd process	メモリ使用量 (kompira_jobmgrd)
Number of kompirad process	プロセス数 (kompirad)
Number of kompira_jobmgrd process	プロセス数 (kompira_jobmgrd)

7.2.3 外部スクリプトによる監視

こちらは Zabbix サーバ上で外部のスクリプトを実行して、監視項目の値を収集する方法になります。

まず、Kompira が提供するスクリプト `/opt/kompira/bin/kompira_jq.sh` を、Zabbix サーバ上の外部スクリプトを配置するディレクトリにコピーしておいてください。デフォルトでは `/usr/lib/zabbix/externalscripts` になります。

プロセス数

外部スクリプト `kompira_jq.sh` を用いてプロセス数を監視する場合、以下のような設定で Item を作成してください。

Name	Kompira processes
Type	External check
Key	<code>kompira_jq.sh[-s,{ \$KOMPIRA_URL },-t,{ \$KOMPIRA_TOKEN },-ac,/process]</code>
Type of information	Numeric (unsigned)
Data type	Decimal

インシデント数

外部スクリプト `kompira_jq.sh` を用いてインシデント数を監視する場合、以下のような設定で Item を作成してください。

Name	Kompira incidents
Type	External check
Key	<code>kompira_jq.sh[-s,{ \$KOMPIRA_URL },-t,{ \$KOMPIRA_TOKEN },-ac,/incident]</code>
Type of information	Numeric (unsigned)
Data type	Decimal

第8章 Kompira REST API リファレンス

著者

Kompira 開発チーム

8.1 イントロダクション

本ドキュメントは、REST API の仕様について記述します。

8.2 共通

8.2.1 エンドポイント

REST API のエンドポイントは、通常の Kompira オブジェクトへのリソースパスと同様です。すなわちルートエンドポイントは

```
http[s]://<hostname>/
```

となります。

ブラウザからのアクセスと API リクエストを区別するために、HTTP リクエストの Accept ヘッダに

```
Accept: application/json
```

を含める必要があります。

もしくは、クエリ文字列に `format=json` を含める方法もあります。

8.2.2 ユーザ認証

認証はトークン認証と、セッション認証方式の2種類が許可されます。セッション認証方式はブラウザからのアクセスを想定したものなので、REST API のクライアントでは通常は使用しません。

トークン認証を使用する場合、以下のようにリクエストの Authorization ヘッダにトークン鍵を含めます。

```
Authorization: Token <トークン鍵>
```

または、HTTP リクエストのクエリ文字列に以下のようにトークン鍵を含める方法もあります。

```
token=<トークン鍵>
```

ユーザ設定ページにて、各ユーザの REST API を有効にすると、アクセストークンが生成されます。REST API を無効にし、再度有効にすると、トークンが再初期化されます。

8.2.3 フォーマット

データフォーマットは JSON 形式のみサポートしています。

日時型データ (Datetime)

日時型データは UTC であり、以下の形式 (ISO8601) が用いられます。

```
%Y-%m-%dT%H:%M:%S.%fZ もしくは %Y-%m-%dT%H:%M:%SZ
```

入力時にはマイクロ秒や秒を省略することが可能です。末尾の UTC 指示子である Z を省いた場合は、ローカル時刻 (JST) とみなされ、内部で UTC に変換されます。

オブジェクト型データ (Object)

オブジェクト型データはオブジェクトの絶対パスにより表現されます。

ファイル型データ (File)

ファイル型データは出力時は、以下のように name, data をキーに持つ辞書型データとなります。

```
{ "name": "<ファイル名>", "data": "<BASE64 エンコードされたファイルデータ>" }
```

入力時は、name と data をキーに持つ辞書型データとします。

```
{ "name": "<ファイル名>", "data": "<BASE64 エンコードされたファイルデータ>" }
```

8.2.4 エラー

エラー時は、エラーを示す HTTP ステータスコードを返します。この時、HTTP レスポンスのコンテンツボディにはエラー理由を示すデータが含まれます。

多くのエラーデータは以下のように detail キーを含む辞書データとなります。

```
{ "detail": "<エラーの理由>" }
```

必須のフィールドがリクエストデータに含まれていないようなバリデーションエラーの場合、以下のような辞書データを返します。

```
{ "<フィールド名>": ["<エラーメッセージ>", ...],
  "<フィールド名>": ["<エラーメッセージ>", ...],
  ... }
```

8.2.5 ページネート

一覧取得の場合、以下の形式のページネートされたデータが返されます。

```
{
  "count": <オブジェクト総数>,
  "next": <次ページの URL>,
  "previous": <前ページの URL>,
  "results": <オブジェクトデータリスト>
}
```

ページを指定して取得する場合、クエリパスに `page=<ページ番号>` を含めます。最後のページを取得したい場合は、ページ番号に `last` を指定します。

ページサイズのデフォルトは 25 です。ページサイズを変更したい場合、

```
page_size=<ページサイズ>
```

をクエリ文字列に含めます。

8.2.6 取得属性の指定

取得する属性名をクエリパスに `attrs=<属性名>` と指定することで、オブジェクトデータの一部の属性値だけを取得することが可能です。

たとえば、オブジェクトの ID と表示名だけを取得する場合は、以下に示す例のように、属性名として `id` と `display_name` を指定します。

```
/some/object?attrs=id&attrs=display_name
```

一覧取得においても、同様に取得したい属性を指定することが可能です。たとえば、プロセス一覧取得において、プロセス ID と状態のみ取得したい場合は、以下のように指定します。:

```
/process?attrs=id&attrs=status
```

8.2.7 フィルタリング

一覧取得において、オブジェクトの属性でフィルタリングするには、クエリパスに <属性名>=<値> を指定します。

たとえば、正常に完了したプロセスのみの一覧を取得する場合、以下のように指定します。

```
/process?status=DONE
```

また、以下のように複数の属性をクエリパスで指定した場合は、AND によるフィルタリングとなります。

```
/app.descendant?display_name=test&owner=root
```

上記は完全一致によるフィルタリングですが、以下のように属性名に続けてルックアップを記述することで、細かなフィルタリング条件の指定が可能です。

```
<属性名>__<ルックアップ>=<値>
```

たとえば、表示名に **test** を含むオブジェクトをフィルタリングできます。

```
/app.descendant?display_name__contains=test
```

ルックアップの種類ごとの値のフィルタリング方式は以下のとおりです。

ルックアップ	フィルタリング方式
exact, iexact	属性が指定した値に一致する。 iexact では大小文字を区別しない。
contains, icontains	属性が指定した値を含む。 icontains では大小文字を区別しない。
startswith, istartswith	属性が指定した値で始まる。 istartswith では大小文字を区別しない。
endswith, iendswith	属性が指定した値で終わる。 iendswith では大小文字を区別しない。
regex, iregex	属性が指定した正規表現にマッチする。 iregex では大文字小文字区別しない。
gt, gte	属性が指定した値より大きい (gt)、または、属性が指定した値以上である (gte)。
lt, lte	属性が指定した値より小さい (lt)、または、属性が指定した値以下である (lte)。
in	属性が指定した値に含まれる。

仮想オブジェクト以外の一般のオブジェクトにおける属性値によるフィルタリングでは、属性によって指定できるルックアップが異なります。属性の一覧と指定できるルックアップは以下のとおりです。

属性	指定できるルックアップ
owner	exact, in
abspath	exact, iexact, contains, icontains, startswith, istartswith, endswith, iendswith, regex, iregex
display_name	exact, iexact, contains, icontains, startswith, istartswith, endswith, iendswith, regex, iregex

[次のページに続く](#)

表 2 – 前のページからの続き

属性	指定できるルックアップ
description	exact, iexact, contains, icontains, startswith, istartswith, endswith, iendswith, regex, iregex
created	exact, gt, gte, lt, lte
updated	exact, gt, gte, lt, lte
type_object	exact, in
parent_object	exact, in

また、仮想オブジェクトでは、属性のデータ型によって指定できるルックアップが異なります。

属性の型	指定できるルックアップ
文字列型	exact, iexact, contains, icontains, startswith, istartswith, endswith, iendswith, regex, iregex
整数型	exact, gt, gte, lt, lte
日時型	exact, gt, gte, lt, lte
オブジェクト型	exact
ユーザ型	exact
真偽型	exact

なお、ルックアップを指定していないときは **exact** が適用されます。

8.2.8 並び順の指定

オブジェクトの一覧取得において並び順を指定するには、クエリパスに **order_by=<属性名>** を指定します。この場合、指定した属性に関して昇順で並べ替えした結果を一覧として返します。降順にしたい場合は、クエリパスに **order_by=-<属性名>** を指定します。

order_by で並び順を指定できるオブジェクト属性は以下の通りです。

属性	適用される並び順
id	オブジェクトの ID 順
owner	所有者の ID 順
abspath	絶対パス順
display_name	表示名順
description	説明順
created	作成日時順 (古い順)
updated	更新日時順 (古い順)
type_object	型オブジェクトの ID 順
parent_object	親オブジェクトの ID 順

バージョン 1.6.6post1 で追加: **order_by** で指定できる属性に **description** と **parent_object** を追加しました

オブジェクト型 (Object)

仮想オブジェクト以外の一般のオブジェクトのフィルタリングに使用できる属性は以下のとおりです。

属性名	意味 (属性の型) または [指定できるルックアップ]
owner	所有者 (ユーザ型)
display_name	表示名 (文字列型)
description	説明 (文字列型)
created	作成日時 (日時型)
updated	更新日時 (日時型)
type_object	型オブジェクト (オブジェクト型)

さらに、型オブジェクトが特定される状況では、フィールド値によるフィルタリングも指定できます。

```
field:<フィールド名>__<ルックアップ>=<値>
```

たとえば、以下のように指定します。

```
/.descendant?type_object=/system/types/Jobflow&field:source__contains=urlopen&
→field:defaultMonitoringMode=MAIL
```

型オブジェクトが特定される状況とは、以下のいずれかを言います。

- type_object 属性フィルタリングによって型オブジェクトが指定されている
- 起点となるオブジェクトがテーブル型であり、テーブルに型オブジェクトが設定されている

型オブジェクトが特定されていない状況で、フィールド値によるフィルタリングを指定するとエラーになります。

なお、フィールド値によるフィルタリングでは、フィールドのデータ型に応じて指定できるルックアップが異なります。

フィールドの型	指定できるルックアップ
文字列型	exact, iexact, contains, icontains, startswith, istartswith, endswith, iendswith, regex, iregex, in, range
整数型	exact, isnull, gt, gte, lt, lte, in, range
真偽値型	exact
日時型	exact, isnull, gt, gte, lt, lte, range
オブジェクト型	exact, isnull
添付ファイル型	(文字列型と同じ、ファイル名がフィルタ対象になります)
配列型	(文字列型と同じ、配列の値がフィルタ対象になります)
辞書型	(文字列型と同じ、辞書の値がフィルタ対象になります)

プロセス型 (Process)

プロセスオブジェクトのフィルタリングに使用できる属性は以下のとおりです。

属性名	意味 (属性の型) または [指定できるルックアップ]
job	ジョブオブジェクト (オブジェクト型)
user	実行ユーザー (ユーザ型)
started_time	開始日時 (日時型)
finished_time	終了日時 (日時型)
status	ステータス [exact]
schedule	スケジュールオブジェクト (オブジェクト型)
parent	親プロセス (プロセス型)
current_job	実行中ジョブオブジェクト (オブジェクト型)
suspended	一時停止フラグ (真偽型)
lineno	実行中行番号 (整数型)
console	コンソール (文字列型)

スケジュール型 (Scheduler)

スケジュールオブジェクトのフィルタリングに使用できる属性は以下のとおりです。

属性名	意味 (属性の型) または [指定できるルックアップ]
name	スケジュール名 (文字列型)
description	説明 (文字列型)
user	ユーザー (ユーザ型)
job	ジョブオブジェクト (オブジェクト型)
year	年 [exact, contains]
month	月 [exact, contains]
day	日 [exact, contains]
week	週 [exact, contains]
day_of_week	曜日 [exact, contains]
hour	時 [exact, contains]
minute	分 [exact, contains]
disabled	無効化 (真偽型)

インシデント型 (Incident)

インシデントオブジェクトのフィルタリングに使用できる属性は以下のとおりです。

属性名	意味 (属性の型) または [指定できるルックアップ]
name	インシデント名 (文字列型)
device	デバイス名 (文字列型)
service	サービス名 (文字列型)
created_date	作成日時 (日時型)
closed_date	完了日時 (日時型)
status	ステータス [exact]
owner	所有者 (ユーザ型)

タスク型 (Task)

タスクオブジェクトのフィルタリングに使用できる属性は以下のとおりです。

属性名	意味 (属性の型) または [指定できるルックアップ]
name	タスク名 (文字列型)
title	タイトル (文字列型)
message	メッセージ (文字列型)
status	ステータス [exact]
owner	所有者 (ユーザ型)
created_date	作成日時 (日時型)
closed_date	完了日時 (日時型)

ユーザー型 (User)

ユーザーオブジェクトのフィルタリングに使用できる属性は以下のとおりです。

属性名	意味 (属性の型) または [指定できるルックアップ]
username	ユーザー名 (文字列型)
first_name	名 (文字列型)
last_name	姓 (文字列型)
email	E-mail (文字列型)
last_login	最終ログイン日時 (日時型)
is_active	有効化 (真偽型)
is_ldap_user	LDAP ユーザかどうか (真偽型)
home_directory	ホームディレクトリ (オブジェクト型)
environment	環境変数 (オブジェクト型)

グループ型 (Group)

グループオブジェクトのフィルタリングに使用できる属性は以下のとおりです。

属性名	意味 (属性の型) または [指定できるルックアップ]
name	グループ名 (文字列型)
is_ldap_group	LDAP グループかどうか (真偽型)

8.3 Kompira オブジェクトへのアクセス

8.3.1 オブジェクト情報の取得

リクエスト

- GET <オブジェクトパス>

応答

```
{
  "id": <オブジェクト ID>,
  "abspath": <オブジェクトパス>,
  "owner": <オブジェクト所有ユーザー名>,
  "fields": <フィールドデータ辞書>,
  "extra_properties": <オブジェクト拡張属性>,
  "user_permissions": <ユーザーパーミッション辞書>,
  "group_permissions": <グループパーミッション辞書>,
  "display_name": <表示名>,
  "description": <説明>,
  "created": <オブジェクト生成日時>,
  "updated": <オブジェクト最終更新日時>,
  "type_object": <型オブジェクトのパス>,
  "parent_object": <親オブジェクトのパス>
}
```

フィールドデータ辞書とオブジェクト拡張属性は、オブジェクトの型によって異なるキーを含む辞書データです。

注釈: 設定型オブジェクトの場合、上記に加えて設定項目のキーと値を含む辞書データが格納された data フィールドが含まれます。

注釈: Password 型フィールド、Array<Password>型フィールド、Dictionary<Password>型フィールドのパスワードデータの取得には、オブジェクトの書き込み権限が必要です。書き込み権限が無い場合は、null 値で置き換えられたデータが返されます。

バージョン 1.6.8 で変更: パスワードデータの取得にオブジェクトの書き込み権限が必要となりました。

8.3.2 オブジェクト情報の更新

リクエスト

- PUT <オブジェクトパス>
- PATCH <オブジェクトパス>

PUT はオブジェクトのデータ全体を置き換えます。オブジェクトの一部更新の場合は、PATCH リクエストを使用します。

リクエストデータ

```
{
  "owner": <オブジェクト所有ユーザー名>,
  "fields": <フィールドデータ辞書>,
  "user_permissions": <ユーザーパーミッション辞書>,
  "group_permissions": <グループパーミッション辞書>,
  "display_name": <表示名>,
  "description": <説明>                # 省略可能
}
```

PATCH リクエストの場合、属性を省略するとそのキーに対応するオブジェクトの値は変更されません。

応答

更新されたオブジェクトのデータ

8.3.3 オブジェクトの新規追加

ディレクトリオブジェクト、もしくは、テーブルオブジェクトに対して POST リクエストを送信すると、オブジェクトが新規に作成されます。

リクエスト

- POST <ディレクトリ又はテーブルのオブジェクトパス>

リクエストデータ

```
{
  "owner": <オブジェクト所有ユーザー名>,# 省略可能 (省略時はリクエストユーザーが所有者となる)
  "fields": <フィールドデータ辞書>,
  "name": <オブジェクト名>,
  "user_permissions": <ユーザーパーミッション辞書>,
  "group_permissions": <グループパーミッション辞書>,
  "display_name": <表示名>,# 省略可能
}
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```

"description": <説明>, # 省略可能
"type_object": <型オブジェクトのパス>
}

```

応答

HTTP 201 Created 応答と新規追加されたオブジェクトのデータ

8.3.4 オブジェクトの削除

オブジェクトパスに対して DELETE リクエストを送信することで、そのオブジェクトを削除することができます。

プロセス、スケジュール、インシデント、タスク、の各オブジェクトも同様に削除することができる。

リクエスト

- DELETE <オブジェクトパス>

応答

成功すると HTTP 204 No Content が返されます。

8.3.5 子/子孫オブジェクトの一覧取得

ディレクトリオブジェクト、もしくは、テーブルオブジェクトの子や子孫オブジェクトの一覧を取得することができます。

リクエスト

- GET <オブジェクトパス>.children# 子オブジェクト一覧
- GET <オブジェクトパス>.descendant# 子孫オブジェクト一覧

応答

オブジェクトデータの一覧が返されます。

注釈: ディレクトリやテーブル以外のオブジェクトの場合、空の一覧が返されます。

注釈: 取得した一覧データのうち、読み取り権限が無いオブジェクトには、fields 属性（フィールドデータ辞書）が含まれません。

8.3.6 ジョブフローの実行

リクエスト

- POST <ジョブフローパス>.execute

リクエストデータ

```
{
  "step_mode": <ステップモード>,          # true or false
  "checkpoint_mode": <チェックポイントモード>, # true or false
  "monitoring_mode": <監視モード>,          # NOTHING, MAIL, ABORT_MAIL
  "parameters": <ジョブフローパラメータの辞書>
}
```

応答

実行されたジョブフロープロセスのパスが返されます。

8.3.7 スクリプトジョブの実行

リクエスト

- POST <スクリプトジョブパス>.execute

リクエストデータ

```
{
  "node": <実行ノードオブジェクトのパス>,
  "account": <実行アカウントオブジェクトのパス>,
  "command_line": <コマンドライン文字列>
}
```

応答

実行されたジョブフロープロセスのパスが返されます。

8.3.8 メッセージ送信

チャンネルオブジェクトに対してメッセージ送信が可能です。

リクエスト

- POST <チャンネルオブジェクトパス>.send

リクエストデータ

任意の JSON 形式のデータ

応答

成功すると HTTP 200 OK が返されます。

8.3.9 メッセージ受信

チャンネルオブジェクトからメッセージを受信します。

リクエスト

- POST <チャンネルオブジェクトパス>.recv

リクエストデータ

```
{
  "timeout": <タイムアウト値 (秒)>
}
```

応答

成功すると受信データが返されます。受信タイムアウトすると、ステータスコードとして HTTP 408 Request Timeout が返されます。

注釈: チャンネルにデータが無い場合は、タイムアウトで指定された秒数だけ待ちます。タイムアウトのデフォルト値は 0 秒です。

8.4 プロセス

8.4.1 プロセス一覧の取得

リクエスト

- GET /process

子プロセス一覧を取得する場合は、以下のリクエストを投げます。

- GET /process/id_<プロセス ID>.children

応答

プロセス詳細データの一覧が返されます。

8.4.2 プロセス詳細の取得

リクエスト

- GET /process/id_<プロセス ID>

応答

```
{
  "id": <プロセス ID>,
  "abspath": <プロセスオブジェクトパス>,
  "user": <実行ユーザー名>,
  "elapsed_time": <プロセス経過時間>,
  "started_time": <実行開始日時>,
  "finished_time": <実行終了日時>,
  "status": <実行ステータス>,
  "exit_status": <終了時ステータス>,
  "result": <実行結果>,
  "error": <実行エラー>,
  "suspended": <停止中>,
  "lineno": <行番号>,
  "console": <コンソール文字列>,
  "job": <実行開始ジョブフローパス>,
  "schedule": <スケジュールパス>,
  "parent": <親プロセスパス>,
  "current_job": <実行中ジョブフローパス>
}
```

8.4.3 プロセスの操作

リクエスト

- POST /process/id_<プロセス ID>.terminate # プロセス実行を中止する
- POST /process/id_<プロセス ID>.suspend # プロセス実行を一時停止する
- POST /process/id_<プロセス ID>.resume # プロセス実行を再開する

リクエストデータ

resume において以下のリクエストデータを渡すことで、再開時の実行モードを指定することができます。

```
{
  "step_mode": <ステップモード>,          # true/false を指定
  "checkpoint_mode": <チェックポイントモード> # true/false を指定
}
```

応答

成功時は true、失敗時は false が返されます。

8.4.4 プロセスの実行完了を待つ

リクエスト

- POST /process/id_<プロセス ID>.wait

リクエストデータ

```
{
  "timeout": <タイムアウト値>          # 0 以上の整数値を指定
}
```

応答

成功時はプロセスの詳細情報が返されます。タイムアウトすると、ステータスコードとして HTTP 408 Request Timeout が返されます。

8.5 スケジュール

8.5.1 スケジュール一覧の取得

リクエスト

- GET /scheduler

応答

スケジュール詳細データの一覧が返されます。

8.5.2 スケジュール詳細の取得

リクエスト

- GET /scheduler/id_<スケジュール ID>

応答

```
{
  "id": <スケジュール ID>,
  "abspath": <スケジュールオブジェクトパス>,
  "user": <ユーザー名>,
  "scheduled_datetimes": <実行予定日時一覧>,
  "parameters": <パラメータリスト>,
  "name": <スケジュール名>,
  "description": <説明>,
  "year": <年>,
  "month": <月>,
  "day": <日>,
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
"week": <週>,
"day_of_week": <曜日>,
"hour": <時>,
"minute": <分>,
"disabled": <無効化>,
"job": <実行ジョブオブジェクトパス>
}
```

8.5.3 スケジュールの更新

リクエスト

- PUT /scheduler/id_<スケジュール ID>
- PATCH /scheduler/id_<スケジュール ID>

リクエストデータ

```
{
  "user": <ユーザー名>,
  "parameters": <パラメータリスト>,
  "name": <スケジュール名>,          # 必須パラメータ
  "description": <説明>,
  "year": <年>,
  "month": <月>,
  "day": <日>,
  "week": <週>,
  "day_of_week": <曜日>,
  "hour": <時>,
  "minute": <分>,
  "disabled": <無効化>,
  "job": <実行ジョブオブジェクトパス> # 必須パラメータ
}
```

応答

更新されたオブジェクトのデータ

8.5.4 スケジュールの作成

リクエスト

- POST /scheduler

リクエストデータ

更新リクエストと同様

応答

作成されたオブジェクトのデータ

8.6 インシデント

8.6.1 インシデント一覧の取得

リクエスト

- GET /incident

応答

インシデント詳細データの一覧が返される。

8.6.2 インシデント詳細の取得

リクエスト

- GET /incident/id_<インシデント ID>

応答

```
{
  "id": <インシデント ID>,
  "abspath": <インシデントオブジェクトパス>,
  "owner": <所有者>,
  "worklogs": <作業ログ一覧>,
  "alerts": <アラート一覧>,
  "name": <インシデント名>,
  "device": <デバイス名>,
  "service": <サービス名>,
  "created_date": <作成日時>,
  "closed_date": <完了日時>,
  "status": <ステータス> # "OPENED", "WORKING", "CLOSED" のいずれか
}
```

8.6.3 インシデントの更新

リクエスト

- PUT /incident/id_<インシデント ID>
- PATCH /incident/id_<インシデント ID>

リクエストデータ

```
{
  "owner": <所有者>,
  "name": <インシデント名>,
  "device": <デバイス名>,
  "service": <サービス名>,
  "status": <ステータス>
}
```

応答

更新されたオブジェクトのデータ

8.6.4 作業ログの追加

リクエスト

- POST /incident/id_<インシデント ID>.worklogs

リクエストデータ

```
{
  "user": <ユーザー名>,
  "description": <作業ログ>
}
```

応答

追加された作業ログのデータ

8.6.5 インシデントの作成

リクエスト

- POST /incident

リクエストデータ

更新リクエストと同様

応答

作成されたオブジェクトのデータ

8.7 タスク

8.7.1 タスク一覧の取得

リクエスト

- GET /task

応答

タスク詳細データの一覧

8.7.2 タスク詳細の取得

リクエスト

- GET /task/id_<タスク ID>

応答

```
{
  "id": <タスク ID>,
  "abspath": <タスクオブジェクトパス>,
  "owner": <所有者>,
  "assigned_users": <宛先ユーザー一覧>,
  "assigned_groups": <宛先グループ一覧>,
  "name": <タスク名>,
  "title": <タスク件名>,
  "message": <タスクメッセージ>,
  "action_text": <アクション文字列>,
  "result": <結果>,
  "status": <ステータス>,      # "WAITING", "ONGOING", "DONE", "CANCELED" のいずれか
  "created_date": <作成日時>,
  "closed_date": <完了日時>
}
```

8.7.3 タスクのキャンセル

リクエスト

- POST /task/id_<インシデント ID>.cancel

応答 ::

成功すると HTTP 200 OK が返されます。

8.7.4 タスクの送信

タスクチャンネルに対してメッセージを送信します。

リクエスト

- POST /task/id_<インシデント ID>.submit

リクエストデータ

```
{
  "result": <結果メッセージ>
}
```

リクエストデータを省略した場合は、タスクチャンネルに "OK" が渡されます。

8.8 ユーザー/グループ管理

8.8.1 ユーザー一覧の取得

リクエスト

- GET /config/user

応答

ユーザー詳細データの一覧

8.8.2 ユーザー詳細の取得

リクエスト

- GET /config/user/id_<ユーザー ID>

応答

```
{
  "id": <ユーザー ID>,
  "abspath": <ユーザーオブジェクトパス>,
  "groups": <グループ一覧>,
  "last_login": <最終ログイン日時>,
  "username": <ユーザー名>,
  "first_name": <名>,
  "last_name": <姓>,
  "email": <E-mail アドレス>,
  "is_active": <有効フラグ>,
  "is_ldap_user": <LDAP ユーザフラグ>,
  "home_directory": <ホームディレクトリ>,
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
"environment": <環境オブジェクト>
}
```

8.8.3 ユーザーの更新

リクエスト

- PUT /config/user/id_<ユーザー ID>
- PATCH /config/user/id_<ユーザー ID>

リクエストデータ

```
{
  "groups": <グループ一覧>,
  "last_login": <最終ログイン日時>,
  "username": <ユーザー名>,          # 必須フィールド
  "password": <パスワード>,          # 必須フィールド
  "first_name": <名>,
  "last_name": <姓>,
  "email": <E-mail アドレス>,
  "is_active": <有効フラグ>,
  "is_ldap_user": <LDAP ユーザフラグ>,
  "home_directory": <ホームディレクトリ>,
  "environment": <環境オブジェクト>
}
```

応答

更新されたオブジェクトのデータ

注釈: root ユーザの is_active フィールドを false に設定することはできません。組み込みユーザ (admin, root, guest) の is_ldap_user を true に設定することはできません。また、非特権ユーザは groups、および、is_active, is_ldap_user フィールドを変更することはできません。

8.8.4 ユーザーの新規作成

リクエスト

- POST /config/user

リクエストデータ

ユーザー更新と同じ

応答

作成されたオブジェクトのデータ

8.8.5 グループ一覧の取得

リクエスト

- GET /config/group

応答

グループ詳細データの一覧

8.8.6 グループ詳細の取得

リクエスト

- GET /config/group/id_<グループ ID>

応答

```
{
  "id": <グループ ID>,
  "abspath": <グループオブジェクトパス>,
  "name": <グループ名>,
  "is_ldap_group": <LDAP グループフラグ>
}
```

8.8.7 グループの更新

リクエスト

- PUT /config/group/id_<グループ ID>
- PATCH /config/group/id_<グループ ID>

リクエストデータ

```
{
  "name": <グループ名>,
  "is_ldap_group": <LDAP グループフラグ>
}
```

応答

更新されたオブジェクトのデータ

注釈: 組み込みグループ (other, wheel) の `is_ldap_group` を `true` に設定することはできません。また、非特権ユーザはグループを更新することはできません。

8.8.8 グループの新規追加

リクエスト

- POST /config/group

リクエストデータ

グループ更新と同じ

応答

更新されたオブジェクトのデータ

索引

- abort (*built-in local job*), 171
- abspath (*Object property*), 190
- access_token (*MailChannel field*), 216
- access_token (*SmtplibServer field*), 229
- account (*NodeInfo field*), 211
- AccountInfo (*built-in type object*), 211
- action_target (*Channel field*), 203
- action_target (*MailChannel field*), 217
- action_type (*Channel field*), 203
- action_type (*MailChannel field*), 217
- add (*Directory method*), 193
- add (*SchedulerRoot method*), 238
- add (*Table method*), 208
- add_item (*Array method*), 144
- Array (*data type*), 144
- Array (*field type*), 181
- assert (*built-in local job*), 172
- attached1 (*AttachedFile field*), 209
- attached2 (*AttachedFile field*), 209
- attached3 (*AttachedFile field*), 209
- AttachedFile (*built-in type object*), 209
- auth_endpoint (*OAuth2Provider field*), 227
- auth_token (*User property*), 240

- Binary (*data type*), 142
- Binary (*field type*), 180
- bind_dn (*LdapServer field*), 231
- bind_password (*LdapServer field*), 231
- body (*MailTemplate field*), 222
- Boolean (*data type*), 143
- Boolean (*field type*), 180
- bytes (*built-in function*), 178

- channel (*built-in function*), 177
- Channel (*built-in type object*), 202
- checkInterval (*MailChannel field*), 217
- checkpoint_mode (*Process property*), 234
- children (*Object property*), 191
- children (*Process property*), 234
- clear_messages (*Channel method*), 204
- client_id (*OAuth2Provider field*), 227
- client_secret (*OAuth2Provider field*), 227
- code (*Jobflow field*), 200
- compiledDatetime (*Jobflow field*), 202
- compilerVersion (*Jobflow field*), 201
- Config (*built-in type object*), 219
- conn_check (*MailChannel method*), 218
- conn_check (*SmtplibServer method*), 230
- conntype (*NodeInfo field*), 210
- conntypes (*NodeType field*), 225
- console (*Process property*), 234
- content_type (*Text property*), 224
- contentType (*Text field*), 223
- context (*Text field*), 224
- copy (*Directory method*), 193
- created (*Object property*), 190
- current (*built-in function*), 176
- current_job (*Process property*), 234
- CustomStyle (*built-in type object*), 225

- data (*Config property*), 220
- date (*built-in function*), 177
- Date (*data type*), 148
- date (*Datetime property*), 147
- Date (*field type*), 181
- datetime (*built-in function*), 177
- Datetime (*data type*), 147
- Datetime (*field type*), 181
- day (*Date property*), 148
- day (*Datetime property*), 147
- day (*Schedule property*), 237
- day_of_week (*Schedule property*), 237
- days (*Timedelta property*), 149
- decode (*Binary method*), 142
- decode (*built-in function*), 179
- default (*field qualifier*), 182
- defaultCheckpointMode (*Jobflow field*), 201
- defaultMonitoringMode (*Jobflow field*), 202
- del_item (*Array method*), 144
- del_item (*Dictionary method*), 144
- delete (*LazyArray method*), 146
- delete (*Object method*), 191

`delete` (*Process method*), 236
`delete` (*Schedule method*), 238
`delete_message` (*Channel method*), 204
`description` (*Object property*), 190
`description` (*Schedule property*), 237
`detach` (*built-in local job*), 172
`Dictionary` (*data type*), 144
`Dictionary` (*field type*), 182
`Directory` (*built-in type object*), 193
`directory` (*field qualifier*), 182
`directory` (*Repository field*), 213
`disabled` (*MailChannel field*), 218
`disabled` (*Realm field*), 209
`disabled` (*Schedule property*), 237
`display_name` (*Object property*), 190
`displayList` (*Table field*), 207
`document` (*Library field*), 221
`download` (*built-in local job*), 175

`elapsed_time` (*Process property*), 234
`EMail` (*field type*), 181
`email` (*User property*), 239
`enable_restapi` (*User property*), 240
`encode` (*built-in function*), 179
`encode` (*String method*), 141
`endswith` (*String method*), 142
`engine_started` (*SystemInfo property*), 225
`enum` (*field qualifier*), 187
`Enum` (*field type*), 180
`Environment` (*built-in type object*), 206
`environment` (*Environment field*), 206
`environment` (*User property*), 240
`error` (*Process property*), 234
`errors` (*Jobflow field*), 201
`event_count` (*Channel property*), 204
`event_queue` (*Channel field*), 203
`event_queue` (*MailChannel field*), 214
`executable` (*Jobflow field*), 201
`executable` (*Library field*), 221
`exit` (*built-in local job*), 171
`exit_status` (*Process property*), 234
`ext` (*ScriptJob field*), 205
`ext` (*Text field*), 223
`extend` (*TypeObject field*), 192

`fallback_login` (*LdapServer field*), 230
`field_names` (*Object property*), 190

`fieldDisplayNames` (*Config field*), 220
`fieldDisplayNames` (*Form field*), 219
`fieldDisplayNames` (*TypeObject field*), 192
`fieldNames` (*Config field*), 220
`fieldNames` (*Form field*), 219
`fieldNames` (*TypeObject field*), 192
`fieldTypes` (*Config field*), 220
`fieldTypes` (*Form field*), 219
`fieldTypes` (*TypeObject field*), 192
`File` (*data type*), 146
`File` (*field type*), 181
`file_accept` (*field qualifier*), 189
`filter` (*field qualifier*), 186
`find` (*Directory method*), 194
`find` (*GroupRoot method*), 242
`find` (*ProcessRoot method*), 236
`find` (*SchedulerRoot method*), 238
`find` (*String method*), 141
`find` (*Table method*), 208
`find` (*UserRoot method*), 241
`finished_time` (*Process property*), 234
`first_name` (*User property*), 239
`float` (*built-in function*), 177
`Float` (*data type*), 142
`Float` (*field type*), 180
`Form` (*built-in type object*), 218
`format` (*Date method*), 148
`format` (*Datetime method*), 148
`format` (*String method*), 141
`format` (*Time method*), 149
`full_name` (*User property*), 239

`get` (*built-in remote job*), 176
`get_item` (*Dictionary method*), 144
`get_keys` (*Dictionary method*), 144
`glob` (*Directory method*), 197
`group` (*built-in function*), 178
`Group` (*virtuel model*), 241
`group_permissions` (*Object property*), 191
`group_search_class` (*LdapServer field*), 232
`group_search_dn` (*LdapServer field*), 232
`group_search_scope` (*LdapServer field*), 232
`group_type` (*LdapServer field*), 232
`GroupRoot` (*virtuel object*), 242
`groups` (*User property*), 240

`has_child` (*Directory method*), 194

[has_key \(built-in function\)](#), 179
[help_text \(field qualifier\)](#), 182
[hex \(Binary method\)](#), 142
[home_directory \(User property\)](#), 240
[hostname \(NodeInfo field\)](#), 210
[hostname \(SmtpServer field\)](#), 228
[hour \(Datetime property\)](#), 147
[hour \(Schedule property\)](#), 237
[hour \(Time property\)](#), 149

[id \(Object property\)](#), 190
[int \(built-in function\)](#), 177
[Integer \(data type\)](#), 140
[Integer \(field type\)](#), 180
[invertMode \(CustomStyle field\)](#), 226
[invisible \(field qualifier\)](#), 182
[invoker \(Process property\)](#), 234
[ipaddr \(NodeInfo field\)](#), 210
[IPAddress \(field type\)](#), 181
[iprange \(built-in function\)](#), 179
[is_active \(User property\)](#), 240
[is_ldap_group \(Group property\)](#), 241
[is_ldap_user \(User property\)](#), 240
[isoformat \(Datetime method\)](#), 148

[job \(Process property\)](#), 234
[job \(Schedule property\)](#), 237
[Jobflow \(built-in type object\)](#), 200
[join \(String method\)](#), 141
[json_dump \(built-in function\)](#), 179
[json_parse \(built-in function\)](#), 179

[key_strip \(field qualifier\)](#), 189
[keyfile \(AccountInfo field\)](#), 212

[LargeText \(field type\)](#), 181
[last_login \(User property\)](#), 240
[last_name \(User property\)](#), 239
[LazyArray \(data type\)](#), 145
[LdapServer \(built-in type object\)](#), 230
[length \(built-in function\)](#), 179
[Library \(built-in type object\)](#), 220
[libraryType \(Library field\)](#), 221
[License \(built-in type object\)](#), 199
[log \(MailChannel field\)](#), 217
[log \(Repository field\)](#), 213
[logSize \(MailChannel field\)](#), 218
[lower \(String method\)](#), 142

[mail_parse \(built-in function\)](#), 179
[mailbox \(MailChannel field\)](#), 216
[mailbox \(User property\)](#), 239
[MailChannel \(built-in type object\)](#), 214
[MailTemplate \(built-in type object\)](#), 222
[mailto \(built-in local job\)](#), 174
[mainBackColor \(CustomStyle field\)](#), 226
[match \(Pattern method\)](#), 143
[max_length \(field qualifier\)](#), 188
[max_value \(field qualifier\)](#), 189
[menubarBackColor \(CustomStyle field\)](#), 226
[menubarTextColor \(CustomStyle field\)](#), 226
[message_count \(Channel property\)](#), 204
[message_queue \(Channel field\)](#), 202
[message_queue \(MailChannel field\)](#), 214
[microseconds \(Timedelta property\)](#), 149
[min_length \(field qualifier\)](#), 188
[min_value \(field qualifier\)](#), 189
[minute \(Datetime property\)](#), 147
[minute \(Schedule property\)](#), 237
[minute \(Time property\)](#), 149
[mirror_groups \(LdapServer field\)](#), 232
[modulePath \(Library field\)](#), 221
[monitoring_mode \(Process property\)](#), 235
[month \(Date property\)](#), 148
[month \(Datetime property\)](#), 147
[month \(Schedule property\)](#), 237
[move \(Directory method\)](#), 193
[multiplicity \(Jobflow field\)](#), 201
[multiplicity \(ScriptJob field\)](#), 205

[name \(Group property\)](#), 241
[name \(Object property\)](#), 190
[name \(Schedule property\)](#), 237
[next_run_time \(Schedule property\)](#), 237
[no_empty \(field qualifier\)](#), 186
[node_count \(License property\)](#), 200
[NodeInfo \(built-in type object\)](#), 210
[NodeType \(built-in type object\)](#), 225
[nodetype \(NodeInfo field\)](#), 210
[now \(built-in function\)](#), 176
[Null \(data type\)](#), 143

[oauth2_provider \(MailChannel field\)](#), 216
[oauth2_provider \(SmtpServer field\)](#), 229
[OAuth2Provider \(built-in type object\)](#), 226
[Object \(base object\)](#), 180

Object (*data type*), 146
object (*field qualifier*), 182
Object (*field type*), 181
order_by (*field qualifier*), 186
orderBy (*Directory field*), 193
orderBy (*Table field*), 208
owner (*Object property*), 190

pageSize (*Directory field*), 193
pageSize (*Table field*), 208
parameters (*Jobflow field*), 201
parameters (*Schedule property*), 238
parent (*Process property*), 235
parent_object (*Object property*), 190
passphrase (*AccountInfo field*), 212
password (*AccountInfo field*), 212
Password (*field type*), 181
password (*MailChannel field*), 215
password (*Repository field*), 213
password (*SmtServer field*), 228
path (*built-in function*), 178
pattern (*built-in function*), 177
Pattern (*data type*), 143
pattern (*field qualifier*), 188
peek_message (*Channel method*), 204
pid (*Process property*), 235
pop_item (*Array method*), 144
pop_item (*Dictionary method*), 144
pop_message (*Channel method*), 203
port (*MailChannel field*), 215
port (*NodeInfo field*), 210
port (*Repository field*), 213
port (*SmtServer field*), 228
print (*built-in local job*), 171
Process (*virtuel model*), 233
ProcessRoot (*virtuel object*), 236
protocol (*MailChannel field*), 215
proxy (*NodeInfo field*), 211
put (*built-in remote job*), 176

range (*Realm field*), 209
Realm (*built-in type object*), 208
reboot (*built-in remote job*), 176
receive_mode (*MailChannel field*), 216
redirect_url (*OAuth2Provider field*), 227
refresh_token (*MailChannel field*), 216
refresh_token (*SmtServer field*), 229

relatedObject (*Table field*), 207
rename (*Object method*), 191
render (*Text method*), 224
replace (*String method*), 142
Repository (*built-in type object*), 212
repositoryType (*Repository field*), 212
required_group_dn (*LdapServer field*), 232
result (*Process property*), 235
return (*built-in local job*), 171
rfind (*String method*), 141
rsplit (*String method*), 142

schedule (*Process property*), 235
Schedule (*virtuel model*), 237
SchedulerRoot (*virtuel object*), 238
schemes (*field qualifier*), 189
scope (*OAuth2Provider field*), 227
ScriptJob (*built-in type object*), 205
second (*Datetime property*), 147
second (*Time property*), 149
seconds (*Timedelta property*), 149
self (*built-in local job*), 171
send (*Channel method*), 203
server_datetime (*SystemInfo property*), 225
server_url (*LdapServer field*), 230
serverName (*MailChannel field*), 215
session_expiration (*LdapServer field*), 230
shell (*NodeInfo field*), 210
sleep (*built-in local job*), 171
SmtServer (*built-in type object*), 228
source (*Jobflow field*), 200
source (*ScriptJob field*), 205
sourceText (*Library field*), 221
split (*String method*), 142
splitlines (*String method*), 142
SSL (*MailChannel field*), 215
started_time (*Process property*), 235
startswith (*String method*), 141
status (*Process property*), 235
step_mode (*Process property*), 235
string (*built-in function*), 178
String (*data type*), 141
String (*field type*), 180
strip (*field qualifier*), 188
strip (*String method*), 142
style (*Wiki field*), 205
subject (*MailTemplate field*), 222

[submitObject \(Form field\), 219](#)
[suspend \(built-in local job\), 172](#)
[suspended \(Process property\), 235](#)
[SystemInfo \(built-in type object\), 224](#)

[Table \(built-in type object\), 207](#)
[target_users \(LdapServer field\), 231](#)
[Template \(built-in type object\), 206](#)
[template \(Template field\), 207](#)
[Text \(built-in type object\), 223](#)
[Text \(field type\), 180](#)
[text \(Text field\), 223](#)
[time \(built-in function\), 177](#)
[Time \(data type\), 148](#)
[time \(Datetime property\), 147](#)
[Time \(field type\), 181](#)
[timedelta \(built-in function\), 177](#)
[Timedelta \(data type\), 149](#)
[timeout \(LdapServer field\), 230](#)
[timeout \(MailChannel field\), 215](#)
[timeout \(SmtplibServer field\), 228](#)
[token_endpoint \(OAuth2Provider field\), 227](#)
[token_expires_at \(MailChannel field\), 216](#)
[token_expires_at \(SmtplibServer field\), 229](#)
[total_seconds \(Timedelta property\), 149](#)
[type \(built-in function\), 178](#)
[type_name \(Object property\), 191](#)
[type_object \(Object property\), 191](#)
[TypeObject \(built-in type object\), 191](#)
[typeObject \(Table field\), 207](#)

[update \(Object method\), 191](#)
[updateConfig \(Repository field\), 213](#)
[updated \(Object property\), 190](#)
[upload \(built-in local job\), 175](#)
[upper \(String method\), 142](#)
[URL \(field type\), 181](#)
[URL \(Repository field\), 212](#)
[urlopen \(built-in local job\), 172](#)
[use_oauth2 \(MailChannel field\), 215](#)
[use_oauth2 \(SmtplibServer field\), 229](#)
[use_shell \(NodeInfo field\), 211](#)
[use_ssl \(SmtplibServer field\), 229](#)
[use_starttls \(LdapServer field\), 230](#)
[use_tls \(SmtplibServer field\), 229](#)
[user \(AccountInfo field\), 212](#)
[user \(built-in function\), 178](#)

[user \(Process property\), 235](#)
[user \(Schedule property\), 238](#)
[User \(virtual model\), 239](#)
[user_data_email \(LdapServer field\), 233](#)
[user_data_first_name \(LdapServer field\), 233](#)
[user_data_last_name \(LdapServer field\), 233](#)
[user_permissions \(Object property\), 191](#)
[user_search_attribute \(LdapServer field\), 231](#)
[user_search_dn \(LdapServer field\), 231](#)
[user_search_scope \(LdapServer field\), 231](#)
[username \(MailChannel field\), 215](#)
[username \(Repository field\), 213](#)
[username \(SmtplibServer field\), 228](#)
[username \(User property\), 239](#)
[UserRoot \(virtual object\), 240](#)
[users \(Group property\), 241](#)

[version \(SystemInfo property\), 225](#)
[Virtual \(built-in type object\), 200](#)
[virtual \(Virtual field\), 200](#)

[week \(Schedule property\), 238](#)
[weekday \(Date property\), 148](#)
[weekday \(Datetime property\), 147](#)
[Wiki \(built-in type object\), 204](#)
[wikitext \(Wiki field\), 205](#)

[year \(Date property\), 148](#)
[year \(Datetime property\), 147](#)
[year \(Schedule property\), 238](#)